

福井県文書館資料叢書3

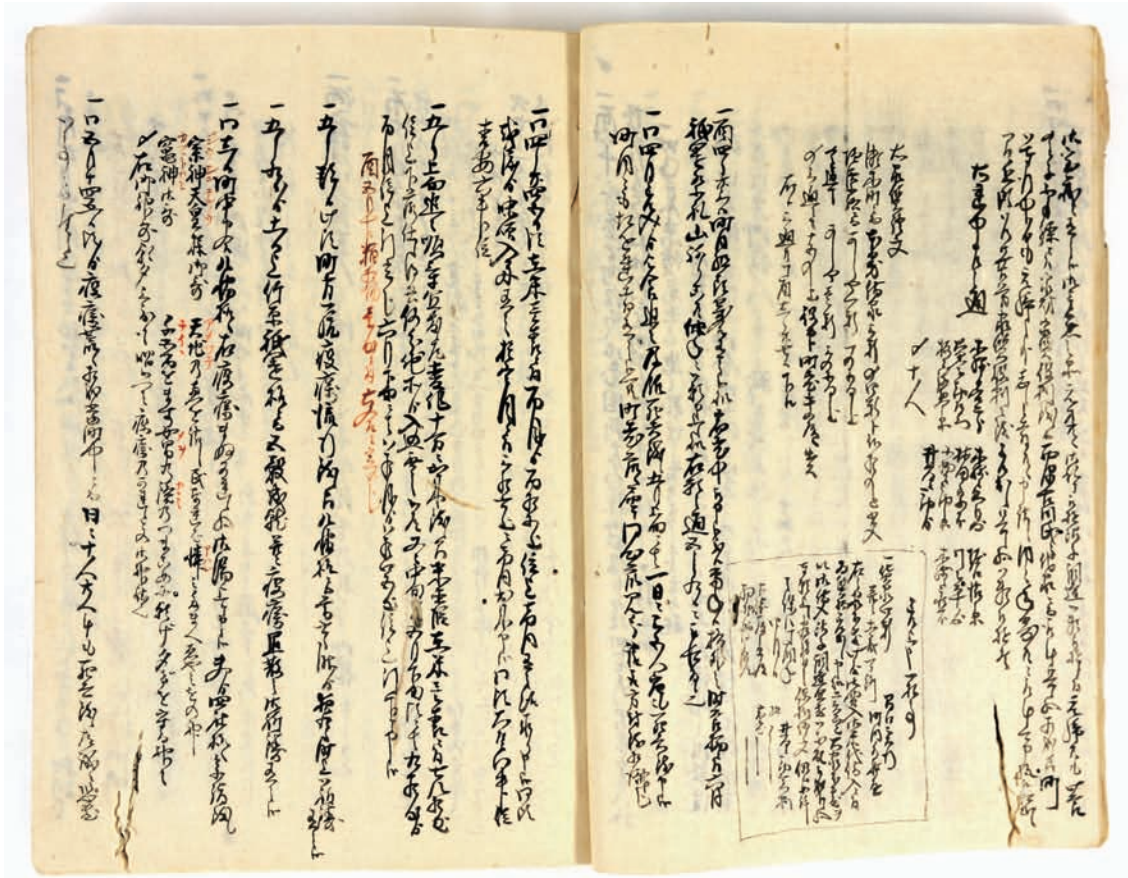
若狭国小浜町人の珍事等書留日記

福井県文書館資料叢書3

若狭国小浜町人の珍事等書留日記



1 若狭国小浜町人の珍事等書留日記



2 書留日記 (天保8年)



3 小浜町絵図 (明治4年)

発刊にあたって

このたび福井県文書館資料叢書の第三巻として『若狭国小浜町人の珍事等書留日記』を発刊することとなりました。第一巻および第二巻（既刊）では、江戸時代中ごろの越前国幕府領大庄屋の日記を取り上げましたが、これに続く本巻は、江戸時代後期の若狭国小浜の米商人、井筒屋勘右衛門の日記を翻刻しています。

井筒屋は、小浜藩の米手形会所の御用達を務めた有力町人のひとりであり、米手形会所は、米手形（藩札）と銀との両替を独占的に取り扱っていました。幕末から明治維新にむかう激動の時代に、彼は米穀商として米価・穀物価等の変動を丹念に記録し、重立った町人として小浜城下での天保の大飢饉のようす、幕府や藩からの御触書（法令）、藩の財政改革にかかわる「仕法」など知りえた情報を的確に記しています。

とくに安政期（一八五四～六〇年）以降になると、洪水や地震、伝染病の流行などの「珍事」を淡々と書きとめようとする日記の内容にも変化があらわれてきます。たとえば、世界的大流行の一端をなすコレラの蔓延（一八五九年）、異国船の到来に備えた城下での台場築造・改修と大規模な訓練、開港場選定のために日本海側の港湾を測量していた英国軍艦の入津（六七七年）、明治新政府軍の北陸道鎮撫使の来浜（六八年）など、一地方の町人の記録にも世界史的な連関がうかがいあがってきます。飢饉時に米廉売や施粥の運営を支えた井筒屋の視線は、不安定な時代にかえって賑わいを増すかにみえる寺社の祭礼や開帳、能、狂言、浄瑠璃、相撲などの諸興行の盛衰

にも注がれ、地域文化をうかがい知ることができる厚みのある記述となっています。

さて、このような当館の資料叢書は、福井県の歴史に関する重要な資料を活字化し刊行するもので、くずし字で書かれた膨大な資料の内容を直接原本にあたることなく詳細に知ることができ、そして現在ではくずし字を活字化することは、同時に資料をコンピュータで利用できるデータに変えることでもあります。近年、文学や社会科学・歴史学などの分野で重要な文献や資料がインターネット上に提供され、これによって研究者のみならず一般の誰もが資料を手軽に利用でき、関心のある情報を探し出すことができるようになりました。

本書と当館ウェブサイトに掲載するそのデジタル版が、福井県にかかわる文化的情報資源をより豊かにし、県内・県外からそして世界中から資料が活用・共有されることで、広く福井県にかかわる研究を進めるものとなることを願っています。

平成二十一年三月

福井県文書館長 岩本文男

序にかえて

福井県文書館資料叢書の第三巻として刊行することになった本書『若狭国小浜町人の珍事等書留日記』は、江戸時代後期、譜代大名酒井氏の城下町、若狭国小浜で起こったさまざまな出来事を、米商人であり藩の米手形御用達を勤めた小浜の一町人が記した日記体の記録である。

体裁は、縦二四・〇センチ、横一七・二センチ、袋綴で、厚紙の表紙を持つ。帖数は全一四二帖であり、墨付きは一二九帖、白紙一三帖を残す。

『若狭国小浜町人の珍事等書留日記』（以下『書留日記』と略記）は、本書刊行にあたって編者が与えた名称である。原表紙には、

「嘉永七甲寅年写之

当所珍事・御触
大飢饉・仕法立書留日記

并二出水・地震・臨時・変死・流行・吉凶・興行事色々

寛政十一年ヨリ□

大北氏

」

とあり、この表紙から、この『書留日記』が、「当所」小浜で起こった珍事、小浜に出された「御触」、「大飢饉」、「仕法立」を主たる内容としつつ、それ以外に「出水・地震・臨時・変死・流行・吉凶・興行」などを内容としたものであることが分かる。この『書留日記』と同時期に、同記主による別の主題で作成された「書留日記」二冊が残されている。それぞれの原表紙は、

「嘉永七甲寅年写之

当所出火
諸国珍事書留日記

文化十四年ヨリ□

大北氏

「嘉永七甲寅年□□^(写之)

殿様吉凶 書留日記
御役人役替

文化六年ヨリ 大北氏」

とある。冒頭に本『書留日記』と同様、「嘉永七甲寅年写之」とあることから、これらの「書留日記」が嘉永七年（一八五四）に同時に作成され始めたことが分かり、相互に参照することで、より多くの事柄を知ることができるが、今回の刊行では、当時の小浜の様子を最も豊かに描く第一冊目をその対象とした。なお、第一冊目と極めて近い関係にある第二冊目の「当所出火」の部分を、付録として巻末に収めることにした。

さて、本『書留日記』の記主は、城下町小浜の中心街である瀬木町（巻末参考資料参照）に住した井筒屋（大北）の五代目当主、勘右衛門である。勘右衛門は、米穀や木綿を商うかたわら質屋も営んでいた。天保八年（一八三七）八月二日、藩より米手形会所御用達に任じられ、明治初年までその役を勤め、その間に「大北」姓を名乗ることを免許されたようである。明治二年（一八六九）正月二十四日に、他の者とともに御用達を免じられ、同年閏十月二日には「融通会社取締役御用掛」の一人に任じられた。そして同四年二月十八日に、宿老退役願と隠居願を提出し、同二十二日、これを認められ、勘助と改名した。

城下町小浜は、寛文元年（一六六一）には五二町となり、町奉行の支配の下、町年寄、宿老を通して運営された。町年寄は惣町を代表する役職で、城下有力町人二人が任じられ、町奉行支配下の小頭（二人）とともに町会所で業務を行った。宿老は町庄屋（名主）に当たるもので各町とも二人ずつ設けられた。はじめは肝煎と称されたが、享保十一年（一七二六）に宿老に改められたとされ、必要に応じて五人組頭の協力も得て仕事を進めた。

井筒屋勘右衛門家は、少なくとも四代目には瀬木町に住み、四代勘右衛門は、文化十年（一八一三）から九年間、瀬木町の「宿老役」を勤め、天保七年（一八三六）ころ家督をこの『書留日記』の記主である五代目勘右衛門に譲ったようである。ちなみに四代目勘右衛門は、隠居後、「勘左衛門」を称した。また、井筒屋勘右衛門家は、天保四年の小浜での打ちこわしにあつた一〇軒のうちの一家であり、この段階にはすでに有力な米商人であつた。なお、本『書留日記』で、「手前」とみえるのは、「井筒屋勘右衛門」家のことである。

本書の内容は、先にあげた原表紙の記載から推測されるところであるが、もう少し詳しく紹介しておこう。

記事は、寛政十一年（一七九九）に始まるが、そのあと文化四年（一八〇七）まで記事はなく、その後、天保七年（一八三六）までは飛び飛びに記述がみえる。天保七年以降、記事は周密となるが、表紙に「嘉永七甲寅年写之」とあるように、嘉永七年まではそれ以前の記事を手許の記録にもとづきながら編年・日記体で振り返って記載したようである。嘉永七年以降は、編年で書き継がれ、明治五年二月で終わっている。

最初の記事がみえる寛政十一年は、小浜藩が幕府に米手形（藩札）の発行認可を求めそれが許可され、米手形会所が開設された年である。この記事は、井筒屋勘右衛門が米手形御用達となつたことに関連し、その心覚えとして、米手形会所の始まりを書き留めたものと思われる。

文化四年の記事は、小浜を襲つた大洪水とそれによる自家の被害、その後は主として大雪・大雨等の異常気候と米価の動向が記され、さらに、天保四年の打ちこわしの様子が、自家の対応も含めて書き留められている。

記事が周密となる天保七年は、天保四年につづく大飢饉の年である。同四年の一揆・打ちこわ

しを経験した藩は、同七年から八年にかけて諸国からの買米による米穀確保を進め、また難渋人への低価格での払米、施粥などを実施した。こうした藩の施策を実際に担ったのは小浜の米屋仲間や「見柄」「身柄」の有力町人たちであった。このさなかの天保八年二月、この『書留日記』の記主である井筒屋勘右衛門は、米手形御用達の一人に任じられ、この飢饉対策にも当事者としてあたることになった。このことが、記事の周密化の直接的要因であろう。ちなみに、天保七年から八年にかけて「天保七丙申年凶作二付大飢饉書留」の項目のもと、米価の動向、難渋人への払米仕法、社倉米、施粥などについて詳細な記事を書き残している。

表紙に記された嘉永七年（一八五四）は、小浜町のほぼ全域を焼き尽くす大火のあった年の翌年にあたる。この大火はいささか大げさであるが「古今稀成大日本ニも無之候大火」と『書留日記』が記す、江戸時代にあつて小浜最大の大火災であった。この火事で瀬木町にあつた井筒屋勘右衛門の家も蔵とともに焼け落ちた。おそらく、この『書留日記』が作成されたのは、この大火が契機であり、それ以前の記事は手許にあつた記録をもとに書かれたものと推測される。嘉永七年の翌年安政二年（一八五五）冒頭の「一」の字の高さに明らかな変化がみられ、このことを推測させる。この年以降は、編年・日記体でその時々 の出来事を書き留めている。そして、記事は、米手形会所の後身である「貨幣方」が「町役所」となる明治五年（一八七二）二月十六日に終わる。

始まりが米手形会所の開設であり、記事のかなりの部分が米価変動の記事を含め米手形会所あるいは米手形御用達に関わるものであり、最後が米手形会所の後身「貨幣方」が「町役所」となったことで終わっていることからすれば、この『書留日記』は、米手形御用達としての井筒屋勘右衛門の記録ということもできる。

しかし、内容は、その職務だけを記しただけのものではない。表題に「当所珍事・御触・大飢饉・仕法立」とあり、また表紙の注記に「出水・地震・臨時・変死・流行・吉凶・興行事色々」と注記されたように小浜に関する多種多様の記事で成り立っている。

「当所珍事」は、何をもって珍事とするか判断の難しいところであるが、本『書留日記』が「前代未聞之御事」とした、文化九年（一八一二）暮の一丈（約三メートル）を越す大雪によって「大年（年末）」の取引が藩主の命で正月晦日に延期されたことや、文政九年（一八二六）の継母殺しの磔一件などをあげることができよう。

「御触」は、儉約令、藩の仕法替等の触書類も多くみられるが、米手形会所に関するものが多い。また天保改革時の幕府法令・藩法令としてそれらへの具体的対応も詳細に書き留められている。なお、この『書留日記』に収められているものの中には、『小浜市史』藩政史料編三に収められていない触がかなりみられる。

「大飢饉」は、天保七年（一八三六）については詳細な記事がみられるが、それ以降の凶作の様子やそれへの施米・施粥などの対応策などの記事も少なくない。「仕法立」は、藩の財政改革に関するもので、この史料でしか知り得ない事柄が多くみられる。具体的内容は、『福井県史』通史編4近世二、『小浜市史』通史編上巻を参照されたい。

「出水」については、小浜を中心とした洪水の様子、それだけでなく大雪・大風・雹・雷等、気象・氣候に関する記事も多くみられる。また「地震」の記事は、小さなものまでかなり克明に記されており、地震への関心の高さを思わせる。「変死」については、雷による死人、ふぐを食しての死亡記事のほか殺人・自殺・事故死などの記事もみえる。「流行」については、安政六年（一八五九）の「ころり」（コレラ）の流行とそれへの対応の記事が注目される。

「興行」には、角力・能・猿楽・狂言・浄瑠璃・貝細工見世物、力持、曲持、曲駒廻、嘶物まね、芝居嘶等、さまざまなのが取り上げられている。そこでは、京都・大坂から呼び寄せた興行も多くみられ、またその当たり外れ等も注記されていることが注意をひく。

このほか八幡社・神明社・愛宕社等の祭礼に関する記事がある。なかでも祇園会の山・ねり物等の記事、寺社の修復に関する記事は、一つ一つは短いものであるが、その記事数は多い。

天保九年（一八三八）の幕府の諸国巡見使と安政五年（一八五八）の海岸巡見使、尾崎川原や西津浜での調練、海防およびそれに関わる台場築造、安政大火後に広小路に新たに掘られた堀川（新川）などに関する記事も注目される。

このように、本『書留日記』は、一九世紀前半を中心とした小浜の様相をさまざまに記録したものであり、十分に整理されたものではないが、それ以前に成立した『拾権雑話』の後を継ぐ地誌的役割をも担う貴重な史料である。

平成二十一年三月

京都大学大学院文学研究科教授
福井県文書館記録資料アドバイザー
藤井讓治

凡例

一、本巻は、福井県文書館資料叢書の第三冊目である。

一、本書の原本は、小浜市立図書館が所蔵している「旧団嘉次家文書」のなかの若狭国小浜町人の珍事等書留日記である。ここには「当所珍事・御触・大飢饉・仕法立書留日記」「当所出火・諸国珍事書留日記」「殿様吉凶・御役人役替書留日記」の三冊が伝存し、このうち、「当所珍事・御触・大飢饉・仕法立書留日記」の全帖と、付録として「当所出火・諸国珍事書留日記」のうち「当所出火」部分を、『若狭国小浜町人の珍事等書留日記』として翻刻した。

一、資料の利用に資するため、巻末に参考資料を付した。

一、翻刻にあたっては、原本の体裁にそつよう努めたが、読みやすくするために、原文の意味を損なわない範囲で、次のように取り扱つた。

(1) 使用字体は原則として常用漢字を用い、変体仮名や合字は通常の仮名に改めたが、次に掲げるような仮名・俗字・慣用字句は残した。

刁(寅) 扣(控) 躰(体) 芴(州) 斗(ばかり) 𠂔(より)
而已(のみ) 而(て) 江(え) 者(は) 与(と) 茂(も)
百姓(百姓) 出情(出精)

(2) 全文にわたつて読点と並列点をつけ、明らかな誤字には、右側の()内に正字を注記した。あわせて文意が通じないものには(マ、)、文字が重複する場合は(衍)、脱字には(□脱)(□脱カ)などの傍注を付した。また、特殊な読み方をする語句のルビや、年代・人名・地名など校訂者による注記はすべて()内に記した。

(3) 欠損・虫損等によって文字が判読できない場合には、□で示した。

(4) 原本の闕字・平出などはすべて省略した。

(5)宛名の位置は、原文の年月日の位置を基準にして、それとの関係で適宜定めた。

(6)柱は、原則としてそのページの最初の段落における資料上の年を示した。

一、本書には、現在からみると基本的人権にかかわる歴史的事象も含まれているが、地域の歴史的事実を正しく理解するために原文をそのまま翻刻することを原則とした。本書は人権尊重をめざし、史実にもとづく研究を進める立場から刊行するもので、この趣旨を理解し、利用していただきたい。

一、翻刻にあたっては、当館職員が筆耕し、校合は本川幹男氏（当館資料調査員）と当館職員が行った。編集は、藤井讓治氏（当館記録資料アドバイザー）および本川幹男氏の指導をうけ、当館職員が行った。

一、資料の所蔵者をはじめ、本巻の編集のためにご協力をいただいた方々に深く感謝申し上げます。

若狭国小浜町人の珍事等書留日記 福井県文書館資料叢書3

目次

発刊にあたって

福井県文書館長

岩本文男

序にかえて

京都大学大学院文学研究科教授
福井県文書館記録資料アドバイザー

藤井讓治

凡例

珍事等書留日記

文化期	………	1	万延期	………	85
文政期	………	1	文久期	………	94
天保期	………	4	元治期	………	106
弘化期	………	46	慶応期	………	111
嘉永期	………	51	明治期	………	131
安政期	………	66			

付録 …………… 169

参考資料

口 絵

- 1 若狭国小浜町人の珍事等書留日記
- 2 書留日記（天保八年）
- 3 小浜町絵図（明治四年）

参考資料

- 図1 旧小浜町の町名改正図（明治七年）
- 図2 嶺南四郡の町村（明治二十二年）

若狭国小浜町人の珍事等書留日記

〔表紙〕
「嘉永七甲寅年写之」

当所珍事・御触
大飢饉・仕法立書留日記

并二出水・地震・臨時・変死・流行・吉凶・興行事色々

寛政十一年ヨリ□ 大北氏

寛政十一己未年三月朔日今御上様米手形御役所米札初り

鶴札 式拾目 亀札 五匁

松札 壹匁 竹札 五分

右之通被仰付通用初り

文化期

文化四丁卯年九月十六日今雨天二而、同夜七ツ時今東北大風雨二而、同十七日大洪水、右二付板橋・土橋・竹原口橋・湯岡橋落ル、御城内江水付御蔵米千式百表斗濡、御家中之破損不申及、在方・町・西津大水二而、其時魚屋町切戸ニ米屋与市蔵有之候処、石垣崩れ中物共皆無也、瀬木町へ船通ル、其節近所ハ不残床へ水上り候へ共、手前ハ地引高く候故床五寸下斗付、其節手前二者御上様御蔵へ出米預ケ置候処式拾五表濡、又松本町島屋仁左衛門方ニ村上米預ケ置候処座九表斗濡、其外在方田地砂入、御家中・町・西津諸代呂物濡、流シ候物夥敷事ニ候得共、先有増書印置候也

右出水二付難込人少々有之二付、殿様御身ノ上万事御儉約被為遊、郷中へ金子三千両被下候、町方へも壹軒二付小玉壹ツ宛御封被遊被下置候

〔朱書〕
「右三千両之金子ハ西津古川、敦賀美濃屋・高島屋右三軒分調

達被致候由、尤御返済ハ殿様分追々御返し被遊候よし」

殿様思召難有存候ニ付町在身柄之者上ケ金仕候、且又町近在今御城内へ破損場所夥敷候ニ付人足御手伝申上候、尤瀬木町分式百人、但し五日ニ罷出候也

文化九壬申年極月十七八日頃分段々雪降候而、廿七八日時分迄ふり続キ候処、凡七八尺、壹丈斗りふり申候故、御家中・町・在方・寺々破損夥敷有之候、細小路之分ハ不申及町中七八尺、壹丈ふり候上へ屋根分雪おろし候故、一統小坂を歩行如なり、余り大雪二而大□^(年)取引難相成候ニ付、従御上様正月晦日ニ相延し候様被仰付候也、前代未聞之御事也

文政期

同十五戊寅年二月十一日八幡宮様卯祭り御神事ニ付、町方分能狂言奉納致候

一文化十五戊寅年本町木崎勘兵衛六月祭り後分病氣二而、八月廿四

日之暮六ツ時死去被致候、是^(者力)□高浜横町勘兵衛出二而、年五拾五才二而死去也

一同八月十二日夜暮六ツ半時青井町庚申堂前二而、諸士衆四人、町方凡廿人斗と大喧嘩有之、町方拾人斗入牢致候也

一文政二己卯年正月廿三日町内日待宿是迄組日待二候所、当年今正誓寺借用致大日待二相成申候

一同三月八日今十二日迄遠敷上・下宮様千百年御神事執行有之、同九日二能有

一同四月十三日今十七日迄八幡宮様千五拾年御神事有之、社内五夜^(提灯)燈、町中夜毎二十四日今十六日迄燈^(提)灯出し申候、十五日能有、放生会同様町々俄のねりもの有之候

一同六月十二日昼八ツ半時大地震二而所々方々蔵の壁われ申候、家之破損夥敷事也、其外江州大溝辺今向八幡辺夥敷痛申候よし

一文政二己卯年愛宕山御本社及大破候二付、町中寄進を頼再建仕候但シ手前講中故何事も引請世話致候也

一文政三庚辰年五月廿五日今晴天三日之間、八幡宮砂持御座候処、廿五日雨天二付廿六日・七日・八日迄三日之間、土橋之下中瀬之土川崎町浜今町中惣出二而砂持致候、并二町々若者・子供色々揃之拵杯致砂持仕候事賑々敷事二御座候也

一同五月上旬米相場越後米式ト五六升位、出羽米式ト八升位致候処、同中旬頃今六月十日頃迄大雨降続キ候二付、越後米式ト壹升位今出羽米式ト三升位二相成、六月祭礼後今天氣二相成、段々米相場下直二而追々入舟有之候而、八月今九月中旬至り越後米三ト式三升、出羽米三ト四五升迄下直二相成候処、又々作違申立、九月下旬頃今十一月二至候得共越後米式ト七八升迄、出羽米三ト八升迄引立申候

一文政四辛巳年町会所建替二付町中今八貫目出銀、其後世話人中今頼二付拾式貫目二相成申候、右二付町役所与相改ル

一文政四辛巳年五月廿九日昼八ツ時大夕立二而、川縁町疊屋庄助蔵ノ屋根へ雷落ル、下市場鍵八西際ノ裏へも落、瓦式三枚斗われ申候斗也

一同八月廿八日町中へ人改被仰付、京都其外所々江奉公二出候男女呼寄申候、則瀬木町分八十月二日於正誓寺不殘改有之候、同日御

礼二廻り候節御役人衆へ進物左之通

町老衆へ半紙三拾折、小頭衆へ半紙廿折、宿老へ半紙廿折

此時米屋市兵衛・手前親勤居候也

一文政八乙酉年春三月頃田辺米壺ト八升分八升五合位、同四月分五

月段々入舟有之候ニ付、越後米壺ト八升五合分壺ト九升・壺ト九

升五合、出羽米式斗分式ト壺升・式ト一升五合位迄相場ニ御座候

処、六月土用前雨天続、土用中ハ晴天ニ御座候、六月廿日頃分少

々冷氣ニ相成、七月分八月追々冷氣ニ而米相場段々高直ニ相成、

越後米壺ト八升分七升・六升、壺ト五升位迄相成申候、又候放生

会十四日大風雨ニ付壺ト四升分三升・式升五合迄引立申候、世間

一統何となく騒敷候ニ付夫故少々緩ミ、九十月之頃壺ト三升分三

升五合位迄下直ニ相成申候得共、何分元来不作ニ相成候故、又々

十一月・十二月壺ト式升五合分壺ト式升迄、大豆式斗位分一ト五

升位迄、塩六七月頃壺石分九斗位之所七斗六斗、八九月頃五斗・

四ト五升と相成申候、御蔵相場ハ六月御勘定之時分ハ廿三匁五六

分所、夫分段々廿四匁五匁・廿七八匁・三拾匁、八月御蔵払之節

ハ三十一匁位、十月五月初相場三十一匁、十一月下旬三十一匁五

分位之処、御上様御貢納無数候ニ付出米留ニ相成、極月附米三十

一匁、出米三十三匁分三匁五分ニ相成申候

一綿相場も拾六七匁位之処、八九月頃二者廿式三匁ニ相成申候

右諸色高下之次第荒増書記し置申候

一文政九丙戌六月三日夜五ツ半時ニ大雨大雷ニ而、本町木崎藤兵衛

家之中庭ニ落ル、塩屋町紺屋長兵衛・竹内様門口へ落ル、竹原式

番町市石様御屋敷落ル、其外所々在々三ツ四ツ落ルなり

一同四月廿日夜西津家中香河弥三郎様御子息俊右衛門と申人継母を

殺、其夜根来谷へ逃去候所御上様分追手罷出召捕ニ相成、江見求

馬様へ御預ケニ相成、夫より馬場町角明屋鋪ニ新規ニ牢御立被成、

八月廿四日迄入置、同廿五日大津町牢へ駕籠ニ而渡り、廿六日朝

七ツ半時馬ニ乗セ大津町通り、本通り湯岡芝原迄引廻し磔ニ相成

申候

〔但し^(朱書)三日之間其儘さらしニ相成、尤先年東市場おなべ磔分凡

百年斗ニも相成候様申、見物人凡式万人斗有之候、前代

未聞之御事共也

一文政十一戊子年春三月頃田辺米壺ト九升、福知米壺ト八升五合位

之処、同四月分五月時分入舟有之候所、越後米壺ト八升五合分九

升、出羽米壺ト九升五合分式斗、秋田米差不入式ト一式升位迄相

成候処、土用六月中旬頃分段々順気悪敷候而、六月下旬頃越後米

壺ト六升位分段々高直ニ相成、八月頃壺ト三升位迄有之候処、又

八月十日大風ニ而御座候、然二前書書印有之通り九州筋大荒之事

故、上方筋追々米穀高直ニ相成、又々当所も追々引立、越後米壺

ト式升位迄御座候処、無何与世間騒敷相成候故、入津物買人無之候而追々出舟致候二付、從御上様米屋仲間中へ申合買取候様被仰付候二付、仲間相談之上、仲を以紙屋長左衛門方ニ□□□□^(越後米)□□□□^(壬)表斗買申候、一統割合ニ而分ケ申候、代銀ハ御上様分拾五貫目仲間へ拝借仕、同十一月晦二元利御上納仕候、右ニ付極月廿六日仲間年寄御呼出し有之、為御酒料三拾目頂戴仕候也

一文政十式己丑年四月廿五日上中郡末野村半藏と申者昨子年実父を殺し、大飯郡横津海村仁右衛門と申者実母を殺し、兩人共大罪人ニ付馬ニ乘引廻候上、本通り湯岡芝原にて磔ニ相成申候、見物人多し、其儘五日之間晒物ニ相成、昼夜遠敷エ夕番を致申候也

一去ル子年諸方共米価大不作ニ而丑春上方大坂・大津杯相場段々高直ニ而、壱石ニ付百目余ニも相成、当地も正月廿日頃分越後米壱ト一升五合、田辺米壱ト式升位之処、追々高直ニ相成、二月上旬田辺米壱ト〇五合、越後上古米壱斗位、秋田米壱ト壱升位迄引立申候、夫分三四月頃ニ者田辺米壱ト式升三升迄引下ケ申候、右高直ニ付町方身柄之者三拾人斗申合百目ツ、持出し、御上様へ御届ケ申上候而、町役所ニ而廿日斗白米壱ト三升ニ売申候故、同極月廿八日右人数へ御酒壱荷・鯛式連被下置候二付、翌年寅春町役所ニ而頂戴仕候、其節手前も右三拾人之連中故書記ス

天保期

一天保四癸巳年四月九日昼九ツ半時ニ中地震、又其日小地震五ツ斗もゆり申候也

一同年四五月頃氣候甚悪敷、同六七月頃冷氣甚敷候而米直段壱ト壱式升位之処、又八月朔日大風雨ニ而米直段壱斗分九升五合九升迄引立申候処、夫分追々諸国一統不作之趣ニ相聞候、別而越後・出羽・奥州甚凶作と相聞へ、旁以追々引立八升分七升五合分七升位迄引立申候二付、甚世間騒敷候事ニ候故町方身柄之者十人斗申合、於極楽寺粥施行仕候、手前共其中へ加り申候、夫分追々施主人も出申候二付、難洪人追々増申候二付、夫ニ付町問屋方蔵小頭・同心衆御改ニ相成、仲年寄兩人ツ、付添相廻り候、其後町中米屋仲間并ニ見柄^(身)之者迄右同様ニ而御改御座候、國中追々不穩風聞、播州ニ傲訴、越前あわたべと申所ニも傲訴ト相聞へ、尚更右之様子引移り騒敷次第ニ相成候所、去ル十一月十三日昼時ニ名田庄三重村神主左京ト申者之所へ、名田庄之者三五拾人斗も詰掛ケ申候而、十三日夜八ツ時分ニ町方へ参りも善・も伝へ詰掛ケ申候、段々対談致も善ニ者如何様ニ成共致候様被申候而相濟、も伝ニ者為替米を取丹ば表へ遣し候と申候故哉、何分左様之事覚無御座候与被申候二付、夜明ケ方ニ町御奉行大塚九郎右衛門様・藤野惣太郎様御出被成、同心衆少々棒ニて百姓ニ手向イ被致候二付、こぼち掛ケ

申候、酒蔵ニ入酒不残流し申候由、夫より町年寄西島屋をこほち候様ニ申候也、是ハ七八月頃年柄悪敷と心得米三五拾表斗買入候を、西島買メルと御領分中之者か申唱へ参りかけ候へ共、町御奉行衆西島を固メ居候故、尤昼之内ニ而瀬木町・本町ニ百姓不残軒きわニ居申候ニ付、手前共十三日夜八ツ時石田殿分しらせ被呉候時分焼出し致、凡米之壺石斗も焼申候処、夫より御代官・御郡・大目附様方色々御諭被遊候得共一向引取不申、其上西津・小松原・池ノ河内・根来谷・松永谷杯分追々出申候而、十四日暮六ツ時ニ二ツ鳥井米長をこほち、夫分西島もこほち、宇久長も同断、夫分向石田殿ニ而酒を呑候而、井勘ハ爰かと申、夫より追々加戸の戸を叩キ候故、対談致候と心得候所へ何かなくこほちかけ申候故、手前家内之者裏口へ出、樽屋を通り井長・升源兵衛両家ニ泊り申候、夫分尾野屋・茶孫・も伊・四十庄・井清をこほち申候所、十五日曉六ツ時ニ相成候故、御役人衆鉄炮・鎗杯ニ而嚴敷被成候ニ付、百姓不残引取申候

〔^(朱書)右ハ元ハ名田庄三重左京ニも伝為替取候事ニて、主意も御座候へ共、町方ニて焼出し酒屋ニ者酒を出し、肴屋ハ肴を出し致候故、酒きやうニ長し我ま、ニ相成、十五日御役人御出無之候ハ、町中見柄^(身)之者こほち可申位之いきおひニ相成候共、御上様分嚴敷被仰付候事故、ちりくニ引取申候也 〕

右ハ天保十己亥年三月六日ニ御裁許有之候、但シ七年ふりニ而候間、申・酉之飢饉ニ頭分死去致候由故、死罪人ニ相成候

者壺人も無之候、百姓其節分夥敷入牢致、并ニ手錠も有之候へ共、何分毛頭取留メ候傲訴ニ無之候故、何分年数も相立死罪人無之候、百姓御呵之入牢・手錠・追込色々有之相濟申候

町方こほたれ申候者

木綿屋伝助廿日之間戸メ、西島又兵衛・米屋長兵衛七日

追込

木綿屋伊兵衛・尾野屋次兵衛

宇久屋長右衛門・四十物屋庄兵衛

四軒五日追込

三島孫右衛門・井筒屋清右衛門・手前

三軒ハ三日追込ニ而相濟申候

天保五甲午年四月七日分九日迄社家仲間ニ而、遠敷上・下宮様ニ而御国成就之御祈禱有之候也

同十九日從御上様遠敷上・下宮様へ御国成就之御能奉納有之候

去ル巳十月分午五月節句迄町方身柄之者分極難澁人へ施し御粥極樂寺ニ而出し申候、手前共も巳十一月十四日迄出し申候へ共、傲訴ニ出合候故夫分止メ申候

天保五甲午年四月中頃^(分)二三歩一村・四部^(分)一村ニ六尺斗之女毎日出

ル申尊也、是ハ狐狸之類与申也

同五月十日昼時二大津町米屋兵藏之屋根ニ、是も六尺斗女手拭をかづき出候を子供が見届ケ候ニ付、大津町大騒キ致候所消失申候由ニ付、町内中四社様へ参詣致候由

天保六乙未年正月廿四日獵師町・青井町・常在小路右三丁之者十人、獵師町龜屋文七へ寄集りふぐを喰し、内五人龜屋文七・□屋吉之助・高塚屋久兵衛・檜皮宗介・魚屋松之助メ五人、其夜五ツ時ニ死去致申候、残り六人之者少シツ、被宛候得共善快致申候、同廿六日右五人之葬式有之、誠ニ珍敷御事ニ御座候、然ル所三月上旬ニ從御上様御触有之、五人之者共ふぐを喰し死去致候ニ付、此後げんき立致ふぐを喰し死去致候ハ、急度嚴重ニ可申付候、心得之ため書記置候也

同四月十六日瀬木町ニ石田利右衛門殿被居候へ共、大借有之候ニ付、川縁町木谷屋長兵衛借家へ宅替被致候也

(朱書)
「町老ハ矢張被勤候也」

同五月十四日夜より大風雨ニ付、十五日昼時二大洪水ニ相成申候、欠脇丁・今在家丁・材木町・片原町・川縁丁大水ニ御座候

同廿一日・廿二日大雨ニ而先之通出水多分ニ出申候、近年稀成洪水也

同六月十三日祇園祭礼、当日八幡社内ニ而具細工見せ物参り候へ共、左程ニも無之候也

同於正誓寺子供力持・曲持、是ハ珍敷事ニて大当りニ御座候

同閏七月三日從御上様、此度穀物・素麵・油・着類預り候者吟味致、書付を以差出し候様被仰付候ニ付

覚

一着類 一素麵 一荒物 一絹糸 一諸道具類

一穀物類 一油 一鉄釘 一反物 一

右之通町宿老名当ニて書出し申候

右ニ付閏七月廿一日町役所へ御呼出し有之

先達而失セ物御吟味有之候ニ付、町々宿老中へ書附を以書出し候様申付候処、段々御調へ有之候間一統へ申談示候

此度四拾式人江小質屋を申付候、右ニ付はつし者又ハ盜物一切預り候事相成不申候、若シ預り置相知れ候ハ、職分差留メ申候間、仲間一統申合左様之義無之候様急度相守可申候事

大文し屋政右衛門 石田治兵衛 同勘兵衛 堀口清兵衛 油屋与兵衛 井筒屋勘右衛門 堀口久太夫 竹田屋藤五郎 井筒屋清右

衛門 和久屋惣兵衛 鍵屋平右衛門 も勘藏 茶屋久右衛門 越後屋セ右衛門 木谷屋長二郎 も綿屋半三郎 も市兵衛 同久左衛門 同伝助 塩屋宗兵衛 大屋文右衛門 越後屋彦兵衛 も嘉介 同庄助 油屋源兵衛 泉屋平兵衛 大工新兵衛 大黒屋勘左衛門 滝三右衛門 同又右衛門 同六右衛門 米屋吉兵衛 茶屋弥介 同嘉兵衛 角屋利助 石野五郎兵衛 西村屋仁左衛門 亀屋勘兵衛 丹後屋安兵衛 吉岡屋喜兵衛 林田惣介 林屋源助
 四拾式人

一天保七丙申年二月十三日昼八時半時ニ油屋与兵衛殿、正誓寺之地内ニ木小屋を借物置ニ被致居候処へ、右与兵衛殿繩にて首をく、り死去被致居候処を、町内子供か見附届ケ申候、場所柄故見物人夥敷事ニ御座候、右ハ借財夥敷有之、平日小氣ニ御座候故ケ様被致候事ニ被存候、右を急病ニ申立同心衆尋ニ被参候、并ニ町老衆ハ町内之宿老を呼御尋有之候節、変死を陳候故甚六ケ敷候事ニ相成、夫有之儘ニ申上候所、檢使十四日夜四ツ時ニ相立候也、十五日朝勝手次第取送り致候様被仰付候、則十五日七ツ時葬式有之候

右陳候訳合ニ付後日宿老組親類油与番家迄御呵有之候也

一同二月廿日大島之者・下竹原之者外海へ参り居、十ひろ斗の死鯨をひらい、廿一日朝西津浜辺へ引寄、廿一日・二日町在中今見物

ニ参り候事夥敷事也

一同二月十二日夜七ツ時ニ御用処支配之足輕竹原安竹喜太夫と申者、去々午年今折々米手形御役所へ引人ニ罷出候所、新札朱印并ニ増印無之札を盗取、朱印を拵増印も同様、右ニ付同心衆召捕ニ被参候而入牢被仰付候

(朱書)
 「右ハ丁酉年九月ニ疫癘にて牢死致候噂也」

一同六月八日町老衆今町中へ被仰付候義ハ、当年殊の外雨勝ニ而氣候甚敷候間、町中今八幡宮様へ御国成就御祈禱可致様被仰付、則九日ニ一統参詣致候事

天保七丙申年凶作ニ付大飢饉書留

一当春以来甚夕寒く、六月今八月ニ至り不順天氣と申ハ誠ニ稀也、土用其外厄日不残雨降続キ、五月頃ニ者加州米拾匁ニ付壺ト式升式合位之処、六月差入上米壺ト一升位、六月中頃壺斗位、六月晦日頃九升ニ相成、七月三日頃八升八合ニ而御座候所、七月廿五日頃ニ者七升五合位迄引立申候、手前方ニ米商内仕候処日々二買人増、七月廿九日頃壺人ニ壺白宛黒米売申候へ共、買手斗ニ而壺白ニ而ハ暫時ニ米切申候ニ付、七八升ツ、致、夫今五升宛ニ致、夫今三升ツ、致候へ共外方追々切候故、百人斗も一日ニ買ニ参り候故取続キ不申、八月十日頃迄売候得共、最早飯料式拾表斗残し八

月十一日今米商内止メ申候

一同八月上旬ニ社倉藏ニ有之候稗、町中極難渋人ニ被下置候

一綿相場も去ル未年ニ不作致無少上、当中年ニ雨降続キ候て不残木を痛、六月上旬頃今手前下地買置米子古綿少し御座候を、壹貫匁ニ付三拾匁位今三拾五匁位迄ニ売申候処、七月大坂綿相場六貫貳百匁入正銀貳百四拾匁位迄商内有之候由申来り候

一当地塩相場六月上旬八斗位今追々高直ニ相成、七斗、六斗、五斗、四斗、八月上旬三斗五升迄商内御座候処、塩も津留メニ相成申候、六月今八月迄塩舟と申ハ唯一艘も入舟無之処、八月末ニ至り新塩参り夥敷入舟有之候故、四斗今五斗位迄下落仕候也

一麦安壺ト五升位今八月末ニ至り九升七八合位迄引上ケ申候

一大麦三斗今壺ト貳升位迄引立申候也

一小麦壺ト貳升今八月末九升位迄

一新大豆舟入津有之候処壺斗今九升五合位

一小豆壺ト貳三升今八升五合位迄

其外何ニ不寄食事致候物高直ニ御座候也

米屋仲間ニ米買置無之候故、新穀物斗見世ニ御座候也

一八月差入頃より米屋仲間申合入舟米を買上ケ、鶉羽小路菊長明家を借請、町・郷中共壺軒ニ米壺升五合ツ、売申候也、但し内々御上様へ御頼申上候而、八月廿四日迄米屋中間会所也

右ニ付御触書之写

一当夏以来不順氣ニ付、先達而も相触候通銘々覚語(悟)も可致事ニ候処、追々入舟米も絶々又ニ相成、適々纔宛入米有之候へ共、暫時ニ扨切候様之次第、其上追々高直ニ相成、難渋人凌兼候事ニも可及、何共不安心之事ニ候、御上ニ有之候而ハ聊御如才も無之候得共、兼而申来候通り之御時体、自然御手茂届キ兼候次第二者候へ共、何分此儘ニ而ハ下末々ニ至り取続方も有之間敷候間、地船持之者共へ被仰付、他国米買入御手宛茂有之候間、此段安心可致候、しかし右着米迄之処今日之儘ニ而ハ一統難義ニも可及ニ付、御引替米可被差出候間、是又左様相心得可申候、尤相場之義ハ中分以上俵米相調へ候向へハ、其時々相場を以差出可遣候、以下小買致候者共へハ何程高直ニ御買入ニ相成候共、拾匁ニ付白米八升ニ相定メ可遣候間、此後飯料之義者安心致銘々実ニ入用程宛相求メ、且雜穀取交成丈ケ喰延し候義專一之事ニ候

一御上御不手繰之御中格御取扱被下候事ニ候へ者、右冥加ニ不尽候様大切ニ相心得、格別之儉約覚語相立可参候、万一不埒之義於有之而者、兼而吟味筋役々へ茂被仰付置候事も有之候間、甚以大切之事ニ候間、末々迄急度心得違無之様相触可申候

但し本文之通一統飯料御上御引請ニ相成候、有米御取調へも有

之事故、当時飯料相貯居候向江ハ夫々員数相認メ早々差出可申候

右之通被仰付候間町々念入可被相触候

申八月十八日 町年寄

町々宿老中

一天保七丙申年八月廿日ニ手前共御呼出し有之罷出候処、此度御上様米会所店三ヶ所ニ而御売捌二付、世話致候様被仰付候也

難洪人壺軒前ニ白米壺升五合ツ、但し壺匁ニ八合替、

中以上之分黒米壺ト四升ツ、拾匁ニ付七升式合替

東店 石田利右衛門明家

中店 木谷三郎太郎店

西店 菊屋長兵衛店

但シ壺店町組同心衆壺人、目付衆壺人、ノ式人宛、朝五ツ

時々七ツ時迄相勤被申候也、手前共東組出勤申候也、

夜分ハ次郎共壺人、白方・帳元・小使替ル／＼泊り番

致候也

右元締世話人拾人斗

下世話人三店都合六拾人

右ニ付町中飯料貯居候者、当月中或ハ九月中・十月中・霜月中

・当年中皆々町々宿老中ノ書付を以町年寄衆へ差上申候

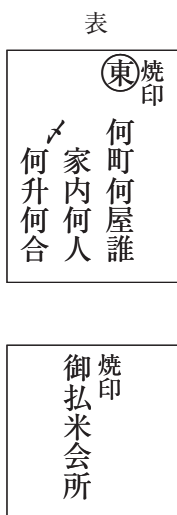
但し手前共ハ当年中等書上ケ申候処、朝夕粥致、昼ハあらめ

・大根菜・稗色々上置致候而喰延し申候故、凡来酉四五月頃迄飯料御座候由相見得候也

九月差入迄難洪人へハ木札ニ壺升五合等名前之札ニ而買申候得共、九月上旬分相改メ、中以上も難洪人も一日ニ三合宛ニ相成申候

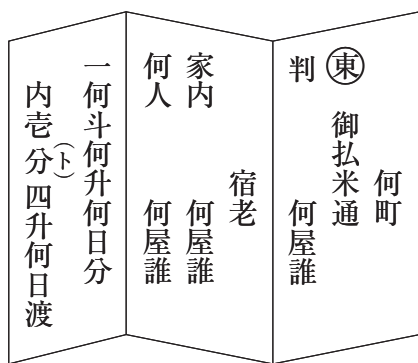
極難札板

裏



但し壺人三合ツ、町在共同断

中以上分通
壺白ツ、御払被下候
拾匁七升式合がへ



右ニ付地舟・他国舟入津不残御買上ケニ而、右三店ニて御売払

被遊候而、米屋へ壺粒も買申事相成不申候而、雜穀斗米屋ニて

売申候也

右ニ付穀穀も他国出津留メニ相成候ニ付、土橋御番所、須崎町浜

辺、大蔵小路浜辺、長源寺出口、欠脇町番所、谷口番所之下ニメ

六ヶ所津留番所相立申候

是ハ町方々郷中之人ニ雜穀売申候を、他国へ出し候哉と御うた
がい有之候ニ付、郷中人米屋方ニて雜穀売申節ハ、左之通切手
を認遣し申候事

御払米	一大豆 何升何合
会所	一小豆 同し
右ハ何村誰ニ無相違候	名判

上之判ハ三ヶ所之
米会所ニて頼、押
て貰申候也

右ニ付米穀買入甚六ツケ敷と存難渋ニ察

申八月二日
一白米三斗井筒屋藤兵衛へ遣ス
申八月五日
一白米壹斗井筒屋茂兵衛へ遣ス

右之通式軒へ施し申候、残り之出入八月十三日呼ニ遣候、御蔵出
米其節壹表五拾三匁位ニ而も迎も手ニ入兼候次第ニ有之候処、甚
難渋と存、当時附米御相場三拾九匁ニ候間、右直段ニ致壹表ツ、
遣し申候事ニ取斗申候

一御蔵出米壹表 井筒屋仲兵衛 一同壹表 木崎四郎兵衛

一同 本所屋久助 一同 木綿屋藤兵衛

一 同 油屋善助 一 五軒甚悦居申候也

井筒屋善右衛門ハ当時口過も致立身致候故、売米代を六ヶ月無

利息ニてかし申候也

申十一月十日
一白米貳斗 下山中へ遣ス

此頃米屋ニて買申候へ者五升五合位之時也、但し徳左衛門へ遣

ス

天保七丙申年八月下旬名田庄小倉畑村次郎右衛門と申所、とちの
身(寒)ニときひ・鼠(葺)竹三品ヲ雜吸(炊)ニ致喰し候へ者、家内五人不残ら三
日斗煩死去致候よし

但し是人先年巳年傲訴ニ出御聞ニ御座候故天罪也(罰)と云

同九月十日例年遠敷上・下宮祭礼ニ而能・相撲御座候へ共、当年
ハ時節柄故止ニ相成申候

諸国津留ニ相成候故、山家々々御大名衆分御公儀様へ御願被遊候
ニ付御触左之通

一新規之津留等者難相成段者兼而被仰出候品も有之候間、万石以
上之面々領分不作ニ候共、容易ニ穀留等致候義ハ有之間敷候事
二得共(候脱)、当年ハ出水其外ニ而米穀(底)扨庭之折柄故、諸国共穀留等
不致融通宜敷様可取斗候

右之趣従

公儀被仰出候

右之趣可奉承知候

五郎八
八郎右衛門

右ニ付御当所御触書写

当年着津米無数、其上作合不宜候ニ付先達而津留之義申付置候
所、此度従公儀別紙之通被仰出有之ニ付津留メ之義ハ差免候、

併此元之義ハ此節迎も米穀払底之義、此上差詰り及飢候様之者有之候而ハ、却而公儀より被仰出候御主意ニも相背候義ニ候間、穀物差出候節ハ夫々其訳申達、及差図候上ニて可差出候、万一心得違之者有之候而ハ大切之義ニ候間、弥以銘々之勝手而已ニ不致穀物融通致、御国中一統取統能様ニ相心得可申候

一社倉アラメニ海布千貫目斗御座候を、町中難渋人御調有之候処凡五千人斗ニ而、小豆御買たし被遊候而、九月上旬ニ極難渋人壱人前海布少し、小豆三合ツ、出ル

一当地酒造之義者止他国酒買入申候、九月晦日他国酒買入停止被仰付候、直段上下式匁三分ニ定り申候

但シ酒ニ水交り候故内分ニ而上酒を頼候へハ、二匁七分分三匁迄ニ買不申候半而ハ売不申候也

一古河之舟ニ出雲芋積参り候ニ付御買上ニ相成、木札小買之向へ壱人前白米式合ニ芋百匁ツ、芋代拾文ツ、九月廿三日分十月廿二日迄三店ニ而売申候故仕舞ニ相成候

凡芋高七百俵斗事也

一十月廿三日分木札買之者へ白米壹合五勺ニ麦安壹合、都合式合五勺ニ相成候、黒米通持之分へ十一月九日分壱人前米式合、麦安五

勺、都合式合五勺ニ相成申候

中店木谷十一月廿五日切ニて止ニ相成申候

一十一月廿四日ニ隠居勘左衛門を呼出し有之罷出候処、当年時節柄ニ而一統金詰りニ相成候故融通会処相立、諸色何ニ不寄買上ケ候間、右世話致候様被仰付候

則店薬師小路古河喜左衛門明家

右ハ西津古川又市殿并ニ町方米元方衆起發記也

右融通会所相立候ニ付、郷中米売捌申候義御免成申候而、又郷中ニ而夫々身柄之者へ世話方被仰付候而、町元締衆透力村々江一緒ニ遣し申候、此段米会所大キニ手綉ニ相成悦申候

右ニ付 東石田明家店 霜月晦日切ニ而止メニ相成申候

西店壱ケ所町方斗

一申十月六日三店共昼四ツ時仕舞ニ相成、町役所へ米世話人元方共七拾人、其外町方身柄之者三拾人斗、都合百人御呼出し有之候処
町御奉行様 塩野八郎右衛門様
岩間五郎八様 御列座御談示扣

当年格別之年柄ニ而、御上ニ茂色々被遊米会所相立候処、他国も追々高直ニ而是迄買入被遊候得共、高直故石数甚無少、江戸表も米穀高直、其外諸色何壱品下直成品も無之ニ付、格別之儉約被為有候而、殿様御勤先甚御不都合ニ相成候位之事故、御上へハ奉御幸恩を報、下々へハ助ニ茂相成候間、銀子調達致呉度被仰付候、

濟口之義ハ其方達も米御払之世話致候故追々二売払返濟ニ可及候間、何分出精致候様被仰出候、夫々手札を以申付候トて手前共へ

金三百兩之書付ニ御座候也

吸物積入 ミソ 豆腐 ミソ 蓮根 ミカン 酒

右ハ一統莫太之調達被仰付候ニ付、段々元締衆并ニ町老衆へ歎願申上候所一統七步掛ニ相成、則百五兩申十一月朔日上納

願申上候所一統七步掛ニ相成、則百五兩申十一月朔日上納

百五兩同廿三日上納

一同十月十日ニ親父町老衆へ御呼出し有之候処、此度社倉米ニ而御

救粥極難涉人江被下置候間右世話致候様、尤元方被仰付候

右元締鍵仁隠居 升源隠居

百仁同 煙草屋八右衛門

金源同 手前親父

メ六人、外二并世話人廿四人被仰付候

右連中相談之上

十一月朔日分初メル

東 正誓寺 元方 煙草屋八右衛門 下世話十式人

升屋源助親父

手前隠居

西 極楽寺 元方 鍵屋仁左衛門隠居

百足屋仁兵衛同 下世話十式人

金屋源七同

焼印
何町
何屋誰
何人
何十何番

但し裏焼判也

何町
何屋誰
何番

右同断

此札を御粥貰へ渡 壹枚ハ大、壹枚ハ小

取替遣し可申事

右粥貰之分へハ御払米壹合五勺、麦なしニ相成申候、其印ハ米木札ニ△印之焼印を付遣し申候也、右粥貰初メハ千式三百人之処、追々増願致候而極廿四日相改候処千七百九十六人、但し東西共社倉米小物屋勘兵衛へ取寄為搗、酒屋ニ而廻りニ焼出し致候様被仰付候、白米壹升ニ水七升、毎日八ツ半時分暮六ツ時迄出勤致粥遣し申候

一米会所極月廿日切ニ止メ、初丁酉正月六日分黒大買之向へハ、昨冬酉正月十五日迄之分売遣し申候、木札持之者へハ酉正月五日迄十五日ぶり売申候、木札ニ△印粥貰之者ハ壹日分さへ買兼候故、元方衆相談之上町身柄之者廿人斗ニ而壹人ニ一日壹合、十五日ぶりニ而壹升五合ツ、買施し候様相談致遣ス、但し跡五勺宛之処へ先方ニ而為買申候也

申十二月廿日 一米高式拾六石壹升

八合替、代三貫式百五十一匁式分五厘

内百目も善二郎分出銀

五拾匁和久宗分同

三貫百壹匁五分五厘

廿軒わり壹人前百五十五匁六厘ツ、

十一月廿五日西島へ渡し

右施し連中

石田治兵衛殿

木綿屋源兵衛殿

西島又兵衛殿

堀口清兵衛殿

鍵屋仙左衛門殿

小物屋勘兵衛殿

井筒屋清右衛門殿

丹ば屋次右衛門殿

井筒屋勘右衛門

同 清太夫殿

石野五郎兵衛殿

三島白鷗殿

細の弁二郎殿

鍵屋平右衛門殿

越後屋セ右衛門殿

も綿屋半三郎殿

齋藤仁左衛門殿

同 彦兵衛殿

同伊兵衛殿

川村平兵衛殿

式拾軒

右△印之者へハ壹人ならば壹升五合、何屋何兵衛ト書印札を拵へ遣し申候、其札を米会所へ持参致候へハ米切手引替ニ相渡し申候也

一御救粥ハ極月廿四日切ニ而止、初り来西正月七日分、但し極廿五日分壹人ニ一日米五勺宛として、十一日分五合五勺宛粥貫へ御米ニて被下候也、但し是ハ社倉米ニて出ル

一八月以来分追々御手宛米并ニ雜穀共入津有之候処、不殘御買上ニ

相成候故、大豆壹斗分霜月・極月ニ六升五合迄、小麦七升迄、小豆六升式三合迄引立申候、然ル処秋舟ニ朽木屋久兵衛方へ秋田地廻り米七百表斗積参り候客舟御座候処、九月頃六升七合位分六升五合迄元締へ直入被致候得共、直段引合不申候与申請かこひ致候処、霜月中旬頃他国へ出舟仕度段相願候処、何分当所ニ着米無少候ゆへ段々引上、五升五合壹勺ニ元締衆へ御買上ケニ相成候、然ル処糶屋仲間一統糶米無之候故御上へ御願申上候者、諸人一統雜穀を食候故味噌無之候而者一統難渋ニ及候間、御払米御願申上候処、御町奉行様ニも酒造方とハ違糶無之候而ハミそ作り候事も不相成候而ハ、諸人一統之難義ニ可及と御尤ニ思召、右秋田米五升五合壹勺ニ而仲間中へ式百表御払被下置候ニ、壹軒ニ八表ツ、分ケ申候、時節柄故糶屋ニも相勤入賃無之、糶壹匁ニ付八合式勺五才と相定売申候様申上候処、御聞濟ニ相成申候

一綿相場之義ハ七月以来分上方筋追々高直ニ相成、六貫五百匁入正銀式百四拾匁分三百目、十一月月上旬ニ者正銀百匁ニ付綿壹貫四百匁迄引立申候、右ニ付木綿平年ハ六七匁位之物、九匁分拾式匁迄引立候由、大坂相場右ニ付越前分当地へ綿・木綿類をさらへニ参り候ニ付、上抜木綿壹貫匁ニ付五拾匁ニ売レ申候故、質屋中木綿屋中ニ夜着蒲団之わた不殘ら出し売申候也、但し平長之客人也、手前方ニ者昨未年分当夏以来買持候木綿千五拾反有之候を、大坂山安分買ニ参り、直段九匁八分五厘ニして不殘売申候、其跡ニて

当地も木綿十一匁位ニ相成申候、尾州名古や表も綿・木綿追々高直ニ相成大坂表同断相場也、然ル処何分諸国共米穀高直故、時節ニ恐レ綿・木綿大下落ニ而、十一月下旬ニ者正銀百匁ニ付綿貳貫匁余り迄、木綿八九匁位迄引下ケ申候、右ニ付大坂・名古や綿・木綿問屋衆ハ莫太之損失致候由

一当地油之義ハ九月晦日桐三十四匁七八分
種四十三匁三匁位之処追々高直ニ相成、十月末ニ至り桐四拾匁
種四十三匁三匁十一月下旬ニ者桐四十五匁六匁
種五十五匁六匁位迄引立申候、右ハ越前今追々買ニ参り貳斗ニ而千樽斗買申候也、但し来二月請取

しかし大年時分ニ而者金詰りニ而貳三匁安

一素麵十月頃ニ拾三匁五七分分上十四匁位之処追々高直ニ相成、是ハ穀物無少相成り候故、十一月中旬拾六匁七八分位引立申候、併是ハ出津留ニ候へ共、食事ニ相成候故金詰りニ而も格別引下ケ不申候也

一糖(糖)四斗入壺表ニ付四五匁分追々引上ケ、十一月・極月ニ者拾匁分十一匁位

一麦糖米屋中間ニ見世ニ出し置候へハ、壺升八文分拾文ニ売レ申候

(穀力)一唐粉五斗入壺表ニ付八九月頃十式三匁位之処、追々高直ニ相成廿五六匁位迄引立申候

一飴(滓力)粕平年式三匁之処壺俵廿五分迄

一山家々々之難渋人困窮ニ差詰り(並)并木松皮をおこし食し申候也
但し葛根其外木之実ひらい夥敷事也

一毎日和田・高浜・小松原・小浜無宿者乞喰ニあるき申ハ三四(百カ)人斗也、町方身柄之者分粥・くし柿其外何ニ不寄施し有之候也

一西津古川屋之施ニ而田井屋茂左衛門明家へ、郡中手仕事不相成老人・子供・難渋人、右明家ニ而朝夕式度宛粥ニ而御養被成下候也
但し十一月頃廿人斗、押詰ニ者百人斗も参り候也

一毎日東西ニ御粥遣申候、残り候分を乞喰ニ遣し申候処極月廿四日切ニ而休ニ相成候故、乞食飢ニ及候而者御国中之名折ニも相成可申候故、粥世話人共甚歎ケ敷存候ニ付、極月廿五日分来西正月七日迄世話人共申合セ、壺軒ニ白米式升ツ、差出し、世話人三拾軒ニてメ六斗、是を下山徳左衛門右正月七日迄御救粥始り候迄、乞食ニ粥ニして遣し可申様申付候也

則高成寺様を頼朝夕焼出し、式度宛遣し申候て漸々年を越候よし

也

一当年ハ格外之凶作故御上様ニも御年貢成丈ケ御用捨被為遊候処、
 正米并ニ附米百姓方甚無利を申候ニ付、御上様ニも嚴敷被仰付追
 々入牢被仰付候ニ付、百姓方も無拋附米皆納致相濟申候、但し附
 米四拾八匁七分在付也、乍併正米ハ百姓方ニ少し宛持候へ共、町
 出し難相成候故押詰ニ願候哉、町仲中へ地米勝手次第売買致候様
 極廿七日ニ被仰出候、右ニ付金詰りニ而地米壹表五十四五匁迄
 下落仕候、十一月中旬下旬ニ者地米内証商内壹表七十七八匁位
 も御座候よし、餅米も右同様之よし

一例年肥シ西勢村武左衛門 善太夫右兩人ニ為取候ニ付、家内七人故七斗可
 請取之処、格別之凶作致候故三斗当(季)氣請取呉、跡来酉年作り米ニ
 而請取呉候様被頼候ニ付、無拋聞届ケ申候

右ニ付正月餅甚減し少致、右三斗ニ而相濟申候
 右ハ先年ハ油屋善助ニ而為搗申候へ共、当年ハ少しニ候故手
 前方ニて搗キ申候也
 例年親類・出入へ餅遣し候へ共、親類ハ為替ニ致、出入ハ当
 年歳暮ハ断申白米二升ツ、遣し申候也

一申八月廿三日ハ極月廿日迄米・芋・麦安・小麦御買上御払被遊候、
 諸造用惣差引之御勘定有之候処凡七拾五貫目之御損銀也

一天保八丁酉年正月元日立春ニ御座候、右時節柄故町方一統御礼ハ
 袴羽織ニ而廻り申候、是ハ御上様ハ被仰出候事ニ而も無之候へ共、
 大体親類・出入又ハ格別ニ心安キ方斗廻り、誠ニ淋敷正月ニ御座
 候也

一同五日例年諸色初相場相立候仲中ハ相場書之扣

一上米五升四合 一新小豆七升五合

一同中下五升六合八合 一大麦壹卜式升

一餅米六升五六合 一小麦七升五合八升

一新大豆八升五六合 一桐実三拾五七匁ハ四拾目

一古大豆八升五合九升 一種百三拾五七匁

一くりわた五拾壹匁 一西塩四卜式三升

一木綿上中下九匁五分 一素麵十六匁四五分

一楮子四十五六匁五十一匁 一金六拾四匁

一桐油四拾三匁七分

一種油五拾五匁

右之通ニ御座候

一米会所去ル極廿一日ハ休日之処正月六日ハ初ル
 一御救粥去ル極廿六日ハ休日之処正月八日ハ初ル
 一同正月十三日例年之通市祭り、能も有之候也

麦四百廿表余

一 同廿五日竹原天神祭りニ御座候へ共、当年ハ格外之年柄ニ付能ハ止ニ相成無御座候

一 同廿八日御家中一統御城へ御召出しニ而、百石ニ付五人扶持ニ相成、外ニ勤料壹軒ニ三拾表宛ニ相成、但し七ヶ年之間也

一 同三月頃分錢相場追々高直ニ相成、壹匁ニ付九拾六文ニ相成申候

(朱書)「右ハ下々噂ニ、御公義分壹文商内致候者、錢相場下直ニ而ハ

難渋致候故と思召、御公儀様へ御買上ケニ相成候杯と風聞も

有之候也

」

一 同三月十四日頃川縁丁朽木屋久兵衛方客舟上下り之舟参り、米五百表・酒粕積合セ、米ハ松前届ケニ而売不申候也、酒粕斗十貫匁ニ付廿式匁五分替ニ而出来申候也

一 同十九日分廿日大坂表町御奉行付与力小塩平八郎と申者不容易企致大騒動、大坂市中大筒ニ而打廻し乱妨致申候次第別紙色々書付出ル、当所へ廿三日申来り候

一 昨年分備後之国尾之道ニ而当所御手宛御買入米・麦、酉二月廿二

日本綿屋源兵衛舟ニ積来り申候 米千百七拾表余

一 酉二月廿七日從御上様時節悪敷候ニ付火附杯も有之候間、町々急度立番致候様ニ被仰出候、尤同心衆下山追々夜廻り致候故、無^(提)丁ちん不相成旨被仰出候

一 天保八丁酉年二月廿七日川縁丁尾野屋次兵衛方へ入舟有之候而、庄内大豆四百表、直段拾匁ニ付八升替、内式百表米屋仲間へ買取、残り式百表者御米元方衆へ被買候也

一 同日分米会所麦之替りニ大豆ニ相成申候

一 同三月十四日茶屋又十郎方客人舟有之、直段肥前米五升五匁、大豆六升、麦安六升三合、右之直段ニ而三口ノ千式百表余御上元方衆へ買上ケニ相成申候 (朱書)「但し御手宛米之外也」

一 中以上飯米直段六升四合五匁之処、追々高直之御買入ニ相成候ニ付、三月十四日分拾匁ニ付五升五合ニ相成申候、右ニ付中難之者共御上様へ御願申上候処御聞濟ニ相成、則中難直段七升ニ相立申候

今日分上中下と三段ニ相成申候

又候六月五日分一統相場立替り

上五升替 中六升五合六分六厘二相成

下難洪之木札持分矢張八合替也

一 乞喰追々及難洪候故三月十三日二町内身柄之者共寄合致、身柄相
応ニ出来致、月ニ六斎ツ、粥を焼出し遣し申候、但し手前八月二
壺斗宛五月迄三斗出し申候

一 三月十四日町中一統申合、当春も雨天続ニ而候間一統日尽致四社
様へ御祈禱致候也

一 去冬今当二月迄乞食ニ施し候所銘々御尋有之、書出し候様被仰付、
則左之通

一 粥ニ焼出し候米五卜四升 一錢四貫文

右之通町内宿老中へ書出し申候

一 西年三月廿六日町役所へ御老岡新左衛門様御出役被為遊、町御奉
行岩間五郎八様・塩野八郎右衛門様御列座、町中宿老中へ御呼出
し御談示扣

一 昨年来米価高直ニ而追々難洪之者共有之義被為聽、殿様殊之
外御苦勞ニ思召御救等被成下度思召ニ候へ共、御上ニ茂従来之

御難洪、殊ニ此度俄ニ公儀へ御金御上納ニ付必至と御差詰りニ
相成、江戸御賄も調兼候及次第、御役人ニ有之誠ニ当惑至極之

事ニ候処、格段厚キ思召ニ而御持伝之御重器を以テ成共御国中
難洪之者共可成尺為相凌候様被仰出候、仍之此度米会所元方世
話人共へ甚難題なから之義、右之御主意を以申談候義も有之処、
御上思召之義深ク奉畏申談候趣及請候事ニ而、入御聽ニ候ハ、
御満足可被遊存候、右ニ付直下ケ米等之義聊取斗候義も出来候
事ニ候、右之次第一統得与相心得御上思召之所奉畏、中分以上
之者共ハ銘々覚語相立、取続キ御上思召之所ヲ以テ難洪之者共
聊ニ而茂相救候様ニと存候、極難之者共ニ者御上を始メ諸人之
厄介ニ相成候間、其所能々勘弁不了簡之義聊無之様相心得、一
己々々精力を尽し、可成丈自力を以取続キ候様可致候

右之通町中宿老中町内惣寄合致通達有之候也

一同四月十二日町老木藤分呼出し有之罷出候処

此度御国中飢人無之様致度思召ニ候へ共、当時御上様之御事故御
取斗方無之候ニ付、御宝藏ニ有之候御重器之品元方共へ御預ケ被
遊、銀子調達御頼被遊候ニ付、元締共も此節金子不手繰ニ付家財
家質役判致候而、西津古川氏と他家ニ而取斗呉候様相成候間、町
御奉行中も元締之外志し之者共へ申談候、内々年寄共ニ取斗可
申様被仰出候間、近頃乍御苦勞家質役判ニ致、差出し呉候様御頼
被遊候

右連中左之通

木綿屋善二郎

木綿屋久左衛門

堀口清兵衛

大黒屋勘左衛門

林田宗介

鍵屋平右衛門

板屋弥惣兵衛 小物屋勘兵衛 木綿屋庄介

井筒屋勘右衛門

ノ
十人

右家質証文

瀬木町ニ而本宅・借家三軒ノ四軒ト代拾貫匁書入

塩浜小路ニ而かしや一軒 一貫五百匁

今道丁 かしや壹軒 三貫五百匁

ノ三通ニ而十五貫匁、役印町老キ藤へ出ス

右ハ三通共丁酉十二月廿七日落ル

差上申一札事

一貸家四軒 間口奥行

并ニ土蔵一ヶ所 町内水帳通

右之家屋敷此度御買入御米代借入ニ付、為質物差出し申処
実正也、右家屋敷ヲ以御借入銀子調達宜敷御支配被成下候
様奉願上候、為後日之役判証文仍而如件

天保八丁酉年 井筒屋勘右衛門判

四月日 組

宿老

木崎藤兵衛殿

細野伝兵衛殿

外之時節柄ニ付六月祇園祭礼・山ねり共休年ニ御願申上候処、
右願之通五月九日ニ被仰付候也

一同四月差入ノ乞食追々及飢死去致候、五月上旬ニ者一日二三五人
宛も死去致申候、町内ニもたをれ者有之候へ共、町老衆へ届ケ同
心衆見分請取方付致相済申候

一同四月廿四五日頃在米壹表ニ付百目ノ百拾五匁位迄商内有之趣承
り申候、同頃越後ノ味噌入舟有之、拾貫目ニ付三拾六匁ニ商内出
来申候、同頃大豆八升位、麦安六升位

一五月上旬追々順氣宜敷候故麦作十分ニ出来致候間、米直段在米壹
表ニ付七八拾匁位迄下落仕候得共、何分他所ノ入込無之候故、又
々中旬ノ五月下旬頃ニ者九拾匁ノ百目位迄引立申候、六月下旬ニ
者八拾目ノ八拾四五匁位迄引下ケ申候

〔西五月十日糶相場壹匁ニ付六合ニ定メ申候〕

一五月朔日此頃町方一統疫癘流行致候間、八幡様ニ而暮六ツ時ノ夜
九ツ時迄御祈禱有之候

一五月九日ノ十一日迄竹原祇園様ニ而五穀成就并ニ疫癘退散之御祈
禱有之候

一西四月廿三日町内組頭寄合有之候処宿老中被申候義ハ、当年ハ格

一同十二日町中申合八幡様へ右疫癘まぬかれ候様御湯上ケ申候、夫
分四社様へ参詣致候

ジウシンテンノウ
崇神天皇様御歌 アメツチ 天地の恵を請し民なれば憐アハレミたまへゑやミを

の神

カマトカミ
竈神御歌 チイ、 千五百をます女男の鏡のつまこめに朝げ夕げ

を守る神々

○ 右二首のルビは朱書注記であることを示す

右御神歌朝夕三度ツ、唱候へ者、疫癘のかれ候との御神徳也

一同五月十四五日頃分疫癘荒く相成、当町中ニ而日二十人廿人斗も
死去致候故、誠ニ恐敷御事ニ御座候也

一丁酉六月七日例年竹原祇園様御輿洗有之、府中へ御旅被遊候所、

当年ハ格別之年柄ニ付竹原氏子分願右神事無御座候

「右朱書ハ下竹原之者飢死又ハ疫癘ニ而死去致者夥敷有之候ニ付、

着服ニ而川上ケ難仕候故と申候噂也

右ニ付昼後行列之義ハ大太鼓・神楽休年を願相休、猪々斗ニ而

御輿様送り申候

一同十三日・十四日町祭礼之義ハ先達而休年被仰付候ニ付、十三日

・十四日両日共内祭りニ而、十四日昼前ニ御輿様を町中宿老并ニ

願出之者共麻上下を着し御見送り申候

右両日山町ねり子・町人形又ハ装束之類、虫干のため町家ニ飾
り申候也、誠ニ淋しき祭りニ御座候也

一酒入津停止後素人并ニ酒屋買取売買致候者拾軒斗御咎有之候也

一酉七月朔日分木谷店ニ而酒会所初ル、直段壺升ニ付三匁六分替、

壺軒ニ付酒五合宛、朝六ツ時分壺日ニ壺石ツ、売被申候故暫時ニ
売切レ申候也

但し酒屋と申者ハ高利を取候也、当年二月頃ニ酒仕舞ニ相成候

杯と申立、切手酒二月中ニ請取ニ参候様申、其節相場を一
升式匁三分ニ相立、内証ニ而追々引上ケ、三匁分四匁式三

分迄上酒を売申候也、表向ハ式匁三分故半分水を交商内致
候者也

右七月一日分酒会所ニ而売申酒ハ、銘々貯居候酒不残持出し、又
々少しツ、酒入舟ニ積来り候を御上様へ願買取、八月九日迄前之

通売被申候へ共、八月十日頃分会所ニも酒切レ申候也

但し料理屋杯又ハ酒呑之内ニ者少しツ、貯所持致候故、少しも

無之候と申ニ而茂無之候、別段酒屋へ掛り頼候へハ、壺升

五匁位ニ而内証ニ而有之候也

一御救粥盆前世話人銘々取引も有之候間、御上様へ御願申上候而、

七月八日夕十七日迄米二而壹人二五勺ツ、十日ぶり相渡し申候也
同十八日夕是迄通初り申候

一同八月晦日切二而米会所引払二相成申候、并二同日夕御救粥も御止メ二相成申候

御払米酉七月晦日迄御勘定三百七拾五貫三百廿四匁式分六厘之御損毛銀也、但し雜穀共二而

八月一日夕晦日迄ハ社倉米二而御取斗故御損銀不分

御救粥社倉米東西二而米七百表御焼出し也、酉八月晦日迄御勘定也

一同七月廿日町老衆夕呼ニ参り罷出候処、無程殿様御城着被遊候故、先年巳年之噉訴掛り之者御目通り出候事難相成候処、右八年数も相立候事故、内々御願申上候ハ、御聞濟二も可相成候様被存候間、願て遣し可申哉と被仰候間、何分宜敷御取斗被下度段願置候処、同廿一日又候町老細野夕呼ニ参り、願之通御聞濟二相成候間、町御奉行様^(迄)御礼廻り候様被仰付候故、直様連中同道二而御礼二廻り申候也、

但し木綿屋伝助ハ御免成不申候也

一酉七月廿九日状夫参り、明晦日五ツ時町御奉行塩野様替宅へ御用有之候故罷出候様申来り、同晦日五ツ時塩野様御屋敷へ罷出候処

去ル巳年噉訴二出合候内七人へ御談し之扣

去ル巳年年柄ニ付難渋人へ施し致候段寄特之事二候、仍之為御褒美銀壹匁宛被下置候間、左様相心得可申候、直様御奉行様・町老・小頭衆迄御礼二廻ル

一同八月二日町御奉行所二而御用達役被仰付候、委細之義ハ別紙帳二委敷書記置申候

一同七月廿四日御発駕二而殿様追々御川支有之、八月九日二御城着被為遊候、委細ハ別紙二書記ス

一当夏以来順氣申分無之候へ共、何分諸方共物併二而高直、四月廿四五日頃当地下夕米壹表百匁夕百拾五匁迄商内有之候、又大坂表六月末夕七月中頃壹石ニ付式百五六拾匁位、越後・出羽之方、去ル申年外方とハ作合宜敷候模様二候へ共、何分諸方御大名様方夕御頼ニ而積出し候故追々高直二相成、壹石代式百四拾匁夕式百五六拾匁位迄有之候風聞ニ御座候、当地順氣、土用無難ニ御座候故七月頃追々下落致、今ずり^(迄)在方夕持来り候へハ壹表ニ付五拾匁位迄引下ケ申候処、今ニも新穀出来致候ハ、壹匁ニ付壹升ニ茂可相成様存候処、式百十日之厄日八月三日ニ当り、夫夕雨天相続、其上八月十四日東風大荒ニ相成湯岡橋落、壹番町二而ハ拵切も御座候程之洪水ニ候故、西津・竹原之通行も難相成候程出水二而、

雨八十四日七ツ時迄にて相止申候、十五日快精致^(晴)申候、右二付風

当りも有之候故、人氣ニ構ひ米相場追々引立、入舟物居合、庄内米拾匁ニ付五升位迄引立申候処、彼岸中宜敷天氣ニ相成候故追々新穀拔出候、八月廿五六日頃新穀壹表五拾匁位迄引下ケ申候、夫の九月・十月二者他国分追々入舟有之、越後新米八升五七合の九升八合位迄、丹ば新米八升の九升五合位迄商内御座候、十月五日例年之通初相場仲分書上ケ、中上米八升二而同前相場壹匁式分位ヲ入、五拾壹匁式分ニ相立申候、右二付例年大津表へ御登せ米有之候へ共、大津銀主鍵五も当年江戸御下し金断被申候故、右米を酒屋へ御相場にて六千表御払ニ相成申候、但し先上納にて酒屋衆も大^(困)込^(困)り之由、是ハ直様江戸表へ御下し金ニ相成候樽也

一同十一月十一日分酒屋銘々売ニ相成申候、但し直段壹升ニ付式匁分五厘ツ、

一同十一月九日夜九ツ時小地震ゆる

一同十一月廿四日夜状夫参り、明日五ツ時於御城御用有之候間、麻上下ニ而罷出候様申来り、尤連中百三拾人斗廿五日下馬揃ニ而御城へ罷出、大書院ニ而手前共ハ御三之間ニ居申候、夫分外之衆中ハ御三之間分御^(時計)とけ之間ニ居ル、殿様御二之間へ御出座被為在、右横ノ方ニ酒井様・三浦様・御老・御用人・町御奉行御列座ニ而

御直之御意

昨年凶作ニ付領分中令難渋、救方手宛も難相整候上臨時物入有之、江戸表賄金も差支候ニ付追々調達并救筋等申付候処、何も骨折且施行上金をも致候趣委細聽之満足ニ思ウ
^(朱書)「是分御老御月番岡新左衛門様御談示左之通り」

只今御直々被仰出候通り、昨年稀成凶作ニ付御領分中必至と難渋せしめ、殆及飢候者も有之候処、御勝手向御差詰りニ而御救方御手宛も難相調候処、銘々寄特之志ニ而施行等致、其上右御救方ニ付臨時調達申付候処、何も尽精力御間を合、中二者上ケ金をも致候者も有之ニ付、委細達御聽ニ御機嫌ニ思召、依之被仰付方も有之候へ共、当御時体之義不為任思召ニ候

右御談示相済一統溜之間へ引取、夫分町御奉行様夫々品物を被下置候也、手前共へ被下置候分左之通

御盃 壹箱

御袴地 壹反

右之通頂戴致

右二付直様御役人中様へ一統御礼廻勤仕候也

一酉十一月廿八日五ツ時、親勘左衛門并二弟正吉町御奉行様へ御呼出し有之、兩人罷出候処其時も百人斗御談、廿五日御城ニ而被仰付候通也、親勘左衛門ハ御救粥世話人并ニ融通会所世話人也、右之外米会所三店世話人惣人数之処へ米手形百五拾匁余り被下置候

也、扱又弟正吉ハ突抜町川市方ニ而昨冬さつま芋を施行致候由ニ而、銀壺匆御褒美被下置候也、御上様米会所初り候迄米屋仲間ニ而会所を拵売申候故、右米屋仲間へ為御酒料銀三拾匁被下置候也

一同十二月廿五日夜町役所ニ而昨申年ニ御買入ニ御調達申上置候金子半銀下り申候也

一同廿六日五ツ時、米手形御役所へ御用達一統御呼出し有之罷出候処

其方共昨年凶作ニ付格外時節柄悪敷、殊ニ当春来別而正金不融通之処、精々相働キ当分調達等も差出、御為筋之義追々心付出精相働候段寄特之事ニ候、依之御酒・御吸物被下置候、尚又御為筋之義心附相勤可申候

米手形奉行

右之通御談示ニ而御酒・吸物料として米札百五拾匁被下置候

二付、忝人前拾匁ツ、配当致申候也

〔朱書〕
「右ニ付御家老様・御老様・御用人様・御奉行様・勘定人様迄不残御礼ニ廻ル」

一同日七ツ時町役処へ御呼出し有之罷出候処、来戊春御巡見様為入られ候二付、御老様之御案内役被仰付候、但し同役

米屋長兵衛
河村平兵衛
手前
メ三人

一天保九戊戌年三月朔日夜八ツ時分同二日昼時迄大風ニ而、町・在中共夥敷破損、近来稀成恐敷大風ニ御座候也

一 例年宗判三月廿八日之処、当年ハ御巡見様御入らせ日限不相分候間、取越三月十五日ニ宗判御座候也

一同四月朔日町老細野分呼^(マ、)出し有之、御巡見様弥先月十八日ニ御発駕被遊候趣申来り候、同三日今日関ヶ原分御使ニ、弥十六日熊川、廿一日小浜御着之由申来り候、左様ニ相心得可申様被仰付候

一 御巡見様被為入候ニ付四月朔日分自身番初ル、四月十六日分立番被仰付候也

一 戊戌四月廿一日御巡見様御着ニ付、朝五ツ時ニ御老様御案内之者三人同道ニ而麻上下着致候而栖雲寺へ行、夫分町御奉行様下宿石野五郎兵衛殿へ行、夫分舟留メ岩へ八ツ半時過ニ御当着被遊、御籠之尻ニ付栖雲寺前ニ御老衆様之処へ御案内申上候而、御通り濟候ハ、御老様方之先へ立、下宿丹後屋彦右衛門方迄御出之御供を被仰付、夕方迄右下宿ニ居夕方ニ帰ル、翌廿二日ニ曉六ツ時ニ町御奉行様御宿武田へ参り、町老衆同道ニ而西津田淵谷口様御屋敷前へ罷出相待候処、御巡見様小浜御発駕被遊下馬ニ而御駕籠分下り、大手御門ニ而殿様と御挨拶有之、田淵へ御越被遊候分鶴田屋

敷之処ニ御老様方御座候を、夫迄御出之御案内申上候て帰ル也
御巡見様役掛り左之通

大將 木下内記様 御紋菊くつし、中二巴

副使 石尾織部様 同 丸二蕪

御目代 寛新太郎様 同 三ツ巴

戊四月十六日熊川御泊り、十七日遠敷御泊り、十八日桂木村御昼、
坂本御泊り、十九日川上御昼、高浜御泊り、廿日関屋村御昼、高
浜御泊り、廿一日本郷御昼、七ツ時小浜御着

木下様御宿 組屋六郎左衛門 木崎吉兵衛

親類

脇亭主西島又兵衛

小物屋勘兵衛

御駕籠御案内

石田治兵衛

堀口久太夫

堀口清兵衛

御家老御案内 木綿屋源兵衛 料理人 長井宇之助
御用人同 林田惣助

下宿 竹田屋藤五郎

当所町御奉行御案内

川村惣右衛門

脇亭主米屋伊左衛門

同御老様同

川村平兵衛

上下四拾人

大蔵小路木谷三郎太郎家ニて
石尾様御宿 木谷武兵衛飯亭主

親類

木谷長兵衛

御駕籠御案内

石野五郎兵衛

脇亭主吹田伝右衛門

芳野屋次郎兵衛

同 鍵屋平右衛門

御家老御案内 近江屋与兵衛
丹波屋次右衛門 料理人 西津屋勘兵衛
御用人同 和久屋三左衛門

下宿 大屋清右衛門

脇亭主丹後屋安兵衛

同御老様同

当所町御奉行御案内 細野弁二郎

米屋長兵衛

上下四拾人

寛様御宿 茶屋孫右衛門

親類

和久屋惣兵衛

御駕籠御案内

越後屋彦兵衛

脇亭主斎藤仁左衛門

茶屋又十郎

同 板屋徳右衛門

木綿屋庄介

御家老御案内 木綿屋半三郎
御用人同 百足屋仁兵衛

料理人 檜皮屋源兵衛

下宿 井筒屋清太夫

当所町御奉行御案内

越後屋清右衛門

脇亭主嶋屋嘉兵衛

同御老様

井筒屋勘右衛門

上下四拾六人

当所御家老様・御老様

廿一日朝御宿栖雲寺御着後丹後屋彦右衛門、同下宿菱屋庄左

衛門

同町御奉行

廿一日朝御宿石野五郎兵衛御着後武田徳右衛門、但し町御奉

行様廿二日迄御詰切也

当所御者頭宿 木綿屋善次郎・上田清兵衛 下宿 塩屋藤右衛門

但し廿二日御立後迄詰切

諸商人宿 永井市左衛門、但し諸商人三拾人斗
在廻り商人 木綿屋久左衛門・木綿屋伊兵衛

御先番并二御荷物案内四拾人斗

佐渡屋伊兵衛 海老屋長右衛門

在廻り料理人 北山義兵衛 川島市兵衛

紙屋吉兵衛 荒木屋庄助

六人

御泊り夜町中不寝番ニ而夜中御廻り有之候、同廿二日朝五ツ時ニ御発駕被遊、当所殿様大手前ニ而御挨拶有之、夫々御案内之者鶴田屋しき迄参り、夫々西津村案内者へ渡し、小浜御案内之者此処ニ而引取申候、廿二日堤村御昼、三方村御泊り、廿三日佐柿御昼、敦賀御泊り、右者御領分中晴天ニ而誠ニ都合宜敷候也

御老御用掛り鈴木三太夫様 町御奉行 塩野八郎右衛門様

御用人同 阿部平六様 本多九八郎様

御勘定方取締 丁野円藏様

池田仲左衛門様

一天保九戊戌年閏四月の五月入梅迄至而順氣宜敷候処、五月末ニ至り五月廿九日土用之入ニ相成候処至而冷氣、夫々追々雨降続キ土用中天氣と申者誠ニ稀成、右ニ付米穀追々高直ニ相成申候、四月の閏四月・五月時分上米壺ト式升位、六月ニ至り上米九升位之氣配ニ相成、何分物濟ニ而舟間故売米と申ハ壺表も無之、一統込(因)り入申候、七月十三日迄雨天氣ニ候処、十四日式百十日上天氣候故人氣穩ニ候所、十九日頃迄天氣、又候七月廿日頃雨天ニ相成、纔宛入米有之候而も八升五合の八升位ニ而暫時ニ売申候、七月廿

六七日頃七升の同晦日頃六升五合位ニ相成候処、木谷方へ入舟有之候而出羽・越後辺追々高直之由、諸方共津留メニ相成候風聞ニ御座候、然共上方筋ニ者至而下直之趣ニ而、七月廿八日兵庫相場上米百目の九拾六七匁位之由ニ候へ共、何分当所物濟ニ御座候間高直、木谷客舟龜田米六升八合五匁ニ出来致、外ニ壺合五匁米屋仲間たし相勤、從御上様五合御たし被遊都合七合五匁分ニ而米屋年寄へ売、店黑白共同直ニ而売申候様仲間へ被仰付候也、追々入舟も有之候而も格別下直ニも相成不申候、夫々新米商内有之候処、七升五合の八升位迄引下ケ申候、然ル処十月五月初相場町米付八升之書上ケニ而、附米五十一匁五分相立申候、然ル処右直段ニ而ハ在方御貢納甚六ケ敷様存候処、又々追々高直ニ相成五拾式匁五分、三匁式分、四匁六分、押詰ニ者五十五匁七分迄相場御座候、誠ニ附米直段往古今無之直段ニ候へ共、在方ニも穩ニ上納相濟申候也

一同十二月廿二日町方一統志之者共へ御救米差出し候様町中宿老中へ被仰付候ニ付、手前共白米壺斗差出し申候也

天保十己亥年三月二日夜五ツ時ニ町方々へ博奕筋之事ニ付同心衆踏込有之、本町ニ而本郷屋孫兵衛方、町内松井善二郎と両家へ博奕致居候て、直様皆連中町預ケニ相成申候

同十月七日町御奉行所へ坂大八様御宅へ親父御呼出し有之、先年御救粥元方被仰付候二付、右六人之者へ御酒料三匁ツ、被下置候也

同十一月廿九日大藏小路木谷三郎太郎(闕所)ニ相成申候、借家并二家財不残附立ニ相成申候、親類中閉門被仰付候、右之家御上様へ御引上ケニ相成産物役所ニ相成申候

天保十一庚子年三月廿三日尾崎於川原酒井伊織様御組貳百八拾人、御調練之御備へ有之候

同三月廿八日例年之宗判有之、町御奉行様御替り目ニ而火消掛出(駆)し有之、誠結構ニ出来申候也

同廿九日堀屋敷浜ニ而深栖様御組三百人御調練有之候、町方ハ拝見ニ出申候

同四月三日於尾崎川原ニ殿様も御行列被為遊、御簾本之御調練大備へ有之、人数七百人

(朱書)「町方ハ追々拝見ニ参り候へ共嚴敷老人も拝見不致候也」

同八月朔日八幡末社世話人被参候而、放生会賑ひ町内へ相当り候

間、何成共致呉候様御頼ニ付、宿老・組頭寄合致相談之上職老本拵、町中子供ニ為持町内ニ建置候也

一同九月八日ハ十二日迄遠敷下ノ御宮御上葺ニ付、町・郷中賑々敷引物有之候、尤八日御任宮(遷)ニ付、先例之通御用達ニ御供致呉候様御頼ニ付罷出申候也

一同廿六日夜七ツ時ニ大津町御番所ニ牢拔有之、但し三人、内式人行衛不知、老人召捕候而牢死去致し申候也、右ニ付小頭高橋太兵衛殿極月廿二日役義御免被仰付候也

一同十月十九日町内当家門口ニ掘抜致候処殊の外水筋宜敷候也、右入用百三拾匁ル

但し半分町内ハ出銀、半分町内水汲候者ハ出銀致候也

一天保十式辛丑年正月十五日追々雪降り積り町中雪おろし致、三拾年来無之候大雪也

一同二月四日川縁町ニ而唐網打候者大津町松本喜右衛門・同町泉屋利兵衛・松本丁木谷源七・大津町林屋善兵衛、外ニ老人不分、都合五人平日禁制之場所へ殺生致候ニ付、大津町三人ハ老里四方御ハ二相成申候、木谷源七外老人ハ式人ハ三十日入牢致相濟申候

一同四日町方綿打仲間三拾軒斗有之候処、定り廿文之処追々仕事世話敷候ニ付廿式文ツ、打賃を取、一統十日斗手錠被仰付候

一去ル子九月十日遠敷下ノ御宮御上葺有之候ニ付、米屋仲間へ金灯笼壹对寄附致呉候様御頼被成候得共、過急之義故出来不申候ニ付、天保十式辛丑年三月ニ京都ニ而為拵、則二月十日御神事御停止ニ而五月十日ニ右御神事有之候ニ付、金灯笼并二手拭搦(挨拶カ)杯引物ニ致、米屋仲間中々差上申候、右釣金灯笼壹对斗代金拾式両、京都松原通柳馬場西へ入石見屋庄兵衛ニて誂申候也

一天保十式辛丑年五月廿五日・廿六日八幡社内ニ而倉太夫能興行致、但し壺人前式匆ツ、加賀之国今役者拾七人取寄来ル、大損致候也、凡五拾両も損致候由、世話人金子引替由

発記人倉多賀之丞先達而従御上様拝借致金子上納可致候ニ付、
右(マ、)

一同年六月祇園祭礼、当年今両日ニ相成申候也

一同年六月七八日頃シンチヨウ新町鍵平兵衛方地面松木有、此木ニ不思議成哉折々火之玉枝ニ所々灯り候ニ付、達磨小路今八幡宮へ御湯上ケ被致候処、弁財天様之由ニ而俄ニ掃除致、七五三シメ繩を張候処追々参

詣昼夜夥敷参詣致、病氣之立願致候へハ其御利生早々有之候ニ付追々心志致候也

一同四月廿四日暁、高成寺方丈不如法ニ付追院被仰付候也

一同八月廿六日御家中一統御召出しニ而御談示扣

去ル酉年御扶持方等ニ申付太切之処取続キ令満足候、何茂永々艱難為致候段氣之毒ニ存候、仍之扶持方等相止メ一ケ年ニ知行高之通差出し、其後ハ酉年以前之通申付候

一同九月廿一日七ツ時町老二細野氏へ御呼出し有之、当年御家中一統御年限明キニ相成候故、御扶持方之者へ右御家中同様被仰付候

翌廿二日朝酒井様初御役人中へ小頭迄不残御礼廻勤仕候也

一同九月十五日今十七日迄滝天神様御上葺供養有之、殊之外賑ひ申候也

一同九月今人別改初ル、十月朔日ニ正四ツ時安居町丹後屋彦右衛門殿宿ニて町内人別改有之候、手前方おいし病氣ニ付親勘左衛門・手前兩人参り、母留主居ニ残り、おいしと兩人ハ同心衆改ニ来ル

一同十月十九日八幡宮様へ町中今湯上ケ致候処、当月廿五日酉刻甚

火之災難重り候故、心信ニ致可申候様御神口ニ而、町中一統四社様へ参詣致候也

一同霜月廿六日夕西津浜ニ而いわし大獵有之、馬駕籠(漁)壹ぱいニ付拾匁位ハ追々下落、極十五日頃迄二者四匁ハ三匁五分、往古ハケ様之大獵ハ無之候由老人被申候也

一同極月四日夜暮六ツ時ハ大南風吹、夜八ツ過迄誠ニ恐敷大風ニ而(不残脱)壹軒も不寝番致申候

一同極月七日町内寄合有之候処、此度焼地面追々御医者衆へ相談有之様子ニ付一統相談之上相究申候、役料左之通り

木崎付、宿老替、五日番、町年番、人夫、山手番、祭り人夫、自身番、山上り宿、御祝宿、山はゆ宿、水火消、メ十式ケ条除キ申候ニ付、地面買請被参候人ハ壹貫五百匁請取可申定也

借家かり被参候医者ハ壹貫匁請取可申定也
右之通宿老・組頭寄合席ニて相究り申候也

一天保十三年壬子年二月十八日深栖様御調練有之、尾崎川原ニて殿様御上覽被遊候也

一同二月廿二日酒井伊織様御調練尾崎河原ニ而有之候、殿様御上覽被為遊候

一同三月八日七ツ半時ハ組屋六郎左衛門宅へ米屋仲間・年寄・組頭不残振舞有之、訊ハ塩座年限明キニ相成候故、今三ケ年は迄通り致吳候様御頼ニ付承知仕候也

一同三月廿三日ハ廿五日迄三日之間愛宕山式百式拾年御神事有之、天气廻りニ而殊之外賑ハ申候

一同四月十五日殿様御意ニ而御家中様御一統へ御談示扣

我等勝手向從來六ケ敷難義ニ存候、此度深ク相考候処、上之勝手而已相直り候而茂、家中ハ不及申下末々百性町人たり共致難渋続兼候者有之候而ハ、勝手向相直り候と者難申と存候、右ニ付此度仕法替申付候事ニ候義能々相守可申、家中一統是迄致難渋、昨年本知遣し候得とも是迄難渋之義何之助ニ茂相成申間敷与存候間、此度格段ニ令勘弁、家中一統之借財引請遣し候間、以後ハ他借堅く無用ニ可致候、且又此度御仕法替ニ付而ハ、往々取続之ため此度之処ニ而少分之手宛金指遣候、并ニ此後他借無用と申付候ニ付、銘々不得止事無余義臨時入用之節ハ応分限引替金差出可遣候、勇(酒)殿院様以来御代々兎角勝手向六ツ敷候処を、此度之仕法替ニ而是非取直し永々差支無之様可致存意ニ付、家中ニ有之候而も右之処

厚相心得、兼々申付置候質素節儉之處皆々相守可申候、万一右申付方不相守主意ニ違奢侈ニ而困窮致候ハ、他借坏致候者於有之ハ、仮令家柄之者共たり共嚴重ニ可申付候

是ハ御役人様御談示扣

御上御勝手向御有余有之、此度之通被仰出候義ニ而ハ無之、古川嘉太夫父子寄特之義申出候ニ付調達被仰付、此度之御取扱ニ被成下候事ニ候

一同四月廿五日ニ単屋源兵衛・米屋伊左衛門・米屋半兵衛ノ三人、町内ニ而人別改メ事ニ付町預ケニ相成申候

一同廿五日・廿六日竹原祇園様・天神宮様御上葺ニ付供養有之候也

一同廿八日町中宿老兩人と五人組と町役所へ御呼出し有之、諸方御触も有之候、御法度之衣類夫々不相成趣御談示書扣

支配下一統へ

一衣食住奢侈無之候様可致旨是迄毎々申付候事ニ候へ共、兎角不相用者多く在之趣相聞へ候、右ハ一躰之風俗人氣不宜、都而上ハ申付候義共輕々敷相心得候故之義如何之事ニ候、乍併過去候義ハ一々沙汰ニ不及候、當時於公儀風俗質素筋別而厚く御世話被為在候御模様ニ而、則三ヶ津坏追々被仰出候次第等彼是風聞も承り居可申、爰元も右ニ准シ御取斗無之而ハ不相成、其上尚

又御上思召も被為在候ニ付、御領分中弊風を改、質素之古風ニ立戻り候様嚴重ニ被仰出候事ニ候、仍之町人共之義も此度改而左之通申付候条急度相守可申候

一分限之町人衣類之義、男子之分ハ絹紬迄用捨、婦人之義ハ供召連候節ハ同様絹紬迄用捨、供無之節ハ絹不相成候、男女共縮面ハ不相成候、其外金入天鷲絨等ハ勿論之義、都而結構成品相用候者、仮令供召連候共廻り之者見当り次第剥取可申候、尤平日者成丈ケ木綿類用候様可致候、帷子之義ハ越後縮迄ハ不苦候

但し分限と申ハ御免許御用達御扶持人、夫代免許迄と相心得可申候

一夫代免許以下平町人之義ハ、内証貧福ニ不拘男女共都而絹衣不相成、袖迄ハ用捨ニ而候、帯・下着・女裾よけ等も絹類不相成候、袖口襟越之半襟ハ用捨、通襟縮半絹・絹紬を掛ケ候分ハ不相成候

一帷子之義奈良・近江柄迄ハ不苦、越後縮以上不相成候、其余都結構之衣類着用致候ハ、たとへ供連居候共剥取可申候

一右衣類之義ハ一統持伝へ候分は来月中ハ是迄通着用不苦候、六月一日ハ前条之通急度相改可申候

但し衣類之義右之通り申付候得者、此末公儀御模様ニ寄猶又嚴重ニ可申付義も可有之候間、兼而相心得罷在候

一塗下駄・絹花緒・蛇目傘・紺日傘等夫代免許以上之者ハ用捨、右以下之者ハ不相成候、併日傘ハ白浅黄類ニ候へハ不苦候

一女子髪之飭り結構之品用申間敷候、子供はねそなど縮面・ひが(緋鹿)のこ(子)之類花美之品無用可致候

一櫛・笄・かんさし・きせる・煙草入金物、其外無益成もて遊びもの金銀用候義不相成旨ハ、去ル戌年従公義被仰付候通弥相守可申候、猶又為心得其節之御触書相示候条急度相心得可申候、万一金銀具用候者ハ見当り次第剥取可申候

但し金銀ニ紛敷品無用可致候

一町人共召仕男女衣類之義ハ袖不相成候、其余ハ都而平町人同様可相心得候

一振舞参会都而飲食筋次第ニ致增長候趣相聞へ如何事ニ候、以来急度質素ニ可相心得候

一家居普請等之義ハ身柄分限ニ心し差別も可有之候へ共、花美結構無之様可致候、格別目立候普請・庭作り等致候者於有之ハ急度可申付候

一近来婦人前たりを致御家中へ徘徊致候者多く有之候、右ニ不限如何之風体ニ而御家中へ立入候義堅く致間敷候

右之条々於相背者宿老ハ勿論組合迄之可為越度候間、相互ニ心付合急度相守可申候

寅四月

小浜 町奉行

一四月廿日頃四郡之手代当時ハ百性共老人も我等宅へ立入レ候事不相成候様被仰出候、并ニ手代共在方へ参り候共酒杯吞候事不相成、

且又音信物何壹品受納致候事不相成段被仰付候、尤足輕一統茶柄提緒不相成段、当年中ニ藤柄ニ致候様被仰付候

支配下一統へ

一是迄町方ニ而両組同心共へ親類ニ而茂無之者、中ニハ酒飯相振舞、或ハ町番所へ音信・付届ケ等致候者有之趣相聞へ候、右ハ甚以心得違之事ニ候間、以来近キ親類之者ハ格別、其外右様之義堅不相成旨同心共へ分而申付置候間、町一統其趣急度相心得、振廻・付届ケ等決而致間敷候、扶突共之義も兼而指定居候廉々、輕キ菓子・肴・野菜等相送り候義ハ不苦候得共、其余平日振廻ハ勿論音信等致間敷候、若シ同心共之内ハ酒食物何品ニ而茂所望ケ間敷義申候者有之候ハ、有体ニ可申達候、万一致心得違右申付背キ候者有之候ハ、吃度可申付候

寅四月

小浜 町奉行

一近来男女共奉公人無数ニ付殊之外高給を望候趣、召抱候者も奉公人無之難替ニ付、無抛高給ニ而召抱候趣相聞へ、全体給金等之義ハ前々ハ大抵方量も有之義、如近来方量も無之高給を望候義者、全く時節宜候ニ付輕キ者致奢増長、我儘之風義ニ相成如何之事ニ候間、以後ハ前々ハ之振合ヲ以給金相定候様可致候、召抱候者も右之心得を以取斗可申、右之趣支配下一統へ心得違無之様、其処之役人ハ不洩様能々可申示候

一惣而出買之義ハ御法度ニ候処、近来土橋之上、升形辺へ青物出買

致候者多く罷在、御家中御往来之差支ニ相成候趣ニ候間、以来出買ニ罷出候義急度差留メ候間、町々不洩様可申付候

刁五月 小浜 町奉行

一五月十日川崎町・塩屋町・広小路・今在家町・欠脇丁・中西町、

メ六町、人別改之事ニ付代人を替りニ相立候当主十六人入牢、男

替り立候者十日之間、女替り相立候分十五日入牢、右町之宿老ハ

七日之間菱垣戸メ、組合五百文宛過料、一日之愼、替り人貸候者

五日之間追込、宿老致代人替り立候者宿老役取上ケ入牢

一同十六日川縁丁・片原町・裏町・材木町・浜浦町、メ五丁拾九人

右同断

一同廿六日大津町・瀬木町・須崎町・薬師小路・今道丁・清水町・

柳丁、メ七丁廿三人右同断

一六月三日大蔵小路・今在家丁・西宮前町・中小路・八幡小路・風

呂小路・文珠丸・浜浦町・常在小路、メ九町廿人右同断

一同十九日獵師町・常在小路・今町・達磨小路・石屋小路・塩浜小

路・福岡町・突抜町・泉町、メ九町廿五人右同断

右人別改之者も七月四日迄ニ入牢致候者も不殘御免被仰付、先々

目出度相濟申候、誠ニ恐敷候事ニ御座候故書記置申候、手前親類

二者尾野屋吉右衛門ニ井長下男を借代人ニ立候故吉右衛門入牢、

升屋源兵衛二者同家子供奉公ニ遣し替り立候故入牢致、其余差支

候所も無之候間、以来無願上方へ奉公ニ遣し候事不相成候間、心

得のため書記申候也

〔但し^(朱書)五月十九日頃今町方寺々誓願寺へ寄合被致、此度人別改

之事ニ付入牢致候義ハ御免成候様寺院方々御願候へ共、

御聞濟無之候也

一同三月中頃羽賀寺様ニ觀世音^(開)閉帳之砌、羽賀村若者芝居致候処願

不叶候を、当六月三日芝居致候者御呼出し有之、若者七人入牢致、

御奉公相勤候者御暇出申候、庄屋手錠、追込も有之候也

一当年の六月祇園祭礼十三日・同十四日両日ニ被仰付候

一同六月廿日達磨小路弁材^(財)天様從御上様取払候様被仰付候

一壬寅年六月廿三日例年愛宕山祭礼ニ而町々分明松上ケ候へ共、今

日不輕大南風ニ而甚火之元太切之事故、從町役所上へ持參致候共、

ともし候義不相成旨被仰付候、則今夜七ツ時ニ上中郡玉置村三拾

五軒斗出火有之候

一 六月廿九日昼四ツ半時大白雨之処、川崎町下駄屋裏火事と申大騒
キ致候

今日四ツ時分諸方へ雷落ル、又学門所^(問)へも雷落ル

一 七月七日御上様分此度人別改之事ニ付過料凡式百貫文斗納り候故、
諸人極難渋之向へ十三才分七拾才迄之者ハ土橋下ノ砂を取候得者、
一日ニ式百文宛賃銭被下候旨被仰付候、町内吟味致候処町内二者
壹人も無之候

一 同十日後藤分銅改ニ参り宿掛屋宗兵衛、町内不残ニ而五面・竹藤
・井セ・橋又・米市・手前、十二日分銅改相濟宿老へ請取ニ行、
此度之印^(三カ) 極印也、五匁下不残取上ケ、右下分銅代銀壹分四
厘^(三カ)御買上ケ被致、改て五匁下十二而代銀七匁五分ニ被差出申候
書付来ル

改料十一匁、手入料壹匁壹分、仕替料七匁五分、メ拾九匁六分、
内壹分四厘引残拾九匁四分六厘、外ニ壹分包料納メル

一 同十一日五ツ時町中宿老壹人宛町御奉行所へ御呼出し有之候御談
示扣

御上思召被為在、先達而御勝手向御仕法替被仰出、右ニ付御家
中諸借財をも御上へ御引請被成下御事候、右ハ御勝手向御有餘
有之被仰出御義ニ而ハ無之、都而御借財増ニ相成候へ共、御家

中追々難渋候て取統兼候様之義てハ、夫か為ニ御上御仕法替茂
難相立ニ付、格別之思召を以此度之通り被仰出、從御上御取扱
被成下候事ニ候へ共、東西ニ而ハ莫太之金高故、其儘二者御取
扱ハ難被下候ニ付、乍氣之毒借財・買物・質物共永キ年賦ニ御
渡し可相成候間、委細之義ハ懸り御用人中并ニ積方中、融通方
ニて対談可有之候間承知可致候

御勝手向從來御六ケ敷兎角御仕法難相立ニ付、先達而格別之思
召を以御仕法替被仰出、右ニ付御家中諸借財をも御上へ御引請
被下候事ニ候、就而ハ銀主買掛り等難義無之様、相応ニ御取扱
被成下度義ハ申迄も無之候へ共、東西ニ而ハ莫太之及金高二、
色々評義候へ共兼粗承知之通不一通御六ケ敷御勝手向之上、追
々臨時御入用指湊思召通り之取斗ニも難及、此段於御役人深く
恐入候へ共、不得止不本意氣之毒ながら調達・買掛り共元銀五
七拾ケ年之永年賦ニ御渡し可有之候間、迷惑ニも可有之候へ共
左様相心得可申候、尤新古差別も有之候へ共、数口之義故只今
分差略も致かたく候間、右様御取扱被下候而ハ必至と難渋ニ落
入、渡世も致兼候向も有之候ハ、詮義之上其品ニ応し御取扱
も可被下候間、無余義難渋之向ハ其旨可申出候、質物之義ハ引
当之品も有之義、別而難義之筋ニ候へ共、是又同様之次第ニ付、
三拾ケ年賦ニ御渡し可有之候間、只々迷惑ニも可致候へ共品物
差出候様可致候、右ハ夫々支配頭分被申談承知之義二者候へ共、
猶又右之趣申候間、御上深く御苦勞被遊候段致恐察、乍不肖

何分納得致候様頼入候事ニ候、尚委細之義ハ積方并ニ融通方
も可及示談候

但し当春以来買掛り分ハ年賦御取扱ニ相成候而ハ別而難涉

可致ニ付、右之分ハ当十一月中皆済相渡し可遣候、尤

年賦銀渡候時節之義も右同様毎年十一月下旬ニ可相渡

候、且調達銀証文并ニ追送り訳等有之分ハ、積方・融

通方之内へ委細書付差出し可申候

(朱書)

「七月廿九日町御奉行所へ御家中掛り町人御呼出し之義ハ奥ニ

書記也

一 壬子七月十七日大津町林屋善兵衛親善左衛門、去年壺里追放之処

立歸り候ニ付召捕ニ相成、三十日入牢致跡郡払被仰付候

一同十八日伏原村仏国寺和尚と別所之尼とかけ落致申候也

一同十□日御触書之写

支配下一統へ

一 近年於支配下売女体之者有之、中ニ者召抱置又ハ娘等売女ニ差

出し候者有之趣、并ニ男女出會宿致候者多く有之趣相聞候、如

何之事ニ候、右者夫々吟味之上嚴重ニ可申付義ニ候へ共、此度

ハ存寄も有之ニ付御用捨咎之不及沙汰ニ候、以来隠売女之類ハ

勿論之義、男女出會宿等致候義急度相止可申候

一 無商売ニ而何渡世と申義も無之相暮候者も有之趣相聞候、右ハ
甚不審之義ニ而、譬者不宜手慰等ニ携候、或ハ婦人之向ハ他之
困物等ニ而日を送り候義ニ而可有之、若さ様事候へ者甚以不心
得之至り如何事ニ候、向後一日も早く心底を改、夫々正路之職
業ニ志シ無油断渡世出精可致候

一 女髮結之義、表向名目ハ無之候へ共近来右職渡世之者諸所ニ有
之趣相聞へ、夫故輕キ者共迄も右女髮結ニ為結候様之風俗ニ成
行不心得之事ニ候、女共夫々身分相応ニ身嗜を可致筈之義ニ有
之候、以来者自身髮を結候様可致候、女髮結ニ為結候義決而無
用可致候、女髮結致来り候者者職を替、洗濯・糸はた其外何ニ
而も左も有べき女之手業ニ而渡世致候様急度相改可申候、右夫
々申付候上万一不相用候者有之候ハ、早速召捕吟味之上嚴重
ニ可申付候間、呉々も心得違無之様可致候、宿老共ニ者別而心
付町内之模様直々毎々可申出候、万一見逃候ハ、是又嚴重ニ可
申付候条、兼而左様相心得可罷在候、近来奢侈令增長殊之外手
籠り候料理を致、於市場魚相求候節も直段ニ不拘高料之魚相調
へ、又ハ他国分季節ニ不至野菜等、其余都而珍敷物を取寄料理
ニ相用候故、自然と高料ニ相成候趣相聞へ如何之事ニ候、以来
他所分季節ニ不至野菜物都而珍敷もの取寄候義ハ勿論之義、於
市場ニ魚相調へ候節も高直之魚相調へ之義堅く無用可致候、且
壺人前三匁以上之料理致候義無用可致、右分高料之料理誂候者
有之候ハ、可申出候、併無尽或ハ格段之訳有之候ハ、其品ニ

寄右直段少々相増候義者格別之事二候、全体料理屋之義ハ奢
 を導キ候基二付、当時公辺之御振合ニ而ハ停止ニ可申付候得共、
 一時二職替申付候而ハ可及難義二付、此度ハ不及沙汰二候、併
 此後模様ニより追々減少可申付間、何時職替申付候共不差支候
 様漸々心掛可罷在候

一 隠売女出会宿等不相成旨ハ先達而申付候通弥相守可申候、併西
 三丁之義ハ辺鄙之場所ニ而渡世も致兼令難渋候趣令歎願、其上
 内分ニ而男女出会宿等致候義ハ甚以不筋之義二付、於御上深キ
 御主意有之、格別之以御評義右三丁限り茶屋職之名目差免候事
 二候、若シ他町一統之内ニも実々外渡世も難出来訊有之、茶屋
 職致度者有之候ハ、西三丁之者共対談之上彼郭へ住居替之義
 可願出候、左候ハ、吟味之上可及差図候

一 此度西三丁茶屋職差免候二付、外今一通り見込候而ハ何とか時
 体ニ不似合之様ニも存候趣ニ而、中二者彼是風評も致候者有之
 候哉二相聞へ候、右ハ御上御主意委敷不相弁候而ハ随分左様ニ
 も存、合点も参兼可申哉ニ存候二付、右様不審ニ存心付等有之
 者ハ無遠慮奉行所へ尋出、存寄等申達候様可致候、夫々御主意
 為申聞又ハ尤之心付等申達候ハ、取上可及評義候、左も無之名
 前も不相認烏乱ケ間敷訴状等ハ一切取上ケ不申候間、左様可相
 心得候、且西三丁茶屋職差免候二付若キ者忤令心得違、猥ニ右
 郭へ至り銀錢を費シ、身持放蕩相成候様義無之様父兄今能々可
 申示置候

〔朱書〕
 壬寅八月十五日夜七ツ時ニ京都万次分飛脚ニ申来り候御触書

写

一文政度以来金銀吹直被仰付候処、当時保字金銀・壹歩銀・貳朱金
 等を以專世上通用被成置候、右二付而ハ文政度之文字金銀草字貳
 歩判・貳朱銀・壹朱銀等、此度不残通用停止被仰付候間其旨相心
 得、凡古金銀是迄停止之品共所持致候者ハ、多少共有体之員數銘
 々今書付其筋へ可指出候、數度引替之義相触候得共今以引替残り
 高不少二者、畢竟金銀持困候余力有之者共、品位宜与存候方を宝
 と致隱置候故二候哉、人情ニおいて無謂事二者無之候へ共心得違
 ニ而候、金銀者世上通用を以宝と致候事故、品位何程宜敷金銀た
 り共既ニ停止之上ハ、持困候者一己之宝と致迄ニて、世上一同之
 宝二者不相成候、公儀御制作世上之宝たる品を、一己之私を以宝
 と致持困隱置候者心得違ニ而、触渡候趣を背罪科不輕義ニ有之、
 世上之為品々御改正被仰出、下々痛ニ相成候義ハ相厭候様之御主
 意ニ而、誠ニ難有御時節之所、一己之迷ニより違犯之罪科ニ陥り
 候者共も有之候而ハ、其節ニ至り後悔致候而茂無詮不便之義ニ付
 兼而諭示し候、是迄之停止此度今停止之金銀共速ニ触書ニ応し、
 銘々持困候員數有之儘書出し候者者自己之冥加を弁候、触渡相守
 寄特之段可被為賞候、若し世上通用之義利を不顧一己之私精之迷
 を不悟者之儘不書出、此上猶隱置候而取上之上嚴重咎可申付候、
 此旨能々相心得違犯致間敷候

右之趣諸国御代官・御預り所諸奉行所、私領八国主・領主・地頭今不洩様触しらせ、停止之金銀所持之有無吟味致、所持之者ハ為書出御勘定所へ右書付可差出候、引替遣候方之義ハ御勘定奉行可申達候、若持隠し吟味不行届キ等閑之義も於有之二者面々可為越度候、右之趣從公儀被仰出候

〔朱書〕

〔八月十五日夜京都分仕立飛脚ニ右金銀停止之噂申来り候二付、

十六日終日寄合致、十七日夕一朱相場銀六拾四匁にて交易致候
 処、御領分中夕追々一朱銀持来り御役所大混雜にて、毎日式組
 ツ、出勤致候所、一日二千五百兩ツ、交易ニ参り候也 〕

一八月十九日鞍次を以京都へ何か聞合ニ遣し申候、今月廿一日二歸り委細相尋申候所、京都ニ而も当地同様之事ニ而未夕引替所初り不申候二付、一朱銀取替呉候義不相成由申参り候、扱又京都ニ而来ル十五六日頃夕一步銀も停止ニ相成候様ニ風聞致、兩替へ詰かけ候様子にて誠ニ大混雜之よしニ候処、御上夕左様之事ハ無之事候之御触有之候よし

当地今日七ツ時御触左之通

一此度一朱銀通用停止被仰出、引替之義御沙汰無之二付天下一統通用之金銀無数可相成、差当り右銀所持之者共之内輕キ者融通も難付、当用難渋致候向も可有之候間、右等之向ハ其町等之役人共ニ

而其訳得与承札、申出候ハ、手形役所御預り米手形相渡し可遣候、一朱銀之義当国ニ而ハ取分多く取扱候哉、手形役所へ納り居候金銀も過半一朱銀ニ候間、右銀引替候義被仰出有之迄者是迄之通金銀交易難致遣候間、此段一同相心得可申候、右二付而ハ手広く他国へ引合候商内も難出来筋ニ而季^(気)之毒ニ存候、此処ハ御国益も薄く相成候筋ニ而不好事にて候へ共、此度之義ハ從公儀被仰出無余義通用手狭ニ相成不及是非事ニ候、此儘長々被指置候而ハ万民之困窮申迄も無之義ニ候へハ、無程引替之義被仰出も有之哉ニ候、夫迄之処ハ一統被仰出候趣堅く相守、聊不正之義致間敷候、銘々通用金銀所持之者共ハ急度手形役所へ差出交易可致候、自然右役所金銀納り多相成候得者、正金銀入用之向へハ多く交易致遣し、商内等為致度存候事ニ候、一統右之所精力を尽し候得者御国益ニ相成、一統之潤ニも相成候事ニ候間、此段能々勘弁可致候、右之通訊而申聞候ハ、当座之利益ニ迷自己之対談を以不正之交易等致候哉、又ハ一朱銀取引等致候様之不心得之者も有之候ハ、嚴重ニ可申付候

右之趣其町所役人共得与相心得、末々迄能々合点致心得違不致候様厚可為申聞候

刁八月廿一日

壬刁八月廿一日米錢御役所へ御用達一統御呼出し有之、御談示扣

一此度壹朱銀通用停止被仰出候処、右銀之義ハ御国ニ而ハ取分多

取扱候哉、役所納りも多分有之、不融通ニ而無余義交易之所、拾両を高と相立候事ニ候へ者、此後正金銀手宛之処不都合之義有之間敷と者存候得共、自然手薄く相成候而ハ難相成事ニ候間、何も如才ハ有之間敷候へ共、銘々精力を尽し不手宛ニ不相成候様覺悟語有之度存候

右被仰出ニ付役所交易減し候義者無余義取斗候事ニ者候得共、無何と人氣立自然と正金銀ハ弥高相心得貯へ候様相成、役所へも不差出、米手形ハ容易ニ相心得候様相成候而ハ甚大切之事ニ候間、右等之所も能々勘弁有之御為ニ相成候様骨折有之度、是等之義ハ御用達中専務之事ニ而、他力を借候事も難出来義、此頃者停止被仰出候ニ付而ハ、銘々手狭ニ而別而太義之事ニ者候へ共、何分出精有之度頼存候、御引替所之義ハ不遠被仰出も可有之と者致恐察候事ニ候へ共、是以御模様不取斗事ニ而者第一御城下衰微、御用達共交易所之元を仕出し候哉、右申候通り専務之義ニ候へ者何も申合、此上ニ茂交易筋御手支無之様相働キ呉度、分而頼入存候事ニ候

刁八月 米手形役所

〔朱書〕「右之通被仰付候ニ付今日昼迄ニ一朱銀交易ハ相休申候」

右ハ他所分追々一朱銀入込候様子ニ付、古金銀・一朱銀共不残御領分中へ当月廿九日迄ニ支配頭へ書出し候様相談相定願申候処、早速翌廿二日願之通ニ相成、其上極難渋之向へハ米手形六十四匁ツ、御引宛御かし被成候事ニ致、廿四日夕取替

初メル

一 八月廿二日夕通用金壹軒前ニ拾両宛交易致遣し候、尤金相場六拾五匁六分ニ成、錢相場銀九拾九文定ル

一 古金銀・一朱銀所持致候者、町々宿老中へ書出し可申候事、尤御用達向ハ中間一統申合一緒ニ書上、御支配町年寄衆へ月番分差出し候、其時書上之扣

〔朱書〕「〇」一真字壹歩判壹歩 一草字小判四両 一真字式部判三両

一草字式部判廿七両式部 一草字壹歩判拾両 〔朱書〕「〇」一大形式

朱銀壹両 〔朱書〕「〇」一小形式朱銀三歩 一壹朱銀三拾兩

七拾六両式歩

此外ニも少々有之候へ共米手形御役所ニて入替を願、京都へ直々御取替被下候様ニ願上候也

〔朱書〕「此〇印ハ高成寺分被頼手前之分ニ致書出し呉候様被申候ニ付、如此ニ御座候也」

一同十月二日諸色何ニ不寄在方へ出買ニ罷出候義不相成候様御触有之候、しかしくた物ハ難義人之取扱候事故御免被成候

一 寅七月廿九日町御奉行所へ御家中貸付有之候、町宿老壹人・かし方一兩人ツ、同道ニて御呼出し有之候、御上様御主意心得違致候

者得与御談示之扣

一此度御家中借財等御上ニ而御取扱被成下候二付、先達而申談示置候通、則御用人中々被申示候趣も有之候へ共、難義之向も有之候ハ、夫々御用掛り之方へ可申出筈之処左様ニも無之、先日被申示候主意多人数之義通達も不行届キ哉、不心服之者も有之趣相聞へ候、右ハ難渋之向ハ其次第歎願可致、左も無之者ニ而ハ何レ銘々調達高売掛り等ケ様ニもと申義、取調へ不申出候而者引合調も難致二付、一統調達売懸ケ等此度御家中書出し有之分、銘々積方融通方之内へ早々差出し可申候、且凡五七拾年賦位ニ御渡し可相成と申ハ、不残其通りと申義ニ者無之、年数・銀高・貧富之差前々々無余義向者当年渡、又ハ四五年、十ヶ年、廿ヶ年賦と申様夫々次第も有之事ニ候間、委細之義者銘々御用懸り之方へ罷出対談可承候、元来押付無利成対談有之候様之御主意ニ而ハ決而無之候間、左様相心得可申候、尤御上御引請与相成候上ハ、申迄も無之向後聊無子細御約定通り御取扱被成下候事故、其段ハ難有相心得安心可致候、併下地御六ヶ敷御勝手向之中、当時御物入も多キ事故、都而調達被仰付御取斗被下候間、十分之御渡し方ニ者無之趣ニ候へ者、其後御時体得与致恐察程能納得致候様ニと存候、此段尚又申示候

小浜町奉行

(朱書)

「右元古川父子之寄特ニ而、御家中一統之借財御引請ニ相成

候由ニ承知致候ニ、ケ様之永年賦之御談示故、一統氣服不

致候趣噂故殿様之思召ニ不相叶候様風聞ニ而、質物も代呂

物御屋敷へ差上、引宛銀ハ御上様分漸々半銀十一月二被下

候趣之御役人中様御取斗ニて、右等之思召ニ不被為叶候様

噂有之候也

右十月六日ニ御懸り御用人様 阿部平六様
塩野八郎右衛門様 御兩人様共御

用懸り御免御差扣被仰蒙候

同十二月十日御兩人様共御用人御免被仰蒙候

一寅霜月十一日御触書写

此度壹朱銀通用停止被仰出、引替之義御沙汰無之候二付、右

銀所持之者共之内当用融通難付難渋之向者、米手形役所へ御

預り遣米手形相渡し可遣旨相触、追々差出し御預り置有之所、

今度右一朱引替方之義被仰出候二付而ハ、是迄御預り之一朱

銀引替度向者可相渡遣候間、来ル廿日迄ニ米手形役所へ引替

ニ差出可申候、右日限過候ハ、差出候共引替不遣候

一文政度吹直し金銀、当時所持之者御引替所へ可差出事ニ候へ共、

遠路迷惑ニ及、為夫不融通難義ニ及候ハ、交易ニ取替可遣候間、

勝手次第米手形役所へ可差出事

一壹朱銀御停止之所、御引替延ニ相成候義ハ御触面ニて承知可致

候、夫々引替可申筈之処遠方持出しかたく、差当り難義ニ及候

者有之候ハ、是迄之書出し有之員数之分、一朱代札四匁ニ而

取替可遣候

御上二茂一朱多相成候而ハ急々御引替ニも不成御手支ニ候へ共、手形四匁宛ニ而取替相願度者ハ勝手次第相願可申出候

右御触ニ付文政度真字・草字金銀、当時通用相場ニ而御取替被下候事ニ相成候

一同極月七日五ツ時二町中御家中様へ貸付有之候分、不残町御役所へ御呼出し有之

御家中諸借財御上様へ御引請ニ相成候ニ付、渡方之義先達而申付候事ニ候、然ル所思召ニ不相叶、猶又御役人中へ被仰出候趣有之候ニ付、渡方之義ケ条書之通改而申付候、下地御勝手向御六ケ敷候へ共、格別之以思召を別段ニ調達被仰付御取扱被下候事故、弥御勝手向ハ御六ケ敷候間、一統渡し方十分ニて難相成候ニ付迷惑ニも可存候得共、都而元銀ニ而可相渡候間、夫ニて皆済与相心得可申候、右思召并ニ御時体之処能々奉畏、心得違無之様太切ニ可心得候

但しケ条申付候上ニも身元難渋ニて今日暮し兼候様之者有之、一時ニ御渡し被下度相願候者有之候ハ、支配頭へ可申出候、左候ハ、詮義之上実々難渋之者ハ御取扱可申候

一当刁年調達売掛、昨丑年売懸り調達分、当暮元銀不残御渡し可被下事

一質物之分元銀不残当暮御渡可被下事

一無尽かけ銀分夫々仕法通時々御渡し可被下事、但し当暮ハ今年兩度之掛銀共当暮御渡し可被下候

一一昨子年今以前之調達・売懸り共当暮今五ケ年賦ニ御渡し可被下事、但し五ケ一当暮御渡可申事

但し郷中御渡銀十二月九日、小浜一円十七日、西津一円同十六日、質屋中間廿五日

外御用達分来春早々御渡し可申候也

壬寅年十二月十七日御渡し銀無滞相済酒飯被下置候也、融通方一統渡し方ニ出勤致候

天保十四癸卯年正月十六日町内寄合初二、潰レ家間口壺間ニ付式百目、表間潰定、横手壺間ニ付五拾目ニ相定メ申候

同年二月初午宵祭りニ産物方稻荷様ニ付御用達一統へ御酒被下置候也

同二月十五日誓願寺へ念仏行者僧被来候也

同二月七八日頃分西ノ方ニ巾壺尺余リニして、長サ三五丈斗之薄キ白雲出申候、尤空晴申候、夜六ツ過分五ツ時迄毎夜出申候故、人々何哉と案事居申候、尤京・大坂ニ而も右同断ニ而、是も不審ニ存居候よし〔朱書〕「但し二月廿五日頃迄也」

同二月廿六七日頃中西町倉屋長兵衛裏二稻荷様有之候、鈴か昼夜鳴候故八幡様へ湯立致候処、同町木綿屋長右衛門方火元にて中西町一円出火二相成候様御神口ニ而、右中西町一統四社参り致、夫々毎日々々不寝番致候よし

同三月廿一日廿五日迄多田寺薬師如来様之開帳、并二八十八ヶ所建立之供養有之候処、折節天氣廻りも宜敷日々群集致参詣夥敷事、八十八ヶ所山景色宜大当り、町在方参詣致さぬ者壺人も無之候也

一六四匁 五日之間座敷料 諸祝義

一三拾五貫四百七拾文 本堂さい銭 蠟燭戒名場

一錢六十四貫五百八十三文 本堂其外 さい銭

一錢百十式貫七百三十三文 八十八ヶ所 さい銭

一米壺石壺ト五升 袋米

一金式兩壺歩 諸在々・西津 寄進

一米式石五升 右同断

一式貫式百廿三匁 右同断

三分四厘 四貫九百五十九匁三分、外米三石式斗

内式貫五百匁斗開帳造用

式貫三百匁下地山開キ日雇人足造用、差引百五拾匁斗利

右ハ三月廿六日町在方世話人立合勘定也

右第壺番ニ八ヶ所之下にて清メ線粉^(香)壺本壺文ニ壳申候処、勘定致候処廿三日中日ニ五六千人参詣致候也

別勘定町方上り高式貫九百六拾八匁八分六厘

世話人道作り之日雇賃

石仏様代残り銀引替メ式貫六百六十一匁八分七厘引替銀有

右同断諸造用四百八匁六分 外ニ世話人寄進銀凡七百匁

差引六百目余残り申候、但し仏様壺鉢金壺両として頼也

右ニ付手前方仏様壺鉢寄進被頼候ニ付、米手形百匁出銀致申候

上り口第壺番釈伽如来 ^{阿州} 靈山寺手前寄進之仏様也

一同三月廿九日夕正誓寺焼地面ニ而堀井座能興行被致候ニ付、町内中相談之上、十日之間ニ座本へ百式拾目祝義として遣し申候、町中表札銭なしニ入約束也、但し場錢壺間五匁ツ、定

右ハ近所迷惑ニ而心安キ人并ニ親類参り候故茶菓子杯遣し申候、

并ニ御家中様方共

手前惣能入用勘定凡六拾匁余り入申候也

外ニ酒式升切手 肴料三匁 木戸番役人へ遣ス、是ハ男女茶菓子杯持参致、

毎度出入致候故会釈也

一当春正月七日夜御家中様御子息様土橋ニ而大喧嘩有之候処、四月

六日右御裁許有之候

平井様・高森様五人扶持ツ、御取上ケ閉門被仰付候、江口様・堀

田様御両家御子息蟄居、跡四五人様御子息慎、親御遠慮被仰付候

〔朱書右夫迄其夜遊はし候青井丁柴屋惣介三丁町御払、菱垣也〕

一天保十四癸卯年四月十日頃西津福谷村福井平次郎殿娘、西津堤へ身をなけ申候

一同四月廿五日五ツ時二三浦様御調練有之、尾崎川原にて人数六百人余り也

一先年本郷村栄助方ニ召遣イ候者三分里村之者、此間右栄助方へ忍込召遣イ下女と密通致居候故、扱夜中時分嫡子罷歸り候処、盗人と存棒にて打たをし候処、即死致候処、浜納屋へ持行首メニ致候処、評判高く相成候故御上様より御吟味ニ相成、六ヶ敷様子ニ風聞致候へ共申開キ宜敷候哉、其儘ニ納り申候風説也

一卯四月廿九日從御上様昨年御公儀様々被仰出候衣食住之義、此頃心得違之者も有之候趣ニ相聞へ太切之御事ニ候間、尚又一統末々迄右御主意相守可申候様御諭有之候也

一同五月二日西津福谷浜ニ而酒井様之御嫡子様之御調練有之候也

御触書之写

一朱并ニ朱墨共朱座之外江戸・京・大坂・奈良・堺へ仲買之者申付掛札為致、并ニ右仲買共今も勝手次第買請候様寛政度相触置候処、此度右仲間之者差止候間、以来ハ先前之通り座方々直々買請候様可致候、尤朱ハ朱座包之儘正路之直段を以小売致候義、且職人遣候残り分も右包之儘同職之者共へ譲渡し候義等ハ不苦候、若し出所紛敷品売買致候趣於相聞者吟味之上急度答可申付候

一無宿并ニ悪党共関東筋在々多徘徊致、山寄村々ニ而ハ白昼も及乱妨村々難洪之趣相聞候、関東取締出役之者へ召捕方為致候処、右風聞相響悪党共関外へ逃入候由粗相聞へ候ニ付てハ、銘々無油断遂穿鑿、召捕方手配可有之者勿論之事ニ候処、他之引合有之分等差出方手数も相掛り候義ニ付、自然粗相忽々致置候向も有之哉ニ相聞へ如何之事ニ候、右者関東最寄国々ニ茂不限、此上無宿悪党共猥ニ徘徊致候様ニ而ハ百性共及難洪ニ、其上風義不宜ニ引移り、おのづから官民之害可相成基ニ付、国々一般ニ可被遂御穿鑿之条、品ニ寄奉行所組与力・同心共又ハ御代官手附手代等踏込、召捕候義も可有之候間、領主・地頭ニおいても弥厳重遂穿鑿、悪党共召捕候様可被致候、尤万石以上・以下共自分仕置難相成、他之引合有之分ハ是迄之通奉行所吟味之義被申立候事ニ候得共、左候而ハ彼是手数も可相掛義ニ付、此節ニ限り他之引合有之候共別段被申聞候ニ不及、関外ハ最寄奉行所又ハ御代官ニ引渡し、関内ハ関東取締出役之手附手代又ハ最寄御代官陣屋へ引渡候哉、或ハ其品ニ

寄寺社領ハ手番寺社奉行、其余之分ハ公事方御勘定奉行へ村役人共差添、召連訴出候而も不苦候条可被得其意、右之趣万石以上・以下領分知行給知有之面々并二寺社領共不洩様可被相触候、右之趣従公儀被仰出候

右之趣可奉承知候
勘左衛門
大 八

卯五月十四日

一先頃下市場町・安居町両町一昨年之出火類焼二付、当年下市場町番二当り候故、祭礼山相休申度段御上様へ御願被申上候処、御上様思召二者、先年突抜町休年を願候へ共、是ハ山道具焼失致候故休二致遣し候へ共、市場二者昨年上市場町ニ相勤申候事故、就而ハ祭礼之事ハ成尺賑(丈)ひ候様ニ可致往古より掟也、然ニ此度土橋御普請ニ付御飯橋を山通し候故、ケ様之大行之事故致候也、土橋切ニ而山引不申候ハ、儉約ニも可相成候へ共、祭礼之事故不得止事丈夫々致候間、雜費入用成丈ケ儉約致相勤可申様ニ御諭有之候故候押テ相願候ニ付、左候ハ、願之通り式ケ年之間休ニ致遣候故、諸事何事ニ不寄儉約相立、其上諸見物等相心得可申様被仰付候て委細奉畏候趣也

(朱書)
「御公儀様御触書写」

一諸国人別改方之義此度被仰出候ニ付而ハ、自今以後在方之者身上相仕舞、江戸人別ニ入候儀決而不相成候間、領分知行所役場等ニ

罷在候家来ハ精々勸農之義申諭、成尺人別不洩様取斗、且職分ニ付当分出稼之者并二奉公稼ニ出府致候者共者、村役人共連判之願書為差出、右願之趣承届ケ候旨、右役場ニ相詰候家来奥書印形致相渡し、小高之分知行所ニ家来不差置、遠国ニ而当地へ願等手重り向ハ、割元役之者奥書印形致候様、其外出家致候者之義ハ、無由緒者雖有弟子之望猥ニ不可令出家、若し無拠子細於有之者其所之領主代官へ相斷可任其意旨、寛文五年諸宗へ御条目を以被仰渡候処、近年糺方等閑之向も有之哉ニ相聞候間、已来ハ出家相願候者ハ人柄并二子細等、領主地頭ハ得与吟味之上寺社奉行へ申斷、聞置之挨拶有之候上ニ而可差免、并廻国修行・六十六部・順礼等罷出候者も、前書出稼之者同様ニ取斗、尤出家願等仕来り候而添簡致候向ハ其通り可致、諸藩中無拠子細ニ而出家致候分ハ是又寺社奉行へ可相斷、且吉田・白川陰陽師、神事舞太夫等より許状申請候者共も、其度々添簡又ハ前同様願書へ奥書致し可被相渡候事一近年御府内へ入込妻子等も無之裏店借請候者之内ニハ、一期住同様之者も可有之、左様之類ハ呼戻し在方人別不相減様取斗可申候右之趣在所ニ罷在候家来へ精々可被申付候

在方之者当地へ出居馴候ニ随ひ古郷へ戻り候念慮ヲ絶し、其儘人別ニ加候者近年相増、在方人別相減し候趣相聞へ不可然義ニ付、今般悉相改不殘婦郷可被仰付候処、商売等相初(始)妻子等持候者も一般ニ差戻しニ相成候而ハ可致難洪筋ニ付、格別之御仁恵を以是迄年来人別ニ加り居候分ハ婦郷之御沙汰二者

不被及、以後取締方左之通被仰付候

一 在方之者身上相仕舞江戸人別ニ入候義、自今以後決而不相成、大工・左官・木挽・杣其外職分ニ付当分出稼のため出府致し、同居又ハ店杯或ハ奉公稼ニ出候者ハ、月限・年限等を以村役人へ申立、御代官・領主・地頭へ願出候得者、村役人連印御代官所へ手代、私領ハ家来奥書印形之免許状相渡し遣し候間、出府之上家主或ハ主人へ差出、且何方ニ同居并ニ奉公濟致候旨村役人へ通達ニ及、期月・年限ニ至り候ハ、一旦村方へ立戻り、何ケ度出府致候共右同様之手続ニ相心得可申事

但し在方人別人重ニ相成由を申唱、職人賃錢を増し奉公人ハ給金をせり上候義等決而致間敷候、以来男奉公人之分ハ武家方中間・町方下男共金貳兩貳部ノ三兩迄、女ハ壹兩貳部ノ貳兩迄を限り、年若幼弱之者ハ其限りニ無之候間、何程も給金引下ケ奉公濟可致候、若相背主人方相對之上給金増之取極於致ハ、吟味之上急度答可申付候

一 廻国修行・六部・順礼等ニ罷出候者、是迄ハ村役人共或者菩提所寺院へ相對之上往来手形請取候由之処、以来ハ村役人共御代官・領主・地頭へ願出、前条之振合を以許状相渡し可申事

一 出家致候者共之義、以来無違失所役人御代官・領主・地頭へ相願、聞濟之上添簡又は奥書可申請、且吉田・白河家、陰陽師、神事舞太夫等ノ新規門下ニ相成、又ハ百性町人ニ而身分相應之許状請候者ハ勿論、縦令前々ノ配下ニ而神道葬祭或ハ継目許状請候節

も、其度之支配領主等相願、添簡又ハ奥書を以其筋より許状可申請事

一 在方人別改方等閑之趣相聞へ候、向後死亡・出生・嫁娶・出稼・奉公稼之者共臣細ニ相改メ、当人印形取之、印判致候ハ、其段斷書致置、職分ニ付出稼・奉公稼候者期月・期年ニ不立戻候ハ、其段御代官・領主・地頭へ訴出候事

一 近年御府内へ入込候裏店等借請居候者之内ニ者、妻子等も無之一期住同様之者も可有之、左様之類ハ早々村方へ呼戻し可申事

右之趣村役人共厚相心得勸農之趣意深切ニ申論、村方人別相減シ不申様精々心得可申候、若人別改方等閑之取斗致候おいて者、村役人共役義取放之上急度可申付者也

右之趣從公儀被仰出候

右之趣可奉承知候
勘左衛門
大 八

〔朱書〕
「是より当所御触書」

此度從公儀別紙之通被仰出相触候間、御主意之処与得覚語可致、右ニ付当支配下之者共向後改而左之通申付候間可得其意候

一 出家致候者之義、是迄猥ニ相成居如何之事ニ候、右者容易ニ難相成事ニ候へ共、無抛子細有之致出家度候ハ、支配頭へ相願可申、左候ハ、遂吟味寺社御奉行へ伺之上可及差図候

一 男女共身上相仕舞他国住居致候義相願候共、以来容易ニ不承知候間左様相心得可申候、併是迄願之上承届ケ候分ハ其儘差免候間、

其旨相心得可申候

一職分ニ付為出稼当分致他国、同居又ハ店持或ハ奉公稼ニ出候者者、限月・年限を以宿老組合連印之願書差出可申候、左候ハ、詮義之上奥書調印相渡し可遣候、他国先々家主或ハ主人へ差出可申、右他国何方何町何時ニ罷在候段、爰元宿老共迄可申達候、右限月・年限済候ハ、急度致帰国可申候

但し奉公稼ニ出候共給金之義ハ御触面之通相守可申候

一廻国修行・六部・順礼等ニ罷出候者、是迄ハ猥ニ成義も有之不宜候間、以來ハ其訳支配頭へ相願可申、左候ハ、奥書調印相渡し可申候、尤菩提所寺院へも掛合往来手形請取可申候

一吉田・白川家・陰陽師・神事・舞太夫等ハ新規門下ニ相成、身分相応之許状請候者ハ勿論、仮令前々ハ配下ニ而神道葬祭或ハ継目許状請候節も、其度之支配頭へ願書差出可申、詮義之上奥書調印相渡し可申候

一他国奉公稼之類、近年願之上承届ケ候分も、此度従公儀被仰出候御主意ニ付而ハ、奉行より奥書調印取斗可遣候間、改而願書差出可申候

〔是ハ^(朱書)御公儀様御触書〕

一町中者勿論国々在町共家作之義ニ付而ハ、先年ハ度々相触置候処追々相ゆるミ、^(長押)なげし・杉戸・付書院・入側附等之紛敷家作致、櫛方掘物・床縁・さん・かまちを塗、金銀之唐紙等相用、門・玄

間様之者取建、或ハ外見質素ニ而も都而工手間等相掛ケ、御茶席同様好事之普請も有之趣相聞、奢侈僭上之義不埒之至ニ候、仮令先代ニ取建候家作ニ候共、此節早々造作相改メ、其外別荘を補理格外手広不相応之家作も有之由相聞候間、当六月を限り質素之家作りニ相改可申候、町人共家作ニ而手広ニ候共、花麗奢侈ニも無之、物好之義も無之分者取毀申付候ニ不及候、町家ニ不似合不相応之家作之分ハ不殘為引直可申候、右限月を越等閑ニ捨置候者も有之候ハ、見分之者差遣し吟味之上嚴重之咎可申付候

一百姓家ニ而余業も致候者ハ勿論、農家一通ニ而も身分不相応之家作、華麗奢侈又者身分不相応ニ者無之候共物好之家作ハ、自然耕作等怠慢之萌^{キザシ}を生し風俗頹敗之基ニも相成候間、農家并之通^(並)ニ家作相改可申候、農家之家作ニ而手広候共、花麗ニも無之物好之義も無之分ハ取毀申付候ニ不及候、尤農家之家作ニ聊行違有之分ハ、追而普請修覆等之節ニ古代之家作ニ引直し可申候、且又百姓家不相応之家作ニ而引直し可申付分、江戸町中并ニ国々在々ニ准シ急度引直し可申候ハ勿論ニ候へ共、専ラ耕作之時節ニ差向イ難義も可致候間、農事之障^(障)明キを考当十二月中迄ニ引直可申候、右限月を越等閑ニ相心得候者有之候ハ、吟味之上嚴重之咎可申付候

右之趣町々ハ町奉行、御領ハ其所之奉行・御代官、御預り所・私領ハ領主・地頭并ニ寺社領共得其意、其向々ニ而嚴重ニ可申付候、若等閑之取斗も於有之ハ可為越度候

卯四月

右之趣従公儀被仰出候

右之趣可奉承知候
勘左衛門
大 八

〔是^(朱書)御当所御触書〕

公儀より百性町人共在所を放候義ハ不便之義、且其所々ニ而人高減シ候様相成候ハ不宜ニ付、重科之者ニ無之候ハ、其所々困ニ而も取繕、相応之仕事ニ而も為致置、先非を改メ良民ニ相成候様可致、御憐愍を以被仰出候趣有之候ニ付、此度御領分中ニ而も徒罪相始料々々右之咎可申付候間、此段兼而一統相心得居可申候、右咎申付候上ハ第一善心ニ相改候様相心得、厚御主意之処難有畏り可申候

右之通被仰出候間町々入念可被相触候、尤寺社有之町ハ宿老中
分通達可有之候

卯五月廿四日 町年寄

一 卯六月五日敦賀氣比之神主并ニ御用達惣代田浪与八郎殿被參、此度氣比大明神鳥居并ニ社内普請ニ付、当地御用達中へ寄進致具候様頼ニ付、為土産ケ美濃紙三折持參致候ニ付受納致候、中間相談之上耆人前金式步宛十一月十日相渡ス

一 祇園祭礼当年も麻上下ニ御願申上候得共、古来之通継上下着用致候様被仰出、太鼓はやし義御願申上候処是ハ当年切相叶申候也

一 卯六月七日竹原祭り、御姫君様於評定場御門ニ大太鼓・神楽・猪子・囃子御上覽被為遊候

一 同十一日手前方内はやし当り拾五匁町内へ出銀致申候也

一 同十四日本練土橋御仮橋ニ而、山通之義ハ笛方耆人、太鼓打耆人山ニ乗通り申候、八ツ時ニ町内山酒井様御門前ニ居候処、御姫君様評定場ニ而御上覽有之、質屋町布袋山はやし相濟候処御昼寝被為遊候て、弁天山・大黒山と暫相待候様ニ被仰付、彼是七ツ時ニ御目覚ニ相成候ニ付両町山はやし致通ル、夫分山引通し^(提)町灯不入暮方ニ引取申候也

一 一兩三年前分中西町絹屋善兵衛と申者、豆腐屋ニ而西向へ出売ニ參り候を右仲間中分差留ニ付、右絹善分御上様へ御願申上候処、同五月十六日右仲間之者株御取上ケ、戸メ・追込・慎夫々ニ御呵被仰付候

一 卯五月廿日町内米幸分井勘兵衛兄キ・ミ能セ米市・刁竹藤兄キ・小嶋兄キ・海老屋兄キ・舟佐・嶋庄・細藤・米幸・柴六・鍵屋庄七・昆伊兄キ、メ右人数ニて舟壹艘借、其外他町分壹艘、右式艘今日外海へ遊山ニ參り候処、昼時分分大南風雨降り大荒ニ相成候

故、右之親々如何相成候哉、迎も此模様二而ハ難舟致候哉も難斗と存神仏へ祈誓を掛、追々七ツ時分皆々相談之上堅海村・泊り村へ飛脚相立候処、吟味致候へハ泊り舟ニ助ケられ候て右同村へ上り、其夜九ツ時二帰り候者も有之、又翌日迄泊り候者も有之、大騒動之事ニ御座候、以後外海行之義ハ心得可申事也

一五月十六日本郷源右衛門ニ銅山相初り候而より田畑作徳上り不申候故、何ソ替りニ上り候事仕度被相願候処、右源右衛門方へ問屋職を被仰付候由而、小浜問屋中分右ニ相成候而ハ差支候趣を御願申上候処、炭問屋斗被仰付候故甚紛敷事と存、同心衆老人と問屋仲間之内分老人ツ、替りく紛敷次第無之候哉之番ニ被参候也

一六月廿四日獵師町も安兄キ熊蔵と申者、一昨晚浜浦町鍛冶屋と大喧嘩を致、鉄きう二而頭を打擲致候処、かじや命も六ツ敷様ニ付、かじや分願出候故右も安兄キ今日入牢致候、申開キ宜敷候哉七日目ニ相済申候、右ハ七月六日御裁許ニ御呵之入牢、も安兄キ十日入相済申候

一六月廿七日朝町内木綿屋藤兵衛、町御奉行所へ組宿老付御呼出し有之、外町ニも八軒斗有之、兼而御法度之男女出会宿致候故徒罪被仰付候、則帰りニ徒之字之袖なし半天を着致帰ル、表二者徒罪

中と申掛札毎日印ニ掛置候事也、来ル七月一日分六日迄御上様之砂持ニ曉六ツ時分相勤可申候、平日外方へ参り度候節も右之半天着致私用致候事被仰付候、但し同年九月七日ニも藤外ニ六軒ハ御免被成候也、外式軒ハ閏九月ニ御免成

〔御公儀様分御触面之写〕
(朱書)

一国々城下社地等ニ於江戸・京・大坂分旅稼ニ出候歌舞妓(伎)役者共を抱、芝居狂言等相催候由、右ハ其所之風俗をミだし不可然筋ニ付、向後決而抱入申間敷候、尤三都狂言座之外他国稼不相成旨、今般取締方急度申渡し候間得其意、此上右之者共罷越芝居興行等之及対談候ハ、其所ニ留置、最寄奉行所又ハ御代官所領所役場等へ早々可申出候、若触面之趣相背ニおいてハ右ニ携候者共悉遂穿鑿を、遠国ニ候共老人別ニ江戸表へ呼出し、吟味之上村役人共初一同嚴重之咎可申付候

右之趣御領(料)ハ御代官、領主・地頭分不洩様可被相触候

右之趣可奉承知候
勘左衛門
大 八

卯六月廿六日

一卯七月二日ニ大島村と長井村とニ先達博奕有之、踏込有之候て今日不残(撥鬢)ばちびんニして徒罪ニ被仰付候、是ハ一ヶ月十式日出勤也、但し女髪之前髪をおろされ候也

一同五日下中郡之内博奕有之、并二平日人柄不宜候者今日徒罪被仰付候

昨日西津福谷之人朝町方へ売物ニ参り、帰り二下馬辺ニ有之徒罪人を見物して歩行候処、御士様へ行当り不礼ニ相成、今朝六ツ時ニ是も徒罪ニ相成申候

支配下一統へ

男女ニ不限身持不宜者有之、父兄親類等之異見をも不相用不心得之者有之候節ハ、願出候ハ、心立相改候迄徒罪可申付候間、勝手次第可申付候

一同七月廿二日夕本境寺ニ而去ル(天保八年)丁酉年大飢饉之節飢死・病死致候者夥敷有之候ニ付、当年右七回忌ニ相成候故、大施餓鬼供養来ル廿五日迄四日之間有之候也

一同廿五日小頭彦人・同心衆式人付添家毎ニ家作御改有之、町中今日夕兩三日中ニ改相済、少しツ、故障有之候処追而役所へ御呼出し有之、心得違不致候様被仰付候也

一今日町内寄合有之候処、魚屋町夕木レ戸溝さらへ入用水上町へ割合掛ル、并二近来ちりあくた捨場不行届キニ付、此度魚屋町夕相改、道ばたニ捨候者見附候ハ、百文宛過料銭申請候様之相談披露有之候也

一同八月十三日夕京都夕曲駒廻し名人早竹寅吉と申者参り、芝居於小屋二十日之間興行有之候処、毎日々々大当りニ御座候

一同八月廿日町内竹藤かしやへ御医者衆借宅被致度ニ付、組頭一統寄合致、諸色定目を除キ手限借ニ致候事ニ治定致候也

一同八月廿八日土橋御普請成就ニ付、普請奉行様御渡り初有之候

一同九月十四日神明八百姫様御上葺ニ付、今夜西ノ上刻正遷宮有之候ニ付世話人夕方行、今日夕十六日迄上葺供養有之、夫々御頼ニ付引物又ハ西三丁夕ふこおろし有之、殊之外賑ひ申候、尤世話人中夕酒壺斗差上申候

一同九月廿八日西津弁財天様御造(嘗)栄ニ付、来ル廿九日迄大賑ニ御座候也

一卯閏九月十日御公儀様御触有之扣

一町人百姓之悴盲人ニ候て檢校仲間へ弟子ニ成、夫々渡世修行致第一官位を心掛ケ候筈之処、近来檢校之弟子ニ不相成、琴・三味線等針治・導引を渡世之積り致、或ハ仕官之身と相成脇差杯を帶シ候類之盲人多相成候趣ニ相聞へ候、以来百姓町人之悴之

盲人琴・三味線等針治・導引を渡世二致、又ハ武家へ被抱候而も市中ニ致住居候者勿論、主人之屋敷内ニ罷在候右家芸を以他所をも相稼候者ハ、檢校之支配たるへき事

一武家倍^(陪)臣之悴之盲人ニ而も、市中ニ住居致琴・三味線等針治・導引を以渡世致候分ハ、是又檢校之支配たるへき事

但し武家出生之盲人他へ被抱、市中ニ罷有候共稽古場を拵弟

子集抔致間敷候、若シ弟子集致候ハ、主人之方へ相断

檢校之支配請べし

一百姓町人之悴之盲人ニ而も、琴・三味線等針治・導引を以渡世

ニ致、親之手寄ニ罷有候而已之者、并ニ武家へ被抱主人之屋敷

又ハ主人之在所へ引越、他所稼不致分ハ制外たるへき事

右之通安永五申年相触候処、近来規則相崩猥ニ帯刀抔致候者有

之、座中ハ相制候而も不取用由相聞へ、是又座中取締も追々相

弛座法不整之筋も有之二付、此度取締役之者申付、諸国末々迄

嚴重ニ座法改正致候筈ニ候間、其段急度相弁へ心得違之義無之

様可致候

右之趣従公儀被仰出候

九八郎

勘左衛門

右之趣可奉承知候

卯九月廿九日

右之通被仰付候間町々入念可被相触候、

尤寺社有之町ハ宿老中ハ通達可有之候

主意ニ付、今日切ニ而御差留メニ相成相止メ候様被仰付候

一同十月廿六日ハ七日迄於空印様寛隆院殿様拾七回忌御取越之一夜

別事御法事有之候

一同十一月七日ハ天神講世話人發起ニ而、京都加茂社家玉田某と申

者を頼、八幡神主宅ニ而天満宮御一代記講積有之候所、無錢故毎

夜々々男女共五六百人程宛も参詣聴聞ニ参り候、然ル処雜費夥敷

事ニ相成候故、天神宮連中毎年壹匁五分ツ、掛錢致候を、来辰年

ハ拾ケ年之間之分拾五匁当年出銀致只度段

(マ)

一天保十五甲辰年二月五日日比野道之助徒罪場より出奔被致候由、

但し夫婦連ニ而

一去ル天保十四癸卯年十二月廿三日西三丁町へ自然喧嘩・口論有之

候而ハ如何之事故、茶屋職之者へ掛^(行灯)あんど^(行灯)う差出し候様被仰付候

由、右ニ付当二月九日ハ一統掛あんと^(行灯)う出し申候、甚夕賑ひ申候

弘化期

一天保十五甲辰年三月九日遠敷上下宮様へ、郷中一統より殿様御武

運長久之能奉納有之候

一同閏九月十二日産物御役所熊河米帳合商内并ニ御蔵帳合商内も御

一天保十五甲辰三月十四日夕極樂寺・高成寺・常念寺・西福寺、右四ヶ寺開帳有之候也

一同四月四日夕川崎町浜辺ニ大角力有之、関取稲妻と申て、繩ニ紫之廻し致候て土俵ねり致候、其外ハ一向不揃ニ付大損ニ有之候、但し五日之間有

一同五月十九日夕廿日遠敷中ノ宮地築有之、甚賑ひ申候也

一同七月廿二日川崎町材木屋半兵衛悴廿三才、川口ニ而かわらニ被引死去致候也

一同八月廿五日古川又市様六十一歳年賀祝ニ付、産物方・一山御積方世話人・帳元不残御振舞有之、親父八ツ時夕参り夜九ツ時ニ帰ル也

一同十八日町内山見送りニ致候表、京都見柄之所持致候毛檀津(綴通)一枚、代金三拾兩ニ買請申候也

一同九月九日遠敷中ノ宮正遷宮、十日・十一日以上三日之間氏子中大賑ひニ而参詣有之候也

一同十月廿六日八幡神主へ京都加茂社家玉田兄キ神道講釈御執行有之候、但し十式銅ツ、

一同十一月五日米手形御役所夕御領分中へ御触面之趣左之通

米手形交易之義小向之相對ニ而致取引候義、兼而御法度之趣毎々相触候処兎角不相守、私ニ致交易候哉ニ相聞へ甚以如何之事ニ候、此後右様之者於有之者聊無用捨一々嚴敷可申付候、勿論改掛り之義ハ御用達共へ分而申付有之候間急度相心得、米手形役所へ交易ニ罷出可申旨去ル亥年分而相触置候処、又々近来兎角等閑ニ相心得、小向之相對ニ而致交易候者有之哉ニ相聞へ、毎々相触候処不相守甚以如何之事ニ候、尚又此度懸り之者へ申付置之義も有之候間、末々迄心得違無之様急度相守可申候

但し市場ニ而者年分魚売捌ニ而、京都近国夕莫太之正金銀取入候由、然ル処一向交易ニ出候義無之如何之事ニ候、此後ハ急度為相改可申候間、右触面之趣心得違無之様可致候

右之通被仰出候間町々入念可被相触候、以上

辰十一月五日

町年寄

町々宿老中

右前日御用達一同御役所へ罷出町中見廻交易通拵、町中宿老壹人ツ、呼出し、夫々帳面相渡し申候也

一 (マ)

一同十一月上旬頃ニ御用所御積方様ノ手通中へ式割七年、銀子に七朱利足付ニ而百貫匁斗御頼被成候趣、右者拾貫目ニ付年々米百表宛、十一月平均ニ而元利之処へ濟込候様御仕法也、手通中にて八拾貫匁斗出来致候由ニ付、跡廿貫匁之処手前方ニ被仰付候ニ付、右之通ニ而出銀致候也

一 辰十二月廿六日御上様諸役所へ又々五ヶ年之間御儉約御年限被仰出候

一同廿八日御触有之候義ハ、是迄御沙汰も有之候御家中様へ不礼無之候様之義、以来ハ笠・傘・頭巾にて行違不相成候間、若御家中様之旦那ニ出合候ハ、右笠・傘・頭巾取通行可致旨被仰付候

一同廿九日御触有之候ハ、当月十三日二年号相改メ有之、弘化元年^{コウクハ}と改正御触御座候

一 弘化式乙巳年正月十五日五ツ時、町御奉行様へ町方新御仕法講世話人并ニ町中宿老共御呼出し有之、罷出候処、昨辰年被仰付候御講之義ハ、元来公方様御本丸御炎上ニ付御献金御願被遊候処、御

公儀様ノ御用捨ニ相成候故、改而御道具御献金ニ相成、左候へハ莫太之金子も減少ニ相成候故、御講札高も減し不申候半而ハ難相成候ニ付、段々御重役様へ御掛合被下候得共、下地御六ヶ敷御勝手向之事故、何分下地之通満会迄掛次候様御願被成候御談示也

一同二月二日川尻ニ而小松原之者兄弟瓦積ニ参り、水舟ニ致壱人死去致候由

一同四日魚屋町組屋吉太夫と申者、昨夜行藏院へ稻荷祭りニ行、夫ノ川縁百足屋久二郎前ノ川へはまり死去致候也

一同^(十)□六日油屋長右衛門殿御坊主吟茶殿之大手形紛失致候ニ付、今朝長右衛門殿追込被仰付候

一同三月廿八日宗判相濟東両組中両組かけ出し有之、町御奉行様八幡前小屋ニ而、御者頭様ハ林重宅ニ而、下宿菱伝也、引取七ツ半過ニ相成、夫ノ大世話人一統佐渡や方にて支度致、但し大世話人壱軒ニ白米五升ツ、焼出し致遣ス

一同四月三日昨夜八ツ時今昼七ツ時迄大南風吹申候、廿年も無之大風にて騒敷事ニ御座候

一同五月四日此度町内山立物致度、一同之相談ニ相究り申候へ共、京都へ買物ニ参り呉候者無之候ニ付、見込にて宿老井セ・米伊左衛門并ニ私共^(大阪府)三人参り呉候様組中^(大阪府)被頼候ニ付、右三人五月六日立にて則私共能勢妙見宮へ心願有之候ニ付、丹ば通り京都へ三日目ニ着致候て、夫々調へ引合候て同十六日ニ帰宅致申候

右諸人用壹人前六拾四匁引之内五拾匁、午正月十六日寄合初之節町内^(大阪府)請取申候

一同九月晦日本行寺和尚・常福寺和尚右式ヶ寺共不如法有之候ニ付、今日追院被仰付候

右掛り合之女三丁町永田ちよと申者、十二日徒罪ニ相成申候

一同十一月廿六日今道町茶屋嘉兵衛殿四ツ時ニ私宅へ参り、来月差入之銀子三貫匁斗入用有之候間才覚致呉候様頼ニ付、荒々承知致被帰候処、門口ニ而こけ申^(義力)□ニ中風差起り候て、先奥へ連行医者針立杯を呼ニ遣し大騒動致、追々親類参り介抱致、駕籠にて八ツ時過ニ先方へ連被帰相渡し^(安)案心致申候也

町方一統江

諸職人・日雇稼之者共職業筋働キ出候節遅刻致間敷旨、并ニ定之作料賃銭之外貪ヶ間敷義致間敷段、先年来毎々申付置候処、近来又々猥ニ相成候趣相聞へ候ニ付、此度別紙之趣申付置候事ニ候、

右ハ相雇候者共有之候而も、定之作料賃銭之外遣し申間敷旨申付置候事ニ候処、近来何角と名目付増銀等遣候趣ニも相聞へ甚如何之事ニ候間、以来定之外増銀等遣し間敷候、万一職人共へ馴合増賃等遣し候様之義有之候ハ、詮義之上急度可申付候間心得違無之様可致候、尤職人共貪ヶ間敷義申出候者も有之候ハ、其趣町老共迄申達候様可致候

右之通被仰出候間町々入念可被相触候也

一弘化三丙午年三月廿三日夜西津玉津嶋明神脇四軒出火有之、其砌西津火消と東両組火消と喧嘩有之、少し怪我致候者有之候ニ付町老へ直様願達置候処、四月六日東両組大世話人御呼出し有之、此度西津出火之節怪我人有之候、後者万一西津出火有之候共綱女墓火除ヶ迄出役致、尤源心寺・西徳寺ハ御家中^(並)并取掛り候様被仰出候間、其旨中世話人へも通達致置候也

〔^(貼紙)弘化式巳年十一月二組屋六郎左衛門隱居老先生発起ニて、

当夏以来今之事ニて新ニ仲間蔵社倉困米ヲ拵置度由ニて、世話人も伊・嶋嘉・田村長・吹弥三右衛門同道ニて、町方身柄之者共へ出来致呉候様頼有之候処、大体夫々出来致候処、其内当年之作方も不宜候ニ付高直ニ相成候故、出来之義者来年ニ相成候、御用達衆も夫々取究申度候由ニ付、手前方ニも米式表出可申様申上候

一 弘化三丙午年八月十日川崎町浜ニ而大角力有之候、今日分初ル、大関釵山・荒嶋、関脇ニ小柳と申者も来ル、近来稀成珍敷大角力ニ御座候

一 同九月十四日分於正誓寺嘶物まね并ニ芝居嘶有之、殊之外賑ひ大流行ニ御座候也

一 同十一月十三日暁六ツ時ニ誓願寺・専光寺・西福寺三ヶ寺追院、不如法之義有之候ニ付無縁堂尼御領分払被仰付候、夫々掛り合女徒罪被為仰付候

一 同丁未年四月十日暁七ツ半時分北風ニ而大風雨ニ相成、五ツ時分四ツ時二者大洪水と相成、川縁町・八百屋町・松本町杯へ水つき、ひくき家々ハゆかの上へ上り、先卯年此方之大水と申事也

一 当春分愛宕山神主講中を相頼候義者、御内陣座敷兼帯ニて長屋を建度候間相談致呉候様頼ニ付、右世話人相談之上町々宿老中を頼御講取結度頼候処、三ヶ年半ニ掛切出来致候ニ付、則右を引宛ニ式間二三間半之長屋を建申候、委細之義ハ愛宕山帳面ニ書記置候也

一 同九月廿一日神明上ノ御宮町中寄進御頼被遊御再建有之、今晚正遷宮ニ付世話人一統麻上下ニ而御供致申候也

一 同霜月三日八ツ半時町御奉行塩野様御屋敷ニ而神明宮世話人へ御酒被下置候、是ハ当春御造栄^(嘗)ニ付町中分御手伝申上候様御頼ニ付、年番町を頼酒飯ニて振舞申候、造用銀五百匁余有之、世話人中分取斗候事ニ付御上様分右之御会釈御酒飯被下置候也

本膳 向平 ^{卷蒲鉾 海老} ^(い) ^(マ、) 汁 ^{鳥請} 盃 八寸台 ^{蒲鉾} ^{あわひ} ^{たこ} ^{くわへ} ^{蓮根} ^{水菜} ^{椎茸} ^{かふら} ^飯 ^{大平} ^{きす} ^{ゆり根} ^{平竹} ^{も半} ^{越七} ^{も惣} ^井 ^古 ^米 ^五 ^檜 ^長 ^(朱書) ^{松本} ^檜 ^長

皿鉢鯛しそむし
皿鉢作り身
吸物 ^{こち} ^{赤ミそ}
大平 ^{きす} ^{ゆり根} ^{平竹}
〔右五ツ半時ニ帰ル、直様御門札相濟〕
^(朱書)

嘉永期

一 弘化五戊申年^{三月廿日}從御上様町中へ被為仰付候義ハ、御堀埋り候ニ付御国中へ砂持被仰付、尤当申・酉兩年ニ壱軒ニ壱人宛人足差出し候

様、尤年限之義ハ追而被仰出候由、来ル廿二日曉六ツ時分組合割合にて差出し可申様被仰出候

一弘化五戊申年三月廿三日分廿五日迄愛宕山奥院上葺供養、并二下々相建申候御内神供養有之、誠二賑々敷參詣、三日之間晴天、右二付講中分相談之上台灯燈一对献上致申候、台永田七拾匁、灯燈奈胡九誂三拾匁、都合百目入用、講中割合壹軒二付四匁、出銀致申候、其節諸々寄進色々有之、米屋仲間へも神主分御頼二付紫縮面幕一張献上致申候、此代五百目余掛ル

一同年二月頃質屋町木綿屋半三郎出生本郷村源右衛門出之人、至而す、どきわやく一方之人也、其悴二安二郎と申者有、是も若省なれ共同様之者、右安二郎義同町林屋長右衛門方ニ婚禮有之悦ニ参り候処、折節奈胡惣助も悦ニ参り、親類中ニ御座候一緒ニ酒を祝居候処、奈胡屋惣助方ニ先年分紛失致候脇差も半悴差て居候を惣助見付、夫分帰り候て早速若者ニ、今日安二郎殿差て被居候脇差を一寸御見せ被下候と申遣し候処、小柄を仕替見せられ候所、奈胡惣助方之紛失之脇差ニ相違無之候二付、辻半と掛合之上奈胡惣へ呼二入候由、然ル処其沙汰町中ハ不及申御家中御領分中へ一杯ニ相成、も半か奈胡惣之脇差を盜候と、則其節之流行歌ニ唱候迄申事ニ御座候、夫分色々附出か致、質物預り候て品物を替て請二来ル人ニ渡ス之と申、又六月祭礼ニ御家中米改御奉行様可兎様にて

休息之内、石田治郎兵衛殿之宜敷けいご挾と自分之悪敷挾と仕替候杯と色々様々ニ悪評判致、今ニも御上様分御不審掛り召捕ニも来ル様ニ申位之事ニ候へ共、何分町中ニ一と申二も三も無之位之大金持身代故、御上様之御用も別段ニ承り候事故、御重役様へ終始立入致候間、夫程之悪評判ニ何之御沙汰も無之候へ共、悪事千里と申事にて其沙汰京都・大坂之宿々、敦賀辺迄も、も半ハ盗人致候位之者故金持ニ成と申位之事ニ候、何分御上様之御用ハ格別ニ承り候故無難ニ納り申候

但し本相調へ候へ者奈胡惣も半ニ格別世話ニ相成候事故事濟致候へ共、他人之者ならば逆もも半を牢へでも不入にて済し不申位之事ニ候、町中ハ不及申御領分中御家中一統、も半をにくまぬ者壹人もなし、誠事ニわやき一方之人、併金持大身代ニ相成候てもケ様ニ仁情ニ預り候而ハ不相叶候へ共、何分辻半三郎之運之強キ人也

一同四月六日御触ニ、於江戸表去月十五日分年号嘉永と改元、右之段被仰出候

右之趣被仰付候間町々入念可被相触候

一嘉永元戊申年六月十日町内寄合有之、此度唐物縫幕掛物地七枚ニ而代金三拾四両、大津町内藤利右衛門世話にて買調申候二付、此度新ニ棚山之相談ニ取掛り、則六月末分出入大工金右衛門、脇棟

梁大工孫助二而当年中ニ為致申候、来ル十二月四日山棟上町内中
一統酒飯出申候也

一同六月十三日夜八ツ半時ニ大蔵小路産物御役所と長井孫左衛門殿
門ニテ、上市場山大津町山と大喧嘩有之、両方共怪我人も有之、
誠ニ恐敷大變ニ御座候、則御上様迄相聞へ御糺も有之候へ共、祭
礼之事故御捌キ方六ヶ敷故、大津町西島又兵衛殿を町老衆分挨拶
ニ被入、内濟ニテ事濟致申候也

一嘉永元戊申年当夏以来六月十四日迄少し宛雨降、格別宜敷順氣と
申候而ハ無之候ニ付、昨十三日頃十一月切赤三拾五匁三五分位ニ
候処、則十五日迄無類之上天氣ニ相成、七月十二日迄雨一粒も降
不申、大暑ニテ二三拾年来も無之上順氣ニ立直り、其後折々白雨
も致候而天氣ニ相成候ニ付、八月十一日頃十一月切赤三拾壹匁七
分位迄下落仕候、然ル処八月十二日昼後分少々宛小雨降候処、夕
方分段々降、夜九ツ時分大雨風ニ相成、八ツ時分此上も無之候大
雨ニ而、誠ニ恐敷家内一統起し申候処、今も家を潰し可申哉と思
ひ候位屋根之瓦・杉皮を吹飛し、夜中神仏様を祈可申斗之事ニテ
夜を明し致、翌十三日曉ニ洪水と相成、五ツ過時ニ川縁丁升屋源
兵衛方ニ而床之上三尺斗も上り、下ノ升屋源助方ニ而八平日至而
高キ処なれ共、床分一式寸斗上り申候、八百屋町ニ而八門ニ而五
六尺斗ニも相成、大津町・本町一円水参り、瀬木町へも段々と参

り候処、植田清兵衛門迄水来り申候、手前門迄舟来ル、湯岡橋引
曉ニ落ル、夫分飛川・五十谷・滝谷辺分五六軒も人家流レ来り土
橋へ懸り候故、御橋四ツ時ニ中残し両きわ落申候、板橋ハ其儘流
レ申候、尤北風也、先卯年大洪水分四十年ニ相成候由、右同様
之水と申事ニ御座候、手前方ニ而八庭へ式三寸斗這入、町内正木
市左衛門方ニ而床分三四寸も上り申候也、九ツ時分引汐ニ相成、
七ツ時ニ升屋源兵衛方ニ而門之水も引申候位、本町堀七床分壹尺
余上り申候、手前ニも下を不残片付二階へ上ケ候へ共、先々不難
ニテ引申候て悦申候、誠ニ前代未聞恐敷御事ニ御座候

但し町内向側ハ突抜町分水這入申候

右ニ付手前へ見舞井筒屋清太夫分酒貳升・飯三升斗来ル

同 板屋市兵衛分酒壹升来ル

手前方分見舞遣し候所

一酒貳升 升屋源兵衛 一飯貳升分 井筒屋藤兵衛
香之物付

一 同 嶋屋嘉兵衛 一同 大工三太夫

一名酒三升ツ、御用人様四軒様 右ハ川村平兵衛・堀口清兵衛・
手前分三人相談之上仲間ニ而見

一 錫式把ツ、町御奉行式軒様 舞差上申候也

一米手形御奉行様・御勘定人様ハ御用達一統より御見舞差上申

候也

一御積方様ハ産物方世話人中分差上申候也

右出水ニ付放生会来九月十四日・十五日ニ相成申候

右出水ニ付御上様御破損夥敷大荒地ニ相成候故、諸仲間分御

手伝人足罷出候、右二付町中町々々も追々内願致、則丁内御手伝銀上納米手形銀弍百匁、但し百人手間分、外二人足六拾弍人、明家除キ袋町共家毎二一人宛、都合百六拾弍人二相成申候

一米屋仲間分米手形銀五百目差上申候

一糶屋仲間分弍百目差上申候

一御用達十五人仲間二而八百目、但し四百人手間差上申候、右

割合一人前五拾三匁三分三厘ツ、出銀

但し古川除キ

右二付嘉永弍己酉年五月廿九日町御奉行様にて

酒三斗、鰯十把十五人へ被下置配当致候

一嘉永弍己酉年三月十五日頃土橋下中瀬砂町中分砂持致候而、川崎町浜へ持捨候様、御支配頭より御頼有之候二付、迎も賑ひ持候而ハ中々容易ニ難参候間、右を日雇頭重田へ五貫目ニ渡し切ニ致候事

一同五月朔日土橋御普請成就ニ付御奉行様御渡り初メ被遊候也

一同五月五日町御奉行様御屋敷ニ而御用達七人之者共へ、西島・石

治・細野・齋仁・川清・も久・丹次・米長へ

麻絹御紋付御上下一具ツ、頂戴被致候也、其外御融通方先日京

都にて縮面御羽織被下置候也

一同十五日八幡宮様御上葺ニ付今晚下遷宮御座候也

一同廿日酒井伊織様御逝去ニ付今日分廿二日迄慎被仰出候

一同廿九日於町御奉行所町中宿老并ニ諸仲間御呼出し有之、昨年出水ニ付人足御手伝差上申候御会积ニ御酒料被下置候也

一昨申六月分取掛り候町内大黒山アラタ新ニ棚山ニ相成、当酉六月十日迄

ニ不残普請成就致候、代銀「凡三拾貫匁入用」(朱書)

右ハ昨年大津町山と上市場町山と十三日内練りニ、大蔵小路ニ而大喧嘩有之候二付、山町当五月時分分申合七十四日本練り斗ニ御願申上候処、早速願之通御聞濟ニ相成、十三日引初、八幡宮様迄引下通り町内へ帰り申候、今晚町々ニ而宵山を飾り、町内山ハ格別ニ結講(樽)ニ相成候故、内練無之候者誠ニ残念ニ奉存候

当年分町内山歌嘶子十ヶ年間太鼓はやし御願申上候処、御聞濟ニ相成申候

一嘉永弍己酉年七月十一日御触 支配下一統へ

天保十三寅年十二月廿八日別紙之通申付有之処、此度御家中御仕法御止ニ相成、都而寅年以前之通被仰付候間、左様相心得可

申候

御家中諸色調物以来者成丈ヶ現銀ニ可被相払、併都合対談ニよ
り二氣^(季)ニ被払候共、年を越候義ハ不相成候間、御家中衆へ御談
ニ相成候間左様相心得、諸色致直下ヶ候様弥油断無之候様相心
得可申候

一御家中衆銀子他借堅御差留メニ相成、質物取預り候義者不相成御
談ニ相成候間、左様相心得可申候

万一内々ニ而質物預り又ハ口入等致候者於有之者、吟味之上嚴重
ニ可申付候

右之通被仰出候間町々入念可被相触候

西七月

小浜 町奉行

町年寄

町々宿老中

一同八月十日八幡宮様御上葺槌、十三日正遷宮ニ付町中へ賑ひ御頼
ニ付、町々思ひく引物俄献上奉納、誠ニ賑ひ申候、町内者京都
御所へ八幡山へ御勅使御立被成候処を行例^(列)ニ仕候、尤^(提灯)燈之義ハ
町々申合十三日朝々十五日夜迄立ル

一武田徳右衛門方々大蔵小路木戸俊助方へ、四五年以前ニ家質役印
証文ニ而銀子六貫目貸被遣候処、俊助へ近來利足も難相立候処、

平日至而心案^(安)キ中ニ而、何哉も両方共世話ニ相成候事も有之候故、

俊助ニ者右之訳柄も有之候と申候て一向不埒致、家も不渡銀子も
返済不致候ニ付、不得止事武田方々御上様へ御願ニ相成、町宿老
・親類ハ不申及、是迄色々町年寄衆も御挨拶有之候へ共一向不
用候ニ付、御奉行様御白砂ニ相成、家相渡し申候様被仰付候へ共
不相用候ニ付、一旦入牢被仰付候処病中之願致、今八月廿三日曉
六ツ時俊助義御領分払被仰付候、家内親類衆へ引取、町内宿老・
組親類々今日中ニ武田へ家相渡し可申候様、御評定場ニ而被仰付
候よし「^(後筆)安政六己未年三月廿六日宿坊高成寺々空印寺・心光寺
へ御願ニ付、今日御赦免ニ相成申候」

一嘉永弍己酉年九月七日板橋御普請成就ニ付、今日先例之通御老様

御壱人御渡り初メ有之由

一大飯郡成生村人殺壱人

一御茶坊主御上様へ盗ニ這入候者壱人

一西津藏切盗人壱人

三人酉九月晦日暁死罪ニ相成、外ニ五十谷村盗人た、き払ニ相成
申候

御上様々盗出し質物預り申候者、質屋堀口・石次・林田・吉岡屋
々四軒同日閉門被仰付候、但し三日之間

一同十月十四日正誓寺ニ而嘶物まね有之候、追願共十日之間

一同十一月朔日米手形御役所へ御用達壺組分人宛御呼出し有之、御談之扣

兼而承知之通近年追々役所御手薄ニ相成、歳々之御用達共ニも心配を掛、自分共ニも是而已致心痛、御役人衆へ者猶更之義色々致相談仕法相立候得共、一兩年ニ髓ニ相成候様ニ者難參、元埋立之義種々骨折罷有候事ニ候、然ル処右者全く空物多キ故之義ニ候へ者、右取立候へハ自然と元髓ニ相成筋と存候、御用達ニケ月限并ニ入替是迄取斗候儀ニ而、且入替之義ハ御手宛ニも相成難ニ、當時も以御為を御手宛ニも可致旨一統申合相達骨折候処、猶自分共も厚く存候事ニ候、右之趣無抛差支候訳も有之候ニ付、以後相止メ申候間猶又御為筋骨折出精有之度候、右式ケ月限之義一時ニ相止メ候而ハ不融通ニも可有之候間、古格へ復し二季ニケ月交易宛拜借筋ニ取斗候義指免可申候、右相止候義心痛之至り、御役人衆ニも御心痛被成候得共、無抛右之通御差図ニ相成候趣ニ候間、御上御時体深く奉恐察納得可致、併右様相成候而者御為ニ不相成候義も候へハ無遠慮可申出、兼々御為ニ相成候様骨折候より外無之と存候へ者、乍難申出義無伏臆及示談候間、少しも無隔意可申出候

西十月

米手形奉行

一同霜月廿六日米錢御役所御用達御談示扣

町方一統小向不正之交易等致候者有之趣毎々御触も有之、文政九之度ニ役問屋へも於町奉行所ニ交易改掛り被申付、其節一統へも分而申談置其後も御触も有之処、不相替不正之交易も有之趣相聞候、此度又候御触も有之、尤町奉行所ニ而町年寄并ニ大問屋へも被申示候筋も有之候事ニ候間、尚又申合不正之義及見聞候者早速可申出候、且又申迄も無之候へ共、御用達ニ而も万一心得違不正之筋有之候而ハ甚太切之義、且者世上風評承り候義も有之候へ者心得違無之様可致、無左之而者他之者ハ尚更不相守様ニ相成候と存候間、家内・家来等迄聊も紛敷義無之、心得違無之様潔白ニ可申付候、町方一統之交易不正無之様相成候義ハ全く其方共気込次第と存候間、尚又出精可相勤此段申談候外ニ取次交易之義ハ月番之外不相成様被仰付候

西十一月廿六日

米手形奉行

一当春以来今川崎町柴屋嘉右衛門方へ加州之浪人ボンベント申大筒拵候者居候而、則御上様へ申上候而右大筒成就仕、霜月四日柴屋分行例^(列)ニ而西津浜へ行、翌日御役人様方御上覽被遊候ニ付、御評義之上柴屋嘉右衛門十式表式人扶持ニ、御用所支配御足輕ニ御取立被遊候、加州之者へ御褒美被遣候而直様帰国被致候由

其後亥年頃ニ柴屋嘉右衛門寄合組ニ御取立ニ相成申候

一嘉永弍己酉年十一月十九日・廿日来ル正月春岳院様百回忌之処御

取越、来ル十九日・廿日迄於心光寺別事御法事有之、仍之右兩日
鳴物・音曲・殺生等停止二候、諸事物静、火之元別而可被入念候
様被仰出候

一 同年当夏以来順氣も無申分、^(抑)仰三月分四月頃越後米壹ト三升四五
合、庄内米壹ト四升五合位迄有之、順氣も土用前迄入梅にて少し
雨天続キ二有之候へ共、差而田畑二障り候訳も無之候得共、五月
下旬頃十一月切赤商内三拾四匁位二候、然ル所土用も順通二宜敷
故、十一月切も六月差入頃二三拾壹匁六分迄引下ケ申候、其後順
氣ハ格別宜敷八月放生会前迄無此上も天氣にて、上方筋も加州米
七拾目式三分位迄引下ケ申候、然ル処秋日和二相成随分宜敷秋入
二御座候得共、諸国一統作違之様子にて追々高直二相成、九月差
入当所越後米一ト式升分壹ト一升五六合二相成申候、上方も加賀
米七拾五匁分八拾目、八拾五匁、九拾目日々飛上り申候て、十月
差入二秋田米壹ト一升五合、中旬頃壹ト一升分段々高直二相成申
候、十一月之差入二者加賀米百目新筑前米百五六匁迄相場、当所
も当年八間屋方之揚置米も無数にて田辺廻米一方二候処、当年ハ
別段余分も御廻し之御約定之処、追々納りも無数故哉年内二四五
千表位廻り高之由、扱壹番直段壹ト式升壹合位、追々跡上りにて
式番一ト一升七合分壹ト一升式合、壹ト〇八合、壹斗大仕切にて
者九升六合迄御座候由、何分外方ニ売米無之様子ニ付追々仲共へ
申込も御座候へ共、割合ニ相成拾表注文致候へハ三表か四表か当

り候事にて、十一月中頃至り候へハ、五表之米も買申候事難相成
候二付、手前方ニ者少し飯料貯、其上濡米を入札にて買候間夫を
商内致申候、此頃古米類ハ九升分八升五合、丹ば米壹斗位、小豆
高直八升分七升位迄、跡下落八升七合位まで、大麦壹ト七升四合、
小麦壹ト一升、大豆一ト三升五合、粕直段十二月頃壹升式合五匁、
右之通引立候得共世間一統穩ニ御座候て、誰か上置粥杯を喰候者
無御座候、誠事ニ恐敷事二候へ共諸国一円穩也、町米書上ケ追々
高直、極月二者壹斗分九升九合迄、御前相場も四拾壹匁六分仕舞
二相成申候、扱産物方商内之義ハ十月十七日二三拾七匁九分にて
立用二相成、跡商内止メニ御座候

一 同十一月十二日御上様分町中へ御談有之候義ハ、追々米相場も高
直二相成、其上米^(底)払庭ニ付買入も難相成候趣承之何共氣之毒之義
二候間、難買入者ハ町々宿老中へ可申出候、問屋方揚置米直段秋
田米九升六合、津輕米九升四合、庄内米九升三合、越後米九升式
合、当分入用之者者三五表ツ、売捌キ候間仲共迄可申出候、又々
三五表ツ、難買入者ハ町之宿老中分相願候ハ、当時御前相場を
以御上様分御扱被下候事ニ相成、右ニ而何程上り候哉と存候も先
安心仕穩ニ納り申候也

一 嘉永三庚戌年四月

於日光山^(徳川家光)大猷院様式百年御回忌二付、江戸表御屋鋪二而一夜別事

之御法事被仰付候間、来ル十六日夕廿日迄御停止被仰出候間、鳴物・音曲・殺生等停止ニ候、火之元別而被入念候

一 嘉永三庚戌年五月三日御産物方帳元木崎長兵衛・阿わ屋孫兵衛両人共、如何義有之候ニ付御暇被下置候也

一同八月十四日夜五ツ時ニ、本町ニ住宅被成候御家中御転役之御医者近藤元哲様と申御方、子供衆と下女を連て放生会之夜宮へ御参詣被遊候処、鶉羽小路山田屋庄助之門ニ而、西津辺之舟大工倅と鍛冶屋倅悪党者四人連ニ而西方へ帰り、右元哲様ニ行当り御紋付之灯燈(提灯)を投捨、又々元哲様を投、其上打擲致逃去候者三人有、壹人ハ元哲様ニトラヘラレ名前を被聞糺候、然ル処右元哲様ニ御親類追々寄合被成候て、右西津之者頭壹人御上様へ御願被遊候て、御貫ニ願書差被出候へ共御聞濟無之、則御上様分御召捕ニ相成候処、壹人被召捕、又式人空印寺へ御願申上隠れ居候へ共被召捕、頭壹人ハ逃去候故追々御詮義も御座候へ共一向分り不申候、右三人ハ入牢致候、此上ハ御上様御戴許(裁)如何可参候哉

右者御領分弘ニ相成候者も有之、又徒罪ニ相成候者も有之候

近藤様ハ御隠居被為蒙仰候、御子息様ニ御扶持方減し家督被為仰付候

一 戊九月二日暮早々北風ニ而雨降続キ、翌三日朝夕丑寅風大雨荒吹ニ而大洪水ニ相成、正九ツ時川縁町升屋源兵衛・井藤方ニ而床分壹尺式三寸も上り、升屋源助方ニ者庭へ入、床迄六七寸ニ而上り不申候、板橋・土橋ハ落不申候、竹原口橋・湯岡橋落申候、雨風ハ三日七ツ時ニ風返し西風ニ相成候へ共、矢張雨付申三日夜中降続キ候而恐敷御事ニ御座候、水ハ昼八ツ過分段々引汐ニ相成申候、併一昨日之水と者式尺斗無少御座候へ共、御家中之痛ハ余程之事ニ御座候、茶又・尾野屋両家之客舟百四五拾石積舟ハ浜へ打上ケ申候也、西三丁町へ不残水入申候由、高成寺橋落ル、本町・大津町へ水付申、町内ハ当家門口迄来ル

右ニ付水見舞遣し申候、左之通

一 焼出し飯 升屋源兵衛・尾野屋重助・井筒屋藤兵衛ノ三軒へ遣

候

一 酒壹升宛 橋本良藏様・湊吉五郎様・西島安兵衛様・西脇文右

衛門様・木戸仁左衛門様・下陣高田克藏様・欠脇丁

阿わ屋孫兵衛殿ノ七軒へ遣ス

外ニ御用人・御町奉行、御積方様ハ融通方一統分申合差上申候也
(各酒壹斗ツ、
各酒五升ツ、竹わ五本ツ、)

一同十月ニ敦賀分秤改参り町内宿老分申参り候ニ付、先例之通皿秤壹挺出し申候処、少々直し此賃八拾四文差出し申候也

一 嘉永三庚戌年米直段書

近來永々米価高直之處、最早當年ハ豊作を奉祈候処、矢張当戌春
 相場上米壹斗分三四月頃九升五合位之相場ニ有之、五月頃二者一
 卜五合分秋田米壹卜一升五合ニ相成候、土用も大体ニ参り候へ共、
 七八月頃二九升四合、八月末秋田上米九升位之處、去ル九月二日
 大洪水ニ付九月中頃分又々追々高直ニ相成、秋田米八升分七升式
 三合位迄、九月末分十月差入二者七升分六升四五合之氣配ニ相成
 申候、右ニ付町年寄衆町御奉行様へ御頼、思召ニて町米式三千表
 斗御買入被遊候、扱又出水も格別当り不申候故哉、又々氣配も緩
 ミ段々下落致、七升分七升六七合位ニも相成申候、然ル処難涉人
 も有之候ニ付、町方ニ而世話人三拾人斗被仰付、町役所ニ而壹匁
 ニ付白米八合ニ御売扱被遊候事ニ相成候、田辺米初直段七升八合
 ニ相成候故、十月五日之初相場書上ケ、新米八升御前相場五拾壹
 匁式分、酒一升ニ付式匁壹分五厘ニ相立申候、右十一月・十二月
 二者追々下落ニて、田辺米八升五合位迄押下ケ申候、附米押詰ニ
 四拾八匁六分迄御座候、極難涉人江御売扱ニ相成候米者白米ニ致
 候義ハ、米屋仲間へ糖(糖)たわら被下壹個五分八厘ツ、ニワキ可申様
 被仰付候、戌年中荒増書記置申候

一 嘉永四辛亥年正月元日薬師小路出火ニ付、其節町役所も焼失致候
 故、町内於正誓寺二三月廿八日町中一統之宗判有之候也

一同四月朔日ニ東水組道具揃と申立、今日かけ出し致申候也

一同四月五日元日出火ニ付八幡市祭り、今日御面掛式有之候也

一同四月七日京都粟田様分上瀬様へ御代拝之扣

三方郡上瀬大明神様一昨酉年御再建御普請有之成就致候、右ハ先
 代浅野彈正様之御時代御寄附也、右ニ付京都粟田青蓮院様御宮分
 御遷宮之御御簾壹連、本滅金之金物、大和錦之縁二重落しふさ一
 対附代凡金拾兩位之御寄附之由、然ル処辛亥四月七日ニ粟田様御
 代拝として、一家老坊官大谷治部卿様三位之御位ニ而御手人十三
 人、下座人共上下三拾人余上瀬神主へ御着有之て、翌九日御潔齋ケツサイ
 御祈禱有之、十日末社廻り御遊覧被遊、十一日敦賀之方へ御出立
 有之候由

一 此度上瀬大明神様へ御献物葛玉壹連、是御簾之内へ掛ル品物
 也、銀壹枚

一 当殿様へ御太刀壹振り、御馬代銀壹枚

一 御三家老様へ短冊掛ニ短冊式枚宛、ふしのこ壹箱、扇子一對
 宛被下候由

一 御老様へ右同断ふしのこなり

一 御用人様へ右同断、御郡奉行・御代官様へも右同断

其外神主・庄屋・下女給仕人迄夫々御土産被下置候由

一 殿様へ時(候カ)僕為御見舞と匂袋式ツ御献上被遊候由

右二付粟田様御殿之此度之御物入夥敷事ニ御座候由也

当所御上様

一 銀式枚御返礼之由

一 御三家老様・御老様迄葛式貫五百匁入三箱

一 御用人様式貫五百匁入葛式箱

一 御郡奉行・御代官様からうそく壺箱

右之通大藪村助左衛門咄しニ承り申候間書留申候也

一 亥四月廿一日遠敷上・下宮様ニ而下中郡中今五穀成就之能有之候

一 同廿八日東組・中両組・西組・四組当春出火ニ道具損し候ニ付、

今日迄ニ直し修覆致、道具揃かけ出し致申候也

一 同六月十四日日本練上小路当春出火ニ付、三ヶ年之間大太鼓休年願

致候ニ付、ねり子先立無之誠事ニ土拍子ニ付、町年寄之取斗ニ而

竹原大太鼓借入、上小路若者俄ニ御雇ニ被成、例年之通無滞祭礼

相済申候也

一 昨戌年今亥正月追々米価高直ニ相成、上米七升式三合今七升二相

成、御蔵出米五拾五匁五分迄有之候処、大坂表も壺石代百四拾式

三匁之処、追々麦作宜敷風聞ニ而、二月下旬頃ニ大坂百拾五匁位

迄下落ニ付、当所も無何と人氣引緩ミ、上米七升五合今七升七八

合、出米五拾式匁位迄下落仕候、然ル処三月十日頃伏見今大坂写

し正米百八匁七分迄、其後追々引直り三月廿日頃百廿式三匁ニ相

成、当所も三月廿三四日頃越後米入舟有之、七升五合ニ出来致候

也、扱又々五月中頃大坂百三十一匁位、当所も十一月切赤熊川米

五月四日今初り四拾三匁四分赤初商内、夫今追々順氣宜敷下落致、

七月ニ至り加賀米八升今八升五七合、秋田米九升五合今壺斗、大

坂表も百拾五六匁之処六月土用厄日々々不残不難、七月十三日頃

今八月十五日迄庚申・甲子式百十日今廿日迄も誠ニ無申分無類之

上天氣ニ付、暑も強く其間夕五七日斗少し南風も吹候得共、元来

上出来ニ候故却而田畑之為ニ宜敷申唱へ候哉ニ而、八月十一日赤

三拾七匁式分、大坂かり米八拾八匁位迄申来り候、伏見十一月切

新筑前米七拾六匁五分申来り候、夫今秋入も不難ニ而誠ニ世上一

統穩ニ相成候、然ル処当夏以来今西津松見助太夫・新町長井卯之

助両人強氣ニ而、十一月切赤并ニ熊川立相場今買掛り追々米嵩ニ

相成、八月ニ至り追々右順氣故下りを押、赤斗四五万表も被買候

由、右二付町米入舟も投ケ候而ハ末物之氣配ニ拘り候故、夥敷買

調へ候て追々入銀も被差入候へ共、何分諸方相場今者格外上さや

不正之商内ニ候故、御領分中ハ勿論他所他国迄も手強く売候を、

三拾七匁式分ニ而商内を居へ、何程成共買可申と申候ニ付、是迄

ハ入銀も出来致候へ共、最早松見之入銀不安心ニ存候間商内方も

色々心配致、迎も此上取組候而も此末六ヶ敷候様、商内方并ニ産

物方世話人共出合候而色々相談も有之候処、又々売方々者諸方追

々下落致候故、当所斗押へ相場ニ相成候而ハ難相濟候間、何程成

共売可申旨申立誠ニ不隱事故、不得止事十月十一日ニ三拾七匁

分を中直と定メ、上エ下夕式勿違、以来何程之高下御座候共右ニ

而仕舞可申事ニ納り申候、然ル処追々明り米・丹ば米も参り、壺

ト三升四合々壺ト四升ニも相成模様ニ付、十一月廿四日頃之御蔵

現米三拾壺勿五分商内有之候故、弥々十一月切赤も三拾五匁式分

之差引ニ相成候を、又々松見無体を申出し三拾七匁式分位ニ而直

貫致呉度申候へ共、最早向も見へ候故、売方一統承知致候事も無

之候故、無抛右約束之通三拾五匁式分ニ相濟申候、往古々々様之

無法之買、損被致候事ハ承り不申、諸人之笑者と相成申候也

一 松見助太夫損高凡式百貫目と云、正米損と末物損と西辺料理

屋遣し候合テ

一 永井卯之助損高凡四拾貫目余之由

右珍敷事ニ極月廿日ニ者現米三拾目迄下落致申候也

助太夫義夏秋以来々御役人様御出入、家中様々色々御異見も有之

候へ共聞入不申候由也

一 嘉永五壬子年正月廿九日御免許御用達へ町老衆々殿様溜詰格被為

仰蒙候御祝義被下置候旨、尚日限之義ハ追而可被仰付趣被仰出候

一同閏二月五日町中見柄^(身)之者町奉行所へ御呼出し有之、見込調達御

談示被遊候由

但し五ヶ年済込調達也

一同三月十三日夕十四日永三小路市塔様御供養有之候也

一同廿三日夕廿五日迄竹原天満宮様九百五拾回之万灯有之候而賑ひ

申候也

一同五月三日夕晴天十日之間、湯岡芝原ニ而弥太丸と申曲馬興行有

之、大流行ニ御座候也

一同五日夕西舞台ニ而子供芝居興行有之候へ共、右曲馬ニ而押レ甚

不景氣ニ御座候

一同六月十三日祭礼、山内練鬮引致今在家町ニ而揃西廻り致、夫よ

り東へ廻り申候也

一同七月七日七ツ半時夕大白雨大雷鳴ニ而諸々へ落申候、三ツ松村

へ落式軒出火有之候、同日同時ニ熊野坂へ落志積村之者式人、矢

代村之者壺人、都合三人町方夕帰り掛ケニ、右坂峠ニ休ミ居候処

之辻堂地藏堂へ右三人かけ込候処、女式人ハ口ニ居、男壺人ハ奥

ニ居候処、右堂の前へ落子女壺人之着笠をとばし、又女壺人之足

をかき付ケ、奥之男方へ行屋根を拔上り候由にて、又途中二居候者段々上り彼地藏堂へ行見候処、男ハ即死、両手共黒く相成、足もかき付られ、女式人ハ氣を取失ひ居候処へ、追々村方かけ付女式人ハ助り申候、近来稀成雷ニ御座候、西津火除ケ松ニも落申候、西方ニも諸々へ落申候よし

一同七月廿二日昨夜八ツ時分丑寅風ニ而雨降、今朝川筋出水ニ相成申候、一昨戌年分ハ少々無少事ニ御座候へ共、五十谷橋・湯岡橋・東市場橋・遠敷橋・釘拔橋・高塚橋・丸山大川橋不残落ル

京都三条・五条橋落ル、淀大橋も落ル

〔但し京都ニ而ハ一昨年分三尺斗増の方死亡人三五拾人も有

之候よし

一先日来三方郡早瀬浦へ御公儀様日之丸御定米積候舟入船有之候ニ付、則七月廿九日二小浜へ入津有之、中荷八道ニ而難舟致あか入ニ相成候故、北方分小廻りニ上荷積参り、親舟大破損大あか入ニ而御米産物方蔵へ、翌晦日ニ水揚ケ有之候

〔右ニ付火消大世話人御呼出し有之、此度御公儀様御廻米御役所

へ上り候故、出火之節ハ右御米蔵大切ニ相守候様諸組へ通達致候、隣町自身番有之候

右ニ付丹後組浜へ御足輕御飛脚ニ被遣候て、則八月三日組浜御

役人上下三人御出役有之、宿御産物役所

鍵屋仁左衛門
右二付亭主役
井筒屋清右衛門

吹田伝右衛門

大問屋三人 木崎吉左衛門

米屋長兵衛

給仕人

川村喜太郎

井筒屋長次郎

同八月七日五ツ時町役所へ米屋仲間年寄兩人御呼出し二付、米屋五兵衛・手前兩人同道罷出候処、御公儀様御廻米濡米大沢手百七拾九表と、皆濡米千式百七拾壹表と有之候間、右を来ル九日迄ニ望人有之候ハ、入札致候様、年番町へも呼出し、并ニ御領分中ハ不及申、隣国近辺へも夫々入札之御触出しも有之候間、尤素人も望候ハ、中買米屋仲間へ相頼、相談之上差加へ候様御談し、尤正銀ニ而入札可致、代銀之義ハ落札ニ相成候ハ、直様差出し上納可致旨相心得可申様被仰付候、右ニ付直様年寄・組頭中呼二遣し通達致申候、然ル処組頭中と西津米屋中と申合入札致候処、夫ハ差支候間三五人程ツ、申合、壹番・貳番・三番・四番と何段も有之候様之入札ニ致候趣、内々大問屋衆分被申聞候間、夫分於正誓寺を借大寄合致、一統申合入札を程克拵右役所へ持参致候処

大沢手三百四拾五表、但し壹表二付十式匁分五厘替

〔是ハ少したわらぬれ中不通分〕

内百六拾六表ハ大問屋・町老・亭主役合候

て御役人造用当ニ相成候て入札へ入、右

役掛りへ取られ候也

皆濡米千式百七拾壹表、但し壹表二付三匁七分五厘替

右ハ是より直段下直ニ候へ共、落札ニ相成候と其本人を呼出し

再増被仰付、少々増致候ハ、又再々増被仰付候故、右之直段ニ

相成申候、是定法之由ニ候間以来余程下直ニ入置候事也

右諸仲間へ夫々割合致配当致候、代銀米数請取次第交易致、金ニ

而掛屋封ニ致上納致候也

御役人之名前

増田作右衛門様

御手附石川貞三殿

〔此人大將ニ而被參候也〕

右大濡米米屋仲間壹軒へ五表ツ、配当致、其儘舟手へ売申候者

ハ、拾匁七分六十一式匁迄商内有之候也、沢手米ハ壹表ツ、

配当致廿七八匁位ニ相成、町方一統ハ余程賑ひ申候へ共、御上

様ハ余程之御雜用・御物入ニ御座候よし也

一八幡宮様舞台当春取掛り御普請致候処、則当九月十五日迄ニ成

就致諸入用高

拾五貫式百四拾目五分七厘入高 世話人西島又兵衛

内銀五枚讚州丸亀京極様御寄附有之

引残り拾五貫式拾壹匁分七厘入用

右ハ宮世話人ハ壹貫匁ツ、取替、町中ハ十五ケ年賦ニ集、宮

世話人へ無利息返済頼也

一嘉永五壬子年八月十五日放生会初舞台、猿楽座能有之候也

但し当年衣将束も替り候也

一同十七日赤誠社中ハ舞台開キ能奉納被致候也〔是ハ十六日積り

二候へ共、大荒ニ付十七日ニ相成申候〕

一同十月十一日ハ於正誓寺舞台ニ照葉狂言興行有之候て、同廿六日

今日切之処、今晚八ツ時ニ右楽屋へ火を附ケ候而付垣燃上り申候

〔右ハ見物人不残出叩消申候、翌二夜斗近所之者正誓寺ニて立

番致申候也

一同十二月十五日多田寺後住京都因幡葉師柳之坊請待致入院有之候

一嘉永六癸丑年三月十日小浜町大出、暮六ツ過今在家町平岡おせ

んハ火元ニ而、大南風ニ而古今稀成大日本ニも無之候大火、町中

ハ不及申寺方高成寺、青井村笠屋迄不残焼失致申候、家ハ覚語致

候へ共此度ハ蔵落し申候而皆々誠ニ難洪仕候

一御家中四つ谷十三軒 一町方式千四百十一軒

内千三百一軒かしや

一土蔵九百拾ヶ所 一納屋七十式軒

一能舞台一ヶ所赤木持 一寺三十七ヶ所

外ニ寺建物廿一ヶ所

一下陣町役所・米手形役所・制札場・牢屋敷・社倉蔵、蔵小堂青

井村笠屋、下山寄小屋、ひ二ん長屋之類合廿四ヶ所

右之通江戸表へ御達しニ相成候趣書付之写

残り所川崎町廿四軒、七軒屋片かわ・欠脇町・八幡宮様神主居宅、
常光寺・瑞雲院・知足軒・金毘羅様・天神様仮御殿残ル

一同四月六日從御上様分御触書

此度火災之義早速江戸表へ被仰上候処殊の外御驚被為遊、一統之者嘸々可致困窮御難義至極ニ被思召、当夏者早々御入国可被遊候へ共夫迄之処御案思被遊候ニ付、直様御膝下兩人へ被仰付、爰元様子見請候而申上候様被仰出、即日出立被罷越候趣ニ候、不慮之大変ニ付深く御痛心被遊候段何共恐入難有御事ニ付、一体近年毎々風水之変も有之候上、此度之火災ハ昔分承り不及程之大変ニ而、近年次第二人情も薄く相成上下一統奢致増長候故、古風ニ立戻り候様ニとの神明之戒ニも可有之哉ニ存候程之義ニ而可恐事ニ候、今日場ニ至り候而ハ家居・衣類も無之、食事迄も無之場ニ落入候事ニ候へ共、榮耀^耀安楽等之事ニ無之、何成共致雨露ニ不当ひたなくひだるくなく候へ者事足り候義と心得、細々ニも銘々之職業ニ取附候手段分外無之候へ者、是迄之事ハ打捨只正直正路之心ニ立戻り、いかにもして生れ故郷を離れず、先祖代々骨折置候家銘を取続キ候様ニと工夫骨折可申候、御上ニも段々御苦勞ニ被思召被下候義故、世間を見合さず人ニもたれず、昼夜骨折候様有之度、

末々迄心得違無之様克々可申付候

小浜町奉行

一丑四月十二日竹原天神祭り正月分御停止ニて延引、其後町方大火ニ而又々延引ニ相成候分、今日御神事能有之候也

一丑四月十七日町御奉行様御屋敷へ御用達一統御呼出し有之、此度

大火ニ付蔵余程落申、此末入舟有之候而も入場も無之次第故、急々浜地所持之者蔵相建候様、并ニかしやも早々相建可申様被仰付候

一敦賀表町中申合せ、此度小浜大火ニ付困窮致候趣故、何成共施遣度申合ニ付、そうり・わらんじ・付木・むしろ・繩・茶碗・古枕・古膳・古下駄・古桶・梅干・糠・ミそ・醬油・米・大豆・古箱・古棚、其外色々取集、大舟何艘ニ茂積送り来ル分下馬前へ揚ケ候を、町宿老・人夫罷出右品物を割合ニ而鬪引ニ相成、夫々町々へ持帰り

右之品町々ニ而家数割合又ハ壺品・式品ニ而難割品物ハ入札ニ致、右之代銭家数へ割可申候事

一四月廿日町中宿老中御呼出し、此度之大火ニ付御法も有之候へ共、融通方御用達共へ杉六寸角拾本ツ、被下置候、其余家持之分へ米

壹表ツ、借家かり之向へ米式卜五升ツ、被下置候、右二付難洪人へ差出し候粥当月中二而御引払二相成候間、極々難洪之向ハ得与宿老中ニて吟味致、早々申出候様被仰出候

一 (マ、)

一 四月廿七日御触書左之通

江戸表西御丸御炎上ニ付諸大名様方御献金、壹万石ニ付金五百両宛之割合を以被仰付候ニ付、御領分中調達可申候処、此度焼失致候者者差除キ調達ニ不及候趣、尤欠脇町・川崎丁ハ残り候へ共、是又調達ニ不及候趣被仰出候

一同廿八日町中類焼之者宿老・組頭兩人付添、家主へ御米手形五拾匁ツ、無利足七ケ年賦ニ御貸被下置候、右ニ付町内ハ居宅共かしや四軒分式百目拝借致

今道丁ハ壹軒分 五拾匁同

塩浜小路ハ壹軒分 五拾匁同

一同五月十一日八幡宮様初卯之御神事有之候

一同六月朔日二鳥井米屋長兵衛殿朝何方へ被出候哉相分り不申候故、色々詮義被致候処高成寺浦へ身を投ケ死去被致、誠大変之事ニ候

〔朱書〕右ハ当春大火ニ付格別ニ大損有之、心配被致候趣之処へ狐狸

ニたぶらかされ候事と皆々申候也

誠ニ氣之毒ニ存候事也

一同六月七日竹原祭り先例之通朝御輿洗有之、夕方八幡宮様へ御旅有之猪々送り来ル

同十四日山ねり子無之候ニ付町中宿老麻上下ニ而竹原へ送り申候也

一 丑八月十七日当春ハ西組まとひ不残焼失致候ニ付、御上様へ御願被申候処、御不易之まとひ四本有之候ニ付式本西組へ被下、壹本中組へ被下、壹本東両組へ被下置候也

一 三月廿八日宗判大火ニ付延引ニ相成候処、八月廿八日町御奉行和多様御屋敷ニ而町中宗判有之候也

一 九月十六日神明宮祭礼、当年ハ格別之年柄并二世話人へ預り居候諸道具焼申候ニ付、夫々調候ニ付物入も有之候ニ付、御役人丈ケ酒肴・赤飯差出し候、其余参詣人ハ赤飯斗出し申候、右ニ付而ハ掛銭も集メ不申候也

一同廿三日・廿四日八幡宮放生会之神事・角力・能先例之通有之候、

御停止故延引二而

一同廿五日遠敷上・下宮祭り、角力・能有之候、右同断

一当春出火後差掛り職業手宛無之可令当惑義と存、諸株物之内升座

・魚問屋・問屋・鞍屋・酒屋・為替屋・七軒屋・白土座・中買・

手廻、都合十株を除キ、其余之株物致類焼候者斗、追而及沙汰候

迄ハ勝手ニ可致旨相触置候事ニ候、全体商内筋二付株并二仲間等

立置候而者銘々相応之職業自由ニ難相持、自然商内筋手狭ニ相成

一統之為方不宜、且是迄諸品直下之義追々申付候事ニ候へ共、兎

角直段引下ケ候様ニも無之候、右者全く株物等之差障りも可有之

哉二付、此度右十株之外諸株物相潰シ、諸職勝手ニ相働キ候様申

付候間一統手広く相持、諸品下直ニ而捌方都合克様相心掛出精可

相持候、右二付是迄運上并二冥加等立来り候分ハ已来不及其義ニ

候

右之通一統得与相心得出精相持候様可致候

但し是迄御作事屋へ御役相勤候大工・木引・檜皮之類、新規ニ

相持度者ハ相願御役相勤可申候

其余為冥加品物并二手間等差出候分ハ以来不及其義候

一同十月五日米手形御役所御普請中差支有之候二付、暫之処御用達

之者ニ而致交易候間、左様相心得可申候

一同十日從御上殿様之思召ニ而類焼之者へ米千表被下置候、右割合
壹軒二付壹卜六升ツ、頂戴致候

右持賃十八文ツ、出錢致候也

一同廿二日朝大藪盜賊藏切死罪、西津之者、御上様之焰硝を盜候者

死罪之上芝原ニ而獄門

一同十二月二日当春大火之節空印寺様御類焼二付、殿様御位牌田良

庄長英寺へ御預ケニ相成、空印寺様方丈御同住被成候処、今日空

印寺様御普請御成就二付、四ツ時二右御長持へ入三荷行烈^(列)二而、

空印寺方丈并二長英寺和尚・御用人駒林様御供先払、殿様之御通

行之通空印寺様へ御引移り被為遊候也

一同十日米手形御役所御普請成就二付、御棟上ニ而今日御用達中七

ツ時分御振舞御酒被下置候間、一統分酒式樽・鯛十れん献上致、

右二付丑十二月十五日分御役所交易初ル、御用人様御出役、今日

当番斗也

安政期

一嘉永七甲寅年正月十六日土田安左衛門様御子息様小納戸役勤二而、

御城内御殿ニ而切腹自害被成候、但し十六日朝六ツ時之事也、右
八何之訳合ニ候哉一向相分り不申候也

一 嘉永七甲寅年三月廿三日夕廿五日迄愛宕山御本社御上葺ニ付御供
養有之候、誠ニ賑ひ申候也

一 同四月十五日西津弁財天様御上葺ニ付供養有之、殊之外賑ひ申候
也

一 同五月廿二日安田嘉右衛門殿大筒小浜御台場ニ而初て有之候処、
余程之鳴音ニ御座候也

一 同六月十三日八ツ時小地震ゆる、同十四日夜七ツ時ニ大地震ゆる、
不残目を明ケ瀬戸加戸へ逃去申候、誠ニ恐敷事ニ御座候、夫夕夜
明ケ迄ニ小地震十斗ゆり、皆々夜通し致申候、十五日暁六ツ時過
ニ又々大地震ゆり、五ツ時迄ニ五ツ斗もゆり申候

右ニ付諸国大地震大變有之次第書、諸国珍事之処ニ委敷書記申候
也

同十六日小地震五ツ六ツゆる、十七八日迄も少しツ、ゆり、廿一
日夜五ツ時ニ又々中地震ゆり、七月九日夕七月十日頃ニも小地震
ゆり

七月廿五日夜八ツ時ニ小地震ゆる

一 九月朔日小浜裏町事御願申上候而北本町と改名致候

一 十一月四日五ツ時ニ大地震ゆり、夫夕昼中ニ四ツ五ツもゆり、今
晩もゆり申候、又々同五日夕七ツ半時ニ大地震ゆり申候、当夏同
様之地震ニ而皆々瀬戸門戸へ逃去申候、蔵杯少々ツ、痛申候、又
々今晚も一時々々ゆり申候て、誠ニ恐敷次第ニ御座候、其後毎
々式ツ三ツツ、ゆり申候也

右ニ付町中大キニ騒キ四社様へ参詣致候也

右ニ付諸国大地震大變有之次第書、諸国珍事之処へ委敷書記置候

一 同十一月十六日夜八ツ時夕大西風吹、誠ニ古今珍敷稀成大風ニ而、
今も家を潰シ可申候哉と家内一統起夜通し心配致居候処、夜も明
ケ候ハ、少々風も静ニ相成申候、右ニ付仮小屋潰レ候事夥敷有之
候、本建之分ニ鳥井町ニ壱軒、浜浦町ニ壱軒、清水町ニ壱軒潰レ
申候、其外屋根をまくり板囲を潰シ、町・御家中之痛不輕大變之
御事ニ候也、然ル処翌十七日朝夕誰云となく海之汐引候へハ津波
ニ相成候と風聞致候処へ、大坂表之風説も有之候故、扱又町年寄
衆も昨夜大荒ニ海模様も替り汐之差引遠見を安置候故、段々汐
かれ候ハ、津波と心得逃去候様ニ御触も有之候ニ付、町中一統諸
道具・着類・蒲団杯を負在々へ逃出し候御事、大混雜ニ相成近辺
ニ而ハ別所發心寺・仏国寺・尾崎・野代・多田寺・遠敷、其上松

永谷迄も参り候者も有之、又西之方ニ而ハ西林寺・西福寺・妙徳

寺・龍谷寺・勢・谷田部・名田庄谷迄も逃去候者も有之候ニ付、

誠ニ心細く相成候、其上当年之年柄故落付候事も難相成候故、先

老人之親父と病人之家内と下女付て、清水町檜皮喜大夫方迄遣置、

其夜男斗三人残り留主致居候へ共、町内三四歩通り明家ニ致、居

不申方も御座候て誠ニ心細く夜を明し候処、先々不難ニて目出度

事ニ御座候、翌十八日皆々帰り、元々ニ道具を持帰り人大混雑也、

今十八日ニ而ハ風も余程静ニ相成候へ共、何分余国之風聞ニ而一

統恐入申候事也

一 甲寅十一月廿五日暁六ツ前時分又々大南風吹、誠ニ恐敷事ニ御座

候、右刻限分遠敷村九拾四軒も一時ニ焼申位事、町方へも火の子

参り候、今晚夜八ツ時ニ漸々風も静ニ相成申候、又々屋根をまく

り痛所夥敷事ニ御座候也

一 同十二月八日夜八ツ半時ニ中地震ゆる

一 同十日昼五ツ時雷鳴、夜九ツ時小地震ゆる、同十一日九ツ過時

も小地震ゆる

一 同十一月廿日殿様御義異国舟度々渡来ニ付京都御警衛被為蒙仰候

ニ付、当所御家中十二月廿二日頃分廿七日頃迄ニ追々京都へ御出

被為遊候

京三条御屋鋪ニ小浜材木や三軒引受候而、廿間余御長屋廿五六

ヶ所乙卯春分小浜職人を連普請被致候也

当甲寅冬出京被致候御役人方様ハ

士大将三浦又太郎様壱万石格式也、御老小沢太左衛門様・御

用人村松又右衛門様・組頭針谷様・者頭式組・鎗奉行山田甚

内様

惣御人数凡上下四五百人斗

一 同十二月五日年号安政と改名有之御触也

一 同廿一日夜四ツ時中地震ゆる、又々九ツ時小地震ゆる

一 同廿二日町中宿老壱人・組頭兩人ツ、町御奉行所へ御呼出し有之、

御談示扣

博奕筋御制禁之義ハ従御公義被仰出も有之、兼而嚴重申付、就月

々証文も差出候処、右改方不参届いつとなく等閑ニ相成、只作法

一通りニ而実意無之故、如何之者夥敷有之趣相聞へ不届之事ニ候、

右ニ付是迄壱町切博奕改方申付有之候へ共、此度右改役相止メ組

合頭博奕改役申付候間、組合丈ヶ之処聊軽キ手慰たり共決而不致

候様精々可申付、万一心得違之者も有之候ハ、早々可申出候、尤

他組合之内ニ如何之者有之趣及見聞候ハ、是又遠慮なく可訴出

候

但し正月・七月年々兩度ニ組合内にて子細無之旨、組合頭分証

文宿老共へ差出し候、宿老分町年寄迄夫々可差出候

一安政貳乙卯年二月一日八ツ時ニ中地しん式ツゆる

一同三月五日昼七ツ半時小地しんゆる、今夜六ツ時小地しんゆる

一同三月六日昼五ツ半時小地しんゆる

一同十二月八日昼八ツ時小地しんゆる

一同三月六日竹原祇園様一千年忌ニ付三日之間神事有之、殊之外賑

ひ申候

一同四月四日午刻過小地しんゆる

一同十一月十一日突抜町志水・塩浜小路和久忠、其外式三軒も御祓様ふり

申候也

一当八月京都聖護院宮様、於大峯山中異国退攘・天下泰平之御祈禱

御修行被為有候ニ付、御当国修験中一統入峯修行被仰出候得共、

無檀同様之諸院故、修行中并ニ往返之雜費等自力ニ難及、右ニ付御國中少分之相對(勸)觀化御免被成下候ハ、他力之助成を以大峯修行岐度趣相頼候通被仰出候間、此段為御心得一統へ御通達可有之候、以上

卯五月三日

町々宿老中

町年寄

一同五月六日夜九ツ時中地しんゆる

一同十三日夜八ツ時ニ小地しんゆる

一同七月四日昼五ツ時中地震ゆる

一同十二月二日暁六ツ時地しんゆる

一同八月廿日辰巳風大雨風ニ而、同昼七ツ半時分段々強く相成候而川も追々増、暮六ツ過五ツ半時迄大洪水ニ相成、川縁町上ノ升源方ニ而式尺斗床へ上り申候位、大津丁・本町・松本町・川崎町杯ニ而ハ皆々水ツキ床へ上り申候由、土橋ハ大破損ニ御座候、嘉永三戌年分少し無数之方ニ御座候

(朱書)
右ニ付見舞遣し申候扣

一 飯一升五合斗 井藤
香之物添

一 飯一升五合斗 升屋源兵衛

一 酒貳升

一 飯貳升斗 升屋源助

一 諸白貳升 高森様

香之物

是ハ此頃病氣ニテ見て貰申候ニ付遣候

一 酒貳升 柴田籙五郎様

一 酒貳升 原田尉之助様

右水ハ市場三丁へ門戸・庭へ這入候へ共井長へハ這入不申、手前
方も同断門戸迄参り候位之事也、同廿一日土橋大津町ノ方大痛ニ
付舟渡しニ相成申候よし、御家中之痛も不輕事之よし

一 卯九月六日夜五ツ時小地しんゆる

一 同十四日夜五ツ半時小地しんゆる

一 同廿八日暮六ツ時中地しんゆる

一 同十月二日夜四ツ時中地震ゆる

一 同九日夜七ツ時小地しんゆる

一 十月十三日御家中一統御呼出し御談示扣

御上御勝手向追々御六ヶ敷候処へ京都御警衛被仰付、此義者永事
二而御本望之御事二候、御転席ニ付都而御入(箇)価も多臨時御物入、
其上異国舟渡来ニ付海防御手宛入用多事二而、上方筋銀主始メ在
・町共及不对談、此上ハ家中共頼(箇)外無之候間、来辰年(箇)五ヶ年
之間、百石ニ付五人扶持割合を以勤料三拾表ニ致具候様被仰出候
よし

一 同十七日町老衆(箇)状夫廻文之扣

御上御勝手向従来御六ヶ敷被為在候処、先頃(箇)被仰出候通追々臨
時御入箇続(箇)キ二而、此節二至り必至と御差詰りニ相成候二付、不
得止事他所御借入、御扶持方共五ヶ年御断延ニ相成候御時体存無
御扱、此度御家中始メ御借米被仰出候間、於町方一軒分式人扶持
二拾表被下候以上ハ、来辰年(箇)五ヶ年之間御借被仰出候間、此段
御請御承知可被成候、割合之義ハ去ル天保八酉年同様之御借入ニ
相成候間、左様御承知可被成候

町方

御扶持人名前殿付

町年寄

一 霜月十七日昼九ツ時小地しんゆる

一 同夜八ツ過二中地しんゆる

一同十八日夜五ツ時二小地しんゆる

三匁式分一厘壹人分掛ル

一同十二月廿五日暮六ツ時中地しんゆる

同十四日雨天休

一安政三丙辰二月二日昼四ツ半時小地しんゆる

同十五日日々増長致、是迄之半天を取替又々色々之半天装束を用ひ、中二者喧嘩杯も出来申候二付、今日切二而相止メ候様二嚴重

一同三月三日東組火消組大焼後道具揃之かけ出し願有之、町御奉行

和田様・者頭様御出役被為遊候、塩浜小路大宗向出店を借聊酒肴武久様

二被仰出候

杯出し賄申上候由、右世話人取持也

〔若者半天四五枚も揃申候者ハ六七百匁も入申候事二而、誠二込^(困)り入申候也

一同九日御上様分来ル十一日分土橋下砂を川崎町浜へ持捨候様、尤賑々敷致候様被為仰出候二付、町々并二若者御祝同様ニ心得申候也

一同三月廿三日分廿五日迄愛宕山拝殿上葺二付神事有之、世話人御札売参り申候也

同十一日朝分砂持町中初り、思ひく揃装束を着用致、町々之出し幟を立終日賑申候、御祝分賑ひチヨイトく踏り二而、大家へ

一同廿三日夜五ツ半時小地し^(ん)ゆる^(脱)

這入ヲドリ、老若男女我レ一二出大騒キ

一同廿八日東水組火消道具揃有之、是も町御奉行・者頭様御見分を願、八幡前二而御覧被下候由

〔当年宗判欠脇蓮光寺也^(朱書)〕

同十二日段々増長致、揃半天三四枚ツ、も揃着用致

同十三日同断御用達中も罷出申候、しらミ絞り揃半天・も、引着

一四月廿八日中組・西組両組道具揃かけ出し有之候

〔当年跡判も蓮光寺也^(朱書)〕

用致罷出、手前ハ病氣故安二郎を名代ニ出し申候、〔右入用七拾

一五月十三日五ツ過ニ小地しんゆる

一同十四日七ツ時ニ小地しんゆる

一同廿四日神明下ノ御宮屋根御葺替ニ付、今日下遷宮有之候ニ付、

安二郎麻上下ニ而御供ニ遣候

一同晦日三浦又太郎様御調練有之候

一同六月十九日都筑外記様弟子・針谷様弟子先達京都御警衛御手宛

ニ被參候節、^(所司)諸士代之火方と喧嘩被致候故御兩人共今日御暇被下候よし

一同晦日七ツ時小地しんゆる、同廿九日三ツ松村嘉助方たもの木へ

雷落候由

一同七月三日大夕立ニ而雷巖敷鳴申候也

一同八月十四日神明下ノ宮御上葺成就致、今晚右上遷宮有之、同十

五日・十六日御神事有之候

一安政三丙辰年九月九日遠敷上ノ御宮御上葺ニ付、今晚正遷宮有之

申来り候へ共不快ニ付得参り不申候、十日・十一日右御神事有之、氏子中ノ引物大太鼓出、殊ノ外賑ひ申候よし

一当夏以来産物方御役所御普請有之候処、辰九月中旬ニ出来致御用

初、但し町役所と半分ツ、之兼帯之御役所也、^(朱書)「則入用高半銀町御役所ノ出ルよし」

一丁巳年正月十五日火消諸組共例年初寄有之、酒狂之上町々纏持出

候処中組と東水と喧嘩有之候、右ニ付御上様ノ同廿三日東水組御差留メニ相成申候、右之訳有之五月五日町御奉行様御上覽ニ付、

驅出し有之候ニ付今日御免ニ相成、右ニ付大世話人平長・中世話人七人役義御免ニ相成申候、右一条別帳ニ委敷有

一同廿二日夜九ツ時中地しんゆる

一同廿八日五ツ時町御役所へ御免許御用達其外町方宿老組合老々人ツ

、御呼出し有之、御奉行様御出役御談扣^(朱書)「町御奉行様御談示」

当御時体ニ付旧冬以御書下ケ御家中一統へ被仰出候義も有之、御上一昨年来別而御臨時打続キ、不被為得止一統へ被為及御不

義理ニ候上、重ね々之御用金永調達被仰出候ニ付、御前之思召之趣此度自分共へ以御書下ケ被仰出候間為説聞候、何茂可奉

畏候

〔(朱書)殿様御意御書下ケ〕

此度一統へ為申聞候通之時体ニ而、在・町之者共へ追々之不儀
理之及次第候、其上毎々骨折候義何共心痛之至りニ候へ共、何
分一統致堪忍呉候様不洩様ニ能々為申聞可申候、扱又為ニ相成
候義心附之者有之候得者、無遠慮支配頭へ申出候様為致可申候、
若難申出義も候ハ、印封いたし訴状箱へ差入させ可申也

町奉行

郡奉行

代官共へ

〔(朱書)町御奉行様御談示〕

只今説聞セ之通之御書下ケニ而、一統へ是迄追々為骨折候段深
く御心痛御苦勞被遊処々、是等難有御書下を以被仰出候事何分
氣之毒ニ被思召候得共、一統堪忍致呉候様ニ能々為申聞候様ニ
との御主意、并ニ右ニ付心附之義も有之候ハ、上書可致旨、分
而被仰出候様之義下々有之、誠ニ無勿躰難有事ニ有之候間、其
方共能々合点致厚相心得、思召之処銘々我心ニ相届キ候様無之
而者不相成、下末々迄之者不洩様二分而為申聞候様可致、呉々
も籠略ニ相心得候而ハ不相成、尤末々之者御趣意心得兼候者も
有之候ハ、尚又直ニ為申聞可申候間可申出候、上書之義心付
候義者当二月中書上ケ可申候、若シ支配頭へ難申出様之義も有
之候ハ、銘々印封ニ致名前書記、町番所前訴状箱ニ入置可申

候、尤名前無之而ハ一切取上ケ無之候間左様相心得可申候

巳正月

小浜町奉行

一同二月七日夜七ツ時中地しんゆる

一同八日昼七ツ時中地しんゆる

一三月四日暁六ツ時中地しんゆる

一丁巳三月六日昼七ツ時小地しんゆる、又夜四ツ時中地しんゆる、

夜七ツ時中地しんゆる

一同八日暁六ツ時中地しんゆる

一同九日暁五ツ時中地しんゆる

一同十日夜七ツ時小地しんゆる

一同十三日暁六ツ時小地しんゆる

一同十八日夜七ツ時小地しんゆる

一同十二日十三日西津弁財天様七年祭り候ニ付十二日御役所休日ニ相成申候、十三日能有之、棧敷掛御用達米錢御役所一山ノ御誘引ニ相成、一統御相伴ニ参り申候

一五月五日産物御役所ニ而町奉行・者頭様町方四組火消かけ出し御覽有之候

一閏五月七日極楽寺方丈不如法ニ付追院被仰付候、右ニ付二鳥井木引新助家内徒罪ニ被仰付候

一同九日上中郡三宅市場村木引兄キ諸方へ蔵切致盜取候ニ付、今日死罪ニ相成申候

一同十日夜八ツ半時中地しんゆる

一同十七日七ツ時ハ大雨降続、夜四ツ時頃大水ニ相成川縁町へ水上り申候

西の方ハ大洪水、青井村へ四五軒も床へ上り候よし

一同廿二日夜七ツ過時中地しんゆる

一同六月十二日高浜七年祭りニ付当月差入ノ殊の外賑ひ申候

一同十一日今町木綿屋惣助と申者勢坂へ土取ニ参り、右土ずり致下ニ相成即死被致候由

一^{丑年}大火後ハ昨年迄祇園会山ねり子共休年ニ候へ共、当年ハ何成共ねり子を出し候様ニ被仰付候ニ付、町内ハ当年当り番ニ付、子供七人はら当ニ板ノ松右衛門手細を拵、俵を持セ力持之まねを致相勤申候、尤十三日内ねりハ出ス、質屋町・市場ハ山ノかたちを拵出ス

一^(朱書)御輿御帰り、右ニ付格別ニ賑ひ申候、十四日大太鼓・神楽・山ねり子不残十四日朝市場ニ而先格通揃申候也

一丁巳六月廿三日塩屋町鍵屋与兵衛夜之内ニ差殺有之、^(檢)俵使相立色々御詮義も有之候へ共未夕殺人相分り不申候也 ^(朱書)「同町ニ池田ハ十八兄キ鉄蔵義色々評判致候間、入牢致御詮義ニ相成候処、先方家内居候節密夫致事ニ斗ニ付御領分払ニ被仰付候」

一丁巳八月六日多田村ニ御上様焰硝場有之候処、今四ツ半時ニ大はぜりニ相成即死人三人有之、外ニ少し怪我致候者も有之、大騒動ニ^(朱書)御座候也 ^(朱書)「小浜町方迄も大鳴ひ、き申候也」

一同廿五日五ツ過時小地しんゆる

一 同廿八日都筑外記様御調練、暁六ツ時ハ堀屋敷浜ニ而有之、八ツ時ニ御引取有之候

右ニ付御姫様八幡宮様へ御参詣被遊、多田寺へ御立退被遊候

一 同九月九日夜七ツ時中地しんゆる

一 同九月廿七日於御城御家中御一統様へ御談示扣

御意書

我等勝手向兼而一統へ申聞候通甚差詰り何共六ヶ敷及時体令心痛、追々役人共へ申付置候義も有之事ニ候へ共、家中共之義ニ付而者深く存寄も有之二付、扶持方賄年限之義者当冬ハ指免候、乍去京都御警衛ニ付而ハ多分之入箇も有之、今日之処手宛も難相調候間、追而見通し相付候迄御警衛中増借米申付候、乍太義此段頼存事ニ候、是迄格段難渋為致候段氣之毒ニ存候、尚役人共ハ可申聞候

談書

此度被仰出候通御勝手向不一通御指逼ニ付、甚心痛被遊御役人共へ分而被仰出、格別之御省略追々御取調へ有之事ニ候、併御家中之義ニ付而ハ深キ思召も被為在候ニ付、此度御扶持方賄御年限ハ御明ヶ被成下事ニ候、昨年来多分之上ヶ米被仰付一統致艱難候段氣之毒ニ思召、御役人共ハ能々申聞候様ニ御沙汰ニ候、将又右之通御年限御明ヶ被成候へ共、追々御六ヶ敷御勝手向之

上、京都御警衛ニ付而八年々多分之御入箇ニ而御地盤之入増ニ相成、御見通し御都合難相付ニ付不得止ヲ増御借米被仰出候事ニ候間、御時体可令恐察候、右御扶持方賄御明ヶ被成下候ニ付何となしニ弛ミ相付、不取締之筋相成候而ハ以之外不宜義ニ付間、此処者銘々得与令勘弁、暫之処御年限中同様之覚語悟ニ而急度質素相守可申候、此度被仰出候御警衛中増御借米之義者、当十月ハ御家中を初足輕・坊主、在・町御扶持人迄、百石ニ付六表程之割合ヲ以御借米被仰出候、左様相心得可申候

巳十月

一 巳十月十一日夜五ツ時小地しんゆる

一 同霜月廿日頃敦賀表ハ秤座参り、秤改町宿老中ハ申来り候ニ付、式貫ハ勿之小秤壹挺改させ申候、此代式ハ勿と十六文出銀致申候

一 安政五戊午年正月十四日滝町板屋弥惣兵衛家内自害被致候ニ付、御医者衆被縫候へ共一夜斗居死去被致候、右ニ付御上様へ無届葬式致候間跡ニ而夫々御呼出し有之、当主・親類・五人組・宿老迄夫々ニ御呵り有之候

一 同二月二日昼七ツ半時小地しんゆる

一安政五戊午二月十八日米手形御役所御開発分六十一ヶ年曆二付、
来ル三月朔日於同所御料理被下置候段被仰出候

一同三月朔日未刻分米手形御役所二而六十一ヶ年曆御祝被下置候、
御出席

御用人北川太郎右衛門様

猿橋豹一郎様

御奉行 山田甚内様

御勘定人 橋本保太郎様

可児武左衛門様

久我承二郎様

安倍様 京御警衛御留主

八木誠二郎様

御用達一同分 上々扇子十本
諸白老斗
鯛五れん
昆布五把

献上致候

右献立八寸色々

鉢巻酢し

鉢かれ

鉢鯛之子

鉢焼肴

吸物 ふくさ
しゅん
しゃう

本膳 鱈

汁 のし蒲鉾
若め

大按椀

紅蒲鉾・竹之子
玉子・長いも
いり子・水菜

吸物 すまし
膳さす

香之物 飯

同 鶴

作身井 竹之子
昆布

井 いも
せんまい

御菓子大仏餅十ツ、

右御役所へ立入之者、御出入之者、皆々御振舞有之候、五ツ半時
相済申候

一同三月十日分十五日迄多田寺四国八十八ヶ所十七回忌開帳有之候
へ共、雨天続キニ而大損之由承り申候

講中分幟壺本奉納致、壺人前三匁五分ツ、掛ル、手前方ニ大師様

一体寄附致、第一番之処へ居置申候

一同十四日・十五日永三小路市塔供養有之、殊之外賑ひ申候

一同四月十七日分廿一日迄八幡宮千百年御神事有之候二付、町中分
奉納物色々有之候、米手形御役所八十七日分十九日迄休日二相成
申候、御社内献上提灯八十七日分廿一日迄上ル、町中十八日分廿
日迄三夜 (提) 丁ちん出ス、千年忌・千五拾年忌共能之節町御奉行様御
出勤ハ無之候へ共、此度ハ御出役を御願申上候様ニ内々御沙汰有
之候二付、宮世話人・年番・町宿老分御願申上候事

町中分能奉納太夫祿米之義ハ先例六石、其節御相場廿匁七分、此度
ハ高直ニ而四十五匁直段ニ候間、石数まけ呉候様宮世話人分掛合候
へハ共一向聞入不申、漸百匁座中分奉納ニ相成申候

十八日能番組 三番叟 西王母 忠度 熊野 耶耶 (耶耶) 善界 野守
祝言、狂言五番

正五ツ時分初り七ツ半時済、宮世話人一統宿老紋付麻上下着用、世
話人一統二弁当訛申候

町御奉行 武久権十郎様

大目附阿部兵右衛門様

米手形御奉行棧敷掛ル、御役所賄御用達分取肴・重詰・大仏餅百

献上

山田甚内様

猿橋豹一郎様

御奉行可児武左衛門様

御勘定人

橋本保太郎様

三浦文左衛門様

久我承二郎様

山後作藏様

一同十二日午刻小地しんゆる

一十九日西三丁町角力場ニ而小屋を掛ケ舞奉納致候、今日志水・

も善・手前当番、外二年番齋藤・川七・丹次丹次袴羽織ニ而出勤

致、銘々弁当、七ツ半時ニ帰ル

右千百年訳書別紙細書記し申候也

(朱書)「本年千八十九年ニ相成申候

以来ハ五拾年ツ、ハ不相成候様ニ此度被仰出候也

神主之秤判(評)不宜候也

」

一四月廿四日暁六ツ時小地しんゆる、又五ツ時ニもゆる

一同日御者頭足立七左衛門様火消大世話人御呼出し有之、則古久

・田村長兩人罷出候処、火消道具下地ハ追々替り候趣ニ付下地

絵図御渡しニ相成、此以来多分替り候分得与取調へ取替差出し候

様ニ被仰付候

一安政五戊午年昨年御用所へ御金盗ニ入候府中村之者、中間致居候

者、午四月廿九日死罪相成申候

一同五月三日巳ノ刻小地しんゆる

一当春ハ御産物御舟上瀬丸新造祝、五月十八日出来候付親共へ参り

候様ニ申来り候へ共、不快ニ付断申候処膳来ル

右ニ付式本入扇子箱一、諸白式升上ル

一五月廿日堀口清兵衛悴清太郎五歳小児相続、先達而ハ以願書親同

様ニ被願出候処則今日、

清太郎へ

其方義此度家名致相続候ニ付、亡父清兵衛同様ニ被仰付被

下度段相願承之候、先代致上金等奇特之筋も有之候ニ付、

亡清兵衛へ是迄七人被差出候七人扶持之内、四人扶持其方

一代切被下置候、諸役免許・足駄御免被成下候

午五月

小浜町奉行

(朱書)「右者先代御用達融通方迄も被相勤候間七人扶持被下候へ共、

此度ハ五才之小児故不殘断ニ付右四人扶持ニ相成申候

一同五月廿二日巳ノ刻小地しんゆる

一午六月六日ハ市場中買ハ勧進元ニ而八幡社内ニ而角力有之候、晴

天五日之間也

一同六月十七日夕八幡宮様ニ而町中夕五穀成就之御祈禱、十九日迄三夜之間也

一同七月二日曉六ツ前二小地しんゆる

一同六月廿六日殿様京都御諸士代(所司)被為蒙仰候ニ付、火消四組へ先年被下候相成候纏暫之處差出し候様被仰付、則西組夕式本、中組夕壺本、東東水(符)夕壺本、都合四本七月十五日御用所へ納ル、七月十四日御用所夜七ツ時御役人様御引取ニ相成候処、十五日曉之六ツ前二早飛脚参り候ニ付、又々夫夕御役人様方御詰、昨日終日詰ニ而追々ニ御家中川支ニ而御飛脚延着致、昨日三ツも早飛脚参り候よし、右ニ付昨今ニ御道中迄御迎御供ニ御立被成候、諸士衆追々御出立被成候由御用所大混雜之御模様也

一同七月廿七日申刻夕北風大雨風荒く候処、戌ノ刻夕西風ニ返し大雨風古今無双之大荒ニ而、此通り夜中降続キ候ハ、大騒動ニ可及と存候処、夜五ツ半過ニ雨止申候て安心致候、川縁丁ニ而ハ升屋源兵衛方門口迄水参り、湯岡橋下ニ而土手切込候間伏原田へ水入、夫故欠脇・今在家辺床へ上り候由、又西ノ方青井町・三丁町・浜浦町杯大水之よし

右ニ付米手形御役所廿八日休日ニ相成申候

一同八月七日西本織右衛門参り、弟音吉今朝下中郡御役所へ御呼出ニ付罷出候処、平日不行跡ニ付、其上如何所業有之趣、右ニ付思召も有之居村払、御城下壺里四方へ立入申間敷候様被仰付候趣、親類へ通達ニ被参候也

一同八月廿九日戌中刻夕北風強く候所、須崎町新地舟屋伊兵衛裏舟小屋夕煙上り、直様表町へ拔出、東・中・西迄大半焼失、翌晦日朝火鎮り申候

一家数千八百五軒 蔵六七拾ヶ所其余納屋類
浄光寺 妙玄寺 願慶寺
 寺 証明寺 正誓寺 西宝寺
 一 下陣長屋二ヶ所
 〆六ヶ寺焼ル

薬師小路金源七残り、夫今町・風呂・二鳥居浜側不残り申候、又新町古川屋久右衛門夕長卯迄五六軒之間残り、福岡丁松山様町両側共残り、石垣丁丸残り、二鳥居桑村向側迄焼、夫ニて留ル、川先丁(崎)拾軒斗焼ル、松本丁絹又夕残り

此度ハ出火ハ一筋之風ニ而返し無之、皆々浜へ道具出し不残助り申候由、蔵も壺部通焼候事故誠ニ火事なれ候故、道具類ハ無難ニ候へ共、何分先年夕間も無之一統六ヶ敷候次第ニ相成申候

右出火ニ付御談示書写

此度之火災先年大火後間も無之、別而一統難義之事ニ候へ共、凌之相付候様御取扱被遣度候へ共、一統粗承知之通御物入相高御手詰り之御時体、其上当御役ニ付尚又莫太之御物入ニ相成候事故、

相応之御取扱被遣兼残念之至ニ候、併格段難義之事ニ付御操合を
以乍少分御取扱被下候事ニ候間、御時体柄厚く奉恐察、此上者銘
々艱難を凌能覚語を相立、何分職業取続キ相互ニ力を添合相励ミ、
家名致相続候様末々迄能々相心得可申候

但し割合等之義ハ町年寄共可申聞候 小浜 町奉行

一以前取扱之振合も有之事ニ候へ共、都合難相調候ニ付乍少分米壹
表ツ、指遣し候

一融通方御用達之者者本家之分柱拾本ツ、指遣し候、其余借家等之
分ハ外并之通米壹表ツ、
但し杉六寸角

一一統へ貸銀五拾目ツ、是迄之振合之通指出候、但し追而都合次第
可相渡候

一借家借之者ハ米式斗五升ツ、指遣し候

一地面借致相建候者へも米壹表ツ、被下置候

一地主へハ銀五拾匁ツ、七ケ年賦ニ御貸被下候

午九月七日

一大工・木挽之義是迄之形合も有之、猥ニ相雇候義難相成候得共、
此度之火災普請ニ付而ハ他国并ニ敦賀在中大工・木挽共呼寄遣候
義、暫之処差免遣し候間、相雇候義ニ候ハ、雇主ハ大工年行司へ
可相届、尤職人も相届ケ可申候

一火災ニ付難渋之者へ焚出し取斗遣置候得共、来月四日切ニ相止候
間左様可相心得候、併鰥寡孤独或ハ病人・子供多く候而渡世致兼
候様之者、町々ニ而詮義之上来月五日迄ニ名前書町年寄迄差出し
可申候、町々宿老中ニ而区々ニ相成候而者不宜候間、一樣ニ相成
候様申合可申達候
右之趣被仰出候間町々取調へ早々可申達候

一此度之火災ニ付入舟有之候而も銀子不融通商ひ出来不申、出帆有
之候而ハ第一湊不繁栄、町方一統之不為ニ存附候故、万一仕切銀
ニ手支候節ハ町老・大問屋共ニ而融通致遣候様ニ申付置候間、惣
而入舟物其時々之相場を以手弘く商ひ可致候、若又当分現銀商ひ
六ケ敷節ハ延売等世話可致し遣候、大問屋共へ申付置候間代銀及
不埒候義於有之候者、上納同様ニ敷敷為取立候間、兼而其心得ニ
而正直ニ売買可致候、火災前延売等多分有之趣相聞へ候、是又限
月勘定無相違取引可致候

午十月

町年寄

一午十月廿五日於町御奉行所御免許御用達惣代兩人ツ、町年番・

町宿老兩人ツ、御呼出し御談写

類焼之者へ

此度町方焼失之趣委細被為聴被遊御驚、先年之大火間も無之又候
夥敷類焼、一統別而難義ニ可及と何共氣之毒ニ思召、御心痛之御
事ニ御座候

右之次第二而ハ容易ニ元形りニも至ル間敷、町方衰微ニ可及哉と
御苦勞ニ被思召、一体小浜町方之義ハ商売筋何角便利之場所ニ而、

一統精力次第随分繁昌之土地柄ニ被思召候へ共、追置之格段之火
災如何ニも残念之義、何卒一と凌相付早々元形りへ引戻り繁栄之
筋御助力被遊度、精々御役人中へ被仰出候へ共、何分下々迄粗承
知之通、先年来江戸表ニ而も追々之天災、其外御臨時相湊御下地
とても甚御六ヶ敷上、右等之次第且又此度御役ニ付而も夥敷御入
箇も有之、今日之処甚御差迫之御時体、御勤筋之義者如何様共御
不都合無之様御取斗無之而ハ不相成、夫以御繰合も御六ヶ敷、御
公私色々相重り誠ニ御難義之御時節故、一と凌相付繁栄之筋ニ御
引立と申程之御救者難相成候へ共、当分之處如何様共被成御無利
成ニ御繰合、聊御救被遊度思召ニ付金五百兩一統へ被下置候、少
分之義為ニ相成候程之義も有之間敷候へ共、御時体不及是非事ニ
候、此上ハ銘々職業尚又相励合、物毎質素ニ立戻り、惣体之衰微
ニ不相成様互ニ力を入、早々繁栄之道ニ運候様可相励候

町奉行

演舌

只今申談之通町方続而之大火一統難難洪ニ落入可申、何共氣之毒
ニ思召候次第二而ハ、自然可至衰微と深く御心痛被遊候所、懸
ル御時体之御中御六り成ル御繰合を以此度金子五百兩被下置候御
事ニ候、余り聊之義一と簾之場ニ相成候程之義も有之間敷候へ共、
格別之思召を以御救被下候段於拙者共も難有奉存候間、一統右思
召入之處難有深く奉恐察、何卒互ニ一際職業相励、外国へ衰微之
体を不見せ、早々繁栄之町ニ立戻り候様致度義ニ存候

十月 小浜 町奉行

右割合壱軒ニ付金壱歩宛被下置候也

一 燒後米手形御役所交易、西津古河氏ニ而十月九日迄被相勤候所、
御役所御土蔵ニ庇仮建を被成、十月十日右御仮建ニ而御役所初
り申候也

一同十月朔日夜七ツ時ニ中地しんゆる

一同十一月十九日巳ノ刻中地しんゆる

一同廿二日町老衆手前御呼出し有之候へ共、不快ニ付安二郎を名
代ニ遣候処、今度海岸御巡見使御入来ニ付右御案内役被仰付候、

右同役之義ハ西島又十郎・石野五郎兵衛・丹ば屋次右衛門・同屋
仁左衛門・古川屋久右衛門・手前、メ六人

〔^{朱書}〕右被仰付候へ共手前焼後眼病ニ付引込、御太切御用難勤候間御
断申上候

右宿之義ハ焼後町方不都合ニ付西津古川・松見、其余十軒斗下宿
被仰付候よし

〔^{朱書}〕然ル所来ル廿五六日頃敦賀表へ御越之趣ニ付、廿日頃分町方焼
普請致居候大工・檜皮不残御上様之御用ニ罷出申候、或ハ佐柿
行、倉見行、堤行、勢・加戸・本郷行色々有之、雪隠数も凡式

三百も御領分中ニ而御拵被成候事ニて候へ共、持歩行色々御工
面被成七八十数建申候由

此度湊々為御見分堀織部正様・駒井左京様并ニ右御二方様之御手
附之御役人方近々之内当所御^到至着、西津御旅館ニ相成候間、此節
分火元別而入念可申候、御至着之上ハ自然御家来向出町も難斗ニ
付、不敬慮外之義無之様末々迄も相心得可申候、町方御通行且町
浜御見分等之節者左之通相心得可申候、尤御至着日限御治定之上
尚又可相触候

- 一 町方御通行并ニ町浜御見分等之節町中家普請等差扣可申候事
- 一 御通筋之町々家職差扣可申、御通相濟候迄ハ猥ニ戸外へ罷出候義不相成候事

一 御通行無之共御見通ニ相成候町ハ御通筋同様ニ可相心得候事

但し御道筋盛砂等ニ不及掃除入念可申候、御道筋之町々ハ

掃除人夫兩人箒を持セ、御先扨同心共之先へ相立可申

事

右之通被仰出候間町々不洩様通達可有之候

十一月廿二日

町年寄

海岸御巡見御旗本御二頭様御領分御宿割

午十一月廿七日敦賀御泊り 佐柿御昼 廿八日倉見御泊り 堤村

御昼

廿九日

西津御泊り 本郷御昼 晦日高浜御泊り 以上御

逗留無之御機嫌克御通被為遊候

堀織部正様古河 新道様田井や 其余御手附手代・御小人目付五

駒井左京様松見 六人様二同勢有之候分七八軒御

宿有之候、上下百式三十人之由

葵ノ御紋長持式棹有之、是御太切之荷物也、十一月晦日御大将

一頭様外ニ御小人衆表町分谷口へ御通り、御一と頭様ハ浜御台

場御見分、常在小路へ御上り、谷口へ御出也、五ツ過迄ニ小浜

御通り相濟申候

一 十一月廿五日是迄廿八日切赤取引之模様ニ而哉、町米付下直色々含有之候由ニ付、口入相談之上今日十一月切之分、不残四拾七匁

五分ニ而直貫ニ相成申候

〔但し〕町老志水氏売方二付大問屋木崎吉左衛門・油長右衛門兩人

共、町米付之事哉暫御差留二相成申候由、同十二月押詰二

御免二相成申候

一安政六己未年正月三日夜山田半兵衛様御二男と菊地中務之弟、酒

興之上西三丁町野原や文吉と申処へ遊二参り口論致、山田舎弟刀

を抜、菊地舎弟二手疵をおふせ候趣御上様へ達し二相成申候

御戴許〔裁〕 山田様御舎弟御暇被仰付候

茶屋野原屋文吉ハ三

菊池舎弟慎被仰付以来町住宅御構 丁町御払被仰付候

一同二月十日頃分広小路新川掘初り申候、町御奉行御支配ニ而幟立、

日雇頭重田卯左衛門

此時御奉行武久権十郎様・小畑佐右衛門様、町年寄志水林藏殿・

組屋六郎左衛門殿、小頭宮川柳七殿・田辺源次殿也、

右世話人辻半・武田・川彦・丹次ノ四人へ被仰付候へ

共、迺も莫太之入〔簡〕と心得、右世話人御断被申上御聞

濟二相成申候、右代り同心衆五人斗へ被仰付候由也

昨冬分右新川之御沙汰二付、鶴羽小路吹田伝右衛門所替被仰付事

二相成、色々歎願被致候得共迺も当所ニ而ハ難相叶と存、京都ニ

酒井豊後様御座候事故、上京致色々歎願之趣被願候得共御取上ケ

無之、右二付又候当処町御奉行所へ被願候処、何哉京都分申参り

候事ニ而少々言葉之掛違二相成候趣ニ而、口上書差上候様ニ被仰

付、返答難出来二付乱心ニ致候へ共相濟不申、当三月ニ親類分依

願隠居致申候処御聞濟ニ相成、尚全快次第書取差出し候様被仰付

候趣ニ而、御扶持方御免許も離レ家督も渡り不申候、難義被致候

右二付当八月廿八日ニ吹田子息源之助御呼出し有之、下地五人扶

持之処此度式人扶持御免許被仰付候

一古屋忠次郎藏引、丹ば屋利兵衛藏引、木綿屋喜助藏引、吹田伝

右衛門藏引

一金屋源七家・藏不残引申候事大變大騒動ニ御座候、三月廿二日

金源右藏引申候二付御老御用人・町奉行御見分被為遊候由

四月十三日金源七庇重田組之日雇引申候二付、張上より落三人怪

我人、内老人即死致、但し川先丁〔崎〕かもやと申者

六月六日今在家町之橋掛り今日渡り初、町御奉行様〔朱書〕「○」南橋と

云〔朱書〕「但し組屋寄附之由」

十月三日鶴羽小路分永三小路へ渡り之橋板橋ニ而出来二付、町御

奉行様今日渡り初有之、則今日分通行〔朱書〕「○」中之橋と云〔朱書〕「但し

志水様寄附之由」

同廿五日薬師小路分今町へ渡り之橋今日町奉行様御渡り初有之候

〔朱書〕「○」北之橋と云

右新堀川成就二付当冬町御奉行様麻絹御上下、御紋付三ツ組御盃

御頂戴被為遊候由、町年寄麻絹御上下御頂

戴被為遊候

重田卯左衛門者手間代之内拾貫匁差上候由二付、御免許足駄御免被仰付候由

一三月廿一日夕五日之間末野惠比須様御神事有之候

一同廿五日夕廿九日迄明通寺薬師様御開帳有之候

一五月中旬頃新格山ノ後作藏様京都御諸士代御扶持方奉行仮役被致候処、島原へ通ひ金子を遣込、女郎を連伊勢へ参詣致、帰り二伏見ニ而召捕ニ相成、駕籠ニ而当所へ連帰り揚り屋へ入牢

同九月御戴許有之候
(裁)

無宿作藏へ申渡ス

其方義、於京都当五月炭薪代同所町人北村屋嘉兵衛へ御払ニ可相成金子廿七両壹朱、御用所夕請取遊興ニ遣イ果、剩御扶持方米之内拾表払米ニ取斗、右代金五両式分式朱をも過半飲食等ニ遣イ果、御屋敷を令出奔候始末吟味之上及白状、重々不屈ケ至極沙汰之限り之義ニ付、死罪ニ申可付候処近々重キ御法事在之ニ付、格別之以御燐燄入墨重敲之上御領分払申付候、以来御領分中ハ不及申京・江戸一円并ニ武家へ急度立入申間敷者也

右之趣被仰出候間町々入念可相触候

未九月

一祇園会山ねり子一昨巳年夕初り候処、又々昨午八月ニ大火ニ付町中夕御願申上候而、当末年より三ヶ年休御願申上候処御聞濟ニ相成申候

一未六月廿二三日頃谷田部村ニ田村屋長三郎在宅致居申候、右之長三郎子供才斗小児を浜浦町之者長三郎ニ奉公致居、守致川端へ連行小児を木ニくゝり付、銘々ハ川へ水をあびニ参り候処、余り子供泣候故手拭ニ而口を詰候処其儘死去致候由、段々評判ニ相成七月四日ニ彼守召捕ニ相成候処、外之女子ニ教られ候由白状致候趣ニ付、又々同夜五ツ時ニ郷方手代谷田部村へ参り召捕ニ御出、是も十式三才位之奉公人飛川生之由、被召捕揚り屋へ入牢

同翌庚申年二月ニ御戴許、其守永牢、飛川村守居村払被為仰付候

一同七月上旬頃夕頓ころりと申病氣流行ニ而町方一統不穩候事ニ付、追々大川様を拝借願ニ参り候ニ付、町内ニも相談之上年番兩人同廿八日立ニ而参り、八月朔日朝四ツ過時ニ町内へ御出被下候而、則上田明地面ニ祭り申候(朱書)「同八月廿四日丁内夕大川様へ御湯立仕候」

右者世間不穩追々即死致候趣ニ付、八月七日年番町宿老を御役処へ御呼出しニ付、此節病流行ニ付世間陰氣ニ相成候間、町内ニ而大太鼓杯叩候事差許候間随分賑ひ候様ニ、尤無程放生会ニ相成候、

十三日・十四日・十五日作り物御輿なりとも拵賑ひ候様ニ被仰出候、右二付而ハ今晚分鉦・太鼓・三味線杯ニ而賑ひ申候、八日分

十日迄八幡宮様ニ而御祈禱有之、毎夜参詣人夥敷事也

〔朱書〕
「今晚分大騒キ、町々色々大太鼓山とうし故、色々俄も有之候

へ共略之

一八月廿一日・廿二日遠敷上・下宮様ニ右悪病之御祈禱有之候

一同廿四日分廿六日迄神宮寺ニ而大般若御祈禱有之候

一同廿四日廿六日迄竹原祇園天神様ニ而御祈禱有之候、右二付廿五日町方分願山ねり子を順々ニ竹原へ参り、誠ニ古今珍敷賑ひ申候

一同廿八日川崎丁・須先丁・松本町ノ三町ニて水無月様を拜借致候故、右祭り致作り物を拵誠ニ賑ひ申候

一九月朔日分同三日迄神明様ニ而御祈禱有之候

一同二日分三日滝天神様之御祈禱有之、西三丁町分奉納舞有之候

一八月廿三日米手形御役所御普請成就ニ付、今日棟上ケ并ニ御交易初有之、正八ツ時分御用達一統御相伴被仰付候

御用人小畑佐右衛門様

猿橋豹一郎様

可児武左衛門様

橋本保太郎様

御奉行阿部九兵衛様

八木誠次郎様

松浦長右衛門様

野橋久馬太郎様

仮役新畑左内様

志水林蔵 木綿屋久左衛門

武田徳右衛門 林屋安兵衛

御用達出人 齋藤耕之助 丹ば屋次右衛門

川村彦兵衛 大北勘右衛門

同 清右衛門

〔マ〕
十人、外ニ断古川・辻半・丹安・吉岡

やメ、差支ニ而断有之候

御用達分任先例諸白式斗・鯛十連献上、月番朝持参致候

献立

向切酢し三 吸物小鯛引盆 八寸台色々盛替有之 鉢巻酢し

鉢生ふり 鉢焼鯛 鉢小鯛かも瓜 鉢作り身

本膳 鱈 鯛 大根 汁積入赤みそ 平皿蓮根ふり切身 穂之餅三文ツ

香之物 飯 添

右五ツ時ニ目出度相濟申候

未九月二御触

一 升之義者古来今川越屋権左衛門焼印無之升ハ遣イ不申候様ニ触置候処、不埒之義も在之二付、天明度・文化度・嘉永度升目売買致候者共之分ハ、権左衛門相廻り升改致候事ニ候処、又々猥ニ相成焼印無之升を相用ひ候者も在之哉ニ相聞へ如何之事ニ候、此度権左衛門代替りニ付、依願先規之通御国中升目売買之者へハ同人相廻り升改可致候間、其旨可相心得候

申正月廿七日町内宿老分指出し候様申来り、一升升ハ痛無之候様申出し不申、五合升斗出し此改料五分、新一升升壺ツヲ以代六匁一分七厘

一 未十月八日夜分寺町山定之裏ニ而從京都浄るり興行有之候、氏太夫・駒太夫・雲井太夫・芝太夫・芳太夫・豊太夫、三味線槌之助・福造・清太郎

一同廿七日七ツ時中地しんゆる

一 未十二月十八日頃新格新畑左内殿出奔被致候由

右者去ル九月廿二三日頃米手形御役処勘定人仮役中ニ金百枚紛失致、^(然カ)□間封を致段々吟味有之候処、弥右新畑之仕業ニ内々相分り候趣ニ付他国被致候由

万延期

一 安政七庚申年正月廿四日曉六ツ時、空印寺方丈思召有之候ニ付隠居被為蒙仰候

御用人島田小八郎様 大目附藪左門様

右御両君様空印寺へ継上下ニ而御出御談示之趣也

一 二月十七日曉六ツ時中地しんゆる

一 三月三日矢代祭り、阿納之者式人と西小川之者三人と都合五人矢代舟二乗、右渡りニ難舟致水死致申候

一同廿九日町方一統分殿様御武運御長久之為四社様へ御湯御祈禱有之候

一同晦日申上刻頃分大雷鳴今ニも落候哉と存候位、段々大黒雲舞下り夜ノ模様ニ相成候処、大ひやう降大サ玉子ノ如く、凡半時斗ニ三四寸斗溜り申候て、誠ニ町中如何相成候哉一統恐れ居申候、屋根瓦われ檜皮屋根ハ突通し候処も有之、古今稀成大変ニ御座候

^(朱書)「西方加戸辺迄・谷田へ迄、遠敷辺迄、川筋野木辺迄、宮川谷ふり不申候、西津も格別之事無之、奈胡・羽賀辺不降」

一同閏三月朔日今年号万延と改元有之候

一同閏三月三日迄七日迄三方郡石観音様千五拾年忌之御供養有之、

町方参詣御座候

一同六日迄十日迄多田寺薬師如来様閉帳有之、以上五日之間雨天続

キニ而大損、壹貫五百匁斗

〔町方世話人中幕奉納有之、手前方五匁寄進致候〕

一同十九日朝夕南風吹候処段々強く相成候て、夜二入候へハ大変ニ

吹町中一統夜通し致申候、翌廿日辰ノ刻ニ西ニ返し申候、右南風

ニ八幡社内之松木中程夕打おれ、左之方金灯笼と石灯笼とニ当り

打くだけ申候、誠ニ恐敷大風ニ御座候、町方屋根破損夥敷事也

一同四月朔日小地しんゆる、夜四ツ時ニ

一申四月五日未中刻中地しんゆる

一同七日火消東・西・中を松・竹・梅と被仰付候

一同閏三月十一日立古川・志水・辻半ノ三人京都ニ御用向有之趣ニ

付罷登り、四月朔日ニ殿様御目通り御意有之、古川・志水御紋付

御帷地被下置候、辻半へ黒羽二重御紋付単物被下置候由

其上三人へ御料理被下置候趣、四月十三日御用相済帰宅

被致候

一四月廿八日火消不残道具揃駆出被仰付候、町御奉行 武久権十郎様
安倍守様

御者頭五人様八幡前ニ而御見分有之候、委細ハ火消帳ニ有

一五月十一日大南風、雨風七ツ時迄北風ニ返し、折々雨止候へ共大

洪水ニ相成、御作事屋水鐘ツキ申候

一同十九日産物方商内手通并ニ仲共、未商内之義御指支有之候ニ付

御差留被仰付候

右ニ付廿日町御奉行所も以来未商内急度不相成候趣御触、町一

統へ被仰出候

一同廿七日町御奉行所へ御用達其外見込百七拾人斗御呼出有之、御

談示左之通

御上御勝手向従来御六ヶ敷義ハ兼而一統承知も有之義、於御領

分中も先年来追々差向之調達出金等被仰付莫太之金高二有之候

へ共、何分東西之御入増不少事ニ而、右出金之廉々今以御返弁

之御手段も無之延々ニ相成居候段、御役人中ニも何共無面目次

第不本意ニ被存候事ニ候、扱此末迎も御取続キ之見込も難相付、

且京都御警衛之義ハ誠以御本望之御勤柄ニ而、是非無御不都合不被遊御勤候半而ハ不相成義ニ候処、加ルニ此度江戸表之大變ニ付而ハ、米金共御用意無之而ハ何時御不覚語之可及御次第ニも難斗、御役人中一同何共被及当惑候場合ニ而心痛罷在候事ニ候、当時米価ヲ始諸色高直之時節柄一統迷惑ニも可有之、下地出金之分も其儘ニ被成置、別而申出兼候得共此度仕法調達御取組可相成候間、斯々不容易御場合致恐察、乍太義仕法立之通致出金候様頼存候、猶委細之義ハ町年寄共可申聞候

申五月 小浜 町奉行

是ハ町年寄御談示写

唯今御奉行所ハ被仰渡候通り御時体恐入候次第、御一統ニも恐察被致骨折御出金有之度候、割合御仕法等之義ハ追而可申談候、町方請前札数廿枚ニ而金三千兩ニ相成候、右之金子此頃出金之義ハ時節柄一統難義ニ思召候而御奉行所深く相心配有之、御役場ニ而調達御取斗ニ相成、請前通御納メニ可相成候間左様可被相心得候、右御返弁方ハ加入被仰付候方ハ年賦ニ御役場へ可被相納、右を以調達被仰付候廉々御返しニ可相成候、猶委細之義ハ追而可申談候

町年寄

調達仕法帳之写

一口数十式口 壹口百五拾兩宛 ム千八百兩壹講

右返濟方毎年春秋兩度集会、年五朱之利息付春会之節五拾兩ツ、式口メ百兩、秋会之節も右同様メ百兩振鬮を以相渡し、利足

ハ毎会相渡し、九年ニ而元利共皆済ニ相成候事

一 申六月五日空印寺方丈様越後ハ御出、今日晋山有之候

一同六月十日朝ハ雨降、九ツ時ハ八ツ半時迄辰巳風、大雨七ツ時ハ大西風、雨返し終日雨降大水ニ相成申候

一 町方祇園祭礼之義者、午秋大火ニ付昨未年ハ三ヶ年休ニ町方一統ハ御願申上御聞濟ニ相成候処、昨年頓ころり之節八月廿五日竹原天神様之山ねり子抔致、町中之者大騒キ致候事故、其例も有之候間当祭礼ハ何成共致相勤候様ニ被仰出候ニ付、町中夫々其積りニ取掛り申候、右ニ付当年ハ瀬木町番ニ候間、則六月九日ハ則寄合致色々相談、ねり子を拵罷出候様ニも申合候へ共一向究り不申、元山町之事故たとへ簾山ニ而も拵度一統之相談ニ付、右ニ相究大工ニ掛合候処、木代・手間代共凡式百匁余ニ而出来致候趣ニ付詠申候、暮見送りハ大勘ハ一枚、三島ハ式枚借用、夫々詠板ニ而縁を取、十三日八ツ時ハ内ねり八幡小路迄参り、福岡下ハ下通り今町橋ニ而火を入、五ツ時ニ帰ル

十四日例之通市場揃ニ而山を出ス、宿老兩人・細兵・手前以上四人継上下着用、其余警固ハ羽織斗、四ツ時ハ今町へ引取休支度、夫ハ八ツ前時ハ御屋鋪へ引、跡山岡様前ニ而御宮入相済申候、任先例野石様を休息場ニ拝借御願申上候へ共御断ニ付、俄ニ田村様

を拜借仕弁当致、大廻り二而町御奉行様前山二火を入、六ツ半時二御橋を渡り、川縁通り泉町分塩浜小路分五ツ過二町内へ帰り申候也、但シ当年山出し候町ハ大津町・市場・質屋町・瀬木町メ四町也、其余ハねり子也

一申年春以来西芝居小屋舞台建申度趣、山定分御番所へ拜借御願申上普請成就致ス、凡十一貫匁余大工請取之由、尤廻り舞台也、外二式貫匁斗諸造用入申候也、然ル也当五月節句分京都分役者取寄興行仕度段相願候へ共、水腐一条二付旅人止宿六ヶ敷二付願不相叶候二付、西三丁町之芸子ニ舞さらへと唱願致候也、無抛御聞濟二相成京都分振り付・はやし方杯参り、則六月十六日分初日ニ而十五日願一日追願、都合十六日興行致候得とも、時節柄殊ニ大暑甚敷候事故誠ニ不景氣ニ而、漸々在方御勘定時故少し店屋衆参り候斗之由

右諸雑用差引致六貫匁損と申事ニ御座候

一七月十一日夜南風之処四ツ半時分段々強く相成、七ツ時分雨風ニ相成、十二日暁六ツ半時分四ツ時迄大雨風辰巳、誠ニ古今稀成大風雨ニ有之候、四ツ過二雨止風斗ニ相成、誠ニ恐敷御事ニ御座候

一同十三日夜八ツ時過二魚屋町吉岡屋喜兵衛方へおとり込這入候次第、表を叩キ大津町番所之者少々御目ニ掛り度用向有之候間、明

ケ呉候様ニ申候故明ケ候也、ほうかむり致、尻引からけ、たすきを掛ケ、刀を差、這入と刀を抜金子を出せ、出さずば打殺スト申され候故、無抛蔵之内ニたんす有之候故御這入被下、御出し被下候様ニ被申候へ共得這入不申、何分早々出ス様ニ申候故喜兵衛殿札を式三百匁斗出ス、左候ハ、是敷之事ニ者這入不申と申故、金小箱ニ小拾両斗早々有之夫を出し候へハ取、直様持帰り申候由

但し右ハ喜兵衛殿之咄しニ候へ共、一説ニ者百両斗も持帰り候杯と噂致候也

一同十九日未ノ刻大夕立、大雨・大雷鳴之事不怪音ニ有之候也、本町小物屋勘兵衛殿蔵之前へ落、蔵之柱へ上り申候而柱さけ有之候而、跡分夥敷見物人参り申候、古今稀成大雨也

一同八月四日晚町老志水林蔵殿中風被致候也、同八日町老飯役西島又兵衛殿へ被為仰付候

一申八月廿八日夜七ツ時ニ八幡小路檜物屋何某と申者、酒興之上大蔵小路三島孫右衛門へ参り戸を叩キ候へ共、何か狼藉者故明ケ不申候ハ、戸を破り這入乱防致候故、直様皆々裏分出御番所へ願候也、直様同心衆被召捕括り入牢致候、右ハ誰も居不申候ニ付嗷訴之心得ニ而か、皆々這入々々と呼手前老人してこほち候事のよし

右者同極月ニ御領分払ニ被仰付候

一 九月三日町老衆分辻半・堀口・丹次・手前ノ四人御呼出し有之、
 罷出候処米価高直ニ付難洪人有之、八月差入ノ本境寺ニ而粥焚出
 し施行致来り候へ共、新穀ニ取付候迄と存候処今以其見込ニも不
 参候間、来年之三月頃迄救遣し度候故、右御用達中ニ而凡百五拾
 俵斗施米致呉候様御頼被成候間、今日一統寄合申候故及相談御返
 答可仕事ニ申上候、右ニ付翌四日手前丈ケ米拾表施米致事町老へ
 返事致候

一 御米手形銀六百匁 但シ米拾表代町老組屋方へ納メル、九

月十九日ニ

右ニ付十二月十五日五ツ時ニ町御奉行所へ御呼出ニ而

当秋難洪人へ施米致気毒之事ニ候、御役人中へ申達乍少

分御酒料被下置候

但し出米多少ニ而御酒料甲乙有之候、手前ハ拾式匁

被下置候也

先頃ノ御上様御仁恵ニより極難洪之者へ御救粥被下置候処、御時
 体奉恐察、此度町方寄特之衆中分限相応出米致、難洪人御救被下
 度段出願被致候処寄特之事ニ被思召、右施米を以是迄通於本境寺
 御粥被下候間、是迄頂戴人之外当時極難凌キ兼候者も有之候ハ、
 詮義之上難洪之次第委敷可被書出候、尚又寄特人も有之候ハ、
 米多少ニ不拘早々取調へ御書出し可有之候

一同九月廿五日夜ノ芝居小屋ニ而早熊一世一代浄るり興行有之候、
 京都ノ都玉齋、ちやり(茶利)語り老人、三味線老人清次郎と申者ノ三人、
 其余ハ当所之錦志・紺友・鞍伝・三好・住尾・祐久・米多抔罷出
 申候、大流りニ而御座候

町中一統へ

近年米価高直之上、当年ハ諸国風水ニ而別而不作之国々も有之哉
 ニ而、穀物直段引下り不申一統難洪之時節ニ候へ共、諸品売買筋
 貪高利且買締等致候而ハ預り人氣ニ、尤右様之義兼而御法度之事
 ニ而、不宜義ハ何も承知之事ニ候得共、ケ様之時節ハ聊之義ニ而
 も人之目を付ケ彼是申唱候者ニ而、左様相成候而ハ不輕義候間一
 統分而心を用、正直ニ売買致候様可致候、若心得違如何之売買筋
 有之、人氣ニも関り候様之義有之候へ者嚴重可申付条、呉々心得
 違無之様急度相心得、五人組相互ニ遂吟味、若如何之者も有之候
 ハ、早速可申出候

但シ左之趣問屋并ニ米穀物商之者へ申談候間、一統へも相心得、
 穀物他国出し等急度致間敷候

問屋并ニ米穀致商内候者共へ

当年ハ米価殊之外高直ニ相成穀物も右ニ準シ同様、其上諸国風水
 等之沙汰も有之、当年作合等も不宜哉ニ相聞へ何与なく人氣不穩
 候間、暫之処米・大豆ハ勿論、諸穀物他国へ指出し候義差留メ候

間、左様可相心得候、尤同心共見廻り差出し、若如何之者も有之候ハ、急度可申付候間、心得違無之様可相心得候

申十月 小浜 町奉行

其上之中難込人へ者壹匁ニ付白米七合ツ、直段ニ而御売払被下候、大人三合宛、十五才以下合合ツ、之宛之由、其上之者へハ当時直段を以来二月中半銀、三月中半銀、無利息ニ而御借被下候趣ニ被仰出候

一 申十月十一日出立古川退四郎・辻半三郎兩人共京都御用向ニ付被罷登候処、兩人共御内輪之御取扱と有之

黒木綿之御紋付御綿入御頂戴被致候趣也

一 酒屋中へハ米式千表之米ニ而造り込致候様、其余ハ買候義不相成趣ニ被仰付候

一 同年秋分塩浜小路丹仲店ニ而御上様之製菓所初り、誰ニ而も商菓御売被下候也

一 十一月八日松本町油屋長右衛門大豆を他国へ拔出し致候ニ付、入牢被為仰付候

十二月二日右御戴許(裁)

一 同十一月三日分五日迄竹原松林寺ニ而、来酉年之御国成就之御祈禱有之候

長右衛門御領分払、家・穀物類厥所、諸道具ハ身寄へ被下候
問屋年番之者偽り申候ニ付 本郷屋源兵衛 金納屋六兵衛 嶋屋長右衛門

一 同十一月三日從御上様中難之者取調へ可申様、尤何職ニ而家内何

油長雇人欠脇丁之者拔出し手伝致候趣ニ付式貫文過料、廿五日

人暮シ、何才以下子供何人有之候哉迄書上ケ可申様、右ニ付米を御貸被下候趣之由、五人組ニ而取調へ宿老へ返事可致事

間入牢 齋藤仁左衛門大豆蔵出し致候ニ付十日間追込

外ニ甚五郎困窮ニ付喰番増上ケ呉候様頼ニ付、一統相談之上十

丁持八人三日追込、油長分丁持賃酒料取候分御取上ケニ相成候

一月朔日分月ニ壹匁ツ、遣し可申事、外ニ半氣毎ニ三拾匁(季)

ツ、町銀を以来年中遣し候様相究申候

一 申十月中頃大飯郡青野郷百姓共米価高直ニ付一揆を起し掛ケ、高

一 十一月八日町方年番・町宿老御呼出し、極難之者ハ御救粥被下候、

浜へ出可申様之廻章を認メ村々へ廻し候趣、中山寺分和多御奉行へ注進被致候趣、右ニ付夫々被召捕入牢致申候也、但シ九人斗之

由

問屋并ニ米屋中へ

一米価高料ニ付難渋人多人氣不穩、問屋中・米屋中ニ而米買締高直
 二致候様悪評申唱候へ共、飯料手支之様ニ相成候而ハ太切之事故、
 可成丈買込置人口防之為役場へ差出置可被申候、明キ蔵借入置入
 用之節ハ何時ニ而も相渡し可申候、津留メ中ニ者候へ共、飯料宛
 十分出来候上津出し被願候得者、時々御評義之上御差免可相成候
 間、精々買入骨折一己之隱置不申、役場へ被相届候様ニ可被致候、
 尤米価高直ニ不相成様骨折可成丈下直ニ売買可被致候、此段御奉
 行所分御沙汰も有之候事故申談候

十一月八日

町年寄

一申十一月九日米屋仲間米何程有之候哉取調へ申出候様二年寄共へ
 被仰出候間、中間一統呼出し吟味致候処、五拾七軒ニ而雜穀共メ
 式千三拾五表有高ニ御座候

町方御粥貰之者ハ除キ、其上之者難渋人へ大人^(マ)壺合三合ツ、十
 五才以下へ壺合五勺、直下ケ米壺匆ニ付七合之直段ニ而、風呂小
 路坂本屋家ニ而御壳払被下旨被仰出候、右者酒屋中へ三千五百表
 出候内を式千表ニ而作り込候様、残り千五百俵を町御役所へ初相
 場ニ而御取上ケ被成、右を直下ケ米ニ被為成下候事

右世話人川村清右衛門隠居 古屋文右衛門隠居 米屋五兵衛隠居

宇久屋長右衛門隠居 田村屋長次郎 和久屋三左衛門隠
 居 堀口次兵衛隠居 木綿屋七兵衛 木綿屋又兵衛 鍵
 屋庄兵衛

十人、十一月十八日分初り申候

右直下ケ米貰候、又其上之者へ者当時相場を以米壺表宛御貸被為
 下度候事、上納之義者来ル二月半銀、三月半銀、兩度ニ御取立ニ
 相成候事

町方一統へ

当時米価諸色格別高料ニ相成、御領分之内ニも自然食物ニも逼り
 極難之向も有之趣ニ付、御上分何卒一と凌相付候様ニ御取斗も被
 成遣度候処、下地御難渋之上当御役後追々不時御入用相重り如何
 共被成方無之、乍併下々極難飢渴之向ハ難被成御捨置義ニ付、甚
 御六ヶ敷御中御役人中ニも心痛被致無利ニ御繰合、少分之御救金
 役場へ御差出ニ相成候事ニ而、右を以差向極難之向相凌かせ候様
 可致旨被仰談候ニ付、極難之向へも兼而身柄之者分指出候施行米
 を以粥焚出し取斗、又直下ケ米差出し遣候得共、迎も右ニ而行渡
 り候様ニも不参候処、此度不斗御上分乍聊御救金御差出ニ相成候
 事ニ付、右金子を以米価買入直下ケ米粥焼出し方へ差入遣し候間、
 一統ニも当時体之処御救被成下候義を難有可奉存候、今日之姿ニ
 而ハ米価を初急々下落ニも相成間敷、右者諸国一同之義御上ニも
 被成方も無之、不及是非御時勢下末々迄奉恐察、大切之職業相励
 取続参り候様可致候、就而ハ申迄も無之候へ共相応ニ相暮候者共、

衣服・飯食ハ不申及專質素二省略致、聊二而も極難之向救遣候様
致度候事二候、是迄寄特之相立候者も有之候二付尚又申示候間、
右之趣末々迄不洩様相心得可申候

申十一月十九日

小浜
町奉行

但シ御奉行所始町年寄・小頭中へ常例之音信、当時之義誠二印
迄と被相心得手輕キ可被致候、難洪之向八年限を相立音信
御断被申達候而可宜旨、御奉行所之御沙汰二候

町年寄

町々宿老中

一同十九日晚本町吉野屋次郎兵衛方二博奕有之、同心衆踏込被成候
由、町方連中木綿屋作兵衛殿・升屋栄助殿・貝屋金七殿・本丁井
筒屋庄兵衛殿、外二在方式人有由
右之連中不残徒罪被仰付候

宿次郎兵衛殿へ八月十二日勤三ヶ年御扶持方式人有之候を御取上
ケニ相成、其上病氣引不相成候様、近所歩行たりとも半天を着用
之趣被仰付候、然ル処外ニ銀談事二付御役所へ上納銀有之、右之
銀子出来不申候二付申十二月二夜拔被致候而、跡厥^闕所同様ニ相成
不残御役所之御売払、家も御取上ケニ相成候由、家内之親類へ御
引取ニ被仰付候由也

一申十二月四日頃松本町絹屋又右衛門殿穀物他国へ拔出し之御疑掛

り入牢、同十一日二出牢致、同十二日五貫文過料、十五日之間戸
ノ被仰付候而相濟申候

一米・麦ハ外国人へ猥ニ売渡し候義難相成筈二候間、米・麦粉類
も同様たるへき所、右品是迄御買渡し候者も有之趣ニ相聞へ如何
之事二候、向後ハ米・麦同様相心得、交易品々取交売渡候義者致
間敷候、若心得違之者於有之者嚴敷可及沙汰候

十一月廿七日

右之趣従公儀被仰出候

權十郎
守

町触 直下ケ米御指出し被下候者共へ

油屋長右衛門大豆拔ケ出致候二付御領分払被仰付、所持之穀物類
御取上ケニ相成候所米・大豆少々有之、大豆ハ御用之飯料にも不
相成品之義故御米と取替ニ相成、不残難洪人へ御差出し被成候事
二而、当月廿九日・晦日両日者右取上ケ之米を被下候、且此度御
上様之御救金出候二付右を以米を買入ニ相成、正月元日之三日迄
御救之米を被下候間、都合日数五日之間ハ代銀持参ニ不及候
粥焚出し被下候者へ

是迄御指出し之焚出し者、身柄之者之指出候米ニ而御取斗ニ相成
居候へ共、当月廿六日之晦日迄ハ油屋長右衛門之御取上ケニ相成
候米を、壱人前式合ツ、之割合を以米ニ而被下候、正月元日之十日迄
日迄之処ハ此度御救金出候分ニ而御取斗ニ相成候、是又壱人前式

合ツ、割を以米ニ而被下候間、左様相心得可申候

但シ正月十一日今是迄通粥焚出し被下候

右之通御奉行所被仰出候間下末々迄不洩様可被申示候

町年寄

町々宿老中

此度御救金百八拾弍兩三部^(歩)一朱從御上被下候間、左様御心得

可被成候

直下ケ米御払之者へ

米会所来ル廿三日切年内者相休候間、廿三日今廿八日迄六日分一

緒ニ売渡し候間、其御心得ニ而代銀持参可有之候、廿九日今正月

三日迄日数五日分無錢ニ而被下候米ハ、廿五日於米会所相渡し候

間、銘々木札を以頂戴ニ可被罷出候、正月四日今是迄通於同所日

々売渡し可申候

右之通町々宿老中今木札人へ不洩様御通達可有之候

一 申十二月十八日頃塩屋町木挽惣八と申者、二鳥居町米屋長兵衛方

藏を切入込、鉄を取出し候処被見付、下山ニ被召捕色々詮義致候

処、是迄金源・三島・古川屋・鍵仁浜藏・斎藤同・食見屋同、諸

方之藏を切、米・油・苧杯を盗取候事及白状候二付、直様大津町

へ入牢致申候

右御戴許^(裁)西三月十九日朝死罪ニ可相成候処、当年者重キ御法事も

有之候二付、重キ入墨之上叩払被為仰付候

一 申十二月廿二日町中宿老御呼出し、町御奉行所御宅へ御請扣

当時米価・諸色共格別高直ニ而、下々一統難義之趣被為聴氣之毒

ニ被思召候処、此度御役知御加増被為蒙仰候二付、乍少分右御拜

領式万俵之内金三千兩、在・町家別割合を以可被下置旨被仰出候、

何卒一と凌相付候程被下置度義ニ候へ共、一統粗奉承知居候通御

役御入箇莫太之義ニ而、御行足難被成御事二付、聊之義ニ候へ共

右之通可被下置候旨被仰出候間、末々迄申通し難有可致頂戴候

申十二月 町奉行

右割合壹軒ニ拾匁ツ、被下置候

一同廿一日御家中様御一統御呼出し御金被下置候旨、御大身十三兩、

御小身へ五兩位、新格衆へ四兩位、御足輕衆へ金壹兩位、惣高七

千兩と申、都合壹万兩之由

申春早々大豆相場七升五合位、米七升五合位之処、当三月晦日未

ノ下刻ニ大雷鳴、間もなく大ひやうふり大サあひるの玉子之如く、

半時斗ニ五六寸曇り、誠事ニ恐敷御事ニ御座候、然ル処五月廿二

三日頃迄曇天・雨天続キ、其上舟間ニ而米払^(底)ニ相成候故、因州

米買入ニ参り申候処へ金納六へ入舟有之、因州米五升四合ニ出来

致、大豆六升四五合位ニ御座候、右之米刻合ニも可相成位之御事

ニ御座候、夫々追々因州米相廻り、六月中頃二者六升四五合位迄

下落致、六月六日土用五分迄ハ最上之天氣ニ御座候処、七日夕曇天冷氣、八日夕□ニ入十五六日頃迄雨天続ニ相成、七月中頃因州米ニテ六升壹合、大豆六升四五合位迄、塩越米七升貳合、塩四斗、小豆六升、六月廿日頃迄七月七八日頃迄天氣ニ相成候得共、何分夏中氣候不順氣故哉畑物不作、田作者大体ニ出来致候得共、芥入ニ相成候得共一向無数之趣、大体五六部之作柄ニ相成候趣、大豆・小豆類ハ諸国共大不作之模様ニ而、九月分段々上リニ而小豆六升貳合、大豆六升位、越後米六升位之処、九月末迄十月差入ニ至リ候へハ秋舟も無数候故、たま／＼少シツ、参リ候而大豆五升五合、新大豆五升貳三合、田辺米六升壹合、越後米五升五合ニ相成、十月差入迄大豆新古四升迄之商内、塩三斗五升分三斗迄、米ハ何分酒屋仕込時ニ相成候故追々買上ケ、地米七拾匁位迄商内有之候

文久期

一辛酉年正月十四日申刻ニ小地しんゆる

一二月十三日夜寅上刻ニ中地しんゆる

一同十四日申ノ刻小地しんゆる

一同三月十八日夕廿日迄八幡宮様ニ而御国成就之御祈禱有之候

一同四月廿五日志水林藏殿病氣願、養子悴万次郎殿へ家名相続之義被相願候処、則今日は迄林藏へ被下置候御扶持方十一人差上、悴万次郎へ永代三人扶持、外五人扶持一代切被下、諸役免許、足駄御免被為仰付候、隠居へ三人扶持被下置、格式是迄通被為仰付候

一昨年米価高直ニ付米屋仲間有米を吟味致候様ニ被為仰付候へ共、癸丑年出火後諸株とも御差留ニ相成、誰成共勝手ニ何職成共致度者勝手次第ニ商売致候様ニ被為仰付、仲間と申者無之事ニ相成居候ニ付、此末昨年通被為仰付候而も一向吟味等難取調旨申候而御願申上候処、右ニ付則今日左之通被仰付候

西四月廿八日

米屋共へ

米屋職之義者猥ニ相成候而ハ、有米取調へニ付差支之義も有之、其上願出之次第も有之候ニ付以来同職之内ニ而年番等代り／＼ニ相勤、不正之義無之様可取斗候、右ニ付別紙之通町中へ相触候間、左様相心得可申候

町触

米屋職之義ハ有米等取調へ筋ニ付、猥ニ相成候而ハ指支之義も有之候間、以来米屋職致度者ハ米屋年番へ申出、調印之上願出可致候

酉四月

小浜町奉行

〔朱書〕右之通米屋年寄共御呼出しニ而被仰付候間御礼ニ廻ル

町御奉行
武久権十郎様
安倍守様

町年寄
組屋六郎左衛門殿
西島又十郎殿

小頭
宮川柳七殿
田辺源次殿

〔朱書〕右之通年番も次付添為持遣候

是分仲間取究 新株願祝義金壹両、酒壹斗、外ニ壹両伝糸料

古株譲り祝義金壹両、酒壹斗

〔朱書〕右荒増取究申候

当時年寄 川村彦兵衛 米屋五兵衛

同 七右衛門 大北勘右衛門

古屋文右衛門 五人

一酉五月二日昨年分御上様直下ケ米御売払場所分御買入之間屋、蔵分米屋仲間分無賃ニ而持運ひ申候、為御会釈御酒料五拾匁仲間へ被下置候、但シ町御奉行所ニ而

同七日米屋仲間古株之者昨冬分当酉三月迄御直下ケ米持運ひ之者へ、谷口鍵藏宅ニ而酒飯取斗差出候て右之披露致申候、出入四十八人、酒式斗三升入用、料理壱人前式匁分ツ、

昨申年米価高直ニ付大飯郡青野郷ニ而徒党を致、高浜へ罷出候様ニ廻状を廻し掛候処、中山寺分和田御奉行へ注進致八九人被召捕入牢、酉五月御戴許

大飯郡横津海村徳兵衛へ申渡候

其方義難洪ニ罷在候ニ付麦・稗之類拜借致度候得共、壱人立歎願出候而も相聞申間敷、他村難洪人共一統ニ願候へ者叶可申と存、青村小右衛門へ及対談候処、昨十月同人分組内村々難洪人共打寄令相談候方可然申聞、廻文認メ呉候ニ付、右廻文中山角右衛門へ為持遣候始末吟味之上申達承之候、難洪歎筋も有之義ニ候ハ、銘々村役人迄可歎出之処無其義、他村迄も申通し村々廻文等相廻し候次第、徒党を企候筋ニ而、越境之次第二も可及も難斗不屈ケ至極之事ニ候、依之御領分払申付候、以来御領分中へ急度立入申間敷候者也

同郡青村小右衛門へ申渡ス

其方義難洪ニ罷有候処、昨十月横津海村徳兵衛分難洪願致度候得共、壱人立願候事も相聞申間敷旨令相談候ニ付、組内難洪人共一統分相願候方可然哉と存、廻文認メ徳兵衛へ相渡し候始末吟味之上申達承之候、難洪歎筋も有之候義ニ候ハ、銘々村役人共迄可歎出候処無其義、廻文等認メ指遣候段、徒党を企候筋ニ而、越境之次第二可及も難斗、取斗不屈至極之事ニ候、依之御領分払申付候、以来御領分中へ急度立入申間敷

者也

昨申五月頃納田庄之者打寄申候二付

次右衛門 八十右衛門
市左衛門 金右衛門 へ申渡候

其方義時節柄難洪罷在候処、田村孫右衛門分直下ケ米等相願
度趣及相談候二付令同意、孫右衛門ニ申含他村難洪人へ申通
し去ル五月薬師堂へ大勢打寄、其後上田村庄屋仁左衛門宅へ
も罷越候始末吟味之上申達し承之、難洪筋も有之候ハ、銘々
村役人共迄幾応も御歎出筈之所無其義、他村迄も申通し毎々
薬師堂へ大勢打寄彼是及相談、仁左衛門宅へも罷越候次第、
徒党等ニ取斗不届ケ至極之事ニ候、依之郡払申付候、以来下
中郡中者不及申御城下壱り四方へ急度立入申間敷者也

西五月四日

一五月十七日夜七ツ時小地しんゆる

西五月二
一灯油之義者往古分御国産之一種ニ相成、国々分桐実・菜種追々入

津も有之候処、近来国々ニ而油ニ絞候由ニ而油仕種入津少キ上、

当所之桐実・菜種等仲買致候者有之、他国へ売捌キ候趣ニ而弥当
所ニ而油仕種^(底)相成、油屋共及難義油絞数少く、夫故桐粕等
も自然無数、御田所肥し物払庭之道理ニ相成詰り御国損ニ付、向
後桐実・菜種等仲買之者分他国へ差出し候義堅く不相成候、并ニ

兼而相触置候通入津之桐実・菜種等問屋共之手を離、出買・直買
ハ不申及、在中へも^(マ)菓物之外諸色出買致候義堅く不相成候、万一
心得違之者於有之者吟味之上嚴敷可申付候

但シ本文之通郷中へも其手分被申付置候

一同五月廿四日夜五ツ時西津屋勘兵衛方へ博奕有之、同心衆踏込被
成候趣也

一六月十五日昼九ツ時小地しんゆる

一同十九日從御上様小盗人・火附杯有之趣ニ付、町内五人宛急度立
番致候様、尤四ツ過候ハ、無提灯ニ步行致候者を吟味致候様被仰
付候、則今晚分隣り明家ニ而五軒ツ、相勤申候

^(朱書)
「八月廿五日頃分廻り宿ニ相成四軒ツ、ニ而勤メル」

一同廿四日頃丹波かん林分納田終へ越候坂ニ山伏親子を差殺有之候
趣、納田終村庄屋分御代官江御達し^(検死)儉使ニ被參候

一同八月廿二日立ニ而御用所分京都御屋敷へ御金荷物参り候処、道
中坊村安藤正親宅ニ居候播州作次郎、金子三百両盜取逃去候、見
分次第申出候様人相書ニ而御触廻ル

一同九月十八日夕西舞台ニ而大坂分浄るり来ル、太夫五人、三味線

三人来ル、十五日之願、勝太夫・津賀太夫・ちやり語(茶利)・常盤太夫、

越太夫(朱書)

「是忝人上也」

一十月二昨年青野郷噺訴候ニ骨折高名致候者、関屋村六郎左衛門式人扶持被下置候

中山地藏院様大幅狩野家掛物一幅、若さ絹疋被下置候由、三ツ松村庄屋御紋付麻上下被下置候由

一西十一月十一日辻半三郎殿御上様へ金千三百八拾両、外ニ是迄御用所へ六百廿両□□調達有之候

都合式千両、外ニ米五百表社倉米共被差上候ニ付、則左ニ右御会釈被下置候

同十五日五ツ時町御奉行所ニ而御呼出し有之

永代十人扶持、帯刀・町年寄格・裏地免許・名披露被為仰付候

〔右ニ付三本入扇子箱一・諸白式升切手祝ニ遣申候〕(朱書)

一当夏以来分丹ば屋宗兵衛殿京都御拝領地面ニ御普請ニ付、格別骨

折出精致候ニ付、十一月廿一日於京都永代免許三人扶持被下置候

〔右ニ付式本包扇子・諸白式升切手・絹池之坊鶴之画掛物地毡〕(朱書)

枚祝ニ遣し申候、京都分土産ケ両度到来ニ付右之通祝遣候

一極月二日米手形御役所ニ而 小森六兵衛へ御談示

其方義従来病身ニ罷在候処、追々多病ニ相成候ニ付弟善介へ家督相譲り致隠居度、依之御用達代御免被為下度段相願承之候、右ハ無余義相聞へ候ニ付願之通申付候、是迄被下置候式拾表可差上候、長々相勤太義之事ニ候

小森善助へ

其方義役所御用達代役当分雇申付候、依之為給米御米拾表被下置候、勤筋入念可相勤候、但し勤方之義ハ本勤同様可相勤候

西十二月

〔同六日ニ善介義六兵衛ニ改名、誓紙血判相済申候〕(朱書)

一去ル巳年ニ御警衛ニ付御家中・御足輕・町方御扶持人迄百石六表ツ、割を以御借米有之候処、酉極月廿日ニ御扶持人御触有之候、昨年御役中式万石御加増ニ相成候間、御借米御免被成下候旨被仰出候

一西十二月廿日三方郡之者宿安居町鶴田屋ニ泊り居、御用所へ可相納金子七拾兩余、右善太夫姿を替御用所之中間体ニ成、語りを申右金子を盗取候処、翌廿一日大津御番所ニ而御詮義有之、右を及白状候趣ニ付右善太夫入牢致申候

一 戊二月四日初午、酒井豊後様稻荷様御勸昇(請)分五拾年ニ相成候趣ニ付、作り物色々御拵被為遊、尤老若男女参詣御免被成候間、四日・五日夥敷拜見ニ参り申候、さい銭無用并ニ御庭分御座敷拜見

一同暮六ツ半時小地しんゆる

一同九日町中宿老壹人、組頭貳人ツ、町役所へ御呼出し有之、御談示写

此度諸色直下ケ之義別紙之通従公儀被仰出候間、御地頭々々ニ而嚴敷御世話有之候事ニ候間、末々迄銘々得与勘弁致、一己之利潤を不貪、相当之薄口銭売徳ニ而正路ニ商ひ可致候、尤当所斗之義ニも無之世上一統之事ニ者候へ共、御国産之品ハ尚更之義ニ而、仕込元ニ而精々骨折下直ニ卸可遣候、仲買又ハ末々之商人共も仕込元へ御触面之趣を以掛合、成丈ケ下直ニ買入薄口銭ニ而売捌キ可申、是迄も代呂物我勝手ニ入候所存ニ而直段セリ上致、相對之者も有之哉ニ相聞へ不宜事ニ候、中ニ者骨折薄口銭ニ而売買致度心庭(底)之者有之候而も、外分彼是申立候者有之候ニ付、下直ニも難致様之味も可有之候、左候ハ、自他之無差別其趣早速可申出候、又直段下ケ候而も、品物省(劣)り候而ハ直下ケ之甲斐も無之候間、自他共仕込元へ示談之上品物不省様致可申候、此度之義ハ従公義嚴敷被仰出候事ニ而、御領主・御地頭之御越度ニも相成候趣ニ候得者、万一不正之商等致族も於有之ハ難捨置、無用捨嚴重ニ可申付

候間、末々迄心得違無之様致御国恩大切ニ相心得被仰出候、不省様精々勵合厚風俗ニ復シ、品物入念下直之売買致可申候

但し去ル午年以前之諸色直合何程、當時之直合何程ニ申義を商人共分逐一当月中ニ書出し可申候、其上ニ而尚又可申付義も可有之候

戊二月

御触届

近年米穀諸色共高直之處、去ル申年違作ニ付際立直段引上ケ下々致難義候趣相聞へ、当年ハ米穀を初豊熟之品ハ追々相場も下落致候間、右ニ准シ夫々引下可申候、一旦直段引上候品者容易ニ引下ケ不申、何品ニ不依高価ニ売出し候趣相聞へ不埒之事ニ候、追々諸色高直ニ相成候而ハ、詰りハ世上一統之難義ニ相成候事ニ候間、御国恩ヲ相弁へ此上精々直段引下ケ候様可致候、尤直段引下ケ候迎品物を劣らせ候義等決而不致、元直段相当之売徳を以正路ニ渡世可致旨、造元・仕込元始問屋・仲買末々迄商人共ニ至迄嚴重ニ可申付候、右之通申付候而も尚不引下候ハ、其筋ニ遂詮義、不直之売買致候者於有之者無用捨吟味之上嚴重之咎可申付候、右之趣ハ国々江も抵候間、仕込元直段引下ケ不申、或ハ買メ等致候者有之候ハ、其筋之商人共分可訴出候、打捨置候ハ、是又可為曲事候、右之趣相抵候間私領内国産物有之面々ハ、元直段引下ケ方之義其領主・地頭分精々遂吟味可被申付候、若此上元直段不引下ケ又ハ

不正之義も有之趣相聞候ハ、領主・地頭之可為越度候間厚く可被申候

右之趣従公儀被仰出候 戌二月

一 戌四月十九日町役所へ火消大世話人呼出し有之、先年異国舟参り

候ハ、東・中正誓寺揃浜へ罷出候様ニ申為置候得共、年数も相立候事故此度相改下馬前へ罷出候様被仰付候

堀口・手前兩人へ米手形御役所焚出し方被仰付候、人数之義ハ六拾人余と被仰付候

一 戌五月朔日町老衆の御免許御用達共の殿様御武運長久之御祈禱四社様へ参詣有之候

名代悴喜三郎遣し申候

来ル四日御札納御免許代河村平兵衛殿、御用達之番川村彦

兵衛殿

〔但し袴羽織ニ而右入用五匁四分四厘出銀申候〕
(朱書)

一同十三日朝五ツ時小地しんゆる

一 五月中頃今京都麻疹流行致、諸国一統小兒ハ手軽く致候得共、大人ハ余程手重く、中二者不養生致候者追々死去致、当所ハ六月上旬下旬ニ至り大流行、七月中一面ニ相成申候、先年ハ格別養生

も手軽く候へ共当年之はしか者甚六ケ敷、少し不養生致候へハ直様跡戻り再発致、七十五日之養生無之候半而ハ不相成事ニ御座候、文政七甲申年麻疹流行今当年迄三拾九年ニ相成、次ニ天保七丙申年流行今廿六年ニ相成申候

一 九月六日辰刻小地しんゆる

一 九月廿五日赤木次左衛門祖父追善於本境寺有之、扇子壺本番組配り候ニ付、米札式匁包手前・喜三郎同道ニ而見物ニ行

本能経政半部 景清

舟弁慶

赤木先生 赤木子九歳

狂言、鞆猿・苞山伏・吃り、外ニ仕舞式番有之候、メ、四ツ時ニ

初り夕方ニ相済申候

一 十月廿四日辻半三郎殿壺万両余之交易被致候て、米手形役所ニ而

御祝有之、則御用達中御酒被下候へ共、手前ハ親父(祥)怛月命日ニ付

断申候

同廿六日辻半(一カ)米銭□山へ御酒被差上候ニ付御相伴ニ罷出申候

一 十二月廿五日町内和久屋市兵衛在方へ付米売払付不渡候ニ付、夫々仍願今日入牢被仰付候、居宅付立ニ相成申候

〔町内之者正月礼式麻上下ニて是迄通致申候、加戸筋り丈ケハ(朱書)〕

遠慮致候

亥十月二御領分払被仰付候由

一十二月廿二日町御奉行所へ御免許御用達町中宿老老一人宛、惣代老一人付添五ツ時御呼出し有之、御談示扣

御勝手向之義付而ハ先年来万人講を初御掛金・仕法講等数々申付有之処、京都御警衛并ニ再度之御役御勤ニ付而ハ莫太之御入増ニ相成、何分御不手繰ニ而御違約而已失御信儀候次第及深御配慮被遊、毎々御沙汰も被為在候折柄、当四月已来京地騒敷義

ニ付而ハ指掛り多分之御入箇、不得止御領分一統へ有志之者へ出金之義御用人中分訳而及頼談候処、御時勢柄奉恐察夫々志を立致出金候段寄特之事ニ候、右力を以御急難御取続キ相成、於御役人共ニも深く忝存、右追々之次第逐一御上へ申上候処、從來御不儀理相成居殊ニ当事世上不穩別而不融通之折柄、御上御急難之程太切ニ存上、一統不一方志を立、下地之御儀理合ハ指

置不取取出金致呉候段、流石ニ御領分頼母敷事と深く御満足思召、此度御代も被為替候義、別而厚く取扱候様訳而被仰出候得共、一統兼而承知之通御退役、京地御引払、引続キ御家督と申様之義ニ而、夥敷御入箇如何共難致次第ニ而、思召通りニも取斗兼候段御役人共ニ有之深く恐入心痛罷在候、当御時節を以思召入之処御取扱も可有之候へ共、此度之処者思召入之趣為申聞一礼申述候迄、仍之誠ニ御寸志之義ニ候得とも、老町へ御紋盃

老ツツ、一統へ御酒・鯛被為下置候間、祭礼等一統打寄候節右御紋盃ニ而相祝、思召入之処難有頂戴可仕候、猶又御代替り之義此後も不相替志を相立呉候様兼而頼入置候、右之趣末々迄不洩様可申聞候

小浜町奉行

一文久三癸亥年正月ニ御用所来ル十七日分御城内ニ相成候間、御用有之向ハ十五日迄二名前書を以被差出候様被仰付候

一同廿二日頃江戸表ニ而麻布御寺御警衛被為蒙仰候

一亥二月五日根来村蔵切死罪、鶴田屋兄キ叩払之上御領分払ニ相成申候

一同六日昼時分大南風八日夕方迄吹通候、古今稀成大風、諸方屋根をまくり大破ニ御座候

一同十八日大工仲間依頼作料三匁五分ニ相成候、外五分酒料合四匁ニ相成申候

日雇酒料込三匁、左官四匁ニ相成申候

一同廿日斎藤仁左衛門町御奉行所ニ而思召有之、御用達役御免被仰

付候

一同廿一日曉六ツ時二齋藤仁左衛門并二祖母・親類中御呼出し、町御奉行所へ

齋藤仁左衛門へ申渡ス

其方義怠家職耽遊興多分之令散財候趣相聞へ候二付、旧家之上先代寄特相立候者之義、難捨置故申示候義も有之処、却而令増長祖母并二親類共之意見も不用、且対他人無礼法外之致方毎々有之哉二相聞候、如何之事二候、依之嚴重二可申付処存寄も有之二付、以用捨禁酒之上慎申付候、急度相慎可罷在候

別段

向後家事取締之義、其方祖母并二親類共之任差図二可申候、右二付諸帳面・金錢証文并二通等迄不残祖母并二親類共へ相渡し可申候

齋藤仁左衛門祖母・親類共へ

齋藤仁左衛門義怠家業耽遊興多分之令散財候趣二付、禁酒之上慎申付候事二御座候

右之次第二および候迄不取締之段不念之事二候、以来祖母・親類共申合万事取締相付候様取斗可申候

亥二月 小浜町奉行

鶴田屋善太夫へ申渡ス

其方義一昨酉年十二月廿日、金山村源兵衛可致上納金子七十一兩壹部三朱と錢八十四文倒取、内式両式部俵屋しけへ預ケ置候段、吟味之上及白状不屈至極沙汰之限り義二付、死罪可申付候処格別之以御憐愍入墨・敲之上御領分払申付候、以来御領分中へ急度立入申間敷候

御触

一式匆式分 大工・木引作料

一三匆五分 右同断、弁当付

右之通大工・木引共今仍願、当亥年中作料直上ケ其手支配頭二而聞届ケニ相成候間、心得申入置候間早々組町へ通達可有之候

亥二月

町年寄

一三月四日町中宿老老人、組頭老人町役所へ御呼出し有之、御談示扣

支配下一統へ

衣食住共奢侈無之質素節儉相守古風ニ立戻り候様被仰出、天保十三寅年四月申付置候処、年数相立中二者心得違之者有之哉二相聞へ候間、寅年申付候通尚又相心得可申候、婦女子杯ハ別而流行之衣類二目も付易ク、親々ニ有之而も人精^(情)ニ流レ、分限不相応之衣類着用為致候様相成、終二者一体之奢侈弊風と相成、難洪二而も世間之振合ニ准シ候半而ハ外出も難致様ニ成行、難洪之者弥難暮

相成候間、福祐之者も御法度之品ハ勿論目立候品、高料品等相用申間鋪候

一嫁入等惣而大勢打寄候節人并(並)二不負様之衣類致着用度義、婦女子之常情二候へ共、右人情二流レ候而奢修之風俗ニ相成指支候間、父兄ニ而右申付候心得を以取斗可申候、嫁入等ハ一生一度之晴ニ而、分限(杯)一盃美麗致度義無余義筋二候へ共、後二者增長致自然外并ヲ見合、無利成拵・振舞等致候而ハ不相成候様ニ成行支ニ相成候間、勝手不宜者ハ勿論之義、勝手宜敷者も高料之品、且目立候様之品等相用申間鋪候

一振舞・参会者勿論平常ニ而も飲食次第ニ致增長候趣相聞へ候間、兼而相触候通質素ニ可致候、振舞等ニ而も勝手宜敷者も致馳走候得者、勝手不宜者ニ而も美味珍敷物等不指出候半而ハ人情不相濟様存、自然と奢り致增長候様ニ相成指支候間、勝手宜敷者も質素ニ可致候

一婚礼整候当日々三日之内、悦ニ参候者へハ親疎之無指別多人數へ酒肴を振舞候弊風押移り、多分之入用有之趣、右等も不事事ニ候間無用ニ可致候、右様弊風之為ニ一生之大礼世間へ押晴難整候ニ付、世間へ隠シ窃ニ整候者も有之哉ニ相聞へ歎ケ敷事ニ候、衣食之類成丈ケ質素ニ取斗、親族打寄陸敷礼式相調へ候事ニ致度候
一新喪之節近親之者相互ニ夜食相送り候義致增長、珍敷物を取寄多分之失墜有之哉ニ候処、火災後相止候模様候得共、自然致增長候而者不宜候間、以来相止候様ニ可致候

一寄合初惣而打寄候節飲食筋致增長雜費多相掛り、中二者難義之者も有之趣相聞へ候処、是又火災後ハ致省略候趣ニ候へ共、致增長候而ハ不宜終二者弊風と相成候間、飲食を初惣而失墜無之様可致候、寄合初当り候者有之、手前分不馳走難致味も有之、兎角難相止候事ニ候へ共、町内或ハ諸仲間等嚴敷法を相立迷惑ニ不相成、宿ニ当り候者も勤能様取斗可申候

一家居普請等之義も火災後大二質素ニ相成候様相聞へ候へ共、是又結構奢ケ間敷義無之様可致事

一惣而御為筋之義不寄何事無遠慮可申出事、右之通申付候上ハ精々心得違無之様、親類・五人組互ニ心付合、弊風ニ不泥質素ニ相立歸り候様可致候、身躰宜敷何角も自由出来候者ハ右申付不心服ニ可存哉ニ候へ共、勝手宜ニ任セ奢り致增長候而ハ外ニ迷惑ニも可相成、夫か為弊風も出来候而御政事之御支ニ相成候間、申付候通相守、可奢余財有之候ハ、難洪人救遣候様有之度候

一質素と吝嗇と紛敷人口防キ之為ニ、世間之付合致增長候筋も有之候間、吝嗇ニ無之義ハ難洪人救之手際ニ而相分り候義候間、不省他質素ニ致難洪人等救遣候様可致候、万一心得違衣食住之内奢ケ間敷義有之、猥り致散財候者有之候ハ、嚴重ニ申付、又ハ難洪人為救候義も可有之候間、兼而左様相心得可申候事

一惣而出買御法度者是迄毎々相触置候処、今以心得違之者も有之哉ニ相聞へ如何之事ニ候、以来急度出買致間敷候事

一蛇ノ目傘相用申間敷候、并ニ頬被り致婦人前だり致候儘御家中徘徊

御致間數旨兼而相觸置候処、中二者心得違之者も有之哉二相聞候、以来堅く不相成候事

一 町方婚禮相整候節石を打、水祝義・樽入等之義御法度ニ付毎々相觸置候処、今以不相止趣相聞へ如何之事ニ候、天保五辰年三月嚴重ニ申付候通り主人・親々之越度ニ候間、子弟・召仕迄嚴敷申付候様可致、万一心得違ニ而石打致候者有之候ハ、御掟之通頭取候者并ニ同類、且ハ石打不指留致見物候者、夫々其科ニ応し過料取上ケ手錠可申付候、条々左様相心得可申事

一 火之元之義ハ毎々申付候通大切ニ可致候、火取扱不宜者有之候者近所互ニ心付合可申候事、綿打候者夜灯相用申間敷候、若心得違之者有之候ハ、近所互ニ心付可申候、風立候節杯町々自身番別而無懈怠火之元用心第一可致候事

亥三月

小浜町奉行

一 亥三月十二日・十三日西津弁財天様七年祭り、十三日能、米手形御役所^(一カ)山見物ニ御出ニ付、御用達一統御相伴被仰付候、并ニ古河氏へも参り酒出申候、色々芝居狂言有之候、来ル十五日御姫様古河氏へ御出被為遊、右芝居御上覽有之候

一 四月中頃町御奉行安倍守様宮津表へ台場御見分ニ御出勤ニ付、仮役小畑様へ被為仰付候

一 同十七日八ツ時頃越前御家老松平主馬様・側用人酒井重之丞様・御用人松宮田部様右御三方御出浜

宿妙光寺・蓮光寺・立光寺ノ三ヶ寺へ被仰付候、亭主役辻半三郎・木綿屋伊兵衛・野田宗兵衛・三島孫右衛門・木谷嘉四郎
右十八日三浦様御宅へ御出被成候、十九日朝当所御役人様方御宿へ御出被成候、御馬ニ而三浦様・安倍様・深栖様・坂様・都筑兵右衛門様・村松様、御家老・御年寄・御用人ノ六人様御出被為遊候、廿日朝立越前御方様御帰り被為遊候、亭主役遠敷迄送ル

一 同七月廿七日晩町内ニおどり致申候、入用凡百五拾匁斗

一 同八月御触

御上様御為筋者勿論町方繁栄之筋、又者は迄仕来り之弊風も有之指支之義者、何事ニ不寄銘々思惑通り無遠慮書取を以可被申達候、若又あらわに申出かたく事柄、印封ニ而被指出候得者他へ不洩様御奉行所へ御直ニ披キ被成、筆者之名前不知様御取斗被下候間、町年寄・町番所両役所共是迄之通り取斗方一統指支之義有之候ハ、是又無遠慮可被書出候

町年寄

一 同廿八日丹ば屋次右衛門殿老年ニ付先達而隠居願出候処、則今日願之通隠居被仰付候、長々勤功も有之候ニ付存命中二人扶持被下

置候、御談示之扣

米手形御役所
丹波屋次右衛門隠居へ

次右衛門義近年損失打続キ、其上及老年候ニ付家業万端悴忠次郎へ相譲り、御用達御免被成下隠居仕度願出候ニ付、則於町奉行所ニ願之通申付、直ニ悴忠次郎へ御用達被申付候、次右衛門義数年出精相勤勤功も有之、其上当番刻限無遅滞罷出実体ニ相勤候段奇特之事ニ候、仍之是迄被下置候御加扶持式人ハ次右衛門存命中其儘被下置候、残ノ三人扶持ハ指上可申候、尚此後も忠次郎指支候節ハ罷出御用向相勤可申候、忠次郎義御用達相勤候内者失墜も可有之候間、勤中三人扶持被下置候、諸事仲間申合念入相勤可申候、此段申談示候

〔朱書〕

右ニ付御役所一山十月廿八日大振舞有之、御用達中御相伴ニ罷出候、献立略之

一 九月十二日八幡神主死去ニ付弟渡辺主税と改名披露有之候

一 十月廿八日於御作園場町方御免許惣代忝人、御用達惣代忝人、町々宿老忝人ツ、郷方庄屋忝人、組頭忝人御領分中御呼出し有之、御年寄・御用人御列座御年寄様御談示扣

領分之者共一統へ

勝手向難渋ニ付而者領分之者共是迄調達等骨折具、殊ニ昨年来格段令出精奇特之者多有之趣委細承之満足ニ候、近年臨時之入箇多

今日ニ而ハ必至と指詰り、取続キ方も無之趣役人共申聞深心痛せしめ候、此上者上下一致一和之力を以取続キ候より外無之、猶又一統へ精力頼候間、取続キ之道相立候様骨折具度頼存候事ニ候

亥十月

一 十一月十三日頃夕雪降、是下雪ニ相成申候、同廿五日晚・廿六日・廿七日・廿八日迄ニ凡五六尺余積り、皆々雪おろしニ掛り、十一月晦日取引そこくニ而、此度ハ大雪ニ而雪留を切、針かね・宮の越繩夫々之雪留を切、雪ずり致候故瓦大破ニ損し御座候、一統之痛不大方大変之事ニ御座候、手前共も右同様ニ而雪留を切申候て瓦凡百枚余痛、其外とひ請筒類大痛也、十二月三、四日頃瀬戸之雪を上田明地面へ、出入之者を雇持行捨申候、町内中右同断上田地面山ノ如くニ相成申候、御領分中在々寺々之痛不軽事ニ御座候

一 亥十二月廿二日古河退四郎様調達等御骨折ニ付、大小縁頭（煙筒）・木綿之御時服御拝領被遊候

一 同日辻半三郎殿右同断ニ付、黒羽二重之御小袖忝被下置候、一代切御紋付御合印御免被遊候

一 同廿八日野田宗兵衛殿式百両献金ニ付、是迄被下置候御扶持方之

内三人永代并二麻上下被下置候

一同日鍵屋仁左衛門殿百廿兩献金二付詰役御免許被仰付、御紋盃被下置候

一御家中様へ御談示御勝手方御六ヶ敷二付、来子二月今百石二付十五俵ツ、御借米被仰出候也

一十二月十七日町中宿老耆人、組頭耆人町役所へ御呼出し御談示之扣

賭勝負之義者人情すぎ好候者にて兎角制しかたくもの二候、然ハ此度相触候も人々好ミ慰候事をあなち意地あしく妨候訳二者無之候へ共、嚴敷相触候主意左之通にて、一統之為ニ相成候様ニト苦心之余りより之事二候間、何分ニも厚く勘弁致、宿老共ハ申ニ不及、一統之者も此辺之義ニ付尚心付之筋も有之候ハ、無伏臆申出候様致度候

一博奕者差而大悪事と申程之義二者無之候へ共、風与右ニはまり候へハ何ニ易^カられす面白キ趣ニ而、覚得す知らす心すさミ、第一銘々家業ニおこたり、夫分して段々と不埒之心ニも生し自然大胆ニ相成、人ニ対し不人情之事何共不存様ニなり行、不義不孝之行迹^{フルマイ}ニ及ひ、あげく二者火付・盗賊・人殺し大悪事をも仕出し候事ニ而、誠以風俗害し候根本ニ付、不及なから別紙之通嚴敷相触候事

二候、訳而一分之物好きを以申示候訳二者無之、近頃恐多き事ながら古ニ無此上御仁心難有、権現様ニも博奕之義ハ御嚴重ニ御制度被為在候者、全く右様之処分御事と古老之物語りも承及候、右等之義者愚昧之我等事新しく申ニ不及、宿老達二者あく迄も承知之事二候へ共、此度不省^肖之我等各々之上ニ立、何卒一統之為ニ相成候様ニと心配致候趣意右之通ニ付、支配一統之者共悪からず汲取呉候様致度候間、宿老ニ而も何分ニも其所得与汲取、末々迄其趣意合点致候様呉々宜示貫度、此段頼入候

亥十二月 省吾

宿老中

町触

年々春ニ相成候得者親類ハ申不及、友たち・心安き者等互ニ打寄遊ひ候者其筈之事二候、併是迄兎角福引・宝引・花合等彼是名目を付、博奕ニ紛敷所業致候者も有之趣ニ相聞へ如何之事二候、此後右様之義堅く致間敷候、若令心得違博奕ハ勿論之事、紛敷義ニ而も於致而者無容赦急度相糺嚴重ニ可申付候間、後日ニ至り後悔致候共難及事ニ付、能々相心得相互ニ心付合急度相慎可申候
右之趣町中末々迄不洩様可被触者也

亥十二月 町奉行

絵、小供もて遊び等商候者誰ニ不限、博奕ニ用候かるた・さい其外花合かるた類、且惣而博奕ニ紛敷事ニ相用品、是迄買取込・仕込有之分不残町役所へ指出可申候、尤夫々直段付致可指出候、且

是迄売残りニふるび候品をも不残可差出候、右相触候趣万一不相用、さい・沓ツかるた沓枚ニ而も隠し置後日ニ露頭ニ於者、嚴重ニ可申付候間心得違致間敷候、尤只今迄之所何程多分仕込置・買取置候共聊咎之沙汰ニ不及候間、其段ハ無懸念可差出候

一 町中一統是迄博奕かるた其外花合かるた等、惣而博奕ニ紛敷事相用候品所持之分、新・古共不残町役所へ可差出候、尤右者は迄誰々之所持と申義相知候てハ不宜候間、夜中町役所前ニ箱をも出置候、十二月十九日夕廿三日迄ニ右へ入置候様ニ相触候も、其辺ハ可然様ニ可被取斗候、但し銘々ニ焼捨又ハ海・川へ取捨之義者勝手次第之事たるへく候、右取斗相触候後、町中ニ於ハさい沓ツ、かるた沓枚ニ而も隠し置所持之者有之者、如何程歴々由緒有之者ニ而も聊無容赦嚴重ニ可申付候間、後日ニ後悔無之様精々申示置候様可被致候

亥十二月

町年寄

元治期

一文久四甲子正月十四日夜四ツ過時ニ、町内鍵屋八右衛門宿ニ而博奕致居候処同心衆踏込被成候連中

下市場煙八兄キ、安居丁井市兄キ、達磨小路紙五兄キ、塩浜日比

野伊兵衛兄キ、安良町嶋莊、大ツ町丹半兵衛ノ六町掛り、紙五兄

キ其夜出奔致申候、同十九日町御奉行様へ御呼出し、不残入牢被為

仰付候〔朱書〕「連中二月五日出牢、宿ハ二月十五日出牢致申候」

三月十一日博奕御戴許有之候、宿六日徒罪、三ヶ年五拾貫文過料、

連中六日、一ヶ年二貫文ツ、過料、宿之町宿老七日閉門、組頭組

合十日閉門、兩隣り五百文ツ、過料、改役七百文過料

一同廿日町年衆ノ町中之地面改絵図調へ候様ニ被仰付候

一 二月廿八日献金被仰付候、堀口清太郎・手前と同断八人扶持・御時服〔頂戴〕丁大、式千両献金之処也

〔朱書〕「新調達百五拾両、当金三百五拾両」

一 四人扶持、今在家丁地続三拾坪 川村彦兵衛〔朱書〕 夫代免許

一 式人扶持、夫代免許 食見屋弥兵衛〔朱書〕

〔右同断〕

一 右同断 絹屋又右衛門

三月四日跡献金御会講

〔朱書〕「調達五拾両、当金式百五拾両」

一 三人扶持被下置候 木谷嘉四郎

〔朱書〕「調達式百両、当金三百両」

一 四人扶持、高足御免 吉岡屋喜兵衛

〔朱書〕「調達三拾両、当金百廿両」

一 一人扶持、高足御免 西野兵助

〔朱書〕
〔当金貳百五拾兩〕
一 式人扶持、高足御免御紋付 西津屋三右衛門
〔朱書〕
〔調達廿兩、当金百兩〕
一 壹人扶持、壹ツ盃 丹後屋安兵衛

〔朱書〕
〔調達貳百兩余、当金貳百拾五兩〕
一 三人扶持、高足御免 木綿屋久左衛門

〔朱書〕
〔当金百兩〕
一 夫代免許、御上下 滝三右衛門

〔朱書〕
〔同断〕
一 同 藤屋甚兵衛

〔朱書〕
〔調達五拾兩、当金貳百兩〕
一 式人扶持、高足御免 古川屋久右衛門

一 同三月十二日夕十六日迄谷田部村谷田寺開帳有之、天氣統殊之外

賑ひ申候

一 同十四日・十五日永三小路市塔様供養有之候、右同断

〔朱書〕
〔御台場〕

一 昨亥年夕町御奉行様御支配ニ而川崎町浜之海を築出しニ相成、右

埋立坪数凡千六百坪、深サ三尺平均、町方一統へ被仰付不容易埋

立、右ニ付御免許御用達、其外身柄之者六拾人斗右世話人被仰付、

晴天三月廿二日夕砂持初り申候、砂取場御城裏并ニ土橋下脊ヲ取

埋立候事相成申候、町中半分ツ、罷出申候事ニ相成、町々出候建

物職杯を立賑ひ申候

〔朱書〕
〔御台場惣坪数貳千八百坪ニ相成申候也〕
初り三月廿一日夕、廿三日、廿五日昼夕、廿六日、廿七日、廿八

日休、廿九日、晦日、四月朔日迄、〔朱書〕
〔二日夕六日迄休〕、四月七日

夕初り、八日、九日、十日、惣出メ十二日出勤致無滞埋立申候

〔朱書〕
〔十日ニ埋立致候間場所ニ而御酒肴世話人一同へ被下置候〕

右人数町方手伝壹万八千人、外ニ土俵五千俵入、日雇人数雇有之
都合貳万人余、諸仲間夕手伝銀色々土俵指上申候

一 御用達中夕三貫匁古川氏共十五人割、壹人前貳百匁ツ、御手伝

一 御免許中夕土俵千俵指上申候、廿四人割同十一匁六分七厘ツ、

御手伝 〔朱書〕
〔代壹貫匁〕

一米屋仲間夕土俵三百五拾表 〔朱書〕
〔人足壹人ツ、出、たわら六ツツ、持出し、
昼迄ニ拵候て昼後砂持致候〕

一 町内へ若者を出し候分日数七日銘々弁当也

一手前世話人、毎日陣笠白ぱつち羽織ニ而、昼銘々弁当下宿菊又、

跡ニ而礼致、金壹両割七匁ツ、掛ル

〔朱書〕
〔夕右世話人左之通役割也〕

相談方

辻半三郎
大北勘右衛門

御奉行様付藤崎仁左衛門

町老衆付古川屋久右衛門

用事取次

野田宗兵衛
石野五郎兵衛
木谷嘉四郎
木綿屋伊兵衛

道具方

川村七右衛門
同 原兵衛
志水源兵衛
石田左兵衛

買物方
人足着□

川村彦兵衛
丹ば屋次右衛門
西津屋三右衛門

堀口七兵衛

木綿屋久右衛門

吉岡屋喜兵衛

休足世話人

窪田手間之介
三しま孫右衛門
林屋安兵衛
米屋長兵衛
丹後屋安兵衛
樽屋孫右衛門
大屋長兵衛

埋立
世話人

堀口次兵衛
金屋源七
和久屋三左衛門
木綿屋義介
釘屋太七
小物屋勘兵衛
鍵屋原右衛門
梅屋喜助

橋詰世話人

田村屋長次郎
井筒屋又右衛門
嶋屋長左衛門
丹後屋伊兵衛
食見屋藤兵衛

大黒屋勘左衛門
塩屋宗兵衛

丹ば屋利兵衛

食見屋弥兵衛

板屋市兵衛

油屋源兵衛

和久屋宗兵衛

舟積

土取場

西野兵助・木谷源七
石の与兵衛・板屋又左衛門
吹田孫右衛門

同□取場

中村屋嘉介・絹屋又右衛門
井筒屋七右衛門・木綿屋作兵衛
平の屋七兵衛

往来世話人

松本利兵衛・滝三右衛門
木綿屋五兵衛・升屋宗左衛門
日笠屋九右衛門

〔朱書〕
六拾人

三月十五日夕郷方中へ頼上人足被仰付、五月九日夕御家中様方砂持初り申候

〔朱書〕
〔○〕右世話人一統へ丙寅年十二月廿六日御酒・御吸物被下置候、

右八時節柄ニ付料ニ而老人前三拾匁ツ、被下置候也

〔朱書〕
〔元治元〕

一甲子三月廿一日都筑外記様御調練勢浜ニ而有之、凡六百人と申事也、与七郎様御上覧被為遊候、御帰りニ町浜ニ而御鉄炮有之候

一同五月七日人別改有之候 東^{本町}魚屋丁 中^{今町}上小路 西^{青井}文珠丸 六町有之候

一同節句後夕川崎町重田卯右衛門・野田隠居、并ニ食見屋弥兵衛・木崎六兵衛杯御家中様方之二男・三男夫々宅へ御出、不正之者故首を取杯と噂致候ニ付、右之人皆々隠れ候故毎々御出之趣ニ相成

候間、尚更恐事ニ思ひ弥々内々不居申、若士衆三五人連ニ而昼夜之わかち無之歩行被致候故、町方ニ有之候而ハ弥今ニも討殺れ候様ニ申唱誠事ニ人氣不穩候ニ付、則五月十五日町奉行江口様御目見得有之御左之通御談扣

支配下一統へ

諸色直下ケ之義一昨戌年別紙通申付候処兎角高直ニ相成、世上一体トハ乍申御国産之品者尚更之義ニ候間、弥以正路之薄口錢ニ而売買可致候、若心得違ニ而一己之利潤ヲ貪過分之口錢を取候者於有之者、吟味之上急度可申付候、此度之義者御重役分訳而御談之次第も有之、右等吟味筋其手へ申付置候義も有之候ニ付、万一心得違之者高直之売買致候而者、都而其身之為方ニ不相成候間、呉々致正路下直ニ売買可致候

一諸職人・日雇、其外日持之者・雇女ニ至迄、定式之外色々名目を付むさぼりケ間敷義有之趣相聞へ如何之事ニ候、諸商人へも相触候通之義ニ付急度相心得、不埒之賃錢・酒料等申請間敷候

但シ一昨春之通一昨戌年以前諸色直合何程、当時直合何程と申義、夫々商人共分逐一当月十九日迄ニ町役所へ書出し可申候、其上ニ而尚又可申付義も可有之候事

一此頃町人共之内種々之悪評・浮説を請候者有之ニ付、風聞之義ニ者候へ共人氣之動キニも相成候ニ付、其手ニ而空実相糺居候事ニ

而、他之指構ニ不相成義ニ候処、追々浮説被行候ニ乗シ、下輩無類之者共夜中諸士ニ偽り町人宅へ踏込、理無尽之所業相働キ候者有之趣相聞以之外不届ケ之至ニ付、追々令穿鑿夜中無提灯或者面を隠シ不審之者ハ、見付次第無容捨可召捕旨其手筋申付置候事ニ候、將又御家中若キ衆中内ニも此間中数人宅へ推参有之、亭主不居合節ハ家内之者へ彼是被及悪言ニ候様之向も有之哉ニ相聞へ、此節浮説等有之事故、被罷越候用向難相分り候而者弥町人共令畏縮、中二者御用申置候者共も有之処、右御用御断申出引籠、御用指支ニ相成候様之義ニも及候、用事有之被罷越候事ニ候へ者がさつ之義無之尋常ニ可被掛合義、又者町人共銘々対シ無礼等如何之義有之難指置候ハ、町奉行へ被届ケ候而奉行所之戴判(裁)ニ可被任哉、又ハ銘々支配頭へ可被申達答ニ候間、已来心得違無之様父兄分急度可被申示候、前書無頼之者之義も有之候間、家来之者ニも心得違不致様主人分可被申付候、尤町人共不正之筋有無之義急度吟味有之様、町奉行中へ申談置候事ニ候

子五月

一五月十六日分町内米屋幸助先達而分寒氣甚敷病氣ニ御座候ニ付、大島村善源庵へ養生ニ参り居候処、同十九日赤ぐり分御台場ヲ見ニ参り其儘行衛不相分候ニ付、大島三ヶ村者不申及、廿二日二者町内組合不殘組頭壱人ツ、大嶋へ尋ニ参り候処、廿三日ニ外海ニ浮居候ニ付、其夜舟ニ而死骸積参り候へ共、廿四日朝五ツ時なら

てハ御見分被下候事不相成候ニ付、其夜親類并ニ町内式人ツ、時
代り之番を致、翌廿四日五ツ過ニ御見使相濟、八ツ時ニ野送り勝
手次第と被仰付、同七ツ時ニ葬式、寺参り致され候

觀月淨心信士、享年四拾三歳也

町触

一先年来当町方再三火災之上、米価高直且諸品高直ニ相成候ニ付一
統不繁榮ニ相見得、中ニ者殊之外難洪之者も有之、別而西向衰微
之体ニ候間何卒引立復古繁榮ニ致度、此度ニ鳥居町ニ而助成方相
立利息藏敷等步安ニ致、難洪之向へ引当ニ応シ元手仕込銀等貸遣
し可申候、且当地産物売捌キ兼候者有之候ハ、可申出候、其品ニ
寄其時々正相場を以買取可遣候、其余為方筋彼是取調へ中ニ而未
急度手組仕法等取極兼、金子才覚も十分二取と、のひ無之ニ付未
一統へ触出し不申候処、此頃町家之者助成方之主意不相弁、疑惑
致彼是相唱候義ニ付、助成方之大意之処右之通ニ候間、先心得之
ため此段相触置候、尚追而及沙汰候義可有之候

但シ何事ニ不寄心付候義ハ無遠慮可申出候段兼而申置候得者、
助成方之義も不宜と心付候ハ、其訳可申出候処、其義無之
却而種々之悪説申ふらし候者有之趣相聞へ不届ケ之事ニ候、
併是迄之義ハ其主意ニ不相弁事ニ付令容赦候得共、此後右
様之者有之候へ者無容赦嚴重ニ可申候間、急度相心得可申

候

子六月二日

町年寄

一子七月廿日河村清右衛門隠居当年六十一歳ニて死去被致候

一九月五日江戸表分丹後組浜御役人宮崎辰次郎様御引越ニ付、組浜
へ御越小浜御出、組屋六郎左衛門殿御宿御泊り被為遊候、翌六日
朝御出立也

一十月十四日人別改被仰出候、東瀬木町中質屋町西二鳥居市場永三小路西文珠丸六町有
之候、町内者五ツ時正誓寺を借請町中罷出改有之候、手前者御免
許ニ付留主番致し、同心衆兩人私宅へ御出、人数御改有之候也

一穀物他所へ出候義者兼々被仰出も有之、御領分中たり共願出御聞
濟之上ニ無之而者不相成候所、中ニ者心得違之者有之、別而江州
辺へ指送り候向者熊川問屋共へ内談致、右問屋取斗ヲ以通行致候
趣、同所奉行所分御沙汰之次第も有之如何之事ニ候、右ニ付以来
願出御聞濟之上、御番所通行手形被下置候事ニ相成候間、右手形
申受他所出し可致候、万一心得違者於有之者御番所通行難相成義
者勿論、嚴重ニ被仰付候間、此義為念早々相触置可申候

子九月

一十月十一日分西舞台ニ而京都分浄るり召寄興行有之候、滝太夫・

政の太夫・津賀子太夫・嶋太夫・浜太夫、三味線四人之内糸竹上手也、以上十七日有之候

一十二月五日御家中様御談示、当二月分百石二付十五表ツ、御借米来ル卯二月迄被仰出候所、来ル丑二月分御免被成候段被仰出候

一十二月上旬分敦賀表浪士押寄諸家様御固メ騒動二付

十二月廿日御触ニ、此度敦賀一件二付御上様始下々迄余程之混雜ニ付、当冬御收納御取立被成兼候ニ付、来ル正月廿日分御取立ニ相成、右ニ付御家中様方之上納物始諸払等同様被仰出候間、町方も同様正月晦日払可被相心得候、併相對之銀子限月通り無相違勘定可有之候

子十二月廿日

町年寄

慶応期

^(朱書)
「慶応元」

一乙丑正月町触

百姓町人無願他国出奉公持等之義不相成事ニ候処兎角猥りニ相成、其上諸色高料、職人手間并ニ日雇稼等も右ニ准シ高料相成候処、他国ニ而ハ猶更之趣ニ而諸稼人追々他国へ稼候哉ニ相聞へ候、右者御國中ニ而も時節形り相応之稼利潤も可有之処、人氣さかしく

相成候所分銘々我勝ニ利ヲ含候様ニ成行、他国稼多相成候事等被察、一筋無余義所も可有之候へ共、御國中ニ而御恩ヲ蒙り生育致候者者、御国中之用便ヲ叶へ相応ニ渡世出来候へハ、他国稼不致候が当り前之義、殊ニ近来乱世ニ及、別而此度浪人多人数御国近

辺迄罷出候様之次第、此後迎も如何様之異変難斗、何時も御国中御軍役御手都合無之而ハ不相成御時勢故、此後他国稼差留候間急度相心得、貪りケ間敷義無之相応之稼ヲ致、異変ニ当り而も人夫其外臨機御間遣事欠無之様、御国軍用之間ニ合候様相心得他国致間敷、乍去前々分他国引合致来り只今相止メ候義難成、実々無余義者者支配頭へ委細ニ相断、聞届ケ之上者宜候得共、右様ハ此後不相成候間急度可相心得候

丑正月

一丑正月廿九日暁七ツ時中地震ゆる

一近年小銭^(底)払庭ニ付、米手形御役所分此頃壹歩・式歩錢札出来通用被仰出候

一二月三日昼五ツ時中地しんゆる

一同廿八日昼八ツ時小地しんゆる

一 三月十日夜丑年焼十三年二付組日待町内夕酒壺升出、手前方宿可致之処、家内一同風邪ニ付宿断申候てかね仕出候、頼宿ハ奈胡長ニ而致呉候也

〔^(朱書)今日手前遠敷上・下宮様夕多田寺へ参詣致、愛宕山へも参詣

致、昼後喜三郎・熊吉連て四社様へ参詣致申候

今日米手形御役所休日ニ相成申候

一 三月廿三日夕廿五日迄三日之間愛宕山奥院上葺供養有之、殊之外

賑申候 〔^(朱書)廿三日・廿四日上天氣大当り〕

〔^(朱書)講中夕諸白壺斗銀式百匁差上申候、壺人前十一匁ツ、集メ

ル也

一 四月二日曉堀口清兵衛隠居、年六十八歳ニ而川崎町御台場先ニ而身を投ケ死去被致候、色々と申立病死ニ被致候へ共、^(檢)見使相立三日九ツ時ニ取置勝手次第と被仰付、右ニ付四日葬式・寺参り有之候

寛淪貞正居士

一 四月廿一日夕廿二日西津弁財天様御上葺ニ付賑ひ申候

一同廿八日夕方小地しんゆる

一 閏五月七日夕九日迄滝金毘羅様御上葺供養有之、殊の外賑ひ申候
右ニ付御用達申合五匁寄進致申候

一同十八日夕廿日迄八幡社内ニ而角力興行有之候、大海ニ和田海と

申頭ニ而三拾人斗、大流行大当り、今道町龜又と申者勸進元ニ而

三四貫匁も得益有之候由

〔^(朱書)丑六月御触書写〕

一 追々米穀高直ニ相成候上当年之人氣不宜候間、万々一為財力有之者共、可相成丈ケ入津之米穀買入候様申付置候事ニ候、然ル処令心得違誰々ハ米穀買メ候杯と申ふらし候徒も有之趣相聞へ、甚以不埒之至り候、此後右様之義申ふらし候者於有之者、無容赦召捕急度遂吟味嚴重ニ可申付候、就而者力有之向ハ御奉公と相心得、弥以無二念可成丈米穀買入可申候、此段末々迄不洩様可被相触候

丑六月

六月十二日米手形御役所ニて御用達一統へ口演之趣意一統承知之通

一 御上御勝手向御難洪之処へ近来御臨時相統、御手繰難被成ニ付毎

々御用金被仰付、一統ニも先年兩度之類焼難洪之段御上ニも深く

御察被為在候得共、何分公辺之御用も御勤難相成御場合ニも可被

為至候ニ付、不得止度々被仰付候事ニ候、毎々骨折相勤候ニ付何

とか御取扱被成遣度候へ共、指当り御手段も無之候ニ付役場以取

斗一統へ、来寅年十二月迄無利息ニ而百五拾貫匁指出し遣候、聊銘々融通のため致候と存候

丑六月 (朱書) 「老入前拾貫匁ツ、配分也」

(朱書) 「右ニ付六月廿日御礼、一組分老入ツ、罷出候」

一繰綿壹貫五百匁ツ、
(朱書) 御奉行 佐藤兵太様

「綿百匁ニ付十四匁がへ」
藤田角右衛門様

一諸白五升ツ、
(朱書) 梶三郎兵衛様

「酒一升ニ付四匁がへ」
駒林喜内様
勘定人

一繰綿壹貫匁ツ、
池田嘉兵衛様

一諸白五升ツ、
木下是之助様

丁野□吉郎様

小原礼四郎様

一諸白五升
仮役 久我永次郎様

丑六月廿一日御触書之写

此度錢歩増通用之義ニ付公儀分御触有之、世上追々相当之歩増相立通用致候趣相聞へ候ニ付、於御領分中も向後真鍮四文錢壹文ニ付十式文、文久四文錢壹文ニ付八文、銅小錢壹文ニ付四文、右之通歩増共相定候間心得違無之様取引可致候、小錢之内耳白錢之御触も有之候通、貯置候義ハ勿論勝手ニ取替候義不相成候間、此段急度相心得早々米手形役所へ指出し候様可致候、代之義ハ耳白錢壹文ニ付六文ツ、之歩増共引替相渡可申候

丑六月 町年寄

七月五日夜大津町御番所牢拔三人有之候、同十四日ニ火付子供老入江州朽木分召捕帰ル也

同廿三日曉七ツ時分昨年甲ケ崎村小林某と申後家一兩度も火付致候者、今日町引廻之上湯岡芝原ニ而火罪ニ相成申候也

同十八日分西津弁天様浜ニ而晴天五日之間角力興行有之候

同廿六日・廿七日八幡社内ニ而角力有之、家毎ニ扇子壹本ツ、配り候ニ付又々大流行大当り也

八月七日御年寄武久内藏様・御用人嶋田八郎左衛門様町役所へ出張被遊、町方身柄之者・町々宿老共御呼出し御談示左之通殿様御意(朱書)「武久様御談也」

我等勝手向地下地難渡之上近年世上不穩ニ付莫太之物入有之、此後何分難取続以上ハ領分之者一統相頼分外無之候間、時体柄察呉骨折呉候様致度、猶役人共分可申聞候

(朱書) 「是分御用人様嶋田様御談示也」

一統ニも略承知之通り近年世上甚不穩、所々戦争も有之候ニ付、

京都御警衛者不及申八幡山崎辺俄ニ出張、殊ニ御警衛ハ永々之事ニ相成、於江戸表異人宿寺固メ・市中見廻り・御上坂等、其外御役ニ付而も品々御入箇而已相嵩ミ御物入不少、大殿様京都御諸士代時分公武之御吉凶・御大礼ニ付而も夥敷御物入有之、^(所司)爰十ヶ年程之処年々御入増式万五千両程ツ、相成候処、領分中追々寄特之者も有之献金等致、其上御用金調達毎々申付、京都・大坂辺御借入ニ而当年迄者漸々御取続ニ相成候得共、京坂御借財も次第多分ニ相成ニ付而ハ自然御不儀理ニ相成候上、当節柄何分増御借も難出来事ニ及、御家中之処も段々増御借米御扶持方等ニ被為仰付、一昨年も多分之増御借米被仰付候処、当節不穩毎々俄ニ出張等被仰付候様事ニ而、専ら武備手宛も不致候半而ハ不相成候処、多分之御借米も有之候而ハ右辺之手宛も難届、殊ニ諸敷も格段高直ニ而難渋之次第ニ付、御上ニ而ハ被成方無之候へ共、古川遐四郎・辻半三郎格段骨折ニ而、右御借米者御免被成候様之事ニ而、又候此上御借米等被仰付候様之義ニ者難及、在・町一統之処も毎々御用金調達等被仰付甚以太義成事ニ而、時々相当之御取扱も被成候筈之処、下地御難渋之義何分不行届之事而已ニ而御不儀理ニ相成居候次第、御上ニも殊之外御心配も被為在、御役人共者不申及心痛之至ニ候、是迄御不義理相成候義ハ厚御断被成候外無之、扨前条之通年々式万五千両程ツ、御入箇増ニ相成候処、外ニ被成方も無之重々太義千万成事ニ而難申出事ニ候へ共、当節不穩義ニ付而ハ御警衛者

不申及、御武備御手宛并ニ御役用御入箇も有之義ニ而、此末暫世上穩ニ相成御警衛等相止候迄者、年々御入箇相減シ候見込ハ少も無之、此儘ニ而ハ御潰レより外無之、甚太切之御場合公辺御軍事御勤向之義者、是非御勤被成候半而ハ御普代之御曆々御家柄、是非御家あらん限りハ御奉公不相成候半而ハ不相成事故、御領分中一統ニ有之候而ハ御助力申上候而、三百年近キ御国恩報する時節ニ付、甚太義千万ニ候へ共御領分中一統ハ凡式万金御軍用指出申度候、尤当年切と申義ハ無之、世上穩ニ相成御警衛等相止候迄ハ同様之義ニ有之候間、一統ニも其覚語^(悟)ニ而夫々職業ニ相励ミ指出候様ニ可致候、年々右之次第ニ候へ共、併年ニ寄御入箇増減も可有之候ニ付、先ツ当年之処式万金指出度候、明年者又明年可被仰付候、斯る時節ニ付御上ニ而も是迄追々御省略も被成、一昨年御家中増御借米被仰付候節も、十分御切詰御省略も相立候得共、尚又此度下一統へ御軍用金被仰付候位事故、爰元御住居向不殘御台所向等御止メ相成格外之御省略ニ相成候間、一統ニも致恐察精々骨折出金致度候、仍而御上ニも殊之外御心配も被為在候事情等、能々下々へ貫候様被遊度ニ付、自分ハ致廻村能々申聞候様御沙汰ニ付、此処能々相心得候様致度候、尚支配頭も可申聞義も可有之候、以上

^(朱書)「但シ町方一統へ金式步掛一枚ニして六千枚被仰付候、当年分

十ヶ年之間と被仰出候、右割合都合之調へ世話人三拾八人被仰付、右を四組二分ケ一組宛ニ而調へ、右四組分町

老衆へ持出し候、右を平均致、其内ニも色々詮義之上割合致申候

右割合丑年分手前へ百三拾枚被仰付候、此金六拾五兩也
〔内三拾貳兩貳部^(朱書) 丑九月晦日上納 町役所へ
三拾貳兩貳部八十二月朔日上納 〕

一 丑九月二御触、大工・木引・檜皮願ニ付手間賃支度為致五匁ツ、
昼弁当持来り候ハ、七匁ツ、尤当年切也

一 同九月七日古河遐四郎殿二所御紋付御小柄筭并ニ熨斗目御小袖御頂戴被為遊候

一 同日辻半三郎殿寄合組格ニ、是迄被下置候九人扶持之内三人永代被下、都合永代十二人扶持ニ被成下候由也
〔右御両家共御借米御引請之訳ニ而右之通被為仰付候^(朱書)〕

一 九月八日夜分加茂社家玉田と申人被参、八幡絵馬堂ニ而神道講積有之候、忝人前壺匁ツ、
〔但シ十五日之間願也^(朱書)〕

一 同廿六日分於西舞台浄るり興行有之候、十日之願又五日追願也、
太夫直太夫・政の太夫・蟻太夫・浜太夫、山城掾ト云今日本一三

味線亀介・弥七、札錢四匁、場錢三拾匁之由

一 十月廿九日御触

一 五匁 檜皮・大工・木引 一七匁 煤被手間賃
弁当不持手間賃 一七匁 萱屋根ふき同

一 七匁 右同断弁当持 一三匁 大小供

一 六匁 根取日雇手間 一 貳匁五分 小子供

一 六匁三分 黒鍬右同断

右之通諸職人手間料申付候間、定り賃銀之外酒料等指出し候義急度不相成候

丑十月

一 丑十一月廿七日分廿九日迄於西舞台篠塚文三師匠舞さらへ有之、
表包札貳匁ニ場三拾匁余之由、右ハ大当り大流行ニ而多分残り候よし

一 同十二月七日酒屋仲間御呼出し、去ル十月頃分酒相場四匁五厘之處、当時米直段格外高直ニ付、冬至ニ不相成内分壺升七匁五分ニ
売出し、并ニ水交売払候ニ付、今日右之売高不残元共御上様へ御取上ケニ相成、御呵之上閉門被為仰付候、当時酒屋仲間人別左之通

〔仕込最中ニ而大込^(困)之事也^(朱書)〕

木崎権兵衛・堀口次兵衛・石田次兵衛・小物屋勘兵衛・細野兵
介・古川屋久右衛門・和久屋宗兵衛・瓦屋九右衛門・鍵屋彦二
郎・鍵屋原右衛門・和久屋三左衛門・川村清右衛門・川村彦兵
衛・吹田伝右衛門・木綿屋善次郎・木綿屋作兵衛・丹ば屋次右
衛門・滝三右衛門・笹井屋太兵衛・金屋源七

〔朱書〕
一 廿軒五日閉門也、小浜酒屋中ニ而上納銀四拾貫匁程之

由

外二井七右衛門ハ一日遠慮ニ而相濟、是ハ切手諸白なら

は出し候由申候て正酒ハ売不申候由也

但シ御領分中共不殘御改有之、夫々取上ケ追込被為仰付候

由也

一 丑十二月十日頃分米手形御役所分五鶴百匁札出来通用被仰出候

敦賀表交易場相止候ニ付、右松札竹札ニ当所之増印ヲ居通用被仰
出候

一 慶応二丙寅年二月十三日夜四ツ半時中地しんゆる

一 三月朔日朝六ツ半時中地しんゆる

一 同四日夜五ツ時ニ小地しんゆる

一同三月廿一日頃諸相場

一 十九日御前相場 壺表ニ付 式百六匁

一新出米 同 式百八匁

一 □□小豆拾匁ニ付 式升四合

一新莊米 拾匁ニ付 式升〇五匁

一 丹は大豆 同 式升三合

一 白かうし壺匁ニ付 式合四匁

一 かうし入ちん 壺升六分五厘ツ、

一 醬油入ちん 立様 五分ツ、

一 ミそ□ちん 六分五厘ツ、

四月九日相場米屋仲間へ書上ケ拾匁ニ付壺升五合、仲中書上ケ一
升六合、御前相場式百五拾八匁、新出米式百七拾匁、莊内米一升
六合位

一 三月十九日北本町鍛冶市右衛門兄キ小盗致候ニ付、今日叩之上御
領分(私脱)ニ相成申候

一米錢役所中使嘉助義、昨冬分病氣之処早春分退役願有之候ニ付暇
遣申候、右後役ニ升屋庄兵衛中使願出候、尤給銀八百匁ニ致呉度
願、小使宗吉も暇被下候様願、是も一緒ニ願、後役川野伊助梓竹
次郎相願候間、是ハ一日ニ付式匁ツ、相談致、辻半世話也、右ニ
付四月十二日番壺番組ニ付御勘定場へ御願申上候処、嘉助・宗

吉暇遣し候様、正兵衛・竹二郎勝手ニ召抱候様ニ被仰付候、右ニ付給銀ハ五百匁ツ、外ニ当時米高直ニ付三百匁取斗、都合八百匁ニ約束致申候

昨年冬分源助一役ニ而相勤来り候ニ付、右会釈二百匁遣申候、宗吉へ百五拾匁、正月分四月十二日迄日数百日分遣し暇遣し申候

外ニ去ル二月廿四日頃中使源助川彦分金三兩持セ、一朱銀ニ取替遣

候節御役所ニ而紛失致候趣ニ付、源助相弁申候間、仲間相談之

上半銀取斗遣可申事ニ相談も有之候へ共、川彦分も一兩丈ケ取

斗有之候趣ニ付、仲間分金壹兩弁致遣申候、然ル処川彦分ハ断

申候趣ニ承り申候、右ニ付源助金貳兩損仲間分壹兩之損ニ相成

申候

改四月十二日分召抱中使升屋莊兵衛、小使川野伊助倅竹次郎兩

人也

右給銀之定ニ有之候処冬ニ至り又々米直段高直ニ付、中使分相頼

候間月百匁ツ、小使半氣(季)ニ五百匁ツ、ニ相究申候也、月番三番

組

一五月六日志水忠三郎麻上下ニ而御用所へ御呼出し御談示扣

志水忠三郎へ

其方義、此度致家名相統候ニ付亡父同様被仰付被下度段相願

承之、先々代分毎々致献金等、殊ニ亡父義各段ニ御為筋氣込

相勵寄特抜群之義ニ付、是迄亡父林蔵へ被下置候永代十人扶

持・一代切五人扶持、都合十五人扶持并ニ諸役御免許、帯刀・足駄御免、寄合組格、都而亡父同様ニ被仰付候、尚志ヲ継相勵可申候、此段被仰出候

寅五月

小浜町奉行

一丙寅年五月十一日初日ニ而西舞台ニ而芝居興行有之候、役者壽藏

・寛三郎・松三郎・喜代三郎・寛光、上役者揃也

〔木戸札錢七匁五分、場壺間七拾匁由、当年八時節柄ニ付四拾

貫匁斗損之由也

一同五月十四日夜中分東雨風強く降続キ、十五日朝ニ相成候へハ追

々強く雨風勸敷候ニ付、則大洪水と相成申候て、湯岡橋落而諸方

川筋土手切夥敷事、川縁町床へハ上り不申候へ共大津町橋詰水ツ

キ申候、川崎ニ而ハ商舟難義致、中二者はせ上候て破損致候事、

併十五日正九ツ時二雨止西風へ返し申候事也、水も引汐ニ相成申

候

右ニ付米手形役所も休日ニ相成申候、御家中床へ上り不申候(マ、)

得共御用達仲間分見舞指上申候、御役所へハ先例ニ而酒肴月番

〔朱書〕右ニ付十六日代役衆へ米錢、御奉行・勘定人衆・御積方衆へ御

見舞之日記ヲ調へ呉候様申遣候処、先年ハ兩度も竹原・西津共

米錢之御掛りへハ御奉行様へ諸白五升と竹輪十本、勘定人衆へ

ハ諸白三升・竹輪五本、御積方へ諸白五升と有之候へ共、当年ハ酒も壹升二付七匁八分五厘ツ、二而、月番川彦殿御差図二而、諸白斗二而付物ハ止メニ致候趣申来り、御用達中々竹原丈ヶへ上ル

一諸白五升切手 米手形御奉行 佐藤兵太様

一諸白三升切手

勘定人 野田嘉兵衛様
小原礼四郎様
中山石之助様

御積方

柴田糸五郎様

一諸白三升切手

増田政右衛門様

井関正五郎様

中川小一郎様

(朱書)「右之通中使庄平ニ為持上候」

一板餅十九 小畑佐右衛門様

一諸白一升切手 猿橋豹一郎様

一京なすひきり五ツツ、

(朱書)「右両家ハ手前壹人前之御見舞上ル」

此度之出水大荒、獵師諸方死人夥敷事

一西津小松原中二而舟三拾艘斗、死人百廿八人

一高浜六艘斗、凡死人三拾六人

一浦方 神子・常上 小川・日向 凡十艘斗、死人不知

一越前獵師舟數百艘余、死人不知

右ハ入梅中故油断致候事ニ而往古々無之候趣、十八日・十

九日西津之葬式致申候趣、其外田畑荒地・砂入夥敷事

御上様御家中荒地・高塀痛・御屋敷痛所ハ不及申、莫太之御損失ニ相成申候

此度之出水ニ付名田納庄筋材木類多分町方へ流し寄候由相聞へ候間、追々木主分請取ニ可被出候間、無子細夫々御渡候様被仰出候間、一統心得違無之様末々迄早々可被相触候、以上

五月十七日

町年寄

御名

當時敦賀表ニ罷在候水戸殿元家来共兼而遠嶋申渡し置候処、慎方格別宜敷趣ニ相聞へ候ニ付、出格之訳を以遠嶋御免之段申渡候、尤当分之内其方へ御預り被仰付候間可被得其意候

右之通被仰出候間町々入念可被相触候、尤寺社有之町八宿老中々通達可有之候

刁五月廿六日

町年寄

一兼而凶年御手宛被為在候得共、猶又厚く御扱御手当米御買入被成置度思召ニ而、御役人深く御心配被為在候得共、近来多分御入箇之上、先日来出水ニ付而も御田地其外所々御破損之ヶ所多分御失墜被為在候、臨時御時体奉恐察、此後入船米買取之義米屋ヲ始素人思惑之者ハ御上御奉公と心得、世間之風評ニ不拘精々買取有之度候、若又此後米価下直ニ相成、右買入米多分之損失有之節ハ

御上様分御補ひ被下候間、無懸念買入可有之候、中二者心得違之

者有之、此節式三百之米買取候へハ直合ニ拘り候様相心得、悪評

申唱候者有之哉ニ相聞候、夫故米取扱候者自然遠慮致候模様ニ相

聞へ、以之外心得違之至り歎敷次第二候、万一凶作之年者町方ニ

多分之米有之候へ者、何時ニ而も御買上ケニ相成、其米を以下々

難洪人御扱可被下候処、米払庭之時者其元手を失ひ候道理ニ而、

不勘弁第一之愚痴と存候間、右様心得違之者へハ宿老中分克々被

申示、今日之時体ニ而ハ米買入を御奉公第一と被心得、少し茂無

遠慮銘々忝儀ニ而も余慶買入有之度候

右之趣末々迄心得違無之様申示候様被仰付候様難有御趣意之段、

宿老中分末々迄不洩様通達可有之候、以上

寅六月

町年寄

一慶応二丙寅年六月十九日木綿屋伊兵衛殿町奉行所へ五ツ時ニ御呼

出し、親類名代ニ被罷出候処

〔町御奉行御談示書〕

其方義存寄有之候ニ付米手形御用達役御免被成候間、左様相心得可申候、委細之義ハ米手形役所ニて可申談候

〔米手形役所御談示写〕 木綿屋伊兵衛へ

其方義今日於町奉行所存寄有之候ニ付当役所御用達役御免被申

談候ニ付、右勤中被下置候三人扶持指上可申候

別段

是迄御預ケ金銀早々当役所へ相納メ可申候

米手形奉行

〔朱書〕 今日質屋町宿老役も町役所ニ而御免被仰付候也

右者本人少し茂覚無之候様ニ被申居、別而手前組合ニ而氣之

毒之次第ニ御座候得共、下々之噂ニ者辻半方へ張紙致候事之

由と申唱候也

一同八月四日町役所ニ而御呼出し有之罷出候処、長州表分軍舟参り

候節夫々御出張ニ相成候間、各方へ焚出し被仰出候

酒井様横手御人数式百五拾五人焚出し方

辻半三郎・志水源兵衛・古川屋久右衛門・吉岡屋喜兵衛・藤崎仁

左衛門・三島孫右衛門・堀口清太郎・大北勘右衛門・野田宗兵衛

・木谷嘉四郎・林屋安兵衛、ノ十一人

川崎町浜御台場御人数百十三人焚出し方

川村彦兵衛・川村清右衛門・丹ば屋次右衛門・米屋長兵衛・石野

五郎兵衛、ノ五人

〔朱書〕 右之通被仰付候ニ付式組共一緒ニ寄合致、銘々焚六ヶ敷ニ付発

心寺様へ米運び、御寺ニ而焚出し候事伺置候処御返答無之候

一同八月五日夜分雨降続、六日・七日終日降続キ候処、七日酉刻又

々大洪水と相成申候、去ル五月十四日之出水分壺尺斗無數位、七

日夜八ツ時々大西風ニ返し、引明ケニ雨風止ミ申候、諸方屋根痛、居室・葺壁痛申候事、此度之方夥敷事破損ニ御座候

〔右ニ付米手形御役所休日ニ相成申候、此度ハ御見舞上ケ不^(朱書)

申趣也

」

丹後由良川筋ニ而ハ不軽大洪水、四丈斗も出水、人家五七百軒斗流レ申候由

敦賀道ノ口山拔崩れ、野兵組廿余人諸士三人即死有之申候

北国筋并ニ松前辺七日・八日・九日大変大荒、大舟破損三四十艘斗、其内ニ志水源兵衛舟式艘蝦差湊ニ而破損ス

一 同^(衍)十八日神明神主へ世話人罷出、当年御祭礼賄方之義諸色格外高料ニ付、預ケ銀利足ニ而ハ迎も仕法も難相立候間、酒肴赤飯之義ハ相止候事、右之趣町老衆并ニ御番所下山へ神主今被届候、相對也、右ニ付講中も前日ニ廻章を以断申遣候、御鏡ハ例年之通致献上候て翌日講中へ配り、掛錢不申請候事ニ候、角力之義ハ例年頭取今奉納被致候事故、酒式升と肴料拾匁ハ遣し可申候事相談相究申候也、右ニ付世話人も參詣致候斗、日雇も相休□助斗兩日雇事、御鏡ならし為持可遣候事也

然ル処神主菊地中務殿時節柄ニ付諸事儉約致在宅度義、表向御上様へ居室及大破候故七ヶ年間在宅願、右年限中ニ修覆致度趣御願ニ相成候処、御聞濟ニ相成申候、右ニ付裏小屋四間ニ式間之下ニ被建、右繕ひ下屋壱間通り増建被致、都合四貫匁斗入用ニ付自力

ニ難及候間、右之内三貫匁世話人ニ而用立呉候様ニ御頼被成候間、世話人申合月壹歩利足付、辻・大北壱貫匁ツ、出銀、跡五人式百匁ツ、出銀、外二古ヤハ一向六ヶ敷被申候故止ニ致申候也、都合三貫匁用立申候、返済之義ハ来卯盆前今同暮・来辰盆前迄三ヶ度ニ元利共請取可申相對、則証文仮建書入之証文為致申置候

扱九月十六日御祭礼之御神事之処、公方様御薨被為遊御停止中ニ付休、十月廿日頃ニ明キ申候ニ付、十一月朔日建札致候而ハ諸雜用も多分入、就而ハ時分も雪荒之頃ニ相成候故、建札なしニ達候、内神事ニ而相勤候様ニ被仰候、右ニ付辻半・大北相談之上御鏡上下壱升ツ、三重拵させ、霜月朔日ニ指上申候、外ニ蠟燭四丁上ル、右を翌二日ニ御鏡取ニ遣候、大北ニ而ならし致、世話人辻・松本・平長・川七・も久・西三・大北・神主メ八軒へ割合配り申候也

一 慶応式丙寅年八月廿二日町触之扣

殿様御城着御日限者未知候へ共、御着之前後并ニ御着之夜右両夜自身番相勤、別而火之元可入念候事

一 御着之節御免許并ニ惣町人共家主、先格之通麻上下ニ而湯岡芝原へ可罷出候、場所之義ハ町年寄共差図可致候、右場所ニ而口論ケ間敷義ハ勿論、声高二無之作法克可相慎、家主罷出候而ハ家内之者病人、又者無人ニ而火之元無心元者ハ不及罷出候間、宿ニ罷在火之元可入念候、尤不罷出断委細可申達候、町々宿老者申合壱人宛相残り町内へ諸事可申付候、宿老病人有壱人ニ候へハ不及罷出

其訳可申達候

一 社家・山伏先格之通り右同断可被罷出候

一 御供二罷越候日雇之者入込可申様宿致候ハ、其頭へ入念対談遂吟味宿可致候、逗留中博奕不法之義無之様急度可心付候、尤旅籠代其外買掛り等出来不申様可相心得候、若難心得品も候ハ、早速可申達候

一 御着之日諸荷物馬・地車差留候、併何角訳有之万一牛馬・車共出候様之義有之候ハ、御往来前後ハ指扣へ可申事

一 船宿之者舟中火之元之義、此節并二御在国中ハ別而入念、舟之者共御通之節不礼無之様急度可申談候、惣而御城近辺ニ而高声并二音曲停止之旨可申渡候、尤右之趣着舟之御船宿之者夫々申談、折々舟場へ相廻り不行義無之様可申付候

一 都而御往来之節辻固メ同心共不指出候事ニ候得者、先達而申付候通り町々宿老共諸事心付、不礼之義無之様可心得候

一 御往来之節御通筋ニ無之共、御見通ニ相成候家之孫庇之分取上ケ可申候、尤日覆取払可申候事

一 御参詣日其外共往来相済候迄葬式用指扣へ可申候、尤養ひ取らせ候事仕間敷候事、川舟持共其心得可仕候

一 御城近辺遊参舟可為無用候事

一 海先浜辺無用之者出集候義可為無用義ニ而、罷出候共高声・音曲無用ニ候、尤舟上ケ下ケ等ニ付木やり等之義ハ格別之事

一 兼而申渡候通り町中之者共諸士中ハ勿論末々又者ニ至迄、此節別

而不礼不仕異乱等無之様人々心掛候事

一 御初入御通筋家々店を明ケ、女子ハ床之上ニ罷在、男子ハ土間ニ敷物を敷行義克可罷在候事

但シ表口壱間通り差扣へ罷在候而、御通り被遊候節ハ手をツキ平伏可仕候

一 御初入御通り之節拜見場所

西ハ	東宮前二ヶ所	東	突抜町	魚屋町
	広小路下		本町	川縁丁
	永三大蔵小路		市場	

右十ヶ所へ向寄者共罷出拜見候義男女共勝手次第ニ候、尤作法克罷出、固メ足輕共指図可相守候、家々不残明ケ罷出候義可為無用候事、老入ハ相残り火之元入念可申付候、尤右之外小路ニて老人も出し申間敷候

此段宿老油断なく相廻り可申候事

一 御着之節町中御通り筋掃除入念可申候、犬等御通り筋不出候様可心付候事

寅八月十九日

一 八月廿四日五ツ時町御奉行岸本様へ御呼出し、人別辻半三郎・藤崎仁左衛門・木谷嘉四郎・野田宗之助、大問屋三島孫右衛門・古川屋久右衛門、脇間屋惣代紙屋長左衛門・本郷屋源兵衛、米屋年寄川村彦兵衛・同清右衛門・大北勘右衛門・木綿屋久左衛門・古屋文右衛門・西津屋三右衛門、メ右之者へ御談示扣

近来之御時勢二付、京地へ当所分米運送之義内々御掛合之趣も有之、追々其運ひニ可相成候間、不取敢御用人衆分辻半三郎・木谷嘉四郎・藤崎仁左衛門・野田宗之輔へ内沙汰有之候事二候処、今日改而右四人大問屋・脇問屋・米屋年寄一統へ右掛り申付候間、申合仲共へも御主意得与為致合点買廻し、運送之都合万事行届キ候様可相勤候、此義畢竟公辺之御国整二候へ者、其段厚く相心得軽浮之義無之様相互ニ可心付合候、右二付追々莫太之運送二相成候ハ、自然土地一統之潤ニも可相成義、何卒精々相励可申候、尤指向之処上ニ而米買入ニ相成候へ者至極之御都合二候へ共、一統承知之通り御次第左様ニも難參二付、其辺も致恐察双方之力を以何とか取斗買廻し候様ニも頼入候、勿論始終ハ京地分金子指下候御都合ニ可相成候

一是ハ申迄も無之候へ共、右京地運送而已ならず京地在町ハ勿論之義、従来米穀売渡来り候近隣之処々飯米等売渡之義、別而心を用指支遅滞等無之様可取斗候

右之義町年寄兩人共掛りハ同様二候へ共徳右衛門重々引請候、助成方三人へも掛り申付置候間左様相心得可申候、右之御用ニ付寄合場助成方之積り二候

寅八月

小浜
町奉行

一寅九月十一日追々米穀高直ニ相成候二付、川崎町米屋多助分難渋人へ粥施し有之候

一同十四日町老衆分町方難渋人御調へ有之、生ツキ白米壹匁二付直段壹合〇五才ニ而、壹人前三合ツ、助成方役所ニ而御壳払被下候但し世話人西津屋三右衛門隠居・木綿屋久左衛門隠居、升取・仲兩人ツ、九月中頃分十月晦日迄出ル、十一月分休此頃誰と施主ハ不申候へ共、実ハ野田・木谷・絹文ノ三人仲間ニ而町中へ百貫匁之施し致度二付、最上小豆三百表余り町割合ニ而申候也

但し瀬木町へ小豆拾表当り申候「町内ニて割合引増廿文以下之

処へ九月ニ半分相渡し、残り半分ハ十二月頃家数割三升ツ、当ル」

一九月十九日八ツ時分大調練備へ有之候

三浦様御城裏大鉦^(砲) 川崎御台場江見様大鉦 達磨小路浜町奉行様

八幡小路裏深栖様大鉦 高成寺次所大鉦

殿様并ニ与七郎様川崎町浜通御馬ニ而御順見被為遊、高成寺山ニ而御上覽被為遊候、深栖様御手御備へ行烈御座候而町方御通り二候、殿様高成寺ニて御休息、御帰り組屋方へ御初入代りニ御立寄、御酒・御吸物指上夜六ツ過ニ御帰城被為遊候「組屋近所ハ七八軒斗御中間休足場ニ被仰出候」

町触

一升之義、古来分川越権左衛門焼印無之升遣不申様触置候処、不埒

之義も有之二付天明度・文化度・嘉永度・安政度升目売かい致候者、其分ハ権左衛門相廻り升改致候事ニ候処又々猥ニ相成、焼印無之升ヲ相用候者有之哉ニ相聞へ如何之事ニ候、右ニ付所ニ寄権左衛門相廻り升改候様之義も可有之候間、心得違無之様可致候

八月廿日

一十月五月初相場仲共書上ケ、拾匁ニ付壺升壺合、御前相場三百五拾匁、冬至ハ酒壺升直段十四匁六分五厘ニテ売出候

一同九日町年寄衆ハ町々宿老へ御貸米、秋田米ニ而拾匁ニ付壺升〇五匁半銀当銀、半銀来正月切ニ而御貸被下候様被仰出候、外ニ難洪人へ御粥米壺人前七勺ツ、十日分ツ、被下候様取調へ可申出旨、此粥米之義ハ兼而御用達中ハ施し願有之候事也

一十一月三日御用達施米難洪人江指出し候義者、先達而ハ当年ハ格外之米直段ニ而、難洪之者も多分有之趣ニ承知致候間、粥ヲ焚可遣之相談致候処、粥ニ而壺人前七勺ツ、毎日貫出候而ハ職業之指支ニも可相成与存、白米ニ而七勺ツ、十日ツ、之分ヲ遣し候事ニ致候得者、渡し方も指支不申宜与、則十一月ハ来ル卯正月迄と町老へ相達人数調へ貫候処、町年寄衆ハ町方へ当年中と御触有之候、凡地内帳共九百余人ニ相成申候、右ニ付通拵遣ス、米手形御役所ニ指支無之様十一月三日・十三日・廿三日・十二月三日・同

十日・同十五日メ六度遣申候

右通表ニ

年号月日
施米之通
御用達
何町何屋誰と認メ

中二家内何人
壺人前七勺ツ、
十日分何升何合

〔朱書〕当日御用達一組ハ壺人ツ、メ五人ツ、六ツ半時ハ出、八ツ半時引取、昼ハ佐渡長賄、汁・香之物・飯

〔朱書〕〔壺軒前ニ〕〔古川様ハ西津ニ而被指出候故除キ別也〕五貫式拾六匁壺分三厘ツ、刁十一月・十二月両度ニ米代出銀致申候、〔卯正月分ハ町老ハ何之沙汰無之候ニ付休申候〕

又式百九拾九匁四分六厘雜用夫々組之割合、卯四月十六日出銀合五貫三百廿五匁五分九厘

内百七拾三匁残り米式ト式升八合卯九月十三日戻ル

指引五貫百五拾式匁五分九厘施しニ成

〔朱書〕〇卯四月廿六日町御奉行所ハ八ツ時御作園場へ御用有之、御用

達一同古川遐四郎殿其外昨年ハ施米致候者都合四拾人參

御老様御談 当節柄ニ付難洪人へ施米致候段寄特之事ニ候、仍

之御酒被下置候間丁大^{頂戴}致候様被仰候

御用人様 右同断ニ付取斗方も有之候へ共、御上当時体柄ニ

付籠末之御酒被下置候、丁大^{頂戴}致候様

〔朱書〕右御両所共直様御帰^{頂戴}り被遊候

町御奉行岸本様・藪様何品も無之候へ共種々丁大^{頂戴}致候様被仰候

夜食膳

向

小板蒲鉾五
切身一 玉子二
くわゐる こ□竹

菓子椀

紅蒲鉾
玉子
竹之子
椎たけ
磯かき

汁 鯛切身

白茶碗 酒

飯

〔朱書〕
夕方ニ相濟町御奉行様へ御礼ニ上ル

〔朱書〕

〔寅九月十九日御触也〕
一 近來酒共不宜酒壳候哉ニ相聞へ候ニ付、吟味之上当分之處左之通

式ケ所ニ而現銀并ニ是迄指出有之候切手酒為引替候、其由ニ而一切酒壳候事指留メ候間、此段触置可申候、但し是迄通帳ニ而買候分ハ可為相對次第之事

本丁

龜屋長兵衛店

鷗羽小路

木綿屋伝介店

右之通被仰出候、明廿日夕右ニケ所ニ而売出し候段酒屋分申達、町々不洩様可被相触候、尤寺社有之町ハ宿老中分通達可有之候

刁九月十九日

町年寄

一同十二月廿六日町奉行岸本様御宅へ去ル亥年川崎浜御台場世話人
一 統御呼出し有之罷出候處、右御台場普請御成就ニ付御酒・御吸物被下置候へ共、時分柄ニ付御酒料耆人前三拾匁ツ、被下置候也

一同十一月廿六日名田納庄田村谷之者藏切盜賊、今日死罪ニ可相成

候處右本人覺語無之、何分今一応御白砂ニ而申訳致度段申出し候

二付、町組衆又々朝分御奉行様之御屋敷連行候て、右ニ付御死置場へ昼四ツ半時ニ町方引廻しニ相成、残罪場へ連行死罪ニ相成申

候

〔朱書〕
右ニ付町御奉行様越度有之候哉、卯二月分廿日斗ツ、替りく

ニ老軒様ツ、閉門被為蒙仰候由也

町触

突抜丁

井筒屋彦兵衛

川縁丁

橋本屋為藏

安居町

木挽権左衛門

其方義一ツ橋御屋形買物方与相唱、敦賀并ニ当所へ相越如何之荷物取扱候、新物時五郎与申者、油樽ニ水ヲ入少し油を加へ他国へ相廻し候巧致、右油樽ヲ当所ニ而も巧ヲ以致質入ニ、金屋源七分銀子六貫匁ヲ借出し其後何方へ歎逃去候、右油樽水ヲ入彼是相巧候次第、其方共委細承知令同意候所、右巧事露頭致掛ケ候ニ付、相談之上掩引隠し候趣向ニ取掛り罷在候段、吟味上及白状ニ承之候、右様巧事ニ令荷担候段甚以如何之義不埒至極之事ニ候、仍之御城下払申付候、以来御城下壺里四方へ急度立入申間敷者也

寅極月

〔朱書〕

親類仍願
御上思召被為在小浜町払、敦賀町共立入 井筒屋長左衛門

不相成候段被為仰付候趣也 〔朱書〕
町々触有之候町も有、触無之

候町も有之候也」

町触

町奉行

郡奉行

代官江

当節米価者申不及諸色格段高直ニ相成、其上当年者毎々風水
違作ニ相成、別而令難洪候趣被為拜聴、初而御入国之義ニも
有之何卒御救助被成下度思召ニ候得共、從來御六ヶ敷御勝手
向ニ而被成方も無之、思召通り被成下候義も難出来候へ共、

此度乍聊銀三百貫匁從御手元御下ケ被下置候旨被仰出候間、
御領分中家別へ配当頂戴候様ニ被取斗候

右之通被仰出候間、格別厚く御趣意之段一統不洩様難有頂戴
可有之候、以上

刁十二月

右之割合家別ニ米手形銀十三匁ツ、卯正月九日ニ町内宿

老中々配分請取申候

一当夏以来度々之風水ニ付追々米価高直ニ相成申候、六月頃四斗入
三百匁位之処、初相場壹表三百五拾匁ニ相立申候、其頃上古米類
拾匁ニ付壹升〇二三勺位、十一月中頃ニ而ハ古米九合式三勺、地
米四百廿匁々四百七八拾匁位、然ル処十二月ニ至り〇印大指詰り
払底ニ付、米直段も少し下直ニ相成、丹波新米壹升壹合式勺、上

古米九合五勺位、種油高直壹斗ニ付式百匁、桐油百九拾匁位、併
米も油も十二月中頃〇印詰り、春延ニ而ハ高直ニ而米・油とも付
米極廿四日付切相場御前四百七匁ニ候へ共、在付ニ而ハ四百拾匁
ニ御座候、三月切付米四百三拾五匁位之商内も有之候、併当冬ハ
雪もふり不申故、持人押詰迄も仕事致申候也、大年取引も早く埒
付一統仕舞も克、夜四ツ時ニ相済休申候也、十二月指入々引宛物
之利息月式歩ニ御座候得共、何分〇印払底ニ而、極廿四日迄も
十二月分二月括り、二月切之四ヶ月括りハ彼是も無之借人斗ニ御
座候也

一慶応三丁卯年正月四日金相場百拾五匁

同五日商内 一上古米拾匁ニ付九合三勺

一田辺米同 壹升〇壹勺

一素麵 上五拾壹匁
中四拾九匁五分

一 種油式百廿五匁

一 桐油式百十五匁

手通商内 三月切四百三拾七匁七分

六月切四百三十一匁五分

同正月十九日々金相場百廿匁

御前相場付米四百廿六匁、廿四日御前四百五拾五匁也

一同二月頃大工・左官作料式拾匁ツ、日雇拾六匁

〔(朱書)昨冬天子様御崩ニ付正月廿七日迄御停止ニ付〕

一二月五日夜市祭り神楽有之、六日市祭り神事有之候、本能町御奉行様・大目附様御出役、宮世話人・町中宿老麻上下ニ而出勤致申候

一同七月初卯神事有之候、半能仕舞囃子有之、宮世話人年番ハ継上下ニ而出勤致申候

〔(朱書)昨年賄料三百三拾匁之処当年ハ四百三拾匁申請候様被申候也〕

一二月朔日辻半三郎・野田宗兵衛・木谷嘉四郎右三人、昨冬殿様御手元御救銀御領分中へ三百貫匁被下置候分ヲ、其節右三人ハ願出献銀被致候ニ付、則今日左之通御会釈被仰付候扣

一和多御陣屋跡旧地永代御貸 辻半三郎殿へ

一永代式人扶持被下置候 野田宗兵衛殿へ

一永代式人扶持被下置候 木谷嘉四郎殿へ

〔(朱書)右御陣屋跡旧地ハ昨冬焼失致候而夫ハ高浜へ御所替ニ付、右

ヲ田地ニ致度段内願有之候思召之尊也

〔(朱書)長井重右衛門悴安三郎へ

〔(朱書)慶応三丁卯正月廿五日石田次兵衛舎弟ヲ長井重右衛門方へ養子ニ被貫候〕此度御用達代役御雇被仰付、右給米として拾表被下置候旨被仰

付候、尤本勤同様心得可申様被仰付候

〔(朱書)右ニ付月番壹人罷出候様申参り手前罷出候処、安三郎へ右之通被仰付候間万端心付候様被仰付候

右ニ付御用達中ハ相談之上長井へ祝遣し申候、御雇之例無之候へ共重右衛門永々勤功も有之候ニ付、別格ヲ以養子被致祝と心得遣申候

一金式歩肴料 〔(朱書)銀六十一匁八分〕 長井重右衛門へ遣候

一諸白五升切手 〔(朱書)銀廿九匁九分〕

一三本入扇子箱一 〔(朱書)銀六匁五分〕

一卷のし付 〔(朱書)九拾八匁二分 御用達十五人割〕

一同二月十日ハ於西舞台団子細工興行有之候、木戸三匁福引壺匁ツ、大流行ニ而五日之間ニ三貫匁斗益銀残候由

〔(朱書)細工人出生田辺之者昨冬今当所へ来ル〕

一同三月朔日米手形役所御発開ハ七拾ケ年ニ付御祝有之、御用達一同へ御酒被下置候旨被仰出候ニ付、仲間中ハ左之通献上

〔(朱書)三本入扇子箱 錫壺連

卷のしへき 諸白壺斗

御役所へ仲間ハ指上申候、中使二月番ハ指上ル

〔(朱書)代凡百五拾匁斗〕

御用人団五郎兵衛様、御奉行様佐藤様・縣様・久野様・藤田様、勘定人池田様・小原様・丁野様・中山様・仮役石川様

御用達出人古川父子・辻半・大北・藤崎・川彦・丹次・古久・吉岡屋・米長・野田・林安、メ十式人、大問屋三島代役長井父子・西野・小森、断志水・木谷・川セ、メ三人
献立

盃 八寸色々盛替 鉢切切酢し 鉢巻巻酢し 鉢かれ
大平いさ、 井したし
本膳 向鱈 平皿 紅蒲鉢
椎たけ
水菜 汁あられ・蒲鉾 三ツ組盃
御飯

八寸色々 鉢目はち浜焼 鉢作り身
井ゆり根肉あへ 吸物こち

メ

御菓子いなり餅十五ツ、

右七ツ時分初り六ツ半時二濟

一卯二月廿九日奈胡村市兵衛家内昨冬生之子ヲ懷ニ抱、柳繩手朝川岸へ身ヲなげ申候、訊ハ右市兵衛防埒(放)ニ付色々異見ヲ加へ候得共、聞入不申候趣ニ付之噂ニ御座候

一同三月五日昼時ニ突抜町辺ニ井ノ口辺之馬つなぎ有之候所、堺寫と云角力取酒ニ酔通り掛ケニ馬之尻式疋切候ニ付、直様手間之助へ願候ニ付、右同人々御番所へ届ケ候ニ付、右角力取直様逃去候ヲ井ノ口ニて次郎共召捕、御番所へ連来り頭取へ御預ケニ相成、頭取分馬方へ手ヲ入銀子ニて内濟事濟致申候由

一五鶴札之贖札ちらく御役所へ上り候ニ付、町方・西津并ニ御領分中へ御触出、来ル十四日夕廿日迄五鶴札へ極印打渡候故、右日限ニ米手形役所へ持参致候様、取替遣し可申様御触有之候、右ニ付御用達当番之外ニ半惣出ニ相成申候、隔日ニ御用達出勤致申候
去ル二月廿七日松見交易之内一枚贖札有之候

三月八日大飯郷方分御用所へ納候内ニ本郷組ニ三枚有之候

三月十四日町米屋九兵衛分本郷清太夫分四枚有之候

同十六日本郷莊左衛門分下(蘭力)村利兵衛出一枚有之候

—— 本郷喜太夫出ニ壹枚有之候

—— 浦和多村五郎兵衛出ニ一枚有之候

右御詮義中ニ本郷村清太夫何方へか出奔致申候趣ニ付、下役徳太夫家蔵吟味致候処、五鶴札之拵かけ有之趣也

右ニ付遠敷村判木師・田良庄長太夫兩人御疑掛り御召捕ニて入牢致候へ共、本郷村清太夫ニおわせ候か入牢御免ニ相成申候

一同十九日夕谷口神明地面角力場ニて京都樋口弥太丸曲馬有之、晴天十日之願木戸錢八匁、棧敷四拾匁五拾匁六拾匁迄ニて興行有之候、大損致候得共三日之間追願致候而、一日相勤願下ケ致申候也

(朱書)「凡七貫匁損之由、神明願料・地面共金十五両之由也」

一四月八日暮六ツ時大雷ニ而安居町井長之旧宅御中間部屋之雪隠之

前へ落ル

〔但シ水雷と見へて煙上り不申候也〕
(朱書)

一 昨冬松寺小路関屋と申処へ博奕有之、踏込有之候ニ付則今日四月十三日、本人ハ不申及其外連中夫々徒罪被仰付候、其町宿老組合過料閉門被仰付候

一 四月十三日町方七八軒斗早春かるた商内致候ニ付、先日分御吟味有之、御糺之上今日夫々過料甲乙有之候て戸メ被仰付候

但シ山田屋莊介百廿文 万久・松寺小路一軒メ式軒ハ七拾

貫文ツ、

清水丁山田屋六拾貫文 亀原・鳥羽滝ハ廿貫文ツ、

右之通過料被仰付候

一 同十八日分今町浜も綿屋善次郎浜地面ニ而角力興行有之候、尤木戸錢六匁、薄縁壹枚十五匁、高場三拾匁ツ、之由、大流行にて三日日分薄縁廿匁ニ直上り、晴天五日願、外三日追願大当り、其内一日雨天休、毎日千人ツ、之通り札有之、昔分無之大当り之趣ニ御座候、大関甲形ニ平野川 〔凡諸造用五百貫匁斗融通由也、惣指引勸進元亀又凡廿貫匁も利ニ相成候也、焼後稀成角力にて御家中・足輕衆、出家ニ至ル迄毎日賑々敷事ニ御座候也〕

一 同廿一日昼四ツ時分南風吹出し追々強く相成、夜通し吹夜明ケ分廿二日昼四ツ時迄又々大風ニ而、近年稀成大南風誠ニ恐敷事ニ御座候、昼時ニ風止雨ニ相成皆々安心致申候、右ニ付諸方破損所夥敷事也

一 丁卯四月廿六日町御奉行所分八ツ時ニ御作園場にて御酒被下候旨被仰出候、是ハ昨年難洪人へ施米致候ニ付、右御会釈として御酒被下置候、献立寅年入用之処ニ書記し申候也

一 此度英国人北海筋測量ニ付近日宮津表へ入津之由、尤御勘定所御役人乗組ニ寄、上陸之程も難斗段、於京都小笠原壱岐守様分御達し有之旨宮津重役衆分申来り、此方様へ御達しハ無之候へ共、御領分海辺へも着岸之程難斗ニ付、若入舟候共動揺致間敷候、此段為心得申談候

但シ漁師其沖合にて異国舟見掛ケ候ハ、早々注進可致候

右之通被仰出候間町々入念可被相触候、尤寺社有之候町ハ宿老中分通達可有之候

一 五月十四日分西舞台にて嘶物真似興行有之、十日之間願由、立川三光連中五人、はやし方五人来ル、暮早々分流行木戸錢五匁ツ、場四拾匁、五日追願有之候也

一同廿二日昼四ツ半時ニ蒸気船ニテ英国人着岸致、唐人三人上陸致
川崎町浜辺へ上り、重田卯右衛門方ニ而休息致、町方大津町・本
町・瀬木町通り新町へ下り元舟へ帰り、八ツ半時ニ出帆致ス

一六月朔日夕重吉一世一代ニ付浄るり永教寺ニ而義太夫芸古興行有
之候、但し三日之間也

一七月廿四日町内北方屋平右衛門参り中老夕被相頼候義ハ、今晚町

内ニ踊り致候間手前方ニ百匁出銀致呉度頼ニ付無処出銀致候

〔家并(朱書)ニろうそく四五丁ツ、集メ候趣、井セ・細兵方夕酒五升ツ

、程被出候、其余中老拾五匁ツ、廿匁ツ、集メ出来致申候、当
年ハ十六日晚夕廿八日迄続キおどり有之候、町内惣入用凡壹貫

匁斗之由

一八月三日上中吉田村紺屋諸方ニテ蔵切致盜賊候ニ付、今日死罪ニ
相成申候

一同二日町老衆夕御呼出し有之罷出候処、江戸表夕蒸気船ニ而御公
儀御軍韓(艦)御役人御出被遊候ニ付、川村七右衛門と手前共兩人へ右
亭主役被為仰付候、御宿之義ハ蓮光寺へ申付候間不都合無之様相
勤候様被仰出候、右ニ付兩人御寺へ見分ニ参り候処、連も間数も
無之不都合ニ相見へ候間、新町古川屋久右衛門方へ御頼被下候様

内々伺候処、右之通古川屋へ被仰付候

一途中通行之節御家中へ対し無礼無之様兼而申付置候処、猥ニ相成
候ニ付、安政四巳年ニも心得違無之様訳而相触置候処、又々近年
無作法之者多有之如何之事ニ候、先年相触候通諸士中へ行合候節
ハ、かふり居候笠・頭巾類を取相慎通り可申候、并ニ類かぶりハ
御制禁ニ候所是又猥ニ相成如何之事ニ候、以来右様之者有之節ハ
名前相尋支配頭へ可被届候間、急度心得違無之様相心得可申候
一諸品出買御法度之義ハ毎々相触候処、近来猥ニ相成毎朝土橋下馬
辺、西ハ谷田辺迄出買致候者有之哉ニ相聞へ如何之事ニ候、以来
出買急度不相成候間、万一心得違之者於有之者詮義之上嚴重ニ可
申付候間、心得違無之様末々迄不洩様可相触候、以上

卯八月

町年寄

一川越権左衛門升改有之候、先年夕九年ぶりニ而町内宿老升持来候
様ニ申候ニ付

上壺升升壺ツ (朱書) 是ハ九年以前ニ求候分

五合升壺ツ (朱書) 同断

壺合升壺ツ (朱書) 同断

〔右三ツ指出し申候 (朱書)

此度壺升取上ケ、五合・壺合升之裏ニ極印相改戻ス、替り一升
新升壺ツ被遣候

右壹升升代式拾六匁、五合・壹合改料式匁、ノ廿八匁、九月五

日藤兵衛集メニ来ル、出銀致

〔^{朱書}此後ハ壹升升ハ紛失致候て無之趣申出候不申候事哉、是非出し候様申候へハ極々古キ升斗出し可申事

又々町々改ニ廻り候事を聞、新一升升を其時川越宅へ買ニ遣候、其升を出し候事宜敷候

一卯十月十一日夜夕西舞台ニて俄芝居興行有之候、札錢七匁ツ、場壹間六拾匁之由、十五日之願、流行申候也

一同廿八日昼四ツ時ニ中地しんゆる

一同廿七日佐柿浪士拾式人産物方へ来ル

一同霜月朔日夜夕八幡宮神主宅ニて、京都夕玉田大学と申講釈師来

り今晚夕初り申候、晴明記大江山一条と八幡宮様御一代記と御講

ニ被成、席料壹人前式匁ツ、ニ而大流行ニ御座候、追願共ノ廿二

日迄興行有之候

〔^{朱書}但し十一月十五日夜御火焼ニ付休ニ相成申候

一此節京都辺太神宮御祓御礼、其外諸神或ハ金銀等種々之品降り下り、右ニ付踊り等催し、老若之無指別家事を忘レ其事而已ニ打懸

り居候杯、兎ニ角風聞も有之騒敷事ニ候、万一当所へ右様之義有之候而ハ不相成候間、若降り下り候品有之候ハ、町方ハ町役人、

郷中者庄屋へ申出、支配頭へ早々可申達候、夫か為家事ヲ忘レ踊り歩行候様之者有之候ハ、召捕可及吟味候、心得違無之様可致候

十一月

町年寄

一十一月十四日当所麴屋甚六・桑村謙庵・窪田手間之助其外、諸所

へ御祓様降り候趣も有之候へ共、下地御触も有之候ニ付静成事ニ御座候

一同十六日夕西舞台京都夕女浄るり興行有之候趣、追願共十五日之

間大流行ニ御座候、木戸五匁、場五拾匁、義太夫末吉・留吉・千

代吉・照吉・八十松・巴寿、ノ六人来ル由

一同廿六日田上村之盜賊藏切死罪ニ相成申候

町触

御領分中在・町共当御時勢二者候へ共、年頭祝義其外共都而不相

替例年之通相心得目出度祝可申候、御役人初支配頭等年礼罷出候

義ハ追而申談候迄見合可申候

十二月十七日

町年寄

明治期

一慶応四戊辰正月十七日御用達中へ此度御勅使掛り被為仰付候、御宿之義ハ酒井様・都筑様・江見様・三浦様ニ被仰出候事

一此度鎮撫使御来向ニ付、御通り道筋所々辻固メ之同心指置候、然共其近辺諸事申付之同心斗ニ而ハ手足り申間敷候間、其町宿老中指加り諸事可申付候、御駕籠見掛ケ候ハ、早速町家へ引取可有罷候

一七軒屋共鎮撫使御着之日者別而旅人致吟味、不見届ハ一切宿借申間敷候、若宿致候者有之候ハ、早速可申出事

一松本町・川縁丁・川崎町ハ御見通しニ候間掃除等入念、無用之往来猥ニ無之様可致候、川縁丁へハ着舟之荷物等揚ケ候事ニ候間、右荷物揚候共并克積(並)ならへ、御通り之節ハ右荷物取扱候船頭・水主以下早々問屋内へ入、物静ニ行義克罷在候様ニ舟宿分可申付候、右之町々へも同心共出置候間、宿老共着濟諸事作法克入念可申付事

一御通筋之町家二階其外窓共御通り日者戸ヲメ可申候、戸無之候ハ、板ニ而成共当分内分見分宜敷様釘メ可致事

一川縁町・河崎町迄之内ニ掛り居候船ハ、地舟・旅舟共御通り之日者町方へ引取可置、旅舟者船宿之者右之趣可申談候事

一御通り筋明家有之候ハ、当分相応之店ヲ飾り亭主附置可申候事
一御通行之節町内犬繫可申候、勿論無主犬も平日其町ニ居候犬ハ其

町分可致世話候事

一川縁筋稲木土橋分目ニ掛り候間竹木并立置候事

一町中乱気者ハ不及言、乱気ヲ名付候程ニ而ハ無之候共難見届候者於有之候(マ)ハ、御逗留中外へ不出候様心付可申事

一御通行之節男女ニ不限見物仕候義堅無用ニ候、家之内ニ而も立除キ不申様、女子供其外下々等へも申付何も物蔭ニ可罷在候、商物之義者并克別而賑ヤカニ店ヲ飾り、家内取乱サル様仕、尤店先之暖簾等掛置候義ハ無用候事

一御逗留中口論其外物騒敷無之様ニ可相心得、假令当坐堪忍難成義雖有之、後日之沙汰ニ可及候事

附り、男女共無用之門立并ニ音曲・高声等可相慎、旅人へも右之趣亭主分急度可申談候

一面々家之前道筋者不及云、店格子迄相改掃除可仕候事

一火之用心第一可入念、鎮撫使御領分へ御入被成候日分御領分御離レ被成候迄、町中自身番相止町中不寝番申付候間、終夜有明ヲ灯シ、火之元不及云万事心ヲ付可申候事、夜番・時番之者町内へ相廻り、若夜四ツ過提灯無之者ハ其宿迄送り届ケ、又ハ番所継ニ可通、拍子木ハ無用ニ候、時番之者ハ一時々々町内相廻り家毎ニ火之元之義相尋、返答ヲ聞候て可通事

一自然出火於有之ハ早速駆付随分物静ニ消留可申候

但し御逗留中町ハ勿論其外西津・竹原等自然出火有之節ハ、火消役人者たり共猥ニ場所へ駆付申間敷候、大蔵小路・瀬木町迄

之間二組々混雜不致候様相固メ居、其上町年寄任差図二進退可致候事

一御着之節先払之小頭并二同心等見掛ケ候ハ、道筋早速掃除等仕、先払之者通り跡二而掃除致候者無之様兼而可相心得候事

一御着・御発駕共夜中二候ハ、御通り之道筋ハ家毎二提灯灯し可申候、見通し町狭小路等も二三ヶ所提灯灯し可申付候事

一御通筋斗欠脇御門外ハ土橋中程迄可致敷砂候事

一御着之日熊川御泊り日ハ、駄荷ハ不及言歩行荷物も指登し候義可為無用、但し旅人急用二而罷越乗掛ケ荷等之義ハ其筋相伺可任指図、勿論御発駕後ハ格別御逗留中ハ同前相心得可申候事

一御着之日ハ御発駕以後迄ハ、町中寺社方大鐘・半鐘共撞候義被相止候様二其町之宿老方ハ可申談ハ勿論、町中夜中太鼓・拍子木も可致無用事

一鎮撫使御供之向被致買物候ハ、諸品共下直ニ売可申、貪リケ間敷義致間敷候事

一御逗留中葬送り夜中穩便ニ取斗可申候事

一鎮撫使御通行ニ付御同勢之内於当町買物等被致候節ハ、都而代料金錢ニ而申請取候様可致候、尤金壹両ニ付錢九貫六百文之定致置候間、端錢・釣錢等之処も右之割合ヲ以取引可致候、代料相尋候節平日之形合ニ泥ミ米手形銀ニ而相答候而ハ不宜候間、心得違無之様可致候事

但金壹両ニ付九貫六百文、金壹歩ニ付貳貫四百文、金貳朱ニ付

壹貫貳百文、金一朱ニ付六百文

一鎮撫使来ル廿五日御着浜之趣ニ候間御通り筋敷砂等之用意可致候、尤治定申来り候

一錦御旗押立、貝吹、太鼓打鳴し候様之義難斗趣ニ候間、万一右様之義ニ有之候共必動揺致間敷候事

一壹番町通行指止、深栖屋敷前ハ町方へ船渡しニ相成候事

一此度勅使御来向之義ハ御当国御鎮撫之御訳ニ候間、人心疑惑動揺致間敷候

一朝廷御導奉御筋合相守、猥ニ下説申唱へ候義急度相慎可申候、軍陣御行装ニ而御入国可相成候も難斗候へ共、下々之者驚怖致不敬・不都合等無之様、御供之向へ相對し候而も町嚙之礼義ヲ相尽候様、支配下々迄堅く可申付候事

正月廿三日

町年寄

急触

此度勅使御供廻り芸州様初御同勢迄於町方不敬之義無之様可致旨ハ、兼々申付置候通り之義猶々堅相守可申候、乍去万一法外之儀被仕向候節ハ其仁留置候哉、名前等委敷承札早々申出、指図相請可申候

一近来於所々致暗殺候内二者、罪状相認メ死骸ニ添有之候も不少、

何れ強悪陰謀等憤り候而之所業ニ可有之、全体不埒之者共ハ得与

吟味之上、刑曲ヲ以嚴重ニ御戴許可被仰付事ニ付、大政御一新之折柄猶更御為筋ヲ心掛ケ公然与可申出所、其義無之私ニ致殺害候者朝廷ヲ不憚致方ニ付、右等之者於有之而ハ吟味之上急度嚴刑ニ可被所候間、心得違無之様可致候事

右之通可相達旨刑法事務総督衆被申渡候、因テ申入候也

辰正月廿三日

参与役所

〔右之通於京都ニ参与御役所分御達し有之候事 町奉行

二月

御勅使御用掛り学問所ニテ相立申候御役人左之通り

御老 村松左門様

御賄方 小幡小作様

御用人都筑兵右衛門様

御積方 増田政右衛門様

勘定人 西島大吉様

一御本陣酒井様 亭主役御舟奉行中山吉太夫様、給仕人舟組八人、御簾八人、町方子供十七人

家司

岡本監物

近習

岡本伊蔵

同

中小路織之介

用人

高倉様 木崎隼人

同

加藤要人

同

長野左衛門

同

山本左馬

同

栗津信濃介

同

早野和泉

家司

小西直記

近習

岩崎織江

同

中井刀称男

用人

四条様 石田帯刀

同

小川兵庫

同

金田久馬

同

木下相模介

同

奥田主計

同

宇和嶋藩中 柳沢脚次郎 大野大助

宮部六左衛門 山田勘介

菊地又蔵

辻半三郎

雇人川野伊助

取締世話掛り 吉岡屋喜兵衛

餅屋次郎兵衛

米屋長兵衛

外二拾人余り

〔朱書〕
〔跡増分〕

鍵屋平左衛門

〔朱線〕
和久屋三左衛門

小堂嘉兵衛

木綿屋安兵衛

〔朱書〕
鶴屋方吉平□代御用所へ振向除キ

入用十七貫七百匁余、但し酒ハ不殘御用所分出候由也

〔朱書〕

一酒井様分上下六拾七人
一都筑様 芸州藩中 亭主役御簾奉行佐橋邦衛様、小頭會根源右衛門、給仕人簾組十三人、町方子供六人、茶坊主西眼正泉

外二壺人加番来ル

調子三太夫 右手附士五人 外遊撃隊廿九人

太田喜太郎 供人三人

取締世話掛り志水源兵衛 雇人鍵屋八左衛門

〔朱書〕
大北勘右衛門 嶋屋卯兵衛

〔跡増分〕

細野兵助

木綿屋幸七

本郷屋莊兵衛

足駄屋又左衛門

御賄貳人毎日御交滞^(代) 料理人鍵屋吉兵衛

〔^(朱書)都筑様分上下三拾九人

右入用九貫五百五拾匁斗、武久様入用共

右□人分二月十三日諸組世話人打寄相談之上、一日一夜

泊り分代廿五匁ツ、相定申候

右書付御積方様へ二月十七日二指出し申候

一武久様 芸州藩中 亭主役御簾奉行鳥居幾次郎様、小頭壹人、給
仕人組下五人、町方子供四人、茶坊主貳人

福田覚市 下帯刀人豊蔵

保田太仲御手附士渡辺他九之丞

梶山玉二郎

荒谷末蔵

取締世話掛り藤崎仁左衛門 雇人布屋与兵衛

〔^(朱書)跡増分〕

西津屋三右衛門

鍵孫弟
安田平兵衛

〔^(朱書)上下六人〕

〔^(朱書)右八都筑様御客二候へ共軍目附之由二付、別席被仰出候間俄二

当日二別レル、夫故細兵・西三兩人町老衆へ願増頼申候也、入

用八都筑様卜一緒ニ成ル

一江見様 芸州藩中 亭主役関東者頭可児伊右衛門様、給仕人御組

衆也

応変隊拾壹人 取締世話掛り丹波屋治右衛門 雇人鍵屋茂七

同 拾壹人

古川屋久右衛門 外五人斗

同 九人

野田宗兵衛

金穀方六人

〔^(朱書)江見様 上下三拾七人 右入用四貫九百目斗〕

一三浦様 芸州藩中 亭主役関東飯役峯尾

小笠原俊太郎 軍目附三人、御簾方四拾四人

山県三郎 手附貳人

取締世話掛り 川村彦兵衛 雇人油や長右衛門

同 清右衛門

樽屋新吉

木谷嘉四郎

升屋庄兵衛

林屋安兵衛

外十人斗

〔^(朱書)上下五拾壹人 右入用拾壹貫六百匁余〕

一岸本様 芸州藩中

山下治郎 武具方 取締世話掛り斎藤仁左衛門 雇人米屋藤七

田中忠蔵 金穀方

木谷源七

外貳人

丹羽良太郎

絹屋又右衛門

〔^(朱書)上下拾九人 右入用三貫六百匁〕

一小林様 長州藩中 小笠原弥右衛門 滝川登

島田祐三郎

小者徳兵衛

村上雅五郎

榑崎都之進

取締世話掛り木綿屋伊兵衛 雇人

日雇由

和久屋宗兵衛

〔上下六人 右入用三貫六百匁〕
〔朱書〕

一町方系役所 藩中・芸州拾三人

取締世話掛り島屋長右衛門 雇人

日雇由

松本利兵衛

升屋又兵衛

〔右入用三貫四百目〕
〔朱書〕

〔正月廿五日御出之節京都今三浦帶刀様御手二而御先供被為遊、

但し馬二而

右御勅使京都廿日二御出立、大津御泊り、廿一日堅田御泊り、廿

二日小松御泊り、廿三日今津御泊り、廿四日熊川御泊り、廿五日

小浜欠脇町今上広小路・鶴羽小路本通り、八ツ半時二壺番町御着

被遊候、廿六日今二月四日迄御逗留、五日朝御発駕倉見御泊り、

六日佐柿御泊り、七日敦賀御泊り、十二日迄御逗留二而十三日朝

敦賀御発駕被為遊候

一右御用掛り・世話人共、廿二日頃今掛りく之御屋敷様へ参り道

具類持運び、廿四日御屋敷飾り付等致、夫々手附雇人致申候也、

廿五日今二月五日迄詰切ニ出勤申候也、御用掛り丈ケハ御逗留中

二而も土橋往来致申候事

一料理屋者佐渡や長右衛門・井筒屋清兵衛・海老屋長右衛門ノ三軒

今仕出し致御宿々へ持運び申候、小料理屋ヲ雇一宿二式人斗程来

料理致申候事也

一町年寄衆へハ越前鯖江・福井・府中、加賀大聖寺・小松・金沢其
外駅々今、藩中或ハ町人杯追々聞合ニ参り候二付、又其宿ヲ被致
候由

一正月廿九日昼時二御勅使様御城内へ御入、御本丸御殿迄御見分被
成、二ノ丸ニ而御茶・御菓子出、七ツ時二御本陣へ御帰り被為遊
候事

一二月朔日四ツ時今当所此度御先鋒之御方様并二三浦様一手と堀屋
敷浜ニ而御調練有之、御勅使御上覧被遊七ツ時本陣へ御帰り也

一御逗留中料理屋献立之義ハ三度共一汁一菜ニ而、尤平皿ハ三品盛
也、酒之義ハ土瓶ニ而指上申候、夫も夕方斗、御肴ハ上分ハ重詰

二致、中以下皿盛引肴、菓子之義ハ上分ハ毎日四ツ時二千菓子む
し菓子上ル、茶ノ方ハ御坊主支配也

五日御発駕、朝飯こうり御持参二付、夫々昼弁当ヲ詰拵テ香之
物添可申事

一米手形御役所之義ハ正月廿五日今二月五日迄休日、六日今古川中

太良殿ヲ月番ハ相頼、九日迄出勤致呉、十日ハ壹番組ハ出勤致申候

外ニ料理屋仕出し賄ハ別也

一 二月四日夜六ツ半時ニ出生上中郡武生村之者、此度御先鋒ニ御供可仕御中間、瀬木町井筒屋清右衛門隣り門口ニテ殺害被致候

右ニ付明朝御発駕之事故町内大騒動ニ有之、七ツ時ニ見使相済死骸下陣へ引取申候、殺人誰ト申事相分り不申候也

右ニ付明朝御通り川縁町通りニ相成申候

一 此度御先鋒大将酒井直江様・御老和田耕平様・御用人山川五左衛門様・御先鋒御用掛り山田甚五左衛門様・奥津大夢様・高木作左衛門様、御人数惣高三百三拾人余ニ御座候、行列之次第書ハ別紙帳面ニ書記シ申置候

〔朱書〕
〔来ル十一月十四日御藩中蒸気舟ニテ御帰リ被成候〕

都筑様・武久様御両家様ニ而入用

一 拾壹貫百五拾四匁五分五厘、正月廿五日ハ二月五日迄惣入用高、日雇賃共

内 壹貫貳百壹匁七分諸払物代メ

引残り九貫九百五拾貳匁八分五厘入用書上申候

〔朱書〕
〔外ニ学問所ハ請取申候白米七表・蠟燭大四百挺・炭四

十八俵・尾木貳百五束、惣メ代凡五貫四百七拾匁

合拾五貫四百廿貳匁八分五厘也

一 河野伊助御両公様之御膳御長持之才領ニ被相頼御先鋒御供致候、留主中月々米壹表小遣イ銀五拾匁ツ、從御上被下置候

一 御勅使敦賀表ハ料理人兩人遣候様申参り候趣ニ付、料理屋仲間中及相談候へ共誰彼ト申居参り候者無之候所、山田屋長兵衛・大屋伝兵衛兄キ右兩人参り候事ニ相成罷出候、右ニ付留主中式人扶持ツ、從御上様被下置候

一 三月六日下竹原漁師かれ引之内三艘、人数廿三人、竜巻ニ出合行衛相知不申候也

一 同廿三日永三小路福屋五郎兵衛ト申者、七ヶ年以来之蔵切大盜賊致候処、下山へ引付られ候て廿八日大津町牢へ入

一 同二月下旬頃ハ府中伝太夫ト申者、当春酒井様之荷物之内脇差壹本・袴壹ツ・福連之羽織式枚メ四品、御用処中番致居候而盗取候事四月七日露頭致候趣ニ御座候

一 辰三月廿一日夜五ツ過時ニ細川藩中柴田主計ト申者、早追ニ而駕籠ニ而町老組屋へ付、宿を致候様被申候ニ付、則七軒屋檜皮喜太

夫へ御宿為致候処、翌日夕糸会所ニ相成御重役ニ御目ニ懸り申候
段被申候ニ付、則御老都筑様・岸本様・江口様御出役之由三日余
り逗留致、右亭主役辻半三郎・武田徳右衛門、医者長井様、西三
丁町へ毎々参り、出立之節勢田屋之芸子連て敦賀表へ参り候趣、
四月五日右敦賀ニ而被召捕入牢致死ス

一 四月十四日八幡宮市祭り神事、但し能なし

一 同十五日初卯右同断 同断

一 同廿四日谷田部村長徳寺ニ鐘鑄有之候ニ付寄進被相頼、小鏡壹面
・札三匁添指上申候、則当日参詣人夥敷事ニ御座候

一 五月十二日夕大工・木引・日雇・檜皮作料左之通町急触扣

一 大工・木引・檜皮弁当持参 拾三匁ツ、

一 同断 向支度 九匁ツ、

一 日雇根取、但し弁当持参 拾匁

一 六月祇園祭礼従御上様相止メ候様被仰出候、右ニ付七日御輿洗も

無之候

〔但し竹原祇園社内ニ御輿飾り有之候也、御神事有之候得共町方

ニハ山ねりこ共町々ニ飾り候事も不相成候様被仰出候 〕

町触

金銀交易之義者米手形役処ニ於人々望次第引換可相成筈之処、当節
御上無御余義御次第柄も有之、乍不本意定限相立一日三拾人宛、壹
人前五両ツ、限と申事ニ相成、諸商人他国仕込金等下方ニ而都合致
候様申付置候処、互ニ高利ヲ貪り格外之歩合ヲ以売買致、夫々悪弊
ヲ生し金子入用ニ無之者も利潤ヲ斗り、於米手形交易致高歩ヲ以売
付候者有之哉ニ相聞へ、別而如何之事ニ候、以後其手へ申付置一々
相糺、右様之不埒之者於有之ハ吃度可申付候間心得違致間敷候、尤
相場之義ハ御定法も有之候義ニ付、一己之利欲□□速正直ニ売買可
致候

五月廿七日 町年寄

一 七月廿四日夜八ツ過時大地しんゆる

一 同日下方金相場高直ニ付、米穀大高直ニ相成候間諸人難渋致候趣

ニ而、米屋仲間年寄共御呼出し有之、是迄相場夕三割下ケ被為仰
付候

一 同廿五日夜七ツ時小地しんゆる

一 同廿九日酒井内匠様京都へ御出張被為遊候

一 八月三日今来ル九日迄日笠河原ニ而松木庄助式百五拾回忌大法事
供養有之候

右ハ往古松木大豆納之事ニ付礫ニ相成候年回之由、但シ京極様
御時代元和元年未年ニ宛ル

一 同日昼九ツ時中地しんゆる

一 辰八月十日未ノ刻八幡宮御上葺出来ニ付御棟上有之候ニ付、宮年
番ハ槌餅十錢三文ツ、持来ル

当春年番町へ宮年番ハ頼談有之候処、諸色高直ニ付当年ニ而ハ凡
五拾貫匁余も相掛り可申見込ニ付、右等之処頼談有之処迎も町中
ニ而六ヶ敷趣ニ被申候事故、宮年番之了簡ヲ以左候ハ、宮世話人
ハ廿貫匁丈ケ出銀致候事故、跡三拾貫匁余ハ当年中ニ集呉候様之
御掛合ニ付銀致候趣ニ付、則当夏宮世話人一同酒屋寄場へ被寄、
神主并ニ宮年番・辻半・川彦・志水ハ老人前壹貫匁ツ、寄進ヲ御
頼有之、甚六ヶ敷候へ共無利ニ承知致呉与被申候、全体是迄町中
ハ御上葺被致候事之先例ニ、此度世話人ハ寄進致銀子指上候而ハ
以来此例ニ相成候事故色々断候へ共、左候而ハ当年御成就出来不
申候様ニ被申候故、無抛承知致候也

米手形

壹貫匁ツ、出銀之処

辻半・川彦・大北・木谷・吉岡屋・古久

志水・藤崎・野田・川清・米長・丹次

五百目ツ、出銀之処

(朱書)

「右之割合ニ有之候へ共、年番之外ハ一同不腹ニ被申候故、不
残出銀被致候哉相分り不申候趣也

但し壹貫匁出しも五百匁出しも、手前共ハ壹貫匁差出

し申候也

・林安・も久

吹田・斎藤・和久宗・川原・も善・丹安

・西島

一 辰八月指入町老衆ハ身込御呼出し有之、先日諸色高直ニ付三割下

ケ被仰出候事候へ共、米穀類ハ格別ニ候へ共外品ニ而ハ一向不相
分候、是も何故と申候へハ、世間不穩風評も有之難洪人之立行不
申候処ハ相成候事故、此度極難洪之者へ直安米取斗候様ニ致、三
割下ケ御免相願候外無之候様ニ御咄し、右ニ付而ハ右救米之損
料無之候様夫々見込ヲ以直安米埋立、損米出し呉候様御頼ニ付、
一統無抛筋ニ付御請申上候、手前共へ米拾表掛ル

此代六貫目町老衆へ指出し申候

右町方身柄之者へ夫々被仰付凡諸仲間共四百表斗出来候由、右ヲ
以於助成方難洪人壹人ニ三合ツ、白米八合之直段ニ而御払ニ相
成候、八月廿日ハ初り、米売之世話人左之通

右世話人 食見屋弥兵衛

川村原兵衛

吉岡屋喜兵衛

大北勘右衛門

井筒屋七右衛門

和久屋三左衛門

小堂嘉兵衛

河村清右衛門

鍵屋安兵衛

古屋文右衛門 右十式人四代り二五ツ時分九ツ
 同 忠二郎 時迄出勤致申候
 西津屋三右衛門

右ハ霜月三日之外相場も少し下直にて、七升位ニ相成候故今日切
 ニて相止メ候様被仰付候

右世話人為御会釈老人前拾匁ツ、十二月廿三日被下置候也

一 八月十四日東両組火消非常纏修覆廻り候ニ付、小世話人塗師原兵衛
 衛ニて掛合候処、式本ニて壹貫五百匁と申候ニ付、又大世話人分
 日比野伝二郎へ掛合候処、式本ニて七百匁にて出来と申候間、詮
 義致心見のため両家にて壹本ツ、致させ候也、右出来并ニ此度皮
 はつび八拾枚余御上様ニ有之候分、此般小世話人分御払之義ヲ願
 候由、壹枚ニ付五百匁ツ、ニ御下ケニ相成候、右ニ付道具揃驅出
 し致度ニ付、町老衆并ニ小世話人分御番所へ御願申上候処、殿様
 御慎ニ付成丈ケ物静ニ相勤可申様被仰出候ニ付、八月十四日ニ右
 驅出し致申候、右ニ付大世話人焚出し方壹軒ニ付白米五升ツ、六
 軒焚出し致、但し香之物ハ不入候事也

一 九月朔日御家中一統へ御談示有之、略之

御上様必至と御差迫りニ付当辰十月分来ル未十月迄頼扶持被仰出
 候、八歳以上へ壹人半扶持、八歳以下壹人扶持、外御老三百石高
 六拾表、御用人八百七拾石高として三拾四表、外役も右ニ准シ候

趣ニ被仰出候、足輕・中間ハ出張も有之候ニ付其儘之由也

一同七日町老衆分火消大世話人着付之義、是迄之装束野袴不相成、
 胸当・陣笠ハ是迄通り、武士先羽織か常之羽織かニ、侍高袴相用
 候様ニ被仰付候

右ニ付是迄之火事羽織ヲ紋ヲ取紐ヲ取、一通り羽織ニ紐を付、
 下ハ何成共たち付ヲ拵用候事ニ申合候也

一 九月十五日年号明治元年と改元被仰出候

一同日芸州藩中兵隊組越後行敦賀表へ御通行ニ付、丹後分小浜泊り
 早追申来り候ニ付、御用達一統へ右取締亭主方被仰付候、則御人
 数ハ式百廿一人

御宿

高成寺方丈八拾九人 右掛り

木谷嘉四郎 野田宗兵衛
 吉岡屋喜兵衛 志水源兵衛
 大北勘右衛門 米屋長兵衛
 林屋安兵衛 〆七人

瑞雲院

廿式人

同

川村清右衛門

古川屋久右衛門

常然寺

拾六人

同

辻半三郎

承教寺

廿三人

同

斎藤・細兵・和久宗

称念寺

七人

同

鍵原右衛門・西右衛門・金屋源七

檜皮喜右衛門

〔^{隊カ}〕長之組三十一人

樽屋喜左衛門 同 三拾人

鼠屋勘右衛門 医師 四人

右高成寺・瑞雲院・常然寺御用達世話掛り被仰付候、十四日

右御寺へ参り取掛り十七日七ツ半時帰ル

十五日八ツ時高浜泊りにて当着、十六日逗留、十七日朝発足

但し一宿泊り料白米六合金壺朱定り、逗留ハ金弍朱定り、米な

し

〔^(朱書)右宿賃町老へ申請候て其余之入用十五貫匆程失墜、委細別帳ニ

有

」

辰九月十七日從御上様御停止も明キ申候ニ付、放生会之仕直し致

候様被仰付候間、宮世話人年番并二年番町宿老相談之上、来ル廿

四日・廿五日両日ニ相究、右之通りニ御頼申上候、廿四日角力、

廿五日能有之候

三番叟・高砂・経政・三井寺・葵上・祝言岩舟・狂言文蔵・三

人片輪

〔^(朱書)右ハ四ツ時夕麻上下にて絵馬堂へ罷出、七ツ半時ニ帰ル、在方

御客ハ八月十五日ニ致候故内祭り也、門口丁^(提)ちんハ両夜ともし

申候也

」

一是迄御蔵定日四・九之処、追々御用多候而渡し方延引ニ相成、且

請取人も迷惑之次第も可有之候ニ付、以来ハ三・八之日朝四ツ時

迄ニ通可被指出候、左候ハ、四・九之日朝五ツ時夕出米渡方相成候事

御礼勤之廉以来左之通

一家督 跡式 格式 御加増 転役 年頭 御咎御免之節

右之外ハ都而支配頭月番斗へ御礼勤可被致候

一恐悦并ニ御機嫌伺右以来支配頭月番斗へ可被罷出候、但し支配与有之分ハ当役場月番斗へ可被罷出候

右之通被仰出候

九月廿四日

町年寄

一十月十日町方身柄之者并ニ町々宿老町役所へ正五ツ時ニ御呼出し

ニ付罷出候処、町御奉行様御出役ニ而御談示有之扣

御上御勝手向御六ツケ敷候所、昨冬来夕御時勢不容易ニ付越後御

出兵、江戸・京御賄方甚御六ケ敷ニ付、無拗義ニ付御家中初町・

在共御扶持方迄も不残減シ候様之事ニ而、殿様初諸御殿向迄も格

別之御省略被為有候位ニ被遊候間、此度御領分中へ金三万兩御用

金被仰出、右ニ付町方ニ而五千兩御頼入ニ相成候間、右等之処深

く奉恐察出金可致被仰出候、尤上納方之義ハ半金十一月中、半金

来已正月中と被仰出候

右ニ付手前共へ金弍百兩被仰付候

右町御奉行様御談示書扣

御上御勝手向必至と御難渋之義ハ一統ニも兼而承知之事ニ候処、旧冬来之形勢ニ立至り種々之御国難相湊ひ礎と御指迫り之折柄、越後御出兵ニ付而茂不容易御入費ニ而、殆与御当惑之御次第ニ候処、此上如何之御軍役可為蒙仰も難斗御時勢、余事ハ兎もあれ当節御要務タル御軍政御不行届ニ而ハ、実々国家之御興廢ニ拘り、何分ニも不為捨置御急務之処、積年之疲弊今日と相成術計も尽果、此儘ニ而ハ御自滅之外無之御場合ニ至り、御上深く御憂慮被遊候へ共被成方無之ニ付、時勢柄御不本意ニ者思召候へ共、不被為得止此度御家中初在・町御扶持人迄御宛行不殘御借請相成、家内人員并ニ役ニ応少分之手宛米被指出、就而ハ大殿様御初諸御殿御賄共十分之御省略被遊、何共恐入候御暮方ニ相成候処、右ニ而ハ中々以指向之御手宛ニも御不足ニ付、此上ハ御領分中御頼之外御手段も無之、是迎も余り毎々之事ニ而実々御信儀も難相立義ニ候へ共、斯之如キ御時勢ニ行当り候上ハ、御国中上下艱難ヲ俱ニ致国家ヲ維持スル之外無之候間、御入国已来式百余年未曾有之世變、御上御憂慮之段一統深く奉恐察、銘々身代ニ応し出金致国家之危急ヲ救ひ、御上之御深憂ヲ解キ呉候様致度分而頼入事ニ候、尤御国中ハ一体之義下々極難無苦之者ハ如何様共被遊、仮令三時之御膳ヲ相減候而も饑渴ニ者立至らせられず、御救可被遊との厚キ思召ニ候間此段ハ安心致べし、又財力ありて指向衣食住ニ格別不自由無之者ハ何分ニも一際骨折呉、一体之力以御軍備初御公務筋御不都合無之、国家維持之基本相立候様、精々尽力之程幾重ニも頼

入候、猶委細之義者町年寄共可申聞候

辰十月

小浜
町奉行

是今町年寄之御談示

只今被仰付候通り下地不一方御逼迫之上、昨冬已来世上之形勢三百年來未曾有之大變ニ而、御上ニも種々之御国難御指湊ひ無益之御入費相嵩ミ、今日ニ而ハ礎と御指詰りニ相成已上ハ御手之尽され方も無之折柄、当節越後御出兵ニ就而ハ不容易御入費ニ而、御仕送り方甚御当惑之処、余事と違ひ多人数之御進退ニも拘り候義ニ而、何分被為捨置かたく、其余京・江戸御仕送り等迄実々莫太之御入箇ニ候処、色々と御練合ニ而漸々少しツ、御差送り之御次第、夫とも越後表兵糧之義ハ太政官御仕送り有之候ニ付、幸ニ多分之御入費減居候得共、戰場之習是迎も御安心者難相成、臨機御差送り之御用意も無之而ハ不相成、尚此上ニも何ケ様之御軍役可被為蒙仰も難斗処、今日之御次第御役人ニも深く御心配被成候得共、已上被成方無之ニ付、此度諸御殿御賄等も十分御切詰にて御渡切と申事ニ相成、乍恐十万石之御身体ニ而小禄之陪臣ニも不被為及程之御暮と申ハ何共恐入候次第ニ候、又御家中ニ於茂当節柄所々御出張等度々之義ニ而其失墜も莫太、実々取続キ出来兼候御場合之処、無御抛廢敷御借米被仰付、御上ヲ初一統只饑渴凌迄之御取斗ニ而、御入国已來無之至難之時勢ニ付、一統迷惑之義ハ深く察入候へ共此段深く恐察有之、闔国之力ヲ以御国ヲ持こたへ相成候様精々尽力有之度、就而ハ只今之処ニ而越後ヲ初所々御仕

送り、其余指向御指置難被成分是非三万両斗無之候てハ不相成候
二付、当町ニても五千両出金有之度候、且甚無理成義ニ而申出兼
候へ共、右御入用宛ハ悉皆他所へ被指送候御都合之処、何分正金
御払庭ニ而是又如何共被成方無之候間、何兎角都合被致正金ニ而
上納有之様、一統実意ヲ以精々骨折貫度分而及頼談候、尤右上納
方之義ハ来十一月晦日限半金上納、残り半金ハ已正月晦日限上納
有之様可被相心得候

此段役場申聞置候様御奉行所被仰出候

辰十月

町年寄

〔是又々御奉行様御談示〕

唯今申述候通之時勢ニ至り国家至難之折柄、闔国之力ヲ以国家ヲ
維持スルニ無之テハ不相成義ニ付、上下共堅く奢侈ヲ禁し無用之
費ヲ省キ、富国之基ヲ不開してハ自滅之外無之候間、吉凶大札ヲ
始平常之衣食住共々精々質素ヲ守り、無益之失墜無之様銘々仲間
或者町内ニテ申合制度相立可申候、自然奢侈ニ長し分限不相応之
侈ヲ極メ候輩者取扱方も可有之候間、世上之流弊ニ不泥節儉之覚
語相立候様可致候、尚委細之義ハ町年寄共可及示談候

辰十月

小浜町奉行

一 天性院殿様十七回忌御征月ハ御指支有之候ニ付当月ニ御取越被成、
来ル十六日夕十七日於空印寺一夜別事御法事有之候、依之鳴物・

音曲・殺生・普請等停止ニ候、火之元別而入被入念候

十月十二日

町年寄

一 十月十五日夕来ル未九月迄右年限中御老様・御用人様、年頭・歳
暮・家督・代替り之節、都而御音信者御辞退被成候趣被仰出候間
此段申入置候、尤御礼之義ハ是迄之通御廻勤可有之候、以上

一 十月十二日夕八幡絵馬堂にて玉田大学殿神道講积有之候、廿日之
願又七日追願致十一月七日切ニ相済申候、木戸錢三匁ツ、候得共
時節ニ押れ指引三貫匁斗損之由

一 十一月十二日夕於西舞台浄るり興行有之候、太夫津太夫・村太夫
・勢見太夫・山城大掾、三味線弥七、木戸錢十五匁、場百匁之由
二 候処、大不景氣ニ而大損之由也 〔但シ十日之願又追願五日都
合十五日也〕

一 霜月十四日当御藩中越後行之御方不残御帰り被遊候

一 同十九日京都有栖川宮御役人被參候て、上り村諦応寺之事ニ付勅
許御木像御上ケ、空印寺へ御預ケニ相成申候、和尚ハ入牢被仰付
候、廿四日御役人被帰候也

一 八幡神主渡辺主税へ小浜社家触頭申付候間、神社之義ニ付而ハ都

而右同人が取調へ候義も有之、為心得之相触候事

但シ神社之義ニ付此度願立等致候節ハ触頭へ願、示談之上可願出候

町触

一当節御一新之折柄ニ付、以来之仕来リニ不拘此度新規川舟運送相始、当湊繁栄富国之基相立候様被成度ニ付、此度大問屋共へ右運送掛り取締申付候、左四人之者へ運送引請可取斗旨申置明六日ハ相始候間、諸荷物為登指出者ハ右掛り之者へ可申出候、并ニ是迄諸荷物取扱馬借座之外不相成候処以来背負等不苦候間、望之者ハ勝手次第相持渡世致候

十一月六日 茶屋四郎兵衛 加福庄助

吹田李兵衛 宮崎屋伊介

一御領分中百姓町人共御役人始諸役之手附等迄御礼事、又八年礼・歳暮其外不時手輕之送物致候義是迄仕来りも有之処、此度嚴敷御省略被仰出も有之、其上御領分中へハ近年多分之御用金等被仰出候茂、自然難義之筋も可相成候間、御年限中ハ音信物一切無用可致候、若心得違ニて些細之送り物致持参候共、乍不本意堅く指返し候間左様相心得可申候

十一月十二日

町年寄

町々宿老中

一辰十二月十八日御積方様ハ以廻文被仰出候、御用所十一月中御平均例年御払米有之候(廉)簾々

例年十一月平均附米各へ御指出ニ相成候処、当年より御仕法替ニ付以来共御指出不被成候、併代銀当年無相違被相納候ハ、例格之俵数丈ケハ付切相場ヲ以御指出しニ相成可申様、是迎も当年切可被相心得候、心工面も可有之候与存候間此段申入置候、但し此上ハ願被出候而も一切御指出し無之候間、左様可被相心得候、但し御用所御出入甘軒斗へ廻ル

一辰十二月廿一日夕七ツ時ニ過ニ、町内細野長兵衛宅へ同心衆博奕不審之筋ニ付踏込被申、町預ケニ相成申候

巳二月晦日御裁許徒罪、過料付

宿老井七・細兵七日閉門、改役大屋庄助七日閉門、田村宗組中十日ツ、閉門、宿之組ニ付

右ニ付夫々見舞遣申候へ共略之

一明治式己巳年正月五月初相庭田辺米拾匁ニ付六合五勺、大豆六合、小豆六合五勺、綿百匁ニ付五拾匁、種油壺斗ニ付五百六拾匁、桐油壺斗ニ付三百七拾匁、素麵壺箇百拾五匁がへ

一正月八日昼四ツ過時大地しんゆる、夫々小地しん四ツ五ツゆる

一同廿四日御用達一同今日御免ニ相成候、訳ハ御役人書留之所ニ委細書記し置候

一同二月十三日米手形役処金相場、七ツ時夕金壹兩代三百目、錢六

拾文ニ相成申候

町触

四郡上茶製申事は迄上茶製三方郡三人、下中郡老人願之上御免ニ相成居、其余之者自然上茶製致候義者不相成候事ニ候様ニ相成居候ニ付、此度広く上中下茶製御免ニ相成候間、相願度者鑑札可相渡候間、在ハ司農、町ハ市令へ可相願候、冥加金等御上様ハ不被仰出候事

二月廿九日

町年寄

坂図書様御事御姓名酒井修吉与御改ニ付、三島修吉も今日ハ慎一

と致改名候間、町々社寺共無洩様可被相触候事

町布令

毎月朔日・十五日・廿五日為政局會議定日ニ付、存寄在之面々ハ拘役儀右席へ罷出可被申聞候、当時御国政御一新之折柄ニ候へハ、御為筋心付候義者聊無忌諱罷出可被致建言候、尤御上御出座之節ハ御直々申上候て不苦候、同心以下百姓町人たり共有志之者罷出候義

不苦候事

三月

小浜市令

右之通被仰出候間町々入念可被相触候、尤寺社有之町ハ宿老中ハ通達可有之候

三月七日

町年寄

町布令

近来諸品高価ニ就而者相互ニ取引銀高も相嵩ミ町方一統不融通、殊ニ難渋之次第も有之由ニ付、是迄二季取引之所此後六季ニ取引致度趣出願之通御聞濟ニ相成候間、以後三月二日・五月四日・七月六日・九月八日・十月晦日・十二月晦日、右之通総而取引可致段社寺不洩様可被相触候

但シ御家中十二月十日是迄通之事

三月

町年寄

町々宿老中

大工・木引賃銀之事、先支度廿八匁、弁当持四拾壹匁ツ、

一三月十日去ル丑年焼合十七年忌ニ付組日待手前方ニて宿致申候、料理ハ組合中昼時夕拵ニ掛ル、町内ハ酒一升組々へ出申候也、外入用割、手前・加福・北方屋・奈胡長・田村九・西方屋ノ六人、割一人前三十一匁分ツ、掛ル、十一日曉四社様へ参詣致候

一 三月廿四日七ツ時ニ御家中様へ御触有之候事、来ル四月中ニ五鶴ヲ指出し候ハ、金札ニ而式百八拾匁ニ而取替可遣候様之被仰出候有之噂致

右ニ付町方下々ニ而者米札ハ潰レ可申候杯と申立、正金・金札買立大騒キニ御座候

右御触書之写

朝政御一新ニ付銀通用停止被仰出候ニ付而者、御当国米手形銀札此度御廃止被仰付、然ルニ寛政以来数年通用致来、即今一時ニ引替ニ相成候而者不融通而已ならず指支之事実々可有之ニ付、無余義漸々引替之積り左之通被仰出候

一来四月朔日夕晦日迄五鶴之分於貨幣方ニ引替候事

但シ鶴札以下引替之義追而相達候事、右廃止ニ付引替之分ハ金

壹両ニ付式百八拾匁がへ、無歩引相渡し候事

一金通用者は迄停止ニ候へ共向後惣而銀目ヲ廃候、金銭通用可致候、

米手形引替相済候日迄者金銭かへ取交通用可致候事

一年賦上納物始メ惣而跡々へ引残り候取引之物者、金壹両ニ付三百

目相場以取引可申候

一同廿六日京都大政官金札潰レ申候杯と噂致、小浜在・町共大騒キ

致申候処、廿八日朝も伊々京都之金相場左之通申来り候

〔朱書〕三月十八日百六拾兩貳部
〔金札〕
〔正金百兩ニ付〕十九日 百六十五兩二部
廿日 百六十七兩二部一朱

廿一日 百六十八兩一朱

廿二日 百七拾兩一朱

廿三日 大乱、相場立不申式百兩余之氣配也

廿四日 百七十九兩三部

廿五日 式百十四兩

右ニ而売手無之買人沢山、大坂表廿五日式百廿貳兩迄有之候趣、右ニ付古金も追々氣配り方々有之候由

一 四月九日昨年三方郡在身柄へ三・四軒斗おどり込ミ這入申候盜賊

五人今朝死罪ニ相成申候

一同廿八日夕於西舞台淡路座人形芝居興行有之候、太夫六七人、三

味線も五人斗、人形遣イ筆五郎頭ニ而十人斗来ル、出遣り早替り

不怪名人ニ有之候へ共、何分時節柄ニ押されて一向はやり不申大

損之由也

〔朱書〕木戸廿匁、場せん札百五拾匁位、右ハ廿日願二十日之追願メ三

十日致、凡五六百兩之損之由也

一 昨辰年八幡宮御本社御上葺替、正遷宮も在之候得共何分時節悪敷

候事二而、右御供養之義ハ御返シニ相成、則当巳年五月十三日
十四日・十五日迄三日之間御執行ニ相成、右ニ付町中へ御頼三日
三夜之間提灯立呉賑々敷致呉候様ニ、一町へ酒五升ツ、同若者
へ酒三升ツ、神主分被遣候ニ付、町中大騒キニ相成申候也

当町内ハ四文銭・文久銭・文錢ニ而御輿ヲ拵候て、十三日ニ町
中持歩行大当り也

〔朱書〕
「委細之義ハ永代覚帳ニ町々之引物、俄おとり之次第書記し
置申候」

町触写

御領分中之者一切脱国不致様嚴敷取締被仰出候ニ付而ハ、是迄子細
有之無扱久離勘当致、且後難ヲ恐れ御帳記之義相願候事ニ在之候処、
向後勘当之義不相成候、若父兄等之教誠（誠）不相用難任所置不作法者有
之節者、其子細委敷可申出候、次第柄ニ寄吟味之上相当之仕置可被
仰付候、就而ハ子弟共平日教育筋猶々不懈、不行跡之者無之様相替
風俗可申候事

〔朱書〕

「巳四月十七日ニ」
一組屋古六町年寄役被仰付、御上思召ヲ以勤中五人扶持被下置候、

尚又隱居之身分失墜之義も可有之候ニ付、別段年々金三兩ツ、被

下候

一武田徳右衛門町年寄役被仰付、御上思召ヲ以准士（並）之格被仰付候、

勤中五人扶持被下置候

町触

去ル寅年生糸并ニ蚕取扱之義旧幕分被仰出も有之、夫々相触置候通
近来無鑑札ニ而猥りニ取扱候者有之哉ニ相聞へ如何ニ候、此後迎も
寅年相触置候通急度相守、無鑑札ニ而取扱申間敷候、若違背致候者
有之節ハ急度可申付候

一文久錢十六文通用之義者兼而御触有之候処、近来間々通用指支候
分シテ、自然物価ニも相拘り下方難洪致候由甚以如何之事ニ付、
以来下方ニ於テ異義申立、通用差障り候者於有之ハ急度可相咎候
条、此間府藩県分給り配下之者共へ嚴重相達候趣御沙汰之事

四月廿日

一六月十四日朝川崎町油屋佐兵衛親父曉七ツ過ニ裏へ罷出行衛不知、
町内中親類色々海山川相尋候得共相分り不申候処、同十七日夕方
ニ又裏之方分無難ニ帰り候趣ニ御座候

一巳六月廿二日分八幡社内ニ於角力興行有之候、木戸錢廿匁、薄縁
壹枚四拾匁、大流行ニ有之候

一天保度以来出奔・勘当・追放人、年齢并ニ右出奔等ニ相成節之年
月取調へ、来ル十一日町役所へ可被指出候事、但し当節何方ニ住
居相知レ居候分、行衛不相知分共ニ書記し可指出候

一同六月晦日朝町内細野屋兵助大借ニ差詰り出奔致被申候、凡三四千兩之事也、右ニ付親類大迷惑ニ而御家中諸役所之拜借当金三部か、無利足元金十ヶ年賦か、扱ニ廻り候事ニ翌午三月中迄掛り申候也

一下山次郎共錢相庭三拾式文ニ相成、米価高直ニ付是又壹匁五分ツ(頂戴)、丁大致候而者、迎も難立行相歎候ニ付、則一軒前付三匁ツ、家并ニ遣候事ニ相成候処、其内町々身柄之者之処ニ而ハ米ニ而丁大致度願ニ付、是も隣町聞合倍増と致六匁ツ、七月七日分遣事、手前も六匁ツ、遣し申候

一七月十六日分於本承寺ミノラクダ菘駱駝壹疋見せ物ニ来ル、木戸錢五匁ツ、五日之間有之候

一同廿四日分於西舞台竹沢万治独樂足芸興行有之、三十日願之処大不景氣ニ而廿日斗ニて願下ケ致候
〔朱書〕木戸廿匁、場金拾三歩、大損凡百貫匁斗之噂有之候、檜皮喜太夫・樽屋喜左衛門・青井梅メ三人之元方之由

市郡江

今般藩々之御製度御改革被仰出候、就而者從四位様御事当藩之知

事被為蒙仰、是迄之御領分ヲ被遊御支配候事ニ而者、御支配ヲ請ケ奉り銘々之職分ヲ尽し、王事ニ勤勞致べき事ニ候間、不相替幾久敷御用等相勤可申候、則御名分ハ替り候へ共御取扱振ニおいてハ素分相違も無之候へ共、其段一統安心いたし弥以職業相勵、御上下御首尾克様ニ心ヲ尽し可申候

町触

大殿様御事 從四位様 若殿様御事 若麻呂様〔朱書〕「与七郎様御事也」前殿様御事 新從四位様 若御前様御事 御新造様与以来

右之通可奉祢旨被仰出候事
右之通被仰出候間町々不洩様可被相触候、尤社寺有之町宿老中分通達可有之候

八月七日

町年寄

一已八月廿四日昨冬被仰出候質素儉約筋之義ニ付、此度婚禮之義ハ一代之大礼之義故賑々敷致度候得共、跡二日酒肴ヲ出し悦ニ参り候者ヲ引上ケ候事故、何となく太義ニ相成候間、当日一日者成丈ケ賑々敷致候様、死去之節も葬式当日丈ケ賑々敷致、跡待夜〔速〕と申振舞杯候義決而相止メ可申候事、尤香奠之義ハ町々ニ而取究相定メ可申様被仰出候ニ付、是ハ町究ニ致候事

不幸之節ハ当日近所組合丈ケ立非時振舞申、寺へ布施調へ是迄通り酒肴遣候、跡近所たりとも待夜相止メ可申事、香てんハ一軒ニ付式匁ツ、番家ニ為集メ、当家へ可遣事相談ニ相究申候也

町触

一先達而御触ニ相成り候贖金一町所持之者有之候へハ、町々ニ而員
数取調へ、来ル十三日迄ニ無遅滞武田一平宅へ可被書出様通達之
事

十月九日

町年寄

町々宿老中

一十月廿九日昼七ツ時中地しんゆる

一十一月五日野田宗之輔因州米買入之事ニ付、今日永代式人扶持被
召上押込被仰付候

一同日本綿屋作兵衛酒造御差留之処作り込致、御改之上之ハ川彦へ
御預ケニ相成、今日閉門被仰付候

一同四日本綿屋久左衛門妹かね嶋屋長右衛門へ嫁入致候也

一已十一月八日夜分於西舞台女義太夫浄るり興行有之候、木戸銭六
百文、大流行也

一町役所普請出来ニ付来ル十五日分於同所御用相勤、毎日朝五ツ時

分九ツ時迄町年寄兩人日勤罷出候間、都而御用向者役所へ可被申
達候、尤内々之義者別席ニ而非番之者承り候間、向後兩人共内々
宅ニ而承り候義者一切御断申入候、併し臨時至急之御用者夜中何
時ニよらず無遠慮早々可被申達候

但シ二・七昼後出勤 五・十休日

〔朱書御役所御普請凡百五六拾貫匁入用之由ニ承り申候〕

町布令

当夏以来不順氣ニ而米穀不熟ニ付、当年限り造酒指留メ他国酒売買
指免置候処、先日来上方筋追々米価下落致候ニ付、酒屋共一統他国
米買入造酒致度候段及出願ニ候故、猶又評義之上此度他国米ヲ以造
酒指免候、就而ハ他国酒買入当年限り、明春分以前之通り停止申付
候間、是迄他所引合之分年内切ニ不残引取可申候、たとひ年内買取
之分も来春ニ相成候得者他国ニ而売払、当所へ取寄候義者決而不相
成候間、銘々引合之分者年内ニ取寄可申候、右之趣末々迄不洩様通
達可有之候

已十一月

小浜市令

右之通被仰出候間町々入念可被相触候、尤社寺有之町ハ宿老中

分通達可有之候

町年寄

町布令

被仰付 被仰出 被仰下 御沙汰

右之文字行政官之外不可用旨於東京御達有之候二付、向後仰・御沙汰之文字ハ相除キ、御令・御申付・御達候節ハ其心得可有之候一惣而是迄官府分諸向へ相達候義ヲ申談と唱へ、諸向分官府へ届出候義ヲ申達与唱へ来り候へ共、向後官府分者達与唱へ、諸向分者届筋二候へ者御届ケと可被相唱候

十一月

権大参事

右夫々支配下迄も可被達候事

右之通御令有之候間末々迄不洩様可被相触候、尤社寺有之町ハ宿老中分通達可有之候

十一月

町年寄

宿老中

一十二月朔日町中宿老老人ツ、町役所へ御呼出し有之罷出候処、当夏正金上納金札ヲ御下ケニ相成候処、御都合克上納致満足ニ思召、依之聊御酒料被下置候間難有^(頂戴)丁大致候様被仰出候、但シ金壹両ニ付百文ツ、被下置候

〔町内金高百七拾九兩ニ付五百三拾七匁出ル、手前分共〕^(朱書)

一同日酒直段壹升ニ付錢壹貫八百文、古札五拾四匁ニ相定り申候^(朱書)
〔但シ以来ハ壹表ニ付米直段貳百匁違候ハ、立替有之候事〕

一同二日三方郡手代中江八太夫・井村利兵衛・松見茂太夫・西木織

右衛門ノ四人、御疑之筋有之入牢被仰付候^(朱書)
〔〇〕翌午七月廿五日井村・中江兩人郡払、松見・西木ハ居村払被仰付候

一同九日銅錢十式文通用之義ハ兼而被仰出も有之処、此頃ニ至り不通用不融通之趣相聞へ候二付、於貨幣方役所引替候間右役処へ可致持参候事

市令

右御申付ニ相成候間町々入念可被相触候、尤社寺有之町ハ宿老中分通達可有之候

町年寄

宿老中

町布令
大谷左右平方今日熊川定番倉廩司兼帯被命市令欠役二付、市中事務之義者民事掛り権小参事須田鎗五郎・寺田純蔵取扱候間、為心得相達候事

右之通御令有之候間町々入念不洩様可被相触候、尤社寺有之町ハ宿老中分通達可有之候

十二月十七日

町年寄

一十二月十八日五ツ時町役所へ呼出し罷出候処、此度御一新御改革ニ付町方年番町御廃止ニ付、相改候て其方方へ宿老頭取・取締役

申付候間、以来ハ町方都而取締致候様御申付有之候

木谷嘉四郎

金屋源七

丹ば屋次右衛門

東 吉岡屋喜兵衛

中 木綿屋伊兵衛

西 吹田弥惣右衛門

大北勘右衛門

西津屋三右衛門

同 新次郎

右之通御申付ニ付九人之者伺申上候事、指当り年番町之

代り故一組耆人ツ、月番ヲ拵、其方へ御用筋御申付被下

候様申上置候也

今日ハ町年寄衆之御用御伺之義者、民事掛り権小参事様須田鎗五

郎様・寺田純蔵様也

社寺刑法方間宮小平太様・団勘吾様、小頭杖突宮川柳蔵・中江定

一、助成方上村惣次郎・今野孫八・松村算次郎

町布令

一銅錢直段引下ケニ相成候哉之風聞申唱へ候者有之、下々ニ而ハ彼

是疑惑ヲ生し取引難義之趣ニ相聞へ不謂事ニ付、既ニ御布令も相

成候上ハ少しも掛念なく取引可致候、望之者ハ貨幣役所へ於テ引

替可遣、并ニ御収納ヲ始諸上納共銅錢相納不苦候間、心得違無之

通用可致者也

但シ諸上納銅錢相納候分ハ、貨幣役処へ持参致候ハ、為替切手

可相渡、右ヲ以夫々御役所へ可指出候

会計局

右之通御令有之候間町々入念早々不洩様早々可被相触候、尤寺社

有之町ハ宿老中ハ通達可有之候

十二月

町年寄

頭取中

旅人止宿証文以来町役所へ可指出候事

一是迄得意諸職人之外勝手次第第二雇候義不相成候仕形ニ候処、今般

右仕形御差留メニ相成候間、以来郷・町職人之差別なく施主勝手

次第第二雇候様御申付有之候

一諸職人賃増願出候、左之通

大工・木引・桶屋・左官・檜皮・畳屋

老人前金壹歩 手前支度 金貳朱三百文 先支度

黒鋏・水主・日雇

老人前金三朱 手前支度 金一朱三百五拾文 先支度

右之通御令有之候間町々不洩様早々相触可申候事

十二月十九日

町年寄

頭取中

一十二月廿五日昼後ハ名田納莊百姓共動拳致、五十谷村小兵衛へ詰

掛ケ候処酒飯指出し候而、夫ハ滝谷村宇左衛門・同宇兵衛両家ヲ

こぼち、谷田部村迄参り候処、暮六ツ半時頃より御役人様方追々

御出張ニ而、色々御諭被為遊候而漸々廿六日朝引取申候也、凡千

五百人斗由

御役人様方焚出し方 辻半三郎・野田宗兵衛・藤崎仁左衛門

・絹屋又左衛門

同廿六日夜根来分遠敷迄百姓罷出候、御役人様方御出張有之由

同廿七日夜池河内分右同断

右同断

一去ル十八日町役所へ呼出し有之候処、当年格外凶作二付在方夥敷

難渋人有之、御上ニも深く御心配有之、従ニ四位様へ御達しニ相

成候処、御手元金五百両御出金被為遊候、新四位様へも御達しニ

相成候処、手元金無之間何成共手道具売払候て、式百両御出金被

成候二付、御役人様方も夫々五表三表ツ、御救米御出し二付、我

等之も少分たり共御用ニ相立候様致度二付、志之者指上候様御頼

談有之候

右二付 一拾表 辻半三郎 一五表 武田一平

一七表 志水源兵衛 一同 川村彦兵衛

一同 丹ば屋次右衛門 一同 木谷嘉四郎

一五表 大北勘右衛門 一四表 藤崎仁左衛門

一四表 古川屋久右衛門 一三表 野田宗兵衛

一同 吉岡屋喜兵衛 一同 金屋源七

一三表 川村清右衛門 一同 木綿屋伊兵衛

一同 組屋六郎左衛門

右之通出米致申候、同十九日右之外頭取分其次之処夫々見込咄し

致呉候様御申付二付、宿老ニ不拘束・中申合頼申候

東方にて式拾六表、中方にて拾六表、惣々百式三拾表出来候由也

凶年之上御上下混雜之次第も有之候二付、当暮御収納取立来正月

廿日過ニ相成候、右二付上納物始総而取引勘定来正月中ニ而被致

候、都合ニより当暮取斗候義ハ勝手次第可致候

十二月廿六日

民事掛り権大参事

右之通御令有之候間町々不洩様可被相達候事

町年寄

頭取中

一下山勧進之義ハ辰年迄老人ニ錢壹文ツ、遣し居候処、錢相場三拾

式文に相成候間増呉候様ニ町中へ相頼候二付、組町相談之上一軒

二三匁ニ相成、尤巳年切左之処大家之向ハ米にて被下候様是又頼

二付、町内四五軒之処其倍六匁と申事ニ相成、手前ニも六匁ツ、

遣し申候処、又候午年も不相替頼二付、頭取中相談之上頼通致遣

し申候

一十二月廿八日町中宿老老人ツ、御呼出し有之罷出候処、当年格外

之凶作二付、別而名田納庄向必至難渋之趣二付、先日動拳致候而

谷田部村迄罷出候二付、御役人方御出張被遊、当年切無年貢、其

上極難渋人へ米壹合ツ、御救米被下置候而一同引取申候、翌晩ニ

も遠敷へも動拳致候趣、是も御出張御取鎮ニ相成候故、最早町方

へハ出不申と存候得共、無法人何時ニ不限罷出候而乱妨致候得者、早速打取候御覺語(悟)ニ御座候へ共、自然右百姓共ニまぶれ町人共罷出候共、無用捨打捨被成候、其節ハ甚不便之至り候故、末々迄心得違無之様得与申諭置候様可致候

右之趣得御意置候旨御申付ニ候

〔(朱書)直様組頭中立寄合致、組下之者末々迄急度通達致候様御申

付有之候也

明治三庚午年

一 正月四日辻半三郎・志水源兵衛・藤崎仁左衛門・野田宗兵衛・木谷嘉四郎・絹屋又右衛門・手前メ七人町老衆分廻状、今日昼飯後民事掛り寺田純藏様御宅へ御用有之候ニ付罷出候様申来り、八ツ時分一同罷出候処、権小参事山川様・原田様・須田様・池田様・寺田様以上五人様御立合にて、昨冬名田納莊動拳致候ニ付、右ハ凶年之上紙・炭杯不捌キにて難渋人夥敷事、夫ニ付右様之訳ニも相成候間、何卒其方共無利息にて右仕込銀取斗致呉候様御頼談、尚又早々取調へ可申様御申付にて引取申候

〔(朱書)右ニ付今晚町役所にて寄合致申候

右ニ付多分之事故正月九日人数増御願申上候て、則九日ニ不残御呼出し、須田様・寺田様御出張御談示有之候、人別嶋長・堀口・食弥・吉岡や・古久・川清・も伊・林安・も久・西三・丹次・金源・川彦メ十三人、都合廿人ニ相成申候

一同十日八ツ時分町役所寄合初二付御酒被下候趣申来ル、町老兩人・窪田・大問屋・宿老頭取中メ十五人、紋付袴羽織ニ而出席ト致

本膳 鱈 汁(のり)積入 飯 香之物 平皿(半へい)焼麩 八寸式枚盛替 鉢肴式ツ 水菜

〔(朱書)右ハ前日廻状ニ差上物御断故止メル 吸物(薄雪)

夕方ニ相濟婦ル

今日八幡宮世話人御廢止ニ相成申候也

以来ハ御宮之義者頭取支配ニ被仰出候 〔(朱書)但シ当年分祭礼二者町老衆出勤無之、頭取中にて相勤可申事定ル

一同十二日夜六ツ半時分八幡宮神楽殿へ袴羽織にて頭取九人出勤致、翁初り神主分銚子ニ土器、焼鯛・御神酒出ル

五ツ半時引取申候

一同十三日市祭り、麻上下ニ而五ツ過分絵馬堂へ出席致申候

間宮小平太様 杖突頭取 宿老頭取九人絵馬堂詰

社寺司 團勘吾様 中江定一殿 〔(朱書)右支配常者権兵衛也 町老衆指図して

〔(朱書)右之御賄之義ハ町老衆分佐渡長方へ先例通御申付也

初積入 吸物盛替酒出ル 中入 菓子盆ニ赤飯 〔(中板・こんにやく)焼たうふ・小芋 〔(ふりいり肴一切)にんしん・牛房

跡々酒之時硯昆布ふた表板

一酒三升七合五勺 倉座せん牛房 一酒貳升 同音方へ

一饅頭一折添

〔右八舞台正面へ持行〕

先例ニ酒一升

饅頭一折添 中西町 右同断 永三小路 右同断八幡小路 西宮前

〔右八古来今市令様へ被指上候例にて、

今般御改革ニ付其町御断ニ相成候へ

共、矢張是迄通差上候様被仰付候

〔右之饅頭一折、客さしきへ一折、同心衆へ一折被遣候、一折倉

座へ

〔宿老頭取・月番三人刑法方へ御酒之時一度御挨拶ニ出、又中入

御膳之時一度出ル

右御出迎之節杖突衆今頭取出勤之御披露有之候、御見送りニも罷

出候事

〔右能相濟候後竹之内参り初卯之能之詮義相談ニ来ル

翌十四日刑法方へ頭取壹人昨日之御礼ニ廻ル事

一午正月十五日火消大世話人年番相談ニ而、若者初寄合壹人前拾欠

ツ、酒料ニ定遣ス也

一二月七月初卯神事ニ付頭取中継上下ニ而九ツ過今八幡宮へ参詣致、

神楽殿へ詰所へ出勤致申候、右賄方之義ハ町老衆今御取斗佐渡長

ニ御申付有之候

一同晚今町八原屋久次郎方へ刑法方同心衆踏込被成、博奕連中桶屋

次助兄弟三人、金屋源七弟、石屋小路ニ壹人有之趣也

右ハ三月十四日夫々徒罪・過料被仰付候、宿老・組合閉門被仰

付候

一同九日助成方御廢止ニ相成、仮取調へ中安居町糸御役所裏ニ有之

候

一同六日今町老衆今御頼ニ付身柄之者拾人斗米貳表ツ、出し致、施

粥致事申合、則焚出之義ハ酒屋仲間へ焚出し被仰付候、町役所ニ

て遣し可申事、右世話掛り之義ハ頭取中へ御申付ニ有之候

〔右ニて一月斗遣候得共跡取継キ不申候ニ付、又々身込相頼壹表今

五升位迄取集メ候処、凡八九拾俵斗出来申候也〕五月十五日切ニ

て相止申候

又五月廿三日今極難洪人取調へ、百廿人、乞食廿人、米壹卜一升

焚出し申候也

町布令

一此度ニツ鳥居町ニ於テ医院御取建ニ相成、医官中一統右場所へ出

勤致、難洪人之者病氣ニ候ハ、診察之上御薬御施し被下候間、来

ル三月朔日夕毎日朝五ツ時夕九ツ時迄之内ニ出願可申候

但シ毎月三・八之日休日ニ候間此段相心得可申候事

尤難渋人之為御取建ニ相成候事ニ付、相応渡世致居候者へハ御施薬ニ者不相成候間、在・町役人共之見込ヲ以難渋之者病氣ニ候ハ、早々願出可申候、併難渋ニ無之而も長病又ハ六ヶ敷病氣ニ而、手広く診察相聞度者有之候ハ、願出候義ハ勝手次第候、尤是ハ相当之薬代相納可申候事、但シ願方之義ハ印紙在・町役人共へ相渡置候間、病氣之者役人迄願出候ハ、右印紙ニ何郡何村何町病人何某役人何某と相認、役人名前之下ニ印形ヲ居へ持參可致候、難渋ニ無之者願出候節ハ、右印紙ニ当人住処并ニ名前相認メ願出可申候、役人印形ニ不及候

右之通相達候事

午二月

権少參事

一冠婚喪祭者人之大札公然と行ふへき事ニ候へ共、世上衣食之奢り増長致、古風ヲ失ひ世間之付合ニ泥ミ吉凶共多分之失費、別て諸色高直折柄、互ニ迷惑致ながら婚禮当日夕三日之間^(親)新疎之差別なく酒宴ヲ催し、新喪之節ハ一七日之間是又親疎之指別なく多人数速夜ニ招キ、^(親)新類日夜客もてなしニ奔走いたし、表事ハ自然ニ怠り、其上莫太之失墜ニ困り、又一生一代の嫁取ヲ世間ニ隠し夜中窃ニ向取り、組合町内へ雇人と披露し致不都合之次第、全く多分之費ヲ厭ひ故ニ弊風ニ至り候故、向後吉凶共左之通節儉相守可申

事

一婿取・嫁取之節当夜親族打寄り目出度祝義相整、料理者一汁式菜、酒肴ハ三種ニ限ル、翌朝夕悦ニ參り候者へ酒肴差出候事一切可為無用事

一新喪之節斎指出候も一汁二菜当日限り、其余一七日之間組合并ニ懇意之者たり共速夜ニ招キ、又ハ近親相互ニ夜食等相送り候事総而可為無用事

一葬送り・寺參り等は迄通り、併シ当日女之寺參り者近親たりとも可為無用事

一翌日夕寺參りハ父母・兄弟・伯母・伯父ニ限ル、其外国友・懇意之者実情ヲ以墓參り致候義者格別之事、併其家ニ不立寄銘々勝手ニ墓參り可有之候事

右ニ付寺參り之人数多分減り候ニ付而ハ、銘々宿坊へハ身分相応之取扱可有之候事

右之ケ条相背候輩者詮義之上相応之過料取立候間、末々迄心得違無之様通達可有之候事、以上

小浜町役所

一午三月十四日・十五日永三小路市塔様七ヶ年目之供養、当年ハ格外之時節柄ニ付壬生狂言者無之候処、十五日八ツ時夕俄ニ舞之舞台ヲ借候而雲天上ニて七八ツ斗被致候趣、兩日共天氣ニ而殊之外賑々敷事ニ御座候也、町内へ一升式三合斗御鏡一重来ル、右ニ付

町内分米手形百匁指上申候

(朱書)

「右ハ先例通り壬生狂言致候へハ諸造用五六十貫匁入用、其余客
賄入ルト百貫匁之由西三之咄シ有之候也」

一 同三月廿八日町方宗判町役所ニ而有之候、民事掛り須田様御壱人
御出役、町老兩人・書役式人立合

町布令

一行方百太郎方民事掛り被免已来ハ大參事 村松左門方

右御用筋被取扱候ニ付右為心得相達候事

右之通御令有之候間町々・寺社共不洩様可被相触候事

四月四日

町年寄

町々宿老中

一 四月廿三日遠敷上ノ宮ニ而五穀成就之能有之候ニ付、賑々敷參詣
可致様御触有之候

一 五月朔日曉六ツ時中地しんゆる

一 同三日夜四ツ時右同断

一 同廿日夕川崎町浜ニ而相撲興行有之、関取小野川才助来ル、木戸

錢三拾匁、場薄縁一枚五拾匁夕七拾目位場所ニ寄、晴天五日一日
之追願、以上六日有之候、時節柄ニて大損之由ニ御座候

一 六月六日助成方二郎左衛門無尺廻状持来り、此間糸役処も御引扨
ニ相成、刑法方取締役と被仰付候て御城内へ刑法方之処ニ而役所
相立候様之咄候、併此度ハ六・七月丈大津町頭取詰所ニて取立被
致候趣也

一 同廿一日御城内御積方様夕呼出し罷出候処、先年夕置居ニ相成候
産物方調達之金銀、此度御一新ニ付御仕法立被成候而御返済ニ被
成度思召ニ候、併一時ニ御返済と申訳も不相成候へ共、其段御談
示有之候

一 同廿二日御用所并ニ町御奉行所へ調達も夫々年曆月日其訳書致、
書出し候様被仰出候

町布令

天保元年以来御上様へ調達之金銀御不義理ニ相成候分、御時節柄
一時ニ御返済と申訳にも無之候へ共、何ニか御返済方御仕法被為
成下度思召ニ御座候間、左之通銘々書上ケ可有之候

一 何百何拾兩

一 銀何拾貫匁

右ハ何年何月如何様之訳ニ而調達、其内元金何程入、利足何朱指引、残金銀何程と申事、并ニ御証文之分有無共委敷書記、来ル廿五日迄之内ニ町役所へ御指出し可有之候
右之通早々町々へ御達可有之候、以上

六月十六日

町年寄

町々宿老中

午七月十日御布令

北海道産物は迄通商司ニおいて相改候処、今般開拓使管轄相成候間、其筋渡世之者共北海道産物入津致候ハ、右産物役所へ速ニ相届ケ水揚等致差図ヲ請可申候、自然其儘ニ水揚等致拔荷其他不正之取斗致候者有之候節ハ、取糺其荷物取上ケ候筈ニ付、心得違無之様堅ク可相守者也

^(開)海拓使御役人連名附属茂庭開拓使掌御用掛り取締

河島錠之助様

辻半三郎

三島慎一

御用達志水源造

石川三良兵衛様

古川屋久右衛門

丹ば屋次右衛門

一七月十六日・十七日八幡社内ニ而江州の素人角力来り興行有之候

一同夜三分り村・万願寺村之寺ニ例年近村三ヶ村若者寄集り踊り有

之候所、右寺ニて野尻村若者と父子村若者と大喧嘩有之怪我人有

之候由、御上へ願候へ共内済ニて相済申候由也

一七月十二日夜四ツ時ニ福谷村真珠庵ニ江戸表へ被帰候新格青野と申人同居致居候、其処へ松見健造寺へ罷越居候処、右青野乱心ニ相成候而右健造并我妻兩人ヲ殺害致候而、自分も海へ入身ヲ投ケ死去致ス、寺之和尚も少し怪我被致候也

一同廿一日頃御作事屋掛り御大工役義御免ニて閉門被仰付候、尤鍵番三人御奉公御取上ケ、諸奉公御構御目代兩人三表ツ、御取上ケ之由也

一八月六日夜四ツ時夕大夕立夜通し、翌日四ツ時迄雨降続キ出水、東市場・遠敷・湯岡・五十谷皆々橋落申候、此度ハ諸々山崩れ有之候、川筋太興寺村の上ノ方ハ格別之事無之趣、小浜ニ而ハ伏原・別所・発心寺・愛宕山・心光寺・空印寺・妙興寺・西屋敷・常高寺・西福寺・妙徳寺・龍谷寺・高成寺山拔致シ、三方郡常神村四拾三軒之処七軒残り、三拾六軒ハ潰レ家砂入ニ相成申候、しかし昼之事故怪我人ハ無之候趣也

大飯郡三分里川上村大山拔、人家牛馬迄損ス、三分里一円大洪水、本郷村ハ大変之事ニ候由

一金壹両此錢両替拾壹貫弍百五拾文、但シ壹匁ニ付三拾六文通用

右之通相場立替ニ相成候事

八月廿七日

町役所

一 八月十四日・十五日放生会、頭取九人十四日羽織斗にて、是迄町老棧敷にて角力見分、弁当八町老賄二而佐渡屋分重詰仕出し、飯盛こほし出ル、角力場へさらし木綿一丈式尺、半紙五折、行司へ金壹歩、呼出し祝義六匁、角力取東西へ酒四升遣候処、又式升増呉候様頼候へ共壹升取斗遣申候

刑法方六人看式鉢・酒式升之処、又権兵衛も少々頼二付一升増之処、都合五升入用二相成申候

丸丁(提)ちん頭取一軒式張ツ、集メ、十八張之処へ二夜之蠟燭三十六丁買調へ相渡し申候

〔朱書〕今晚刑法方衆へ頭取式人御苦勞と挨拶御出候事

町方両日之賄酒八十四日刑法方并権兵方へ五升

同 角力取五升

十五日饅頭付御奉行様へ三升

壺卜三升也

劍鋒八当午年分居切 小屋掛ケハ是迄之通

其余ハ是迄之通り

同十五日朝五ツ半時分頭取麻上下二而絵馬堂へ出(勤カ)致申候

一 酒三升 三組頭取中、下ケ札付テ

一 焼饅頭五十入三折 刑法方へ指上申候

一 酒三升七合五勺 倉座へ

〔朱線〕

一 饅頭五十入一折

一 酒式升

同音方へ

〔朱書〕右ハ町老仕出候

右刑法方御出之節ハ頭取中絵馬堂前ニ平伏ス

神主分菓子・茶持参有之候

同音方へ貸渡し一匁五り通

楽屋へかし渡し九分同断

〔朱線〕

町老賄 吸物積入たうふ

猪口盃 かさ飯

中入之節 菓子盆 赤飯 菓子椀 にしめ

中板・焼豆腐
牛房・小芋

〔朱書〕右ハ佐渡長仕出し也

焼鮎一疋

後 硯表板ふた牛房

酒

刑法方同心衆十式人、賄方ハ佐渡長分町老衆賄之内ニ而被致候事

二相成申候

此度分諸組分警固衆御止メニ相成申候

八月十六日刑法方へ頭取中分壺人御礼ニ罷出候事

同日神主分頭取中御神酒御振舞被下候処、一統羽織斗にて七ツ過

分罷出、御酒・雑魚出、五ツ時二帰ル

町布令

一大工・木挽・桶屋・左官・檜皮・畳屋壺人前賃金定

弁当持参ニ而金三朱錢百四拾八文

同 先支度金式朱

一 黒鉄・水主・日雇者人前賃金定

弁当持参ニ而金式朱三百文

先支度 金一朱式百文

右之通御令有之候間町々不洩様可被相触候

一 町方宿老相勤候者元来無給之義ニ付、町内諸入用出銀等相除キ可

申答之処、中ニテ仕形リニ分平人同様出銀等致居候者も在之趣ニ

承及候、近年御用多之時体別而迷惑之次第ニ付今般相改、宿老勤

中右諸入用等都而出銀ニ不及事ニ申付候間、為心得可被相触置候、

以上

九月六日

町役所

町々宿老中

一 九月十七日組屋古六方歎願之次第も有之、今日町年寄役御免ニ相

成候間此段可被相触候、以上

町年寄

町々宿老中

右ニ付頭取中へ町老人札被仰出候

一 十月十二日藤崎仁左衛門三人扶持ニ而町年寄役被仰付候、同十五

日要三と改名被致候

一 川越権左衛門焼印無之升ヲ以売買致候義、古来分御制禁ニ候処兎

角不埒之義も有之候ニ付、天明度以来毎々権左衛門相廻り升目改

来り候処、近来猥りニ相成り不正之升相用候者有之哉ニ相聞如何

之事ニ候、右ニ付権左衛門臨機升目改致候義可有之候間、心得違

無之様可致候事

民事局

右之通御令有之候間町々不洩様可被相触候

其役場自今被置下士九等官列候事

町年寄

町々宿老中

右之通御令有之候間為心得申入置候事

十月十二日

一 閏十月二日町中宿老於町役処ニ御談示扣

当節金子殊之外不融通ニ付貸付方自然と高歩ニ相成、諸商共利潤

薄く追々不景氣ニ成行候段歎ケ敷事ニ付、右ニ付此度小浜町ニ於

テ融通会社取建月二部之利足ヲ以金子貸遣候ニ付、望之者有之候

ハ、右会社へ可願出候、尤慥成引宛無之分ハ一切貸渡不遣候、右

ニ付已後私ニ金子貸付候者も式歩分高歩之貸付致間敷候、若申付

不相守高歩ヲ以貸付、たとへ入継之義出来致願出候共一切取上ケ

不遣、品ニ分急度可申付条心得違無之様可致候

閏十月

町役所

此度融通会社取締御用掛り申付候間相勤候様被仰出候、人別左之

通

辻半三郎 志水源造 川村彦兵衛 大北勘右衛門 吉岡屋喜兵衛
 衛 古川屋久右衛門 木綿屋伊兵衛 丹ば屋次右衛門 金屋源
 七 西津屋三右衛門
 右十人当分糸会所ニ而定日ニ・七出勤日也

当藩提灯之章別紙雛形之通御改ニ相成候間、御合印御許容ニ相成候者共於テも御改印之通可相改候、此旨相達候事

九月

右之通御令有之候間別紙雛形之通町々不洩様可被相触候

午九月

町年寄

町々宿老中

一 午九月十八日朝五ツ時夕雨強く、東風七ツ時夕大雨風強く吹夜九ツ時大水ニ而、八月七日之出水も一式尺斗多く、夜七ツ時ニ漸々雨止ミ申候

此時下も筋越前・越中・加賀・松前辺も大荒之由ニ而、大船数百艘難舟致申候、則井セ右衛門兄キ当春夕松前へ罷越候処、越中舟ニ便舟致上乘して被帰候処、庄内沖ニ而右之しけニ出来難義致、越中へ流レ寄候趣、舟中波ニ被落候者式人有之候由被申候也

一 閏十月廿七日

今般從朝廷被仰出候御趣意も有之候ニ付藩政御変革ニ相成、是迄之諸役所不殘御廃止ニ相成改而職制相立、在・町諸事務左之通兩役所ニ而取扱候間其意ヲ得、其迄郡方・郷方・市方・社寺方同様諸願又ハ伺等兩役所へ可指出候

租税掛り

少参事 武久権十郎
 大属 原田顕蔵

権大属 高田 貢

同 堀口佐次郎

同 横田早苗

同 小林一弥

戸籍掛り

少参事 須田鑓五郎

大属 欠員

権大属 塩野潜蔵

同 笥山三郎

同 師岡新太郎

租税掛り取扱廉々左之通

一 御年貢筋

一 川除ケ普請

一新田開キ或ハ川欠・砂入之類

一 山方并二道橋

一 戸籍掛り取扱廉々左之通

一 百姓町人身分ニ係リ候事

并ニ宗門改之類

一 公事出入取捌キ

一 社寺之諸事務取扱

一 宿駅之事并ニ馬借又ハ運送之事

一 人足遣イ

一 商法并ニ生産方

一 難洪人取扱

一 御賞美筋又答筋等之事、但シ社寺有之町宿老中ニ通達之事

右之通御令有之候間町々不洩様可被相触候、以上

閏十月廿六日

町々宿老中

町年寄

持参引替可申候事

但シ鶴亀札引替之義ハ追而可相達候事

藩庁

右之通御令有之候間町々不洩様可被相触候、尤社寺有之町ハ其町

宿老中ニ通達可有之候

十一月七日

町々宿老中

町年寄

一 十一月十日頭取月番町役所へ罷出候処、施粥明日ニ於空印寺御渡

シニ相成候間、右ニ付此度改而世話人十五人御申付ニ相成申候

一 十二月三日町内夫代銀并ニ御用金取立申候也

町布令

一 諸願書目安書ヲ以為認メ候願面ハ已来一切取上ケニ不相成候間、

此段可被相心得候

右之通御令有之候間町々不洩様可被相触候、以上

十一月三日

町年寄

頭取中

信州紬壹反 大北勘右衛門へ被下置候

褒美左之通被下置候

一同十四日町中昨冬ニ施米難洪人救候者、宿老惣代壹人ツ、戸籍御

役所へ呼出し

昨年ハ近年稀成凶作ニ而其以来難洪人不少、其方共御時体ヲ恐察

致難洪人救として米穀金錢之類施し候段寄特之事ニ候、仍之為御

一米手形銀札御廃止之義ハ昨春相触候通之事ニ付、松札以下壹分札

迄今般於貨幣方引替候間、当月十五日ニ来ル未正月晦日限同所へ

明治四辛未年

一 諸役所是迄ハ三・八ノ日休日ニ候処、正月ニ改而一・六ノ日休日

二相成候二付、同日休日当役所も致候間此段可被相触候、尤社寺共宿老中へ通達可有之候、以上

未正月

町年寄

町々宿老中

一当年へ八十歳米半表被下、九拾歳へ以来へ毎年米壹表ツ、被下置候、戸籍御役所へ御談示

一米手形銀松札以下壹分札迄御廃止二付、於貨幣方引替之義旧冬相触置候通当月晦日限二付、心得違不致右日限迄二同所へ持参致引替可申候事

但し右日限迄二持参不致追而持参之分へ引替不相成候間、急度心得違不致右日限迄二引替可申事

戸籍掛り役所

右之通御令有之候間不洩様可被相触候、尤社寺有之町宿老中へ通達可有之候

町年寄

一同七日御役所御用初二付、頭取中会社世話人一同麻上下二而出勤致申候事、酒飯出ル、略之

一同十三日市祭り、能無之候二付頭取耆人も出勤不仕候

一米手形松札以下引替之義正月晦日限り二付、右日限迄二急度引替候様相触置候処、取引之義二付不融通次第相聞へ候間、通用へ正月晦日限と相心得、引替残り之分へ二月朔日へ同十日迄二、町方へ宿老、村方へ村役人二而取集メ、貨幣方へ持参引替可申候事
但し二月十日後二引替として持参致候共引替二不相成候間、急度心得違無之候様可致候

一此間御申付二相成候家屋敷切替之義、昨年迄売買相済候分一銀之半数、上納之義者御用捨二相成、右二付来ル二月十日限り不残差上可申候、右日限相過候分上納御用捨二不相成候、尤当春へ売買相成候分へ^(分)一銀切替、届ケ書二相添上納可仕候事

一此度町方組頭役御申付有之候、町内呼出し人別

煙草屋宗兵衛・田村屋宗兵衛・平野屋吉兵衛・柴屋六左衛門・大屋莊助、メ五人被仰付候

一正月廿八日町内用水之為掘抜致事古穴二致候へ共、六ヶ敷候付新穴致申候

棟梁川縁町綿屋伊兵衛 番家地角屋地境之所二
右入用三貫五百四拾八匁綿屋伊兵衛諸入用

五百廿六匁五分諸入用メ

四貫七拾四匁五分

〔内式貫百九十六匁 町内中見込勸化致申候寄高

〔此札五拾式匁七分〕

町布令

一大工・木挽・左官・檜皮・畳屋作料改定覚

錢壹貫九百七拾三文 弁当持參之作料

〔此札五拾式匁七分〕

同壹貫貳百九文 先支度作料

一日雇・黒鍬・水主

錢壹貫五百廿七文 弁当持參分

〔此札四拾匁七分五厘〕

同七百八十五文 先支度の分

右之通御令有之候間町々可被相触候、以上

三月晦日

未二月上旬分町中地図面相改繪図指出し候様町役所分御申付二付、

頭取中分組町へ通達致申候、尤三月中迄ニ認メ候様申付候

右二付町内宿老・組頭相談之上、町大工金右衛門ニ有之候へ

共甚不案心ニ存候処申合、此度ハ川縁町大工市左衛門ニ為引

候方可然と存一同相談究、右二付宿老・組頭立合其組々組頭

壹人ツ、立合、市左衛門同道家別ニ一軒々々相改申候

右繪図出来上り三月廿五日

上繪図二通り、但し表紙茶色形紙

〔内一通り町役所へ出ス〕

清浄繪図一通り、表紙厚紙、外ニ持廻り下繪図反古也

東南側七拾九間式尺二寸四分 但し六尺五寸一間也

西北側八拾間〇五尺七寸九部四厘

右入用左之通

一壹貫五匁 大工市左衛門 一金三步 畳屋莊助筆料

一四拾匁 手間十六人半 〔此札貳百三十式匁五分〕

一拾六匁 繪の具代 一三百三拾五匁五分正木紙手間代

一貳匁四分 表紙貳枚代 一六匁式分五厘 下繪表紙代

一貳匁四分 短冊二枚代 一三匁七分五厘 袋紙代

一貳匁六匁四分

坪数三千貳百三十一坪四部、一坪二付五分〇八毛ツ、集メ申候

上繪図町役所へ納

同一通清浄一通、式通町内箱ニ在

一未二月廿八日町中表札打候様御申付有之、大工金右衛門ニ木札誂、

外ニ町境大札三枚共年番塩五隠居ニ認メさせ申候

一同三月廿日東・西・中三組駆出し御願申上候、四ツ時分八幡前ニ

而戸籍掛り鑑札刑法御頭様御見分有之候

頭取九人之者右席へ罷出御取持致候事、火消長源寺ニ而揃町中相廻り申候

東組入用四十五貫匁 中組入用金三百兩 西組入用金貳百兩斗

一同廿五日町中井戸掘抜之札打候様被仰付候

町内井戸三十三 掘抜七ツ

一未四月廿七日町中自身番巖敷被仰出候ニ付、町内ニも出番家々罷出候事

一同十四日夕跡火消宿老代り壱人、印持壱人、水汲貳人、右場所ニ而名札町老へ差上候事

一同十八日夕川越権左衛門升改ニ被相廻候間左様相心得可被成候、尤升直段左之通

鉄ふち一升升七拾匁 竹ふち一升六十五匁

同 五合升廿七匁 同 五合廿七匁

同 壺合升十八匁五分 同 壺合十八匁

右之通相究申候間御通達申上候

未四月十七日 宿老頭取中

町々宿老中

瀬木町八十八日昼時ニ来ル、宿老塩佐宿ニ而布与・井セ・井九

・煙宗・塩佐ノ五軒分相改メ、少々直し有之候由

一四月晦日西組常夫治兵衛御廢止ニ相成候て、是迄ハ三人之処米貳表ツ、減シ、右ヲ以四人常夫ニ相成申候

一五月朔日御裏門橋掛替ニ付普請成就渡り初有之候、大飯郡鎌倉村彦太夫三夫婦揃

祖父当年百四歳、祖母九十五歳、上下ニ而渡り初有之由

一五月二日町役所ニ而祭礼之義被仰出候、町方祇園会之義弥相止メニ相成、右ニ付六月十三日・十四日両日家毎ニ提灯建候事

御輿御歸り之節ハ町々宿老壱人ツ、上下ニ而御供致可申候事

一放生会従前之通両日提灯建候事

十四日相撲是迄之通、十五日御能替りニ六月祇園会祭礼之通市

中行列致賑々敷相勤申、御宮入致其上引取可申候事

一先達而御触有之候神武天皇様御祭り之義、来ル十五日八幡社内ニ而遥拝所相建候ニ付、壺町ツ、揃賑々敷参詣可致候事

但シ宿老・組頭者袴羽織ニて余ハ勝手次第之事

参詣之順東正五ツ時、中五ツ半時、西四ツ時、右無遲滞参詣致可申、尤神楽殿ニ宿老頭取中出勤可致候間、差凶仕榊御渡しニ相成

申候、左様相心得可申候

来ル十四日九ツ時分町々宿老中分番家老人ツ、砂持ニ御指出し、常夫権兵衛分差図可致事

五月十二日

三組頭取中

町々宿老中

一同十三日町内へ代神楽参り手前方にて金壹歩之芸為致申候、昨年迄ハ小浜地へ入込候事不相成候へ共、此度御一新ニ付当年分立入御免ニ相成申候事

一同十五日町中日尽ニ而八幡宮社内へ遥拝致申候

神武天皇様 在位七拾六年 当辛未年迄千四百五拾壹年 御寿百廿六年

一同十四日分西舞台ニ而東組火消小世話人・組頭中ニ而芝居興行致申候、木戸三拾分、さしき一間金三歩

大不景氣ニ而大損致申候由也

一同十八日夜四ツ半時分大南風吹出し、古今稀成事人家屋根瓦迄まくり候位誠ニ恐敷事、七ツ過ニ相止ミ申候、竹原松平屋敷家一軒潰レ娘子老人即死、其外怪我人も有之候由、不軽大風前代未聞之事共也

一未五月中旬板橋掛替御普請成就ニ付、六月朔日渡り初二而又々鎌

倉村彦太夫三夫婦来ル、此度ハ御帷子四ツ頂戴致申候由

右御橋材木之外大工・日雇手間斗凡千三百両ニ材木屋三軒之請合之由也

一六月六日御輿御旅丈ケハ従前之通ニ御座候事ニ相成申候、御旅中本通りニて何品ニ而も勝手ニ店出し可致候様被仰出候、御輿川御渡り之節、町方分信心之向綱引ニ罷出候者御田地踏荒候趣如何之事、以来見聞次第急度申付候段御申付有之候

一御輿御旅無滞相濟、十四日戸籍御役人八人御出役被下候積り之处、俄ニ御指支出来致御出無之候

一十三日・十四日町中提灯両夜ともし申候也

一十四日分十五日迄兩日八幡社内にて江州角力興行有之、大当りにて一日追願致申候

町布令

去ル十四日大政官へ大参事御呼出しニ而、一昨巳年版籍奉還之義御聴納相成、新ニ知藩事ニ被仰付候处、其実者矢張是迄之姿ニ而御政令一ならず候而、下民ヲ安ジ外国ト并立セられかたく、深く叡慮ヲ

町々宿老中

被為惱候二付、今般別紙之通藩ヲ被廢候旨勅書御渡ニ相成、即日權知事殿御免官、同十五日知事殿御免官ニ相成旨東京今申来り候間、一同御趣意柄相弁追而御沙汰有之候迄是迄通相心得、決而動揺致間敷候

但シ以来小浜県と称候事

別紙

藩ヲ廢シ県ヲ被置候事

太政官

辛未七月

今般藩ヲ廢シ県ヲ被置候ニ付而ハ、追而御沙汰候迄大参事以下是迄通事務取扱可致事

県庁

町布令

来ル八月十五日祭礼之義、兼而願之通従前六月祭礼同様賑々敷相勤可申事

道割

市場揃和泉町ニ而内見分、夫分質屋町本通り常在小路迄、同町分下通り大蔵小路昼支度、即刻御役所ニ而戸籍御奉行御見分、新町分下通り川崎・松本・大ッ町分本通り塩浜小路・材木丁・東宮前御宮迄、夫分勝手次第引取可申候事

但シ八月十日朝鬮取ニ御役所へ参人ツ、罷出可申事

未七月廿三日

町年寄

一 八月十四日例年之通家毎ニ提灯立放生会角力有之候、頭取十式人出勤致申候

〔但し酒肴盛こほし御役所賄也〕

一同十五日暁六ツ時大太鼓・ねり子・神楽・山共不残市場へ揃申候、頭取月番三人、常夫両人和泉丁浅井屋店ニ而内見致候、外頭取九人町役所詰、大蔵小路町役所御門ニ而御見分有之候

戸籍掛り権大属塩野様・寛様 町年寄兩人 使部衆式人

朝四ツ時御出勤、盛こほし・にしめ、九ツ過分行列

後本膳酒・取肴色々、夜五ツ時御引取被遊候、御役所賄也

〔右大太鼓・ねり子規則通八幡宮前分、日之内引取、山ハ八幡前

ニて火入、五ツ時引取申候

一 未八月十六日例年通頭取中渡辺神主ニて御神酒御備へ丁大^(頂戴)二行、

七ツ時分、六ツ半時帰ル

〔同十七日戸籍御奉行様へ祭礼御出役之御礼ニ廻ル〕

米直段下落ニ付酒価立替今日分左之通、未八月廿九日分

一 酒壹升 代錢九百廿三文 〔代廿四匁六分〕

一同五合 同 四百六十式文

一 同壹合 同 百三文

町布令

從四位様來ル十二日小浜御發駕ニ而御東下ニ相成、熊川筋御通行可相成ニ付、為御見立市・在一同罷出候義本意ニ可存候へ共、御道筋混雜致自然不都合之義出來候而も御心配之筋も有之候ニ付、市・在とも宿老・庄屋・組頭・社寺并ニ人別之者、其外惣代として村・町にて耆人ツ、左之場所へ罷出御見立可申上、其余之者ハ猥ニ御道筋へ罷出候義無用可致事

右之通御指図有之候間一町々宿老式人、町惣代耆人、都合三人宛、同曉六ツ時無遲滞芝原へ可被相揃候、尤町老湯岡橋詰ニ扣罷有候間出勤之面々可被届出候事、但し羽織袴にて出勤之事

九月四日

町年寄

九月廿二日

主上御誕生日ニ付天長節と唱へ末々迄奉祝候様被仰出候間、此後町・在共一同家業相休、節句同様御祝申上候様可致候事

県庁

町布令

一 華族ハ平民ニ至迄互ニ婚姻被指免候条、双方願ニ不及其時之戸長へ可届出候事

平民

一 筒袖・細袴着用可為勝手事

一 襠高袴・割羽織着用可為勝手事

太政官

右之通被仰出候ニ付相達候事

未九月

県庁

一 十月廿四日戸籍役所呼出し、町方人別之者七拾人余り一同罷出候
処

扶持人帶刀

諸役免許之類一統へ

今般別紙之通被仰出候ニ付、兼而被下置御扶持方以下免許之廉々

一切廢止候事

辛未十月

県庁

別紙

元各藩ニ於テ管下之百姓町人共帶刀指免、或ハ扶持米遣し諸役免除等申付置候分一切禁止候事

但し御一新後軍功有之歟、又ハ従前之分タリトモ一時ニ廢止

難相成見込之分ハ、巨細取調へ大藏省へ可伺出候事

未九月

太政官

未十一月二日暮六ツ過中地しんゆる

大蔵省

来月十七日大嘗祭、十八日豊明節(會)絵被為行候ニ付、全国一般諸神社ニ於相応之神事執行、衆庶一同可相祝事

但シ兩日刑罪之義者可令禁止事

太政官

右之通被仰出候間当月十七日・十八日右御趣意ニ基キ於神社神事執行可致、其外一同可相祝事

但シ兩日休業之事

十一月

県庁

今十七日昼五ツ時中地しんゆる

一同十一月九日・明十日今新酒直段左之通届出候間此段相達候事

酒壺升 代拾八匁

一新貨幣御発行ニ付而ハ、諸貨相場ヲ以相立候義者都而本位貨幣ヲメアテ準拠と致、金壹円ニ付何程、又ハ何品何程ニ付金何円何銭と相場致、決而従前之銀目又ハ其外称呼ヲ以新貨相場相立候義無之様可

致事

九月晦日

右之通各地方官於厚く相心得、市中都会之地者別而布令行届キ候様可致候事

町布令

今度御都合ニより県庁来ル廿三日今小浜町空印寺へ引越、仮県庁打立候間左様相心得、尤市中・社寺とも方へ不洩様可被相触候

十一月廿日

町年寄

一十一月四日今町内於正誓寺女義太夫浄るり興行、来ル十二日迄大

流行

町布令

兼而相触置候通(牧カ)木ハ秤ヲ以売買可致者勿論之事ニ候処、中二者秤ヲ不用凡之積り(相カ)□場相立強而売付候者も有之、加て於市中売買ニ中へ立入、仲と業ニ紛敷所業及候者も有之哉ニ相聞へ以之外ニ候、以来右様之奸商於有之ハ嚴重ニ可申付候条、急度心得違致間敷候

未十一月廿八日

戸籍掛り役所

明治五壬申年

一若狭一国之義本県へ遠隔シ、尋常一般之願・窺・届ケ等毎限敦賀表申立候てハ、自然下夕方難義と可相成候ニ付、不遠小浜表へ出張所可相設候へ共、其迄之処元小浜県庁旧官員ニ於テ凡諸願・伺・届ケ之類伝達申付候条、若狭国士民一般同所へ可申出事

但直チ二本県へ申立候義ハ其当人見込次第之事

辛未十二月

敦賀県庁

二月五日

金錢其外貸借之義者借主并ニ請人加判之証文ヲ以取引可致筈之処、若狭・越前国之義ハ自然風俗も相敗れ請人も不相立、一判之証文ニテ貸借致候者多分ニ有之、右様之証文ニテ取引致居、後日差纏レ争訟相成候共取上戴^(裁)許不致候条、右様之証文所持之者ハ、来ル三月中ヲ限り屹度請人加判之証文ニ書改可申候、尤右期月迄之事情無余義次第有之者ハ、再応詮義之上取上ケ戴判可申付候事

但田畑・山林・堤防等ニ關係之争訟ハ、一判証文ニテハ事情無余義次第と雖も、取上戴判可申付事

壬申正月

敦賀県庁 印

一二月六日暮六ツ時中地しんゆる、此時石見浜田辺大地しん、人家崩レル

一同七日夜五ツ時小地しんゆる

一二月七日夕町方人別改大津町夕初り申候

一同十四日今七ツ時夕町内人別改、宿正誓寺、六ツ半時ニ済

戸長・副メ三人被參候、茶斗さし上申候

宿老・組頭詰切申、五ツ時酒飯取斗申候也

一百匆宿 正誓寺へ礼遣候 年番

一半紙十五状ツ、宿老兩人へ同

一二月廿九日夕三月四日迄五日之間貨幣役所ニテ、鶴亀札金札壹両ヲ三百匆ニ取替被下候ニ付、元御用達ヲ御雇ニ相成悴栄七町老衆夕御申付候ニ付、五日之間交易手伝ニ罷出申候
右ニ付御酒料金式歩式朱被下置候

一二月十一日八幡社内ニテ神武天皇様遥拜所へ町内中參詣、町方日尽有之候

一同十六日元貨幣方町役所ニ相成申候

付録

〔表紙〕
「嘉永七甲寅年写之」

当所出火
諸国珍事 書留日記

文化十四年ヨリ□ 大北氏

一文化十四年丁丑年六月晦日高浜大火ニ而家数四百軒余、土蔵五六
十ヶ所焼失、甚難渋人有之候趣ニ付町方為施行色々遣し申候、
瀬木町板三拾間施行遣し申候
手前方横町勘藏縁続キニ而松板三間ニ香之物壺桶遣し申候

一 同十五戊寅年五月晦日暁六ツ時今町鼠屋仁左衛門裏出火有之候

一 同^{六月十八日}上中郡麻生野村三拾軒斗出火ニ付、鍵家長左衛門親類香川安大
夫殿類焼ニ付白米壺表代廿式匆見舞遣ス、其余三拾軒斗右長左衛
門得意先故壺軒ニ板壺間宛見舞遣ス、板代メ百式匆也

一 同七月朔日享保己亥年大火之百年忌ニ付正誓寺ニ而日待致候

但し其節焼掛り瀬木町少し、本町・大津町・裏町・塩屋町・魚屋町・安
良町・下市場町・安居町・八百屋町メ拾町掛り之由

一 同七月十二日朝四ツ時ニ西津西長町古川屋久太夫下火元ニ而、下

竹原出村北長町松福寺凡類焼人三百五拾軒斗焼失致、八ツ時ニ焼
留ル

右ニ付難渋人有之候故町内分白米五表遣し申候

一 同十二月廿七日夜四ツ半時分大蔵小路長井ノ下浜分新町林善下迄
納屋蔵式三ヶ所出火有之

一文政二己卯年三月八日昼八ツ時ニ西津西長町古久下小松原拾軒斗
出火有之候

一 同廿八日昼八ツ時ニ西津家中植田様火元ニ而辺方様都合式軒出火、
但し食刺形中喰也

一 同竹原四ツ谷酒井様御下屋敷四日暁五ツ半時出火有之候

一 同十月廿七日夜八ツ時材木町西室町前八軒出火有之候

一 同十一月廿九日夜八ツ半時御作事屋足輕長屋八軒出火有之候

一文政三庚辰年七月十三日夜九ツ時分暁六ツ時迄西津・竹原・小松
原弁才天様下迄小尻百軒余斗出火有之、町内分白米三表遣し申候
也

一同十一月二日夜七ツ時二片原町五六軒出火有之候

一同十一月十七日夜五ツ半時二西津堀屋敷七八軒出火

一文政四辛巳年十月十七日夜七ツ時欠脇町心光寺様前米屋半兵衛と申者火元二而七軒類焼有之候

一文政七甲申年七月十一日晚八ツ半時二竹原天神角近藤如庵様壹軒出火

一文政九丙戌年十一月廿一日夜五ツ半時伏原村十三軒出火有之候

一文政十一戊子年正月九日夜八ツ時達磨小路佐渡屋蔵出火、但し越後屋納屋蔵式ヶ所、鍵平はへ場、□勘蔵一ヶ所 中村屋百助居宅、メ類焼

一同三月四日夜五ツ時大南風ニ而伏原村出火有之、半時斗二四拾三軒斗類焼致候

一天保元庚寅年極月廿七日夜七ツ時二達磨小路裏借家四□軒出火有之候

一天保式辛卯年九月十六日夜九ツ時二大蔵小路魚屋重助・山田屋又兵衛・杉山純伯三軒出火

一同十一月七日夜五ツ時二風呂小路村松^(靖)清庵様壹軒出火有之候

一同極月廿七日夜九ツ時竹原家中御馬屋町野々口八郎様壹軒出火有之候

一天保三壬辰年二月廿五日夜四ツ時北風ニ而御座候処、上竹原茂兵衛殿火元ニ而竹原三拾軒類焼有之候、火元茂兵衛方ニ者馬を焼申候由、右ニ付下男も大怪我致候也

一天保四癸巳年十二月二日昼八ツ時学問所門長屋火元ニ而下馬迄焼失致申候

一同廿日夜八ツ時西津小尻と申所三軒出火有之候

一天保五甲午年正月十九日夜多田村四五軒出火有之候

一天保五甲午年正月廿日昼五ツ時青井村七軒斗出火有之候、火元怪我致候也、直様死去致

一同年二月廿六日夜四ツ時二二ツ鳥井米長裏へ火を附ケ騒敷候へ共、早速寄集り消申候

一同夜九ツ時□れ戸齋藤仁左衛門浜藏之高堀へ火を附ケ、向魚屋町之裏へ火移り、樽九藏、はへ場、鍵甚納屋物数四五ヶ所斗焼申候

一同二月晦日夜八ツ時二湯岡村庄屋久作火元ニ而三拾四軒類焼有之候、是も附火也

一同三月十三日昼九ツ時中山寺出火

一同夜暮六ツ時二和久里村九軒出火有之候

一同廿三日夜八ツ時二新道村九拾軒斗出火、但し松木庄輔殿油藏・酒藏ニヶ所落ル、同人損失凡式千両と申事也

右ニ付松木庄輔殿へ見舞遣之

茶吞茶わん廿人前

丸夜食膳十人前 右川彦殿へ持七遣之

メ代拾奴余

一同四月二日夜七ツ時カミ分熊川橋分上両かわ共不残、御番所も焼申候

一同十二日夜七ツ時二高塚村廿四軒出火有之候

一同廿日夜三方村三軒出火有之候

一同十二月廿六日夜遠敷村上・下宮前五六軒出火有之候

一天保六乙未年正月四日夜五ツ時式番町松本様門長屋壺軒出火

一同八日夜五ツ時松本町舟大工三四郎裏小屋壺軒出火

一同二月廿一日夜五ツ時二青井町之下二二ツ鳥井・今町、右三ヶ所之浜辺二四五ヶ所も火を附候処、格別大變ニ者相成不申候へ共次郎共巖敷吟味致候所、同廿二日二中西町樽木屋喜兵衛と申者被召捕、直様大津町牢へ入ル

但し右仁ハ甚人躰宜敷候者故皆々驚人申候也

右ハ同年閏七月七日二御裁許有、是ハ死罪ニも被仰付候所当年ハ殿様之御法事も有之候ニ付、重キ敵之上御領分払ニ被仰付候

一同三月廿日夜名田庄竹之元八軒斗出火有之候

一天保六乙未年十一月廿八日夜九ツ時塩屋町木引久左衛門材木小屋・鳥羽市小屋と式ヶ所出火有之候、久左衛門材木夥敷事焼申候也

一天保七丙申年四月朔日夜九ツ時分高浜裏手(鯨)蠟師百六拾軒斗焼失致申候

折節殿様御物入ニ而御領分中御巡見ニて、三月廿八日御立ニて西方へ御出被遊、則其夜和田御茶屋御泊り夜也

一同年七月廿一日夜八ツ時西津山玉町明家敷壺軒出火

一同八月廿日昼八ツ時西津松ヶ崎四軒出火有之候

一天保八丁酉年正月廿日昼八ツ時ニ新町組屋吉太夫出火、暫時ニけし申候也

一同二月二日夜七ツ時ニ甲ヶ崎村二軒出火有之候也

一同二月十二日夜四ツ時ニ達磨小路樽屋長兵衛裏塩納屋壺ヶ処出火有之候

右ニ付二月廿七日從御上様御触有之、諸方附火有之町々急度立番致候様被仰出候、并ニ無丁ちん禁制也

但し同心衆下山追々被廻候也

一同三月三日夜五ツ時分敦賀町七百軒斗出火有之候也

一同三月四日夜九ツ時分本郷村六拾軒出火有之候

一同六日夜五ツ時和田村七八軒出火有之候

一同八日暮方松尾村九軒斗出火有之候

一同廿八日朝本所村壺軒出火

一同晚七ツ時飯盛村壺軒出火

一同廿九日夜七ツ時ニ飯盛村前日焼申候隣り壺軒出火

一同四月三日竜前村壺軒出火

一同日金屋村壺軒出火

一同十七日北方新庄村六七軒出火

一同廿日熊川式拾軒斗出火有之

一同九月九日夜八ツ時達磨小路樽屋長兵衛裏塩納屋式ヶ所斗出火有之候

一 同十月晦日夜七ツ時西津松見助太夫方之藏并ニ横庇出火、但し三拾貫匁斗損由

一 西十二月廿二日夜平野村三軒出火

一 同廿六日夜五ツ時二三歩市村八九軒出火

一 同廿七日夜北方氣山村壺軒出火

一 天保九戊戌年正月廿六日曉六ツ半時ニ府中村福泉寺壺軒出火

一 同二月朔日ニ北方佐柿福寿庵と申住^(持)寺を殺し、火を附盜致逃去候を無程召捕ニ相成、御吟味被成候処及白状候故、雲水坊主也、同閏四月廿五日ニ獄門ニ相成申候

一 同三月三日夜五ツ時大藏小路大屋裏納屋・井清太夫納屋式ヶ所出火

一 同四月三日夜堤村喜右衛門と申者出火、是ハ御巡見様之御宿之積りニ候へ共俄ニ外方へ被仰付候也

一 同七日曉六ツ時ニ西津松ヶ崎三軒出火

一 同八日夜七ツ半時西津出村五軒出火有之候

一 同閏四月十六日暮六ツ前時ニ突抜町斎藤仁左衛門裏小屋出火

一 同五月六日夜五ツ時達磨小路松屋裏小屋出火

一 同十一月廿五日夜六ツ半時西津小松原壺軒出火有之候

一 天保十己亥年二月廿四日夜九ツ時西津小尻三軒出火有之候

一 同十一月朔日昼七ツ時ニ長源寺境内寺中壺軒出火

一 同六日暮六ツ時伏原村壺軒出火有之候

一 同庚子年三月十八日夜四ツ時ニ^(太)田良庄村七軒出火有之候

一 同八月十七日曉六ツ時湯岡村壺軒燒失致候

一 同十一月ニ窪谷瓦師九右衛門壺軒出火有之

一天保十式辛丑年正月五日夜四ツ時二今町二有之候木綿屋源兵衛殿
納屋壺軒出火

一同閏正月十八日夜九ツ時木崎村壺軒出火

一同三月朔日三宅村三拾七軒出火有之候

一天保拾式辛丑年九月廿二日夜九ツ半時下市場町升屋惣左衛門火
元二而、下市場町両かわ・安居町両かわ、興風(沖)二候故上市場丹宗
残り留り、安居町向柴善焼留り、夫々嵐二相成市場辻今本町西ノ
方へ片側瀬木町正木迄、但し正木残り留り、一旦浜側ハ甚六ヶ敷
候へ共漸廿三日朝五ツ時二火鎮り申候、釜戸数五拾八軒、蔵六七
ヶ所落申候

右手前残り申候二付火消へ礼致候、左之通、但し手前方へも方々酒飯貰申候也

- 一酒五升切手
- 一三拾目
- 一酒五升切手
- 一酒五升切手
- 一廿匁
- 右六組二而酒三斗、米粉百四拾目、右之通遣し申候

類焼人見舞遣候覚

一上白米三表
但し四斗入
井筒屋長左衛門

一醬油貳升、味噌少々
一六台式ツ、古桶
一古畳、おしき、茶碗
本所屋久助

其外小道具いろく遣し申候

一酒貳升 田井屋惣兵衛

一同 麩屋甚六

右類焼之家也

一酒貳升 鍵屋八二郎

一同 川村平兵衛

一同 板屋長右衛門

一同 大工善助

一同 鍵屋八兵衛

一同一升五合 川嶋伊兵衛

一同壺升 塩屋喜兵衛

右ハ類焼之家也

一上白米五升 常在小路 塩屋久兵衛

一名酒貳升 須先丁 舟大工源助

右貳軒ハ出火二付格別骨折働キ呉候二付、右礼として遣し申候也

一十月十二日夜九ツ時天徳寺村壺軒出火

一 同夜七ツ時羽賀五郎右衛門壺軒出火

一 同十六日朝六ツ半時裏町鼠屋納屋壺軒出火有之

一 天保十三壬子年三月十五日昼江州古河百三拾軒斗出火有之候、但し若^(狭)さ領分也

一 同夜九ツ時上吉田村五拾軒斗出火有之候

一 同六月廿三日夜七ツ時玉置村三拾五軒出火有之候

一 同十月十一日夜七ツ時熊野村三軒出火有之候

一 同十一月十八日昼四ツ時二田烏村五拾三軒出火有之、大西風ニ而

一時二焼申候由

一 天保十四癸卯年二月廿五日昼四ツ半時二川崎町ニも源新船を合セ候、八百石出来上り候舟より灯上り、^(マ、)新地拾軒斗類焼有之候、八ツ時二火鎮り申候

右ニ付見舞遣し申候

一 白米三升ふり飯疊屋弥五太夫 一 酒貳升 中村屋嘉介

一 香之物壺鉢

一 同貳升 嶋屋嘉兵衛

一 酒貳升 舟大工源助

一 天保十四癸卯年四月朔日昼四ツ半時二仏谷前之掛り場ニ、大坂扇屋和藏方舟千四百石積舟火事有之、中荷色々積反物積候故四千兩斗之損之由也、誠事ニ珍敷事暫時ニ焼失致、問屋嶋屋長右衛門客舟也、松前行舟ニて当所へ上荷むしろ積ニ来り荷役致相濟候処、誠ニ残念ニ存候也

一 同四月廿一日夜八ツ時二和田村八軒出火

一 同廿二日八ツ時羽賀村安太夫壺軒出火有之、十四才ニ相成候養子壺人焼死致候故、右親元々恨ミ候故四国八十八ヶ所へ廻国廻り帰り不申由

一 同七月廿五日夜八ツ時五十谷村貳軒出火有之候

一 天保十五甲辰年八月朔日夕方木崎村壺軒出火有之候

一 同十四日暮六ツ時尾崎村三拾軒斗出火有之候

一同九月朔日夜七ツ時ニ羽賀村弥右衛門壱軒出火

一弘化三年丙午年三月廿三日夜四ツ過時今西津玉津島明神之脇四軒出火有之候

一同四月九日暮早々今熊川百五拾軒斗出火有之、大南風ニ而新道村へ飛火、三拾軒斗類焼有之候也

一同閏五月廿四日夜七ツ時西津片原町之裏松ヶ崎三軒出火有之候、六ツ過ニ鎮り申候

一同七月三日夜八ツ時今北方成願寺村今出火ニ而、上野村・能登野村三ヶ村飛火ニて類焼致申候

一同九日曉六ツ時ニ西津福井平次郎壱軒出火有之候

一同十三日金屋村式軒出火有之候

一弘化四丁未年五月十一日朝六ツ時和久屋三左衛門新藏塗あぶり居候処、下地へ火移りもへ上り火事と相成候へ共、早速人寄集り火鎮り申候也

一同正月四日暮六ツ時ニ滝町浄土寺境内ニ稻荷御社火元ニ而、天満

宮様御社御類焼被為遊四ツ時ニ火鎮り申候、尤風無之候故式社切

ニ而相濟申候、(朱書)「但し御灯明之火今移り候趣也」

一同二月廿四日夜五ツ過ニ今町も源藏はへ場出火、四ツ時過ニ火鎮り申候

一同七月廿八日夜九ツ半時三宅村七軒出火有之候

一同八月十一日夜四ツ過時西津清岸寺(巖)稲木小屋出火有之候

一弘化五戊申年二月廿五日夜高浜五軒出火有之候

一嘉永式己酉年四月八日朝次吉村三軒出火有之候

一同九日昼七ツ半時西津北塩屋式軒出火有之候

一同七月十三日曉六ツ時ニ東市場村四軒出火有之候

一嘉永三庚戌年正月廿七日曉池河内寺壱軒出火有之候

一同二月十日七ツ時武田徳右衛門方新藏出火ニ相成候

一 同十二月三分里父子寺火元二而村三軒類焼、和尚・小僧式人都合
三人焼死致申候由

一 同夜三宅村六軒出火有之候

一 同三月十四日晚七ツ時西津弁材(財)天様之下小尻三拾軒斗出火有之、
引取十五日朝火鎮り申候

一 同五月十二日大島東村壺軒出火有之候

一 同七月八日夜九ツ時四歩市村六軒出火有之候

一 同霜月廿一日夜三ツ松村三軒出火有之候

一 同廿六日夜七ツ時遠敷亀屋出火有之候

一 同十二月廿四日夜五ツ時西津出村壺軒出火有之候

一 同廿七日夜九ツ時西津小尻浜納屋式ケ所出火有之候

一 嘉永四辛亥年昨戌大年夜八ツ過之御事正月元日ニ相成申候、薬師

小路薬師堂守尼火元二而、西北風直様達磨小路・西小路へ抜、鶺鴒

羽小路へ出、向側壺面北風荒く相成、夫々広小路両側、中小路・

東宮前欠脇町へ出両側類焼、心光寺様残り留ル、向ヒ願昌寺残り

留ル、又々鶺鴒羽小路今在家町両側、町役所、妙光寺・蓮光寺・

立光寺・誓願寺迄四ヶ寺焼ル、扱又八幡神主居宅・御内神絵馬堂

・舞台・神楽殿迄類焼、御本社并二末社ハ相残り申候也、中小路

一面、八幡小路・永三小路不残、中西町両側、百仁残り留ル、空

印寺新道ニて焼留ル、西宮前両側不残類焼、北東ハ上小路不残、

浜側ニて質屋町木谷屋、石屋小路火除ケニて留リ、向質屋町当家

・も綿屋半兵衛両家類焼ニて林安残り留リ、本境寺ハ残り申候、

誠事往古々無之大変ニて町方一統恐敷事ニて、皆々隣町ハ不残片

付ケ申候也

扱御役人ハ大年晩八ツ時分正月元日昼八ツ過迄御詰切ニて、七

ツ前二御引取被遊候、右ハ追々土蔵へ火移り候て□蔵六十八所

も落申候由、町掛り十三丁、竈戸数三百八十式軒

〔(朱書)右ニ付御上様分家壺軒ニ松木八本代七拾目宛被下置候由

外二五拾目七ヶ年賦御借

都合百式拾目ツ、出ル、但し壺軒二付

惣メ四拾五貫八百四拾目

同 借宅之者へ大麦式卜五升代三拾目壺分八厘ツ、式百式軒へ

被下置候由

メ六貫九拾六匁三分六厘

外二

極難洪人へ御粥米家内壺人ニ付壺ト式升ツ、被下置候

由、メ十四石

同中難へ一軒ニ米壺斗ツ、メ十三石四斗

米合廿七石四斗代三貫九百十四匁式分六里

惣メ高五拾五貫八百五拾目余

右出火ニ付類焼之所へ手前分見舞遣し申候扣

一松六部(分)板式間宛

代拾匁ツ、

川村彦兵衛

西津屋三右衛門

七ヤ
木綿屋半兵衛

古屋文右衛門

木綿屋久左衛門

五軒

一同壺間ツ、

菱屋伝兵衛

代五匁ツ、

古屋忠二郎

中西
木綿屋半兵衛

大工善太夫

林弥惣右衛門

五軒

一白米三升五合

左官孫左衛門

一同 三升

滝与兵衛

一同 三升

西宮前町
鼓脊早寿へ

一同三升ふり飯

くら屋伝兵衛

〔(朱書)右ハ類焼不致候へ共近火ニ付遣ス〕

一味噌五升焼一桶

茶屋仁左衛門

一亥二月廿八日夜五ツ半時ニ三丁町新福寺裏ニ、今道町領分有之候
納屋壺軒出火有之候也

一同三月十一日夜七ツ時北方井崎村三拾式軒出火有之候也

一同十八日夜同相田村九軒出火有之候也

一同四月晦日夜八ツ時ニ竹原御厩屋粥場納屋出火有之、其節隣り納
屋壺軒屋根へ火消大勢上り候故右納屋潰レ申、下ニ働キ居候者下
ニ相成怪我人五六人有之、中ニ塩屋町木挽吉左衛門東組中世話人、
右之下ニ相成即死致、掘出し戸板ニのせ先方へ送ル、右ニ付火消
引取も遅刻ニ相成誠ニおそろしき候事ニ御座候也

一同五月十三日夜麻生野村壺軒出火有之候

一同廿八日昼九ツ時ニ高浜横町式軒出火有之候

〔(朱書)是ハ同所七年祭り御こし洗を家内見ニ参り留主中之由也〕

一同七月十一日田良庄村式軒出火有之候、但し村甚兵衛殿火元之由

一嘉永四辛亥八月廿二日夜四ツ時大藏小路丹後屋安兵衛方納屋藏壹ヶ所出火有之候

一同十二月十六日夜九ツ過時羽賀村仁右衛門壹軒出火

一同壬子年正月廿一日暁六ツ時葉師小路金屋源兵衛裏庇壹軒出火有之候

一同三月六日奈胡村奥中壹軒出火有之候

一同七月七日三ツ松村式軒雷火ニ而焼失致申候也

一同八月廿日暁六ツ半時ニ大南風ニ而伏原村四軒出火有之候

一同日夜八ツ時玉置村四軒出火有之候

一同廿一日夜五ツ時上野木村三軒出火有之候

一同九月十三日夜上野村七軒出火有之候

一同十月廿一日昼八ツ時大藏小路下駄屋仕事場ヶ煙り出候而火事と申立騒キ申候也

一同廿九日晚九ツ時ヶ湯岡村拾六軒出火有之候、右ニ付同村小西兵助へ手桶壹・杓壹本見舞遣ス、同村孫右衛門へ身俵十見舞遣ス

一同十一月九日晚下吉田村五軒出火有之候

一同廿七日晚下吉田村式軒出火有之候

一同十二月一日晚八ツ時ニ玉置村三軒出火有之候

一同三日朝上吉田村五軒出火有之候

一同四日晚上鎌倉村六軒出火有之候

一嘉永六癸丑年二月廿四日暁六ツ時ヶ四ツ時迄ニ大島村西村と申所拾四軒出火有之候而、町方ヶ燃上り候所克見得申候

一同三月十日暮六ツ過時ヶ大南風ニ而、今在家町本境寺前平岡おせいと申所火元ニ而、東西町中不残一円ニ燃上り誰壹人火元へ掛り

候者無之、余り大南風故四方へ飛火様々ニ相成申候、手前方ハ火事と申候今家内一統致不殘藏へ方付、目途迄無滞致罷出申候処、一旦川縁丁升屋源助方へ逃申候へ共是も段々六ヶ敷相成候故、家内一統・井長家内中共西津西本織右衛門方へ逃去申候、夜明けを相待居申候、右之風七ツ前時ニ西風ニ返し川崎町迄参り候処、右之返しニ付松本町・川縁丁・長源寺下陣・本境寺不殘焼、其上竹原四ツ谷へ飛火有之、深栖様御屋敷ハ不及申横井屋敷片側共類焼致申候也、翌十一日曉西本分男分ハ藏を助ニ参り候所、手前藏三ヶ所共落下火ニ相成、土藏一ヶ所残り居候、夫も少しツ、煙り出候故皆々掛り藏の中物出し申候、是もはしこ・手桶類有之候ハ、助り申候へ共、左様之道具無是候故無抛十一日昼前ニ落し申候、内藏のト一ヶ所も不殘誠ニ残念ニ奉存候、然ル処向イ島田雪斎裏ニ藏壹ヶ所借居候分、是も無心許候所是ハ助り、先右向藏へ仮住居と仕、井筒屋清太夫も同道致西本分来り候へ共、翌朝迄ニ不殘落一ヶ所も無之、誠ニ丸焼ニ相成申候、同家長左衛門方一ヶ所道具藏残り居申候

此度之火事ハ藏を多く落し候故大金之事ニ御座候、瀬木町ニ藏四十六七ヶ所所有之候を、漸五ヶ所残り申候程之事ニ候

川崎町ニ廿四軒残り、欠脇丁壹町残り、七軒屋片側残り、八幡宮様神主殿・天神様・金毘羅様残ル、其余高成寺方丈不殘青井村迄(焼脱)類致候、瑞雲院知足軒ハ残り申候

十一日中諸々所々之藏落申候也

一御家中之内十三軒

一町方家数式千四百十一軒、内千三百壹軒借家分

一土藏九百拾ヶ所 一納屋七十式軒 一能舞台一ヶ所赤城裏ニ

一寺三拾七ヶ所、外寺建物廿一ヶ所

一下陣町役所・米手形役所・制札場・社倉藏・牢屋鋪・藏小堂、

青井村笠屋・下山寄小屋・ひん長屋

都合廿四ヶ所

右之通江戸表へ御達しニ相成候趣書付写也、從御上様被下置候分

御用達へ杉六寸角十本宛

家持へ米壹表ツ、借家借へ式ト五升ツ、(朱書)「被下置候」

家持へ五拾匁七ヶ年賦御かし付銀有、無利息ニ而

極難涉人へ産物方地面へ式ヶ所小屋長屋建、町役所へ式ヶ所建、夫へ難涉人入、五月迄御救粥御作事屋分焼出ル

(朱書)「一米式千四百十一俵、家持分

一米三百廿五式ト五升、此俵八百十三俵二部斗(斗)

一升位 此代凡百廿八貫九百六十八匁

無利息御貸銀百廿貫五百五拾匁 外ニ御粥米

当春大火之節西津西本ニ而井長・井清・手前三軒世話ニ相成候礼ニ、白米壹俵四ト式升入ニ致六月四日ニ為持遣申候

御内所様分融通方へ当分為御見舞と白米三表被下置候、但し

三斗入、手前も頂戴致候

一 丑五月廿二日夜加茂村壺軒出火有之候

一 同廿三日野尻村へ火を附ケ盜賊致し小坊主六月差入ニ被召捕入牢致候也、寅三月廿三日朝火罪相成候

一 同六月十二日昼三方郡倉見村四拾軒出火有之候也

一 同七月四日曉方阿賀里村式軒出火有之候

一 同八月十八日曉六ツ前時西津福谷村式軒出火有之候

一 同十月十二日夜八ツ時西津大湊河合織左衛門殿火元ニ而五軒出火有之候也

一 同七月廿七日夜八ツ時御作園場奉行矢部幸助様御屋鋪出火有之候

一 同十一月十五日晚和多村壺軒出火、北方能登野村壺軒出火

一 同十二月廿一日夜四ツ半時八百屋町大工三平普請小屋壺軒出火有之候

一 嘉永七甲寅年正月廿二日夜武生村壺軒出火有之候

一 同二月十三日昼四ツ半時ニ二番町小川太郎右衛門様門長屋出火有之候

一 同廿七日夜大飯郡和田村三軒出火有之候

一 同三月五日夜大南風ニ玉置村拾七軒出火有之候

一 同三月廿三日朝去ル丑五月廿三日野尻村ニ而火を附ケ被召捕候坊主、今日湯岡於芝原ニ火炉ニ相成申候、是迄ケ様之火罪無之候へ共、溜之御間格被為蒙仰候ニ付右之通御仕置ニ相成申候、古今珍敷事故夥敷見物人之よし也

一 同廿五日夜池河内村廿式軒出火有之候

一 四月朔日朝神宮寺村拾五軒出火有之候

一 同九日七ツ時ニ雷火ニ而三重村五軒出火有之候

一 閏七月廿七日加茂村壺軒出火有之候

一同八月廿四日昼九ツ時風呂小路生鍛冶裏借家居宅小屋四軒出火有之候

門様と二軒出火有之候

一同九月九日夜九ツ半時天徳寺村壺軒出火有之候

一同四月五日七ツ時二三宅村十三軒出火有之候

一同十一月十八日夜八ツ時二上竹原茂兵衛壺軒出火有之候

一同六日昼七ツ時脇袋村拾軒斗出火有之候

一同廿五日曉六ツ前時分遠敷村九拾四軒出火有之候、右前刻分大南

一四月十八日夜五ツ時大南風之処尾崎村三拾五軒斗出火有之候

風二而、則火之子町方迄も参り誠ニ恐敷事ニ御座候也

一同日夜九ツ時二国分村分出火致、遠敷村橋迄両側拾七軒斗出火有之候

一同十二月朔日夜三重村寺壺軒出火有之候

一十月廿九日夜四ツ時天徳寺村壺軒出火有之候

一安政貳乙卯年二月九日夜今町米正裏小屋燃上り申候て大騒ギ申候

一十二月七日夜四ツ時^(太)田良庄村壺軒出火有之候

一同廿三日夜五ツ半時高塚村六拾軒斗出火有之候

一同十三日昼四ツ時中小路わら小屋住居式軒ノ出火有之候

一同廿九日夜八ツ時大南風荒し候処、熊川御蔵前分火元ニ而御蔵奉

行屋敷一軒類焼、夫分下ノ方両側共不残焼失致、但し七拾軒斗、

一安政三丙辰年正月四日夜八ツ時名田庄深野村壺軒出火

夫分一ノ瀬十一軒飛火、夫分瓜生村三軒飛火、関村寺一軒飛火、

都合四ヶ村掛りニ相成申候、誠ニ恐敷御事也

一同二月三日夜三方郡井崎村壺軒出火

一乙卯三月廿九日昼九ツ半時西津家中鳥居貫次郎様火元ニ而、藪左

一同三月十三日夜七ツ時ニ西津古川木小屋灯上り候へ共、砂持中之^(マ、)

草臥ニ付町方ニテ誰も不存候也

一同四月十二日暮六ツ時ニ西津家中平井辰藏様御門長屋壱軒出火有之候、但し東西町角屋敷也

一同十三日昼九ツ過ニ西津堀屋敷浜ニ有之候御上様御舟小屋三ヶ所出火有之候

一同十四日四部(分)一村出火有之候よし

一同廿日御家中明石直右衛門様孫子定太郎様義、今日香川勘右衛門様へ昼八ツ時ニ火を被付候趣、獵師か、見付候趣ニ而直様御達ニ相成、御上様分御不審之筋有之御召捕ニ相成、江見求馬様へ御預ケ被仰付候、夫迄之処御親類中急度番致候様被仰付候、右ニ付御先手六人ツ、御上様分見番致候様ニ被仰付候趣ニ而、江見様座敷牢出来致候ニ付今晚江見様分請取ニ被参候よし

(朱書)「右ハ先日來御家中并ニ御舟小屋へ火を付候よし也

但し本来八十五才ニ候へ共、殿様之思召ニ而十四才と心得

候様ニ御仁恵ニ付、右火罪ニ不相成候よし、誠ニ難有

思召ニ而命助り候趣也

同廿四日分評定場揚り屋牢へ引渡し有之候、町御奉行支配ニ相成

(朱書)「但し今日迄ハ御簾奉行御支配之よし」

一辰八月廿五日明石定太郎へ申渡ス

其方義御舟小屋其外御家中へ火を付候趣及白状火罪ニ可申付処、幼年ニ而外匠(企)も無之ニ付遠嶋可申付処、島も無之候ニ付永牢可申付候

(朱書)「右ニ付今日分無宿ニ相成大津町牢へ入

辰十月十九日明石様之宿坊本境寺分空印寺様へ願イ付、御費を御頼被遊、願通ニ出牢被致宿坊本境寺へ空印寺様分渡ル、

本境寺御弟子ニ被致他国被致候也

廿五日今日明石直右衛門様へ御談示候義ハ、孫定太郎義諸々へ火付致及

白状候ニ付火罪ニも可被仰付処、幼年ニ付永牢申付候、是迄心付も可有之処右直右衛門不行届ニ付、三拾石被召上候而隠居申付候

一辰四月廿八日夜七ツ時ニ浜浦町大工喜平次裏材木小屋出火有之候

(朱書)「今晚右出火場ニ而東水と西組と大喧嘩有之候由」

一同七月五日庚申夜四ツ半過分常在小路浜側西方分火元ニ而、三ヶ

町へ被獵師町兩側家数廿軒余出火有之候、南風荒く吹遠方ニ候へ共余程案事申候而、東迄も方付候処も有之よし

右ニ付類焼之処へ見舞遣し申候

一白米五升 三ヶ枝松へ

一煎豆五合斗

(朱書)「右三軒焼見舞遣し」

(朱書)「一飯焚出し 香之物 鍛冶多助へ

「是ハ此頃内ニ居候下女之処故遣ス」

一白米三升 魚屋彦左衛門へ

〔右ハ井長出入之者故遣ス〕
(朱書)

一同十月十四日夜八ツ時川口ニ而和久作客舟丹後小舟壹艘焼亡致候

一同十二月朔日昼七ツ時三方郡白屋村弥伝次殿壹軒出火有之よし

一丁巳年正月廿八日夜九ツ時浜浦町網屋少し燃上り申候

一同二月四日昼八ツ時日笠村四軒出火有之候

一同廿八日大飯郡和田村廿五軒出火有之候

一三月二日夜五ツ過時西津福谷村壹軒出火

一同四日夜四ツ時浜浦町貳軒出火有之候、尤仮小屋

一同十八日夜四ツ半時常在小路わら小屋燃上り、又九ツ時ニ浜浦十
鶴宗浦燃上り、夫下山吟味致候処鶴宗若者之仕業ニ相究り、大
津町入牢致候

右平吉義段々御詮義有之候処、所々へ火を附候事及白状候ニ付、
同閏五月廿一日暁六ツ前馬ニ乗、高張四ツ、其外同心衆手挑灯
行烈有之、(列)大津町今本町・瀬木町・大藏小路今下通り常在小路

引廻し、湯岡芝原ニ而火罪ニ相成申候、後五日さらし、此時町
御奉行武久権十郎様・大目附阿部九郎兵衛様

一三月廿八日昼八ツ時竜前村五軒出火有之候

一同四月廿一日暁脇袋村善右衛門壹軒出火有之候

一同廿四日暁六ツ時西津弁天前壹軒出火有之候

一同八月廿六日鐘寄村六軒出火有之候

一同霜月廿七日昼七ツ時塩浜小路和久屋惣兵衛向藏新ニ建られ、内
ニ而火を燒壁干候処、天上へ付候而右藏壹ヶ処と庇壹ヶ処出火有
之、庇二はりからし桶廿本斗有之候分不残焼申候、凡十貫匁斗損
由

一同廿八日夜九ツ半時竹長村四郎左衛門壹軒出火有之候

一安政四丁巳年十二月廿六日夜五ツ半時本福寺地内借家壹軒出火

一同廿七日夜北方南前川壹軒出火

一同廿八日夜七ツ時西津明神長屋十一軒斗有之候分不残出火有之候、
廿九日曉鎮り申候

一同大年朝文珠丸しら身の辻子壺軒出火有之候

一安政五戊午年二月十八日八ツ半時^夜二大島村六社大明神様御再建ニ
付、御普請荒々出来致候材木不残焼失致候

一同十九日夜七ツ時二野代車壺軒焼失致候

一同廿九日夜大飯郡和田村四軒焼失致候

一同晦日昼七ツ時二大島西村三軒焼失致候

一同四月廿一日夜八ツ時野尻銅山堀子長屋三拾軒出火有之候

一同六月廿九日夜大南風奥田繩壺軒出火

一同夜七ツ時熊川村橋の上廿式軒出火有之候

一同七月十七日巳ノ刻町内煙艸屋宗兵衛新蔵ニ火を焼申候処、天上
へ付牛裏板燃上り申候、火消不残出申候、午ノ刻ニ相鎮り申候

一同八月廿九日夜戌中刻北風強く候処、須崎町新地舟大工伊兵衛裏

舟小屋分出火有之、直様表町へ出須先丁・塩屋町・北本町・大津
町・本町・八百屋町・川縁丁、夫分魚屋町・安ら町・新町・瀬木
町・市場三町・和泉・突抜町・片原町、又松本町・川崎・塩浜・
松寺・材木・今在家・東宮前・質屋・鶯羽・永三・広小路・大蔵
・石屋・達磨・薬師・今町・風呂小路・二鳥井迄、八幡・中小路
・中西・西宮前・福岡・富田町迄、晦日朝迄ニ焼失致候、川崎町
ハ表丁と□地と十軒斗焼ル、其余残り申候、松本町ハ指又残り、
向側も其向辺ニ而残り申候

薬師小路金源長屋残り、其余両側共今町浜側残り、風呂小路浜側
残り、二鳥井浜側不残掛り桑村前迄山側焼ル、福岡丁・松山様町
両側残ル、惣家数千八百五軒、^{外ニ}蔵五七拾ヶ所焼申候由
下陣御長屋焼失

新町ハ古川屋久右衛門分長井卯之助方迄五六軒斗残り申候

浄光寺・妙玄寺・願慶寺・証明寺・正誓寺・西宝寺メ六ヶ寺
焼ル

^(朱書)「右出火私共ハ仮宅焼、今度ハ蔵三ヶ所共残り有之候故格別之難
義ニも無之候、併一旦ハ家内中高成寺様へ逃去居候得共、翌早
朝蔵へ帰り申候

御用所分融通方へ白米壺俵四斗入、酒一斗五升此代三拾匁添
被下置候

米手形御役所ノ酒壺斗此代廿匁被下置候

一万延元庚申閏三月四日夜戌ノ刻西津小松原納屋蔵色々八ヶ所出火、
亥半刻ニ火鎮り申候

一安政六己未年二月十九日夜六ツ過時ニ窪谷村壺軒出火

一同五日朝辰ノ刻板屋町下小松原式軒出火有之候、四ツ時相鎮り申

一同夜五ツ過ニ大南風谷田部村廿六軒出火有之候

候

一同三月十日丑年大焼七回忌ニ付町内銘々四社様へ参詣致候

一同五日夜大飯和田村式軒出火

一同六月十八日夜八ツ時上野木村中太夫壺軒出火有之候

一七月十六日夜八ツ時高塚村大谷庄と申所拾三軒出火有之候

一同廿三日夜七ツ時西津板屋町角ニ階燃上り申候由

一九月廿四日昼滝谷村油屋壺軒出火有之候

一同廿七日夜九ツ時ニ高塚村七軒出火

一十二月七日晩五ツ前時西津小松原三軒斗出火、納屋小屋十五ヶ所

斗、但し松見之下也

一同七月二日所々方々へ雷落ル、其日高浜へも落壺軒出火有之候由

一同十三日未ノ刻西津堀屋敷番家壺軒出火

一安政七庚申年正月廿五日頃上野木村式軒出火有之候

一同廿一日夜五ツ時遠敷村壺軒出火有之候

一二月五日頃北方能登野村壺軒出火

一同廿四五日頃奥田繩寺壺軒出火有之候由

一三月十一日巳ノ刻福岡町桶屋六右衛門居宅仮建壺軒出火有之候

一同廿五日夜熊野村東陽寺壺軒出火之由

一 同廿七日夜五ツ半時大南風ニ而西津片原町中塩屋角火元ニ而、
中塩屋両側、板屋町両側、下町迄家数メ五六拾軒出火有之、町方
火消不残消ニ掛り八ツ半時ニ火鎮り申候

一 酉正月十二日西津火付致候子供入牢致候

一 同二月六日巳ノ刻口田繩村壺軒出火有之候

一 同三月十八日夜七ツ時西津小尻四軒と木小屋と都合六軒斗出火有
之、曉六ツ時火鎮り引取申候

一 同廿八日夜七ツ時高浜岸名町十七軒出火有之候

一 四月二日昼九ツ時ニ南風、北本町と大津町領分之所住家壺軒燃上
り叩消申候

一 同八日大飯郡馬居村式軒出火有之候

一 五月廿六日夜七ツ時夕西津大湊七軒出火有之候、暁六ツ半時ニ済

一 六月十七日夜四ツ半時薬師小路仲喜兵衛庇燃上り騒キ申候

一 同十八日夜九ツ半時(過)二町内油屋喜兵衛之内燃上り候処、加戸を
通り候人見付呉叩消申候、翌日町内中四社参り致候

一 同廿一日夜大飯郡坂田村四軒出火有之候

一 七月八日夜七ツ時ニ上野木村壺軒と寺壺ヶ寺と都合式軒出火

一 同廿四日夜亥ノ刻過ニ西津出村と申処拾六軒出火有之、引取七ツ
時也

一 八月廿七日夜西津小尻納屋燃上り申候ニ付、近所夕寄集り火を付
候者居候を見付候処、同所舟大工六十四才斗祖母被召捕、同廿
九日朝大津町牢へ入、同十月頃牢死致候趣也

一 十月五日夜四ツ半時ニ松原屋敷増田政右衛門様火元ニ而池田多七
郎様類焼、式軒出火有之候、八ツ時火鎮り焚出し致候

御隣家ニ付 米手形御奉行 阿部九郎兵衛様

御用達中夕 藤野宗右衛門様

御見舞差上申候

佐藤兵太様

右同断 同勘定人

池田嘉兵衛様

茶碗十人前 袴地壺反差上申候、右ハ御類焼ニ付

銘々見舞差上候処

〔朱書〕御隣家二付〕酒式升 猿橋豹一郎様

〔朱書〕代五匁五分〕同式升 橋本保太郎様

〔朱書〕火元〕味噌三升 増田政右衛門様

桶代共

〔朱書〕代廿七匁

右三軒八手前見舞上ル

一十月廿三日夜高浜十六軒出火有之候

一十二月七日夜八ツ半時栗田村拾三軒出火有之候

一戌三月十日昼五ツ時大飯和田村四軒出火有之候

一同七月廿三日夜七ツ時頃甲ヶ崎村三軒出火有之候

一同十月六日夜太興寺村三軒出火有之候

一同十二月十五日夜八ツ時伏原村拾壹軒出火

一文久三癸亥年正月十四日夜五ツ時分薬師小路番家火元二而、表十式軒と小路六軒と都合十八軒類焼有之、手前貸家も焼申候、九ツ

時二火鎮り申候

右二付御上様分二月廿一日七拾匁材木代被下置候、外二五拾匁七ケ年賦二而御貸被下候

右二付宿老組合仲辺へ夫々見舞遣し申候、進物帳二有之候

一同九日暮六ツ過二川縁町瓦屋九左衛門酒蔵燃上り申候、直様消申候

一同廿六日塩浜小路番家子供火付致候事二付下山召捕入牢致候由

一二月六日夜ミス□小路付垣燃上り申候由

一三月八日谷田部村壹軒出火

一十一月廿二日三方郡能登野村壹軒出火

一十二月朔日晚五十谷村壹軒出火

一元治元甲子三月十四日藤井村六拾軒大南風二而出火有之候

一同三月廿二日昼八ツ時頃正誓寺地内団様二階燃上り申候、早速町内分参り消申候、〔朱書〕右二付二月廿九日町内四社参り之節酒三升被下候也

一十一月六日昼七ツ過時府中村八軒出火有之候

一慶応元乙丑二月朔日暁六ツ半時夕西津松の下式軒出火有之候

一同四月十七日五ツ時上野木村三軒出火有之候

一同五月十九日夜七ツ時二今町海老屋藤兵衛仕事場夕出火、裏借家
五軒斗類焼、引四ツ二火鎮り申候

一同廿七日夜六ツ半時三重村三軒出火有之候

一同七月廿三日暁七ツ時夕昨年甲ヶ崎村小林某と申後家一兩度も火
付致候趣ニ付、今日町引廻候上湯岡芝原ニ而火罪ニ相成申候也

一慶応二丙寅年二月廿八日夜四ツ時西津出村納屋壹軒出火

一同九月廿九日夜三重村式軒出火

一同十月朔日夜九ツ時和田村百姓郡太夫火元ニ而、御陣屋并ニ御奉
行所居宅・百姓三軒類焼有之候

一同八日夜五ツ過時竜前村式軒出火

一慶応三年丁卯二月五日夜名田納庄小屋村七軒出火有之候

一同六日夜六ツ半時四部(分)一村壹軒出火有之候

一同廿四日夜九ツ時二遠敷村三軒出火

一同三月三日夜九ツ時湯岡村壹軒出火

一四月廿日夜七ツ時夕南風ニて名田納庄持田と申田村谷十七軒出火
有之候

一卯十二月十三日暁七ツ時西津堀屋敷式軒出火有之候

一辰三月廿二日夜五ツ時二根来村出火

一同廿五日夜九ツ半時二須崎町舟小屋四ヶ所之作り舟有之内、紙屋
伊兵衛一艘・敦賀大和田一艘、外ニ旅舟一艘、(朱書)三艘と人家住居
所七軒類焼致申候、七ツ半時ニ鎮り申候、(朱書)井筒屋忠兵衛近火ニ
付翌日酒一升見舞ニ遣候、代十一匁、志水材木有之焼損凡金代百
両、大工清八材木有之焼損凡五拾両、木引久二郎材木有之焼損凡
廿貫匁斗」

一 四月九日夜七ツ時二伏原村壺軒出火有之候

一 同二月廿三日昼八ツ時大南風、高浜南庄獵師之者百三拾六軒出火有之候

一 閏四月廿八日昼九ツ半時青井町藤右衛門住居灯上^(マ、)り申候

一 同夜三方郡藤井村出火有之候由

一 明治二己巳年二月十六日朝六ツ過今阿納尻村拾軒出火有之候

一 三月十二日遠敷村昼八ツ時一軒出火

一 同廿八日丑刻二川縁丁楠屋弥右衛門殿火元にて上下八軒類焼有之候、右之内升屋治助・同惣助類焼二付見舞遣ス

明治四辛未年

米手形百匁升屋治助へ遣ス、米手形三拾匁外二惣助へ遣し申候、酒式升屋源兵衛へ、是ハ近所二候故遣候、焼不申候也

一 正月廿八日高屋村三軒出火

一 四月四日晚丸山村壺軒出火有之候

一 二月八日夜七ツ半時野代村五軒出火

一 同廿八日大南風、熊川橋今上三拾軒余出火

一 六月十七日遠敷水無月御社ヲ仍願川崎町へ御転社ニ付、取ほどき申候事ニ付日雇五六人取掛り候処、右裏之方ニ大キナル蜂の巢有之、右ニ付火ヲ掛ケ落し取^ほとほとき可申候処、上屋根ニ火移り御社上屋根共不残焼失致申候也

一 同十三日夜金屋村壺軒出火

明治三庚午年

一 同廿日夜下根来村十一軒出火

一 正月廿五日夜八ツ時大西風、須崎町冬広五郎兵衛裏小屋一軒灯上り申候

一 未三月廿一日夜甲ケ崎舟小屋出火

一同四月廿一日明通寺夜五ツ時出火

一同九月廿八日六ツ半時遠敷村壱軒出火

一同十二月十日晝六ツ半時御城内二の丸御殿焼失致候、四ツ半時火

鎮り申候

右八大坂表(分)文営之御普請中大工不調法分焼ル

八百屋丁大工頭彦兵衛
同 大工作兵衛 右両人大坂へ引連、二月廿八日分同所にて徒

罪二相成申候

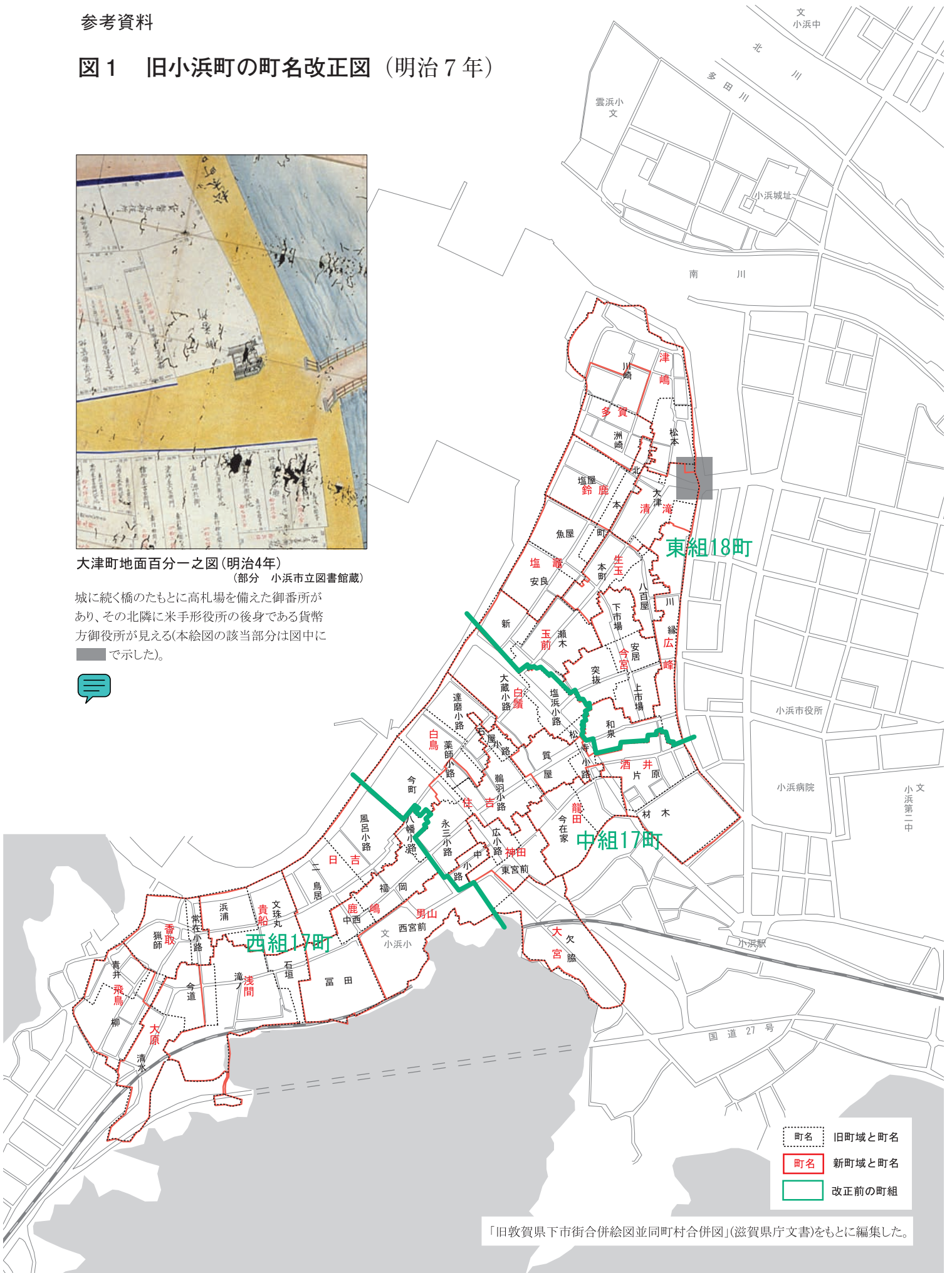
(朱書)「凡新建千式百両斗損毛之由、夫故彦根二相成申候」

図1 旧小浜町の町名改正図 (明治7年)



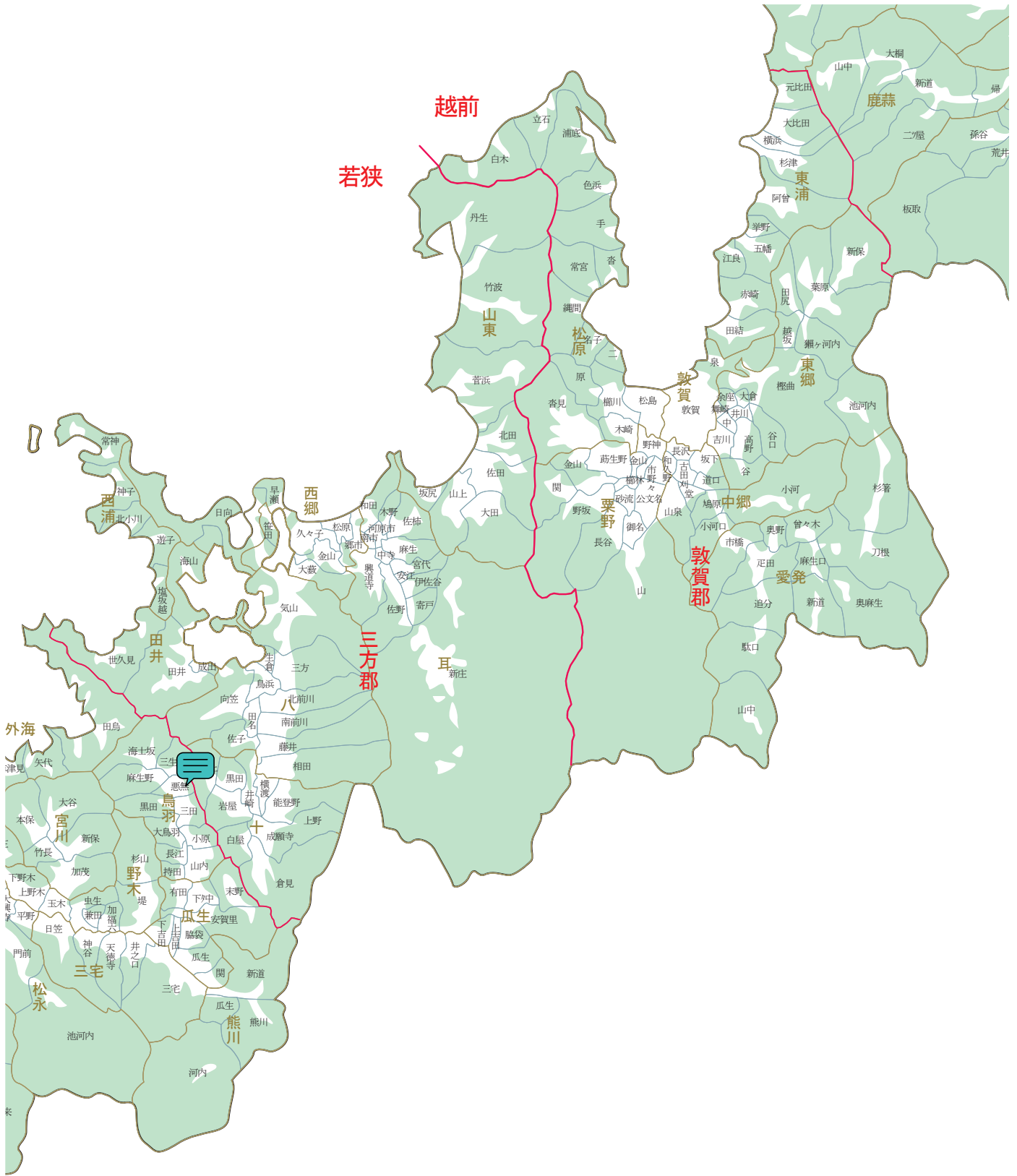
大津町地面百分之一之図 (明治4年)
(部分 小浜市立図書館蔵)

城に続く橋のたもとに高札場を備えた御番所があり、その北隣に米手形役所の後身である貨幣方御役所が見える(本絵図の該当部分は図中に■で示した)。



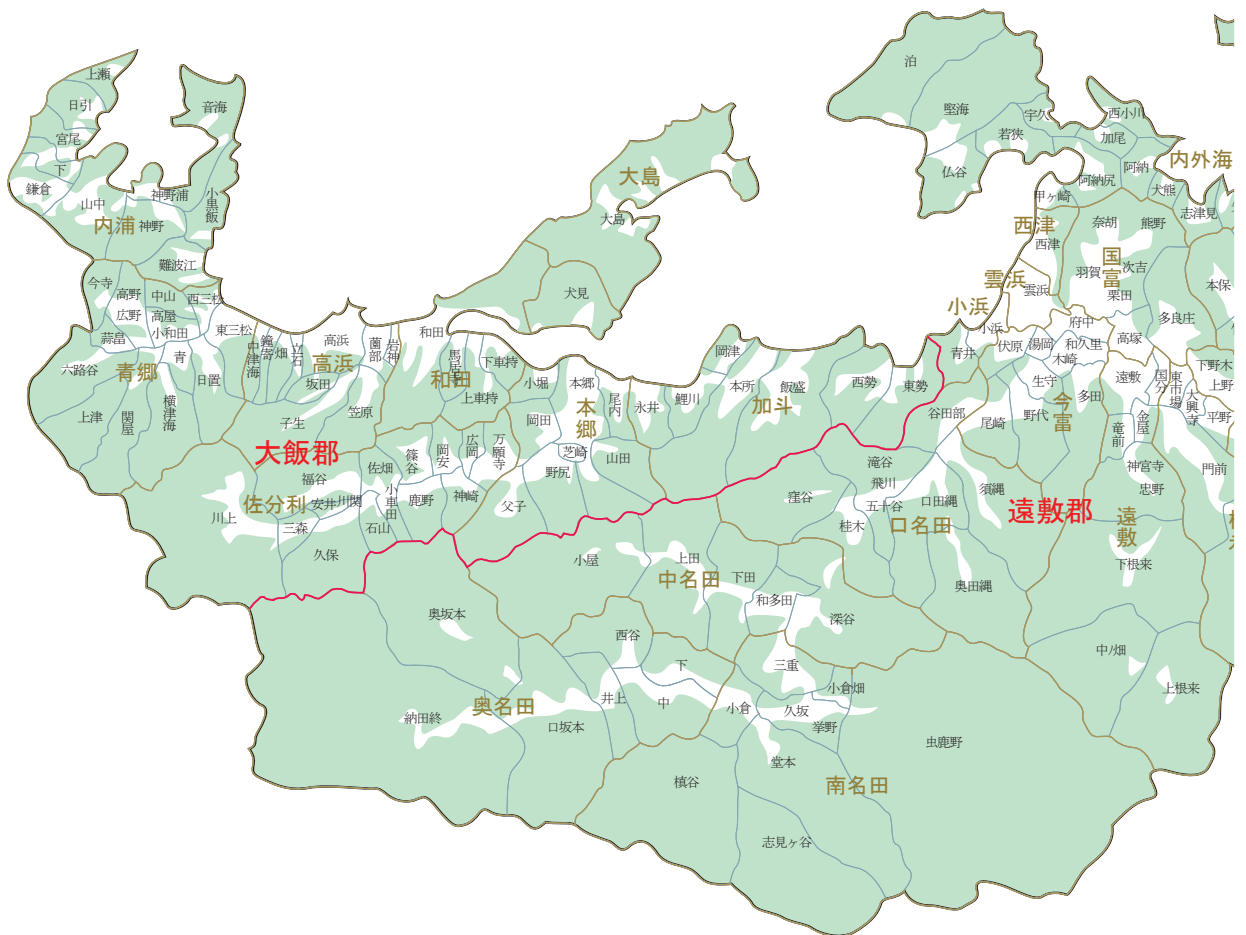
- 町名 旧町域と町名
- 町名 新町域と町名
- 町名 改正前の町組

「旧敦賀県下市街合併絵図並同町村合併図」(滋賀県庁文書)をもとに編集した。



本図は「明治22年2月16日 福井県令第19号」を利用して、同年4月の町村制施行時の新旧町村名を示した。

図2 嶺南四郡の町村（明治22年）



若狭国小浜町人の珍事等書留日記

福井県文書館資料叢書3

平成二十一年三月二十日 発行

編集発行 福井県文書館

九一八―八一三

福井県福井市下馬町五一―一

電話〇七七六―三三―八八九〇

印刷

足羽印刷株式会社

九一八―八三三

福井県福井市問屋町三丁目二二

電話〇七七六―二三―三七三二



健康長寿の福井

09.03.11398